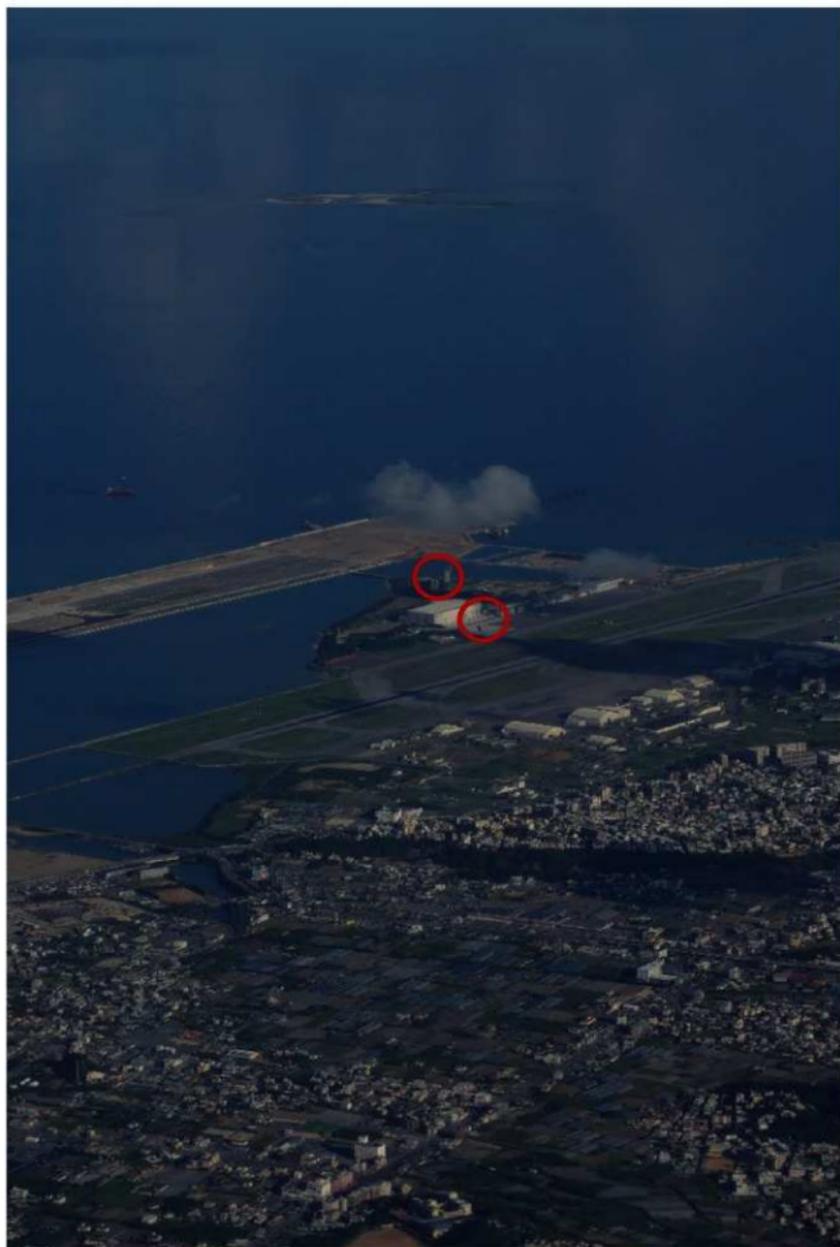


大嶺村跡

那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成31(2019)年3月
沖縄県立埋蔵文化財センター



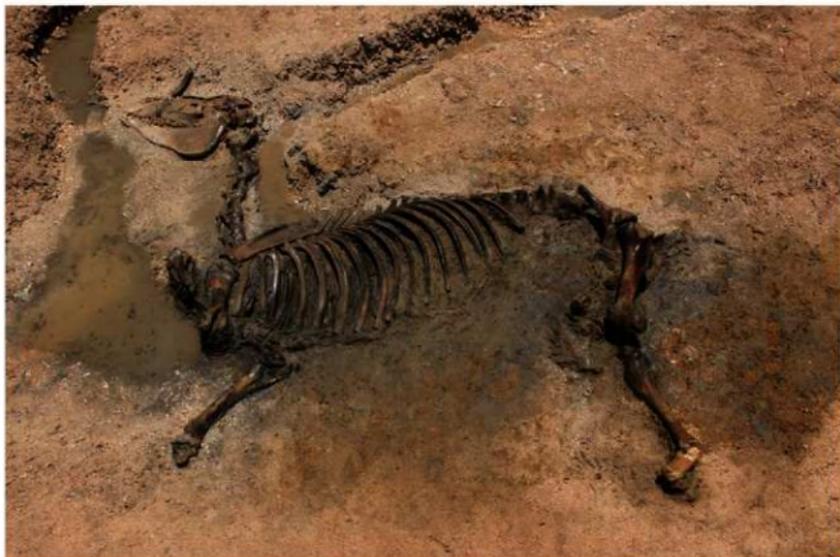
巻頭図版1 事業実施箇所遠景（2018年9月時点。○が発掘調査実施箇所。）



管制塔1地区全景（南西から）



管制塔1地区調査区東西ベルト（北東から）



SK 1 ウマ埋葬跡（北から）



SK 2 ブタ幼獣埋葬跡（南東から）



エブロン地区調査区全景（北西から）



エブロン地区中央部サブレンチ南北断面（南西から）※手前はSE2



SE1 断ち割り断面（西から）



SK1 半截断面（西から）



中国産青磁



先史時代の土器



井戸内から出土した木製品



「歩兵第四十五聯隊酒保」銘歯ブラシ



エブロン地区 SK1 出土の主な陶磁器



泥面子・おはじき・土製品

序 文

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成 27～28 年度に実施した、埋蔵文化財「大嶺村跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。

大嶺村跡は沖縄県那覇市字大嶺に所在し、那覇空港西側の大嶺崎一帯に広がる遺跡です。周辺には南島爪形土器やその時代の様々な遺物が出土した鏡水窪隔原 C 遺跡や、沖縄の農耕開始期の遺構が検出された那崎原遺跡など、学術的にも貴重な遺跡が所在しています。

大嶺村は、集落の西側に良好な漁場を擁し、北側から南東側にかけては肥沃な農地が広がる半農半漁の集落でした。1721 年に冊封副使・徐葆光によって書かれた『中山伝信録』には、風光明媚な場所として紹介されています。しかし、昭和 6 (1931) 年から始まる旧日本軍による大規模な飛行場建設に始まり、戦中から戦後の米軍那覇飛行場、さらに本土復帰後は那覇空港として利用されることに伴い、大きく土地の改変が進められてきました。

今回の発掘調査は、那覇空港拡張事業の一環として国土交通省大阪航空局が実施する、管制塔庁舎新築工事及びケーブルダクト建設工事等に伴う記録保存調査となります。調査の結果、往時の大嶺村に伴う溝跡、ブタ幼獣埋葬跡、井戸、炉跡、遺物廃棄土坑などの様々な遺構や、当時利用されていた生活用品や装身具、遊具など多種多様な遺物が発見されました。さらに、外来馬の埋葬跡や日本兵の部隊名が記載された遺物などの旧日本軍に関連する遺構・遺物も見つかっています。その一方で、12 世紀初め頃から 15 世紀中頃までのグスク時代の陶磁器や、縄文時代・弥生～平安並行時代の土器・石器なども出土していることから、大嶺村跡は先史時代まで遡る遺跡であることも分かりました。

今回の発掘調査で得られた成果は、大嶺一帯の変遷を理解する上で、大きく寄与するものと考えております。本報告書が、文化財の保護普及をはじめ、地域の文化・歴史学習や学術研究等の一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査および資料整理にあたりご指導・ご助言を賜りました諸先生方、並びに事業の実施にあたりご協力を賜りました国土交通省大阪航空局及び那覇空港事務局、日本トランスオーシャン空港株式会社、那覇市市民文化部文化財課、字大嶺自治会、字大嶺向上会、旧那覇飛行場用地問題解決地主会、ほか関係各位の皆様にも深く感謝申し上げます。

平成 31 (2019) 年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 登川 安政

例 言

- 1 本報告書は、平成 27 年度から 28 年度に沖縄県那覇市那覇空港内に所在する大嶺村跡において実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 本調査は、国土交通省大阪航空局那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う記録保存調査である。
- 3 発掘調査から報告書作成までの費用は、事業者である国土交通省大阪航空局が負担した。
- 4 発掘調査及び資料整理、報告書作成は、国土交通省大阪航空局との契約に基づき沖縄県が実施した。
- 5 発掘調査から資料整理までの業務は沖縄県立埋蔵文化財センターの長嶺 均と大堀皓平、報告書作成・編集は大堀があつた。また作業実施にあたり、国土交通省大阪航空局に再委託契約について承認を得た上で、発掘調査及び整理作業について、有限会社ティガネーの業務支援を受けた。
- 6 本報告書に掲載した現場写真は、大堀皓平・有限会社ティガネー吉岡宏が撮影した。また出土遺物写真の撮影は、大堀のほか、有限会社ティガネー栗山初美・仲本智恵子が行った。
- 7 本報告書に記載された資料は、それぞれ下記の者が同定を行った。
石材：大堀皓平 動物骨：喜屋武朋子 貝類：譜久里昌代
- 8 「琉球国間切図（町方・島尻西）」は沖縄県立博物館・美術館、「大嶺村跡民俗図地図」は大嶺向上会より提供頂いた。また 1945 年米軍撮影航空写真は、国土地理院地図・空中写真閲覧サービス (<http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>) USA-Okinawa-5M3A-7 をもとに該当箇所を切り抜き・拡大したものである。
- 9 土層観察表に記載された記号・土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 10 掲載された遺物番号は図・写真で統一したものを記載している。なお、図版のみに掲載されている遺物については、掲載図版ごとに○番号を付けて区別している。
- 11 観察表では一部について、名称等を省略して記載した。詳細は下記のとおりである。
龍泉：龍泉窯
徳化：徳化窯
福建：福建系
福・広：福建広東系
景德鎮：景德鎮窯
瀬・美：瀬戸美濃
- 12 本書の執筆分担は以下のとおりである。なお、資料整理の指導・協力を頂いた諸氏からはその所見等を記載した玉稿も賜った。ここに記して感謝申し上げる。

第 1 章 長嶺 均

第 2 章

第 1 節 大堀皓平

第 2 節 長嶺 均・大堀皓平

第 3～5 章 大堀皓平

第6章

第1節 矢作健二・松元美由紀・上田圭一（株式会社バリノ・サーヴェイ）

第2節 黒住耐二（千葉県立中央博物館）

第3節 丸山真史（東海大学海洋学部）

第4節 小畑弘己（熊本大学大学院人文社会科学研究所）・大堀皓平

第7章 大堀皓平

※遺物観察表

土器：具志堅清大・南勇輔

外国産陶磁器（欧州産除く）：玉城綾

沖縄産施釉陶器：大堀皓平・廣岡凌

上記以外：大堀皓平

13 本報告書で使用している遺構記号は次のとおりである。

S D：溝状遺構

S E：井戸

S F：道跡

S G：池跡

S K：土坑

S L：かまど跡

S P：ピット

S X：不明遺構

14 調査で得られた遺物、実測図、写真等の資料は、沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目次

序文

例言

第1章 調査の経緯と体制	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	4
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	8
第3章 基本層序及び調査方法・経過	
第1節 基本層序	12
第2節 調査方法と経過	12
第4章 管制塔Ⅰ・Ⅱ地区の調査成果	
第1節 位置と層序	16
第2節 V層の遺構と遺物	21
第3節 III層の遺物	37
第4節 I・II層の遺物	53
第5節 管制塔Ⅱ地区の調査成果	60
第5章 エブロン地区の調査成果	
第1節 エブロン地区の層序	64
第2節 下層(Ⅳ-2層)の遺構と遺物	81
第3節 上層(Ⅳ-1層)の遺構と遺物	86
第4節 I・II層の遺物	134
第6章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定・土壌分析	139
第2節 大嶺村跡の海浜部堆積物中の貝類群	158
第3節 大嶺村跡から出土した動物遺存体 —埋葬馬を中心に—	187
第4節 大嶺村跡出土資料の土器等圧痕について	195
第7章 総括	
第1節 地層の年代観と古環境	199
第2節 大嶺村跡で検出された遺構	199
第3節 大嶺村跡出土の遺物	201
第4節 まとめ —発掘調査成果による大嶺村跡の環境と土地利用の変遷—	203

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	那覇空港西側管理区域内の埋蔵文化財分布状況	2	第48図	管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物2	55
第2図	発掘調査箇所位置図	3	第49図	管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物3	56
第3図	大嶺村跡周辺の地質	6	第50図	管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物4	57
第4図	沖縄県及び那覇市位置	7	第51図	管制塔Ⅱ地区位置	60
第5図	大嶺村跡とその周辺の遺跡	9	第52図	管制塔Ⅱ地区東壁断面図	61
第6図	「間切図」にみられる大嶺村	11	第53図	管制塔Ⅱ地区南壁断面図	61
第7図	「正保国絵図」の大嶺村跡周辺	11	第54図	エブロン地区位置	64
第8図	昭和20(1945)年1月米軍航空写真の大嶺村 と小祿海軍飛行場	11	第55図	エブロン地区壁面図1(西側南壁・西壁)	65
第9図	管制塔Ⅰ地区地層柱状図	12	第56図	エブロン地区壁面図2(北壁)	69
第10図	エブロン地区地層柱状図	12	第57図	エブロン地区壁面図3(中央南壁・西壁)	73
第11図	管制塔Ⅰ地区位置	16	第58図	エブロン地区壁面図4(東壁)	77
第12図	管制塔Ⅰ地区地層断面図	17	第59図	エブロン地区Ⅳ-2層遺構分布図	81
第13図	管制塔Ⅰ地区Ⅴ層 遺構配置図	21	第60図	エブロン地区SP16・59平面図	82
第14図	管制塔Ⅰ地区SD1・2・3・4平面図	22	第61図	エブロン地区SP16断面図	82
第15図	管制塔Ⅰ地区SD1断面図	23	第62図	エブロン地区SP59断面図	83
第16図	管制塔Ⅰ地区SD1出土遺物	23	第63図	エブロン地区SP59出土遺物	83
第17図	管制塔Ⅰ地区SD2断面図	24	第64図	エブロン地区SP118～125平面図	84
第18図	管制塔Ⅰ地区SD2出土遺物	24	第65図	エブロン地区SP118断面図	85
第19図	管制塔Ⅰ地区SD3断面図	25	第66図	エブロン地区SP119断面図	85
第20図	管制塔Ⅰ地区SD3出土遺物	25	第67図	エブロン地区Ⅳ-1層遺構分布図	87
第21図	管制塔Ⅰ地区SD4断面図	25	第68図	エブロン地区SE1平面図・立体断面図	91
第22図	管制塔Ⅰ地区SD4出土遺物	26	第69図	エブロン地区SE1出土遺物1	93
第23図	管制塔Ⅰ地区SK1埋葬馬検出状況平面図	27	第70図	エブロン地区SE1出土遺物2	94
第24図	管制塔Ⅰ地区SK2ブタ幼獣埋葬検出状況平面図	27	第71図	エブロン地区SE2平面図・立体断面図	97
第25図	管制塔Ⅰ地区SK3・4・5平面図	28	第72図	エブロン地区SE2出土遺物1	99
第26図	管制塔Ⅰ地区SK3断面図	28	第73図	エブロン地区SE2出土遺物2	100
第27図	管制塔Ⅰ地区SK3出土遺物	29	第74図	エブロン地区SE3平面図	103
第28図	管制塔Ⅰ地区SK4断面図	29	第75図	エブロン地区SE3北壁断面図	103
第29図	管制塔Ⅰ地区SK5断面図	29	第76図	エブロン地区SE3出土遺物1	105
第30図	管制塔Ⅰ地区SK6断面図	30	第77図	エブロン地区SE3出土遺物2	106
第31図	管制塔Ⅰ地区SK7・8平面図	30	第78図	エブロン地区SL1平面図・断面図	108
第32図	管制塔Ⅰ地区SK7断面図	31	第79図	エブロン地区SL2平面図・断面図	109
第33図	管制塔Ⅰ地区SK8断面図	31	第80図	エブロン地区SL2出土遺物	110
第34図	管制塔Ⅰ地区SP1断面図	32	第81図	エブロン地区SK1平面図・断面図	111
第35図	管制塔Ⅰ地区SP2断面図	32	第82図	エブロン地区SK1出土遺物1	112
第36図	管制塔Ⅰ地区SP2断面図	32	第83図	エブロン地区SK1出土遺物2	113
第37図	管制塔Ⅰ地区Ⅴ層遺構外出土遺物1 (陶磁器以外)	33	第84図	エブロン地区SK1出土遺物3	114
第38図	管制塔Ⅰ地区Ⅴ層遺構外出土遺物2(陶磁器)	34	第85図	エブロン地区SK1出土遺物4	115
第39図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物1	38	第86図	エブロン地区SK遺構分布図	117
第40図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物2	39	第87図	エブロン地区上層SP検出状況(西側)	118
第41図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物3	40	第88図	エブロン地区上層SP検出状況(東側)	119
第42図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物4	41	第89図	エブロン地区SP覆土内出土遺物	123
第43図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物5	42	第90図	エブロン地区SF1平面図	125
第44図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物6	43	第91図	エブロン地区SG1平面図	126
第45図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物7	44	第92図	エブロン地区SG1断面図	127
第46図	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物8	45	第93図	エブロン地区SG1出土遺物1	128
第47図	管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物1	54	第94図	エブロン地区SG1出土遺物2	129
			第95図	エブロン地区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物	132
			第96図	エブロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物1	135

第97図	エブロン地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物2	136
第98図	大嶺村跡の海浜部の堆積物採取断面	159
第99図	9.52mm メッシュ残渣	162
第100図	4.0mm メッシュ残渣	162
第101図	4.0mm メッシュ上のフトコロガイ(上)とカニモリガイ類(下)の磨滅・破損状況	163
第102図	大嶺村跡の海浜部の復元イメージ。沖繩市	

泡瀬干潟(2004年)	165	
第103図	大嶺村跡土器丘痕・レプリカ SEM 画像	196
第104図	大嶺村跡主要遺構分布図1	200
第105図	大嶺村跡主要遺構分布図2	200
第106図	大嶺村跡出土有銘ガラス瓶	202
第107図	大嶺村跡出土有銘歯ブラシ	202

図版目次

巻頭図版1 事業実施箇所遠景

巻頭図版2 管制塔Ⅰ地区全景・ベルト断面

巻頭図版3 管制塔Ⅰ地区の主な遺構

図版1	職場体験・現地説明会	15
図版2	管制塔Ⅰ地区地層断面(オルソ)	19
図版3	管制塔Ⅰ地区V層 遺構配置図(オルソ)	21
図版4	管制塔Ⅰ地区SD1・2・3・4 完掘状況 (北東から)	22
図版5	管制塔Ⅰ地区SD1ベルト(南西から)	23
図版6	管制塔Ⅰ地区SD2ベルト(北西から)	24
図版7	管制塔Ⅰ地区SD3ベルト(南西から)	25
図版8	管制塔Ⅰ地区SD4ベルト(北西から)	25
図版9	管制塔Ⅰ地区SK1出土木製品	26
図版10	管制塔Ⅰ地区SK1埋葬馬検出状況(北から)	27
図版11	管制塔Ⅰ地区SK1完掘状況(北から)	27
図版12	管制塔Ⅰ地区SK2 土質分析検出状況 (南東から)	27
図版13	管制塔Ⅰ地区SK3 半掘状況(南西から)	28
図版14	管制塔Ⅰ地区SK4 半掘状況(南西から)	29
図版15	管制塔Ⅰ地区SK5 完掘状況(北東から)	29
図版16	管制塔Ⅰ地区SK6 完掘状況(南西から)	30
図版17	管制塔Ⅰ地区SK7 半掘断面(北西から)	31
図版18	管制塔Ⅰ地区SK8 半掘断面(南西から)	31
図版19	管制塔Ⅰ地区SP1 半掘断面(北西から)	32
図版20	管制塔Ⅰ地区SP2 半掘断面(南西から)	32
図版21	管制塔Ⅰ地区V層出土遺物1(陶磁器以外)	33
図版22	管制塔Ⅰ地区V層排水溝掘削時出土 沖縄産無釉陶器類	35
図版23	管制塔Ⅰ地区V層出土ガラス瓶・蓋	35
図版24	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物1	45
図版25	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物2	46
図版26	管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物3	47
図版27	管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物1	53
図版28	管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物2	57
図版29	管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物3	58
図版30	管制塔Ⅱ地区完掘状況(北から)	61
図版31	管制塔Ⅱ地区東壁(オルソ)	61
図版32	管制塔Ⅱ地区南壁(オルソ)	61

巻頭図版4 エブロン地区調査区全景・壁面

巻頭図版5 エブロン地区の主な遺構

巻頭図版6 主な出土遺物

図版33	管制塔Ⅱ地区出土遺物	63
図版34	エブロン地区壁面オルソ図(西側南壁・西壁)	67
図版35	エブロン地区壁面オルソ図(北壁)	71
図版36	エブロン地区壁面オルソ図(中央南壁・西壁)	75
図版37	エブロン地区壁面オルソ図(東壁)	79
図版38	エブロン地区Ⅳ-2層遺構配置図(オルソ)	81
図版39	エブロン地区SP16・59 完掘状況(南から)	82
図版40	エブロン地区SP16 半掘状況(南から)	82
図版41	エブロン地区SP59 半掘状況(東から)	83
図版42	エブロン地区SP118~125 完掘状況(南から)	84
図版43	エブロン地区SP118 半掘状況(北から)	85
図版44	エブロン地区SP119 半掘状況(東から)	85
図版45	エブロン地区Ⅳ-1層遺構配置図(オルソ)	89
図版46	エブロン地区SE1 検出・半載・完掘・ 断ち割り状況	92
図版47	エブロン地区SE1 井筒石材	92
図版48	エブロン地区SE1 出土遺物1	96
図版49	エブロン地区SE1 出土遺物2	97
図版50	SE2 検出・半載・完掘・断ち割り状況	98
図版51	エブロン地区SE2 井筒石材	98
図版52	エブロン地区SE2 出土遺物	101
図版53	エブロン地区SE3 完掘状況(北から)	103
図版54	エブロン地区SE3 半掘状況(南から)	103
図版55	エブロン地区SE3 井筒石材	104
図版56	エブロン地区SE3 出土遺物	106
図版57	エブロン地区SL1 検出状況(南から)	109
図版58	エブロン地区SL1 半掘状況(南から)	109
図版59	エブロン地区SL2 2層(炭層) 検出状況 (東から)	110
図版60	エブロン地区SL2 南西側ベルト断面 (南西から)	110
図版61	エブロン地区SK1 遺物検出・半載状況	111
図版62	エブロン地区SK1 出土資料	115
図版63	エブロン地区上層SP 半掘断面	119
図版64	エブロン地区SP 覆土内出土遺物	124

図版 65	エブロン地区 SF1 検出・断面状況	125
図版 66	エブロン地区 SG1 断面 (南西から)	127
図版 67	エブロン地区 SG1 出土遺物	131
図版 68	エブロン地区 SG1 (○部分、南東から)	131
図版 69	エブロン地区 I・II 層出土遺物	138
図版 70	年代測定作業風景	141
図版 71	花粉化石・微粒炭・寄生虫卵・植物珪酸体	149
図版 72	年代測定試料 1	153
図版 73	年代測定試料 2	154
図版 74	年代測定試料 3	155
図版 75	年代測定試料 4	156

図版 76	年代測定試料 5	157
図版 77	貝類遺体 (巻貝) 1	168
図版 78	貝類遺体 (巻貝) 2	169
図版 79	貝類遺体 (巻貝) 3	170
図版 80	貝類遺体 (巻貝) 4	171
図版 81	貝類遺体 (二枚貝) 1	172
図版 82	貝類遺体 (二枚貝) 2	173
図版 83	貝類遺体 (二枚貝) 3	174
図版 84	右上顎歯列	192
図版 85	左右下顎歯列	192
図版 86	右上下顎骨	192

目 次

表 1	大塚村跡周辺の遺跡一覧表	10
表 2	管制塔 I 地区 SD1 ベルト 土層観察表	23
表 3	管制塔 I 地区 SD1 出土遺物観察表	24
表 4	管制塔 I 地区 SD2 土層観察表	24
表 5	管制塔 I 地区 SD2 出土遺物観察表	24
表 6	管制塔 I 地区 SD3 土層観察表	25
表 7	管制塔 I 地区 SD3 出土遺物観察表	25
表 8	管制塔 I 地区 SD4 土層観察表	25
表 9	管制塔 I 地区 SD4 出土遺物観察表	26
表 10	管制塔 I 地区 SD1 ~ 4 出土遺物集計表	26
表 11	管制塔 I 地区 SK1 出土遺物集計表	26
表 12	管制塔 I 地区 SK2 出土遺物集計表	28
表 13	管制塔 I 地区 SK3 土層観察表	28
表 14	管制塔 I 地区 SK3 出土遺物集計表	28
表 15	管制塔 I 地区 SK3 出土遺物観察表	29
表 16	管制塔 I 地区 SK4 土層観察表	29
表 17	管制塔 I 地区 SK4 出土遺物集計表	29
表 18	管制塔 I 地区 SK5 土層観察表	30
表 19	管制塔 I 地区 SK5 出土遺物集計表	30
表 20	管制塔 I 地区 SK6 土層観察表	30
表 21	管制塔 I 地区 SK6 出土遺物集計表	30
表 22	管制塔 I 地区 SK7 土層観察表	31
表 23	管制塔 I 地区 SK7 出土遺物集計表	31
表 24	管制塔 I 地区 SK8 土層観察表	31
表 25	管制塔 I 地区 SK8 出土遺物集計表	31
表 26	管制塔 I 地区 V 層 遺構外出土遺物集計表	33
表 27	管制塔 I 地区 V 層 遺構外出土遺物観察表 (陶磁器)	36
表 28	管制塔 I 地区 V 層 遺構外出土遺物観察表 (陶磁器以外)	36
表 29	管制塔 I 地区 III 層出土遺物集計表	37
表 30	管制塔 I 地区 III 層出土遺物観察表 1 (陶磁器)	48
表 31	管制塔 I 地区 III 層出土遺物観察表 2 (陶磁器)	49
表 32	管制塔 I 地区 III 層出土遺物観察表 3 (陶磁器)	50
表 33	管制塔 I 地区 III 層出土遺物観察表 4 (陶磁器以外)	51
表 34	管制塔 I 地区 III 層出土遺物観察表 5 (陶磁器以外)	52

表 35	管制塔 I 地区 I・II 層出土遺物集計表	53
表 36	管制塔 I 地区 I・II 層出土遺物観察表 1 (陶磁器)	58
表 37	管制塔 I 地区 I・II 層出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)	59
表 38	管制塔 II 地区土層観察表	62
表 39	管制塔 II 地区出土遺物集計表	62
表 40	エブロン地区 SP16 土層観察表	83
表 41	エブロン地区 SP59 土層観察表	83
表 42	エブロン地区 SP59 出土遺物集計表	83
表 43	エブロン地区 SP59 出土遺物観察表	83
表 44	エブロン地区 SP118 土層観察表	85
表 45	エブロン地区 SP119 土層観察表	85
表 46	エブロン地区 SE1 出土遺物集計表	92
表 47	エブロン地区 SE1 出土遺物観察表 1 (陶磁器)	95
表 48	エブロン地区 SE1 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)	96
表 49	エブロン地区 SE2 出土遺物集計表	98
表 50	エブロン地区 SE2 出土遺物観察表 1 (陶磁器)	101
表 51	エブロン地区 SE2 出土遺物観察表 2 (陶磁器)	102
表 52	エブロン地区 SE2 出土遺物観察表 3 (陶磁器以外)	102
表 53	エブロン地区 SE3 出土遺物集計表	104
表 54	エブロン地区 SE3 土層観察表	104
表 55	エブロン地区 SE3 出土遺物観察表 1 (陶磁器)	107
表 56	エブロン地区 SE3 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)	107
表 57	エブロン地区 SL1 土層観察表	109
表 58	エブロン地区 SL1 出土遺物集計表	109
表 59	エブロン地区 SL2 土層観察表	110
表 60	エブロン地区 SL2 出土遺物集計表	110
表 61	エブロン地区 SL2 出土遺物観察表	110
表 62	エブロン地区 SK1 出土遺物集計表	111
表 63	エブロン地区 SK1 出土遺物観察表 1 (陶磁器)	115
表 64	エブロン地区 SK1 出土遺物観察表 2 (陶磁器)	116
表 65	エブロン地区 SK1 出土遺物観察表 3 (陶磁器以外)	117

表 66	エブロン地区 SK2～5 出土遺物集計表	118	表 87	暦年較正結果 2	146
表 67	エブロン地区上層 SP 出土遺物集計表	120	表 88	花粉分析結果	147
表 68	エブロン地区上層 SP 土層観察表 1	120	表 89	微細物分析結果	148
表 69	エブロン地区上層 SP 土層観察表 2	121	表 90	土壌理化学分析結果	148
表 70	エブロン地区上層 SP 土層観察表 3	122	表 91	大嶺村跡の海浜部で採取された分析サンプル の詳細	160
表 71	エブロン地区上層 SP 土層観察表 4	123	表 92	大嶺村跡の堆積物から抽出された貝類等	161
表 72	エブロン地区上層 SP 出土遺物観察表 1 (陶磁器)	124	表 93	管制塔 I・II 地区出土貝類集計表 (巻貝)	175
表 73	エブロン地区上層 SP 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)	124	表 94	管制塔 I・II 地区出土貝類集計表 (二枚貝)	177
表 74	エブロン地区 SG1 出土遺物集計表	127	表 95	エブロン地区出土貝類集計表 (巻貝) 1	179
表 75	エブロン地区 SG1 出土遺物観察表 1 (陶磁器)	130	表 96	エブロン地区出土貝類集計表 (巻貝) 2	181
表 76	エブロン地区 SG1 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)	130	表 97	エブロン地区出土貝類集計表 (二枚貝) 1	183
表 77	エブロン地区 IV・V 層出土遺物集計表	133	表 98	エブロン地区出土貝類集計表 (二枚貝) 2	185
表 78	エブロン地区 IV・V 層出土遺物観察表 1 (土器)	133	表 99	動物遺存体出土集計表 (管制塔 I・II 地区)	188
表 79	エブロン地区 IV・V 層出土遺物観察表 2 (陶磁器)	133	表 100	出土ブタ遺存体部位別集計表 (管制塔 I・II 地区)	189
表 80	エブロン地区 I・II 層出土遺物集計表	134	表 101	動物遺存体出土集計表 (エブロン地区)	190
表 81	エブロン地区 I・II 層出土遺物観察表 1 (土器)	137	表 102	出土ブタ遺存体部位別集計表 (エブロン地区)	191
表 82	エブロン地区 I・II 層出土遺物観察表 2 (陶磁器)	137	表 103	埋葬馬の出土部位	193
表 83	エブロン地区 I・II 層出土遺物観察表 3 (陶磁器以外)	138	表 104	上顎歯の計測値 (mm)	193
表 84	試料表	140	表 105	下顎歯の計測値 (mm)	193
表 85	放射性年代測定結果	144	表 106	大嶺村跡出土ウマ計測値 (mm)	194
表 86	暦年較正結果 1	145	表 107	大嶺村跡出土土器等圧痕属性表	196
			表 108	大嶺村跡出土イネ稈圧痕確認資料一覧	197
			表 109	大嶺村跡出土巻貝圧痕確認資料一覧	198
			表 110	石材別石器・石製品・石造物・石材集計表	203

第1章 調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯

那覇空港は沖縄県民の生活を支えるとともに、多くの観光客が利用する重要な社会基盤であり、航空旅客数は年々増加していることから、空港能力の向上が重要な課題となっている。

このため、平成14年度に国土交通省で行われた交通政策審議会の答申において、既存施設の有効活用を図りつつ滑走路増設を含めた抜本的な空港能力の向上方策について、幅広い合意形成を図りながら、国と地域が連携して総合的な調査を進める必要があることが示された。これを受けて、国と沖縄県では平成15年度より滑走路増設に向け、総合的な調査や構想段階、施設計画段階における検討を行った。そして、環境影響評価や公有水面埋立ての手続きを経て、平成26年1月より那覇空港滑走路増設事業が開始された。

大嶺村跡が所在する字大嶺一帯は、那覇空港西側地区管理区域（那覇空港内大嶺地区）に位置し、航空自衛隊那覇駐屯地や海上保安庁の施設にも近接することから、近年まで遺跡の所在およびその詳細については不明であった。本遺跡は那覇市教育委員会（以下、市教委）が平成19年度から22年度まで実施した那覇空港大嶺地区埋蔵文化財分布調査に伴う試掘調査で所在が確認されている（第1図）。

国土交通省大阪航空局（以下、大阪航空局）は、那覇空港西側管理区域において、那覇空港整備事業に伴う管制塔及びケーブルダクトの建設工事を計画し、平成26年5月1日付けで、大阪航空局から市教委へ「管制塔及びケーブルダクト」に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。これに対して、平成26年5月28日、市教委から大阪航空局へ「埋蔵文化財事前審査報告書」を送付し、当該箇所に埋蔵文化財「大嶺村跡」が所在することから、建設工事への立ち会いと未調査部分の試掘調査の必要性が明記された。

平成26年6月9日付けで、大阪航空局から市教委にて「管制塔庁舎新築及びケーブルダクト」に係る審査願が提出され、平成26年8月6日付けで、市教委から国土交通省大阪航空局長及び防衛省航空自衛隊那覇基地司令あてに、「埋蔵文化財事前審査報告書」が送付された。その中で、申請に対する市教委の意見として、①申請地内には埋蔵文化財が包蔵されていることから保存のための調整が必要であること。②現況では埋蔵文化財の有無を確認することができないこと、③今後申請地で建築工事等の開発行為を行う際には埋蔵文化財の有無を確認する必要があること事前に市教委と調整することとした。

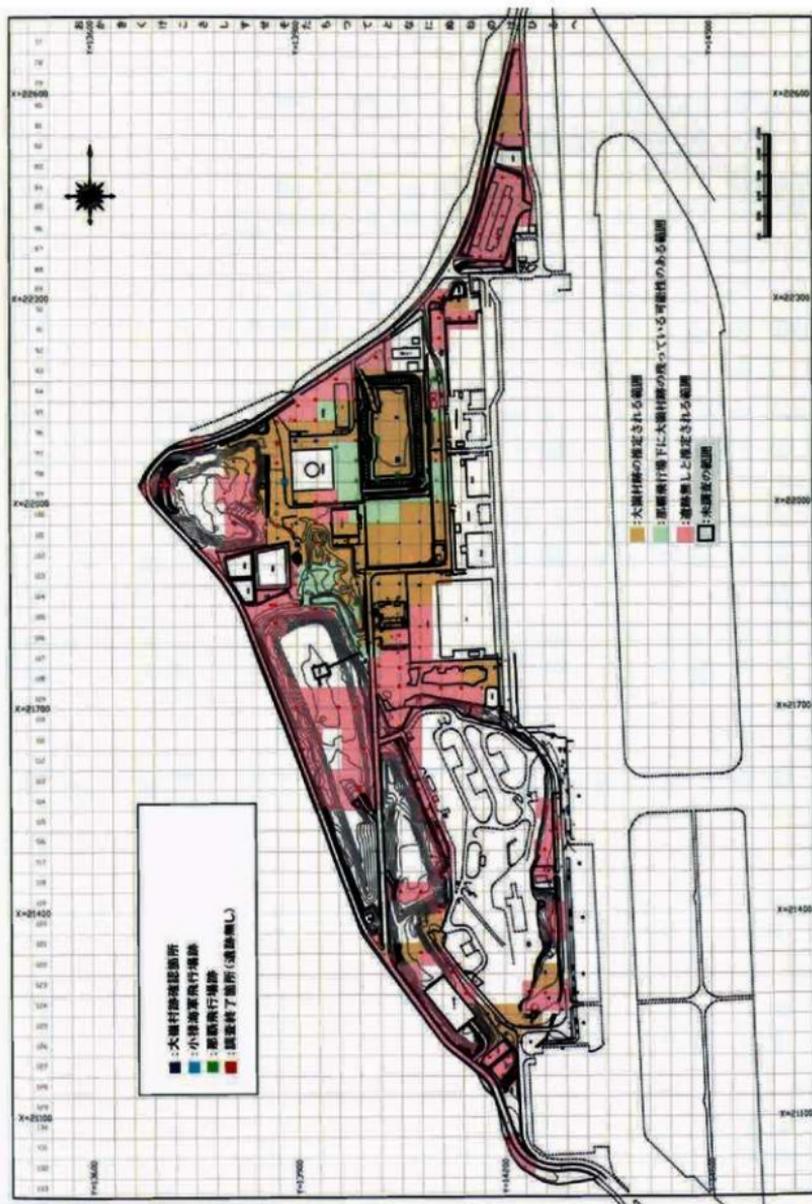
平成27年1月12日から1月14日まで、那覇市市民文化財課（以下、市文化財課）が「管制塔及びケーブルダクト」部分の試掘調査を実施した。平成27年2月4日、市教委から大阪航空局への埋蔵文化財事前審査報告書中で、申請地内には埋蔵文化財が包蔵されていることから、保存のための調整が必要であることが明記された。

大阪航空局は、那覇空港管制塔等の建設工事の着手を平成28年9月に予定していることから、計画の変更には応じられないと主張し、市教委に対して平成27年度中に建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施するよう依頼した。一方、市文化財課は平成27年度当初で策定した年間の発掘調査計画には当該建設予定地は含まれておらず、計画策定後に持ち込まれた案件には文化財調査専門員の配置などの対応が困難な状況にあった。対応に窮した市文化財課は、沖縄県教育委員会（以下、県）に発掘調査を行うよう協力を依頼した。これを受けて、県で検討した項目は次のとおりである。①大規模であること。②緊急性が認められること。③那覇市の体制に余裕がないと認められること。以上の状況を考慮し、県が市文化財課に代わり発掘調査を行う方向で調整を進めることになった。

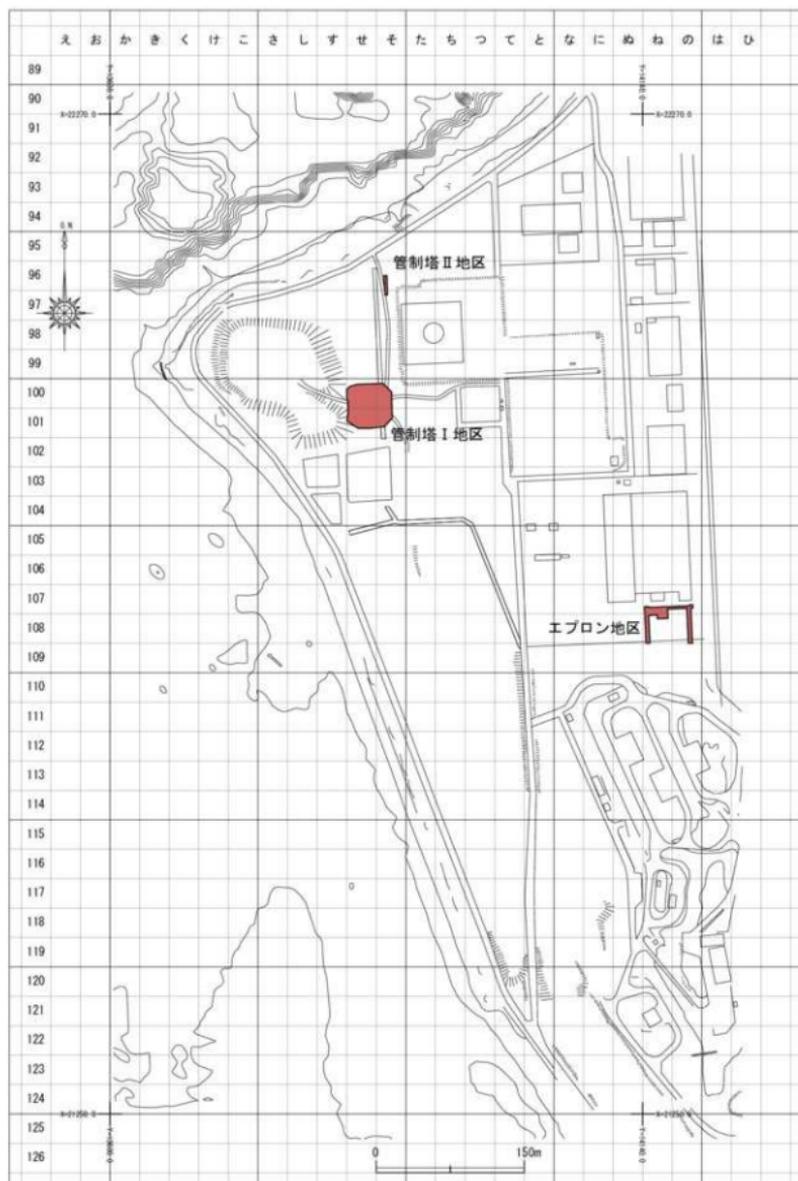
平成27年9月2日、県文化財課において、県（県文化財課、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、県埋文）を含む）、市文化財課で事務調整を行った結果、「管制塔及びケーブルダクトほか」については、平成27年度から平成28年度にかけて県が埋蔵文化財発掘調査を実施することで決定した。平成27年9月10日、大阪航空局、県、市文化財課で埋蔵文化財発掘調査について事務調整が行われた。平成27年9月30日、県文化財課は「管制塔及びケーブルダクト」ほか部分の埋蔵文化財発掘調査に係る必要経費の積算を県埋文に依頼した。平成27年11月2日付け那市文財第278号で、市教委より、県へ「那覇空港内に所在する大嶺村跡発掘調査について」の依頼文書が送付された。

平成27年12月2日、大阪航空局、国土交通省大阪航空局那覇空港事務所（以下、那覇空港事務所）、県、市文化財課で、大嶺村跡発掘調査に係る調整会議を行い、今後のスケジュール等について確認した。

平成28年1月12日、大阪航空局と沖縄県間で、「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事に伴う埋蔵文化



第1図 那覇空港西側管理区域内の埋蔵文化財分布状況 (那覇市教育委員会編 2012)



第2図 発掘調査箇所位置図

財発掘調査に関する協定書」及び「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託(発掘調査)」が締結され、諸準備を経て平成28年3月1日から埋蔵文化財発掘調査が実施されるに至った。

第2節 調査体制

本報告の大嶺村跡の発掘調査については、平成28年3月(平成27年度)～7月(平成28年度)までの2ヶ年度に跨って実施され、資料整理は平成28～29年度、報告書の刊行は平成30年度に行った。実施体制は以下のとおりである。

- 事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 諸見里明(平成27年度)、平敷昭人(平成28～30年度)
 事業主管 沖縄県教育庁文化財課
 課長 萩尾俊章(平成27～29年度)、濱口寿夫(平成30年度)
 記念物班長 金城亀信(平成27年度)、上地博(平成28～29年度)、仲座久宜(平成30年度)
 調整担当 長嶺均(主任専門員:平成27年度)、神村智子(指導主事:平成28～29年度)、羽方誠(主任専門員:平成30年度)
 事業所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
 所長 下地英輝(平成27年度)、金城亀信(平成28～29年度)、登川安政(平成30年度)
 総務班長 新垣勝弘(平成27年度)、比嘉智博(平成28～30年度)
 //担当 當山彬(主事:平成27・30年度)、新里靖(主査:平成28年度)、上間優多(主事:平成29年度)
 調査班長 上地博(平成27年度)、仲座久宜(平成28～29年度)、中山晋(平成30年度)
 //担当 発掘調査 長嶺均(主任専門員:平成28年度)、大堀皓平(主任:平成27～28年度)、新垣有一郎(専門員(臨任):平成27年度) 玉城綾(専門員:平成28年度)
 整理・報告 長嶺均(主任専門員:平成28～29年度)、大堀皓平(主任:平成28～30年度)
 業務委託 発掘調査支援業務 有限会社ティガネー(平成27～28年度)
 資料整理支援業務(遺物整理) 有限会社ティガネー(平成28年度)
 資料整理支援業務(遺物実測・製図・写真撮影等) 有限会社ティガネー(平成29年度)
 理化学分析(管制塔1地区土壌分析等) 株式会社パリオ・サーヴェイ(平成28年度)
 理化学分析(14C年代測定) 株式会社パリオ・サーヴェイ(平成28・29年度)
 調査指導(所属等は当時のもの)
 宮城弘樹(沖縄国際大学総合文化学部 専任講師)(現地指導・助言)(平成28年度)
 小畑弘己(熊本大学文学部 教授)(土器・陶器類指導・助言)(平成29年度)
 黒住耐二(千葉県立中央博物館 主任・上席研究員)(出土品類の分析指導)(平成29年度)
 協力者(所属等は当時のもの)
 業務実施 国土交通省大阪航空局、同那覇空港事務所、日本トランスオーシャン航空株式会社、沖縄県
 商工労働部企業立地推進課、財団法人 沖縄県建設技術センター、当山善吉(字大嶺自治会長)、赤嶺
 政勝(字大嶺向上会長)、上原弘(一般社団法人沖縄県那覇空港用地等地主会)、金城栄一(旧那覇飛
 行場用地問題解決地主会長)
 発掘調査協力 金城貴子・宮城淳一・田村薫・南勇輔(沖縄県立埋蔵文化財センター)
 文化財担当者向け現地説明会参加者及び発掘調査現地指導(所属ごとに50音順、苗字・所属等は当時)
 安斎真知子・大田成子・神谷あけみ・島弘・高嶺朝美・玉城安明・當路由嗣・仲宗根啓・根路銘敦
 子・野原巴・牧山美緒(那覇市市民文化庁文化財課)、新垣裕美・伊波晴美・伊禮さおり・奥間陽子・
 兼城成子(宜野湾市教育委員会)、安斎英介・佐伯信之・菅原広史・瑞慶覧長順・仲宗根久里子・仁
 王浩司・又吉幸嗣(浦添市教育委員会)、大城達宏・幸地千明・宮城良真・与那嶺豊(豊見城市教育
 委員会)、津波陽子・西平剛・山里昌次・横山幸平(南城市)、大村由美子・呉屋孝治・崎原美智子・
 長堂綾・山崎真由美・山里奈美・山田浩久・渡辺幸夫(西原町教育委員会)、仲程勝哉・宮城明恵(与
 那原町教育委員会)、保久盛陽(南風原町教育委員会)、太田菜摘美・崎原恒寿・仲村善洋・福原りお(恩
 納村教育委員会)、宮平盛晃(中城村教育委員会)、知念隆博・中山晋・羽方誠・宮城仁(沖縄県教
 育庁文化財課)、瀬戸哲也・山本正昭(沖縄県立埋蔵文化財センター)

資料整理協力（所属は当時）

丸山真史（東海大学）、新垣力・具志堅清大・廣岡凌・南勇輔・具志みどり・多々良亜矢子・富平砂綾子・
嶺井幸恵・宮平笑里子・宮城初枝（沖縄県立埋蔵文化財センター）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大嶺村跡は、沖縄県那覇市南部の那覇空港内に位置し、那覇市内の最西端である大嶺崎一帯に所在する。

那覇市は沖縄本島南西部に位置する。沖縄県の県庁所在地であり、天久新都心をはじめとした沖縄経済の中心地であり、かつ那覇空港を抱える沖縄県の玄関口でもある。人口は平成22年10月1日時点で315,954人、推計面積は首里市及び小嶺村が編入された昭和29(1954)年時点で22.63km²だったが、度重なる水域の埋め立て等により、現在では推計面積39.57km²を数えるに至っている。気候は年間平均23℃、年間降水量2000mm前後で、亜熱帯モンスーン気候に属する。地質は第三紀中新世の島尻層、第三紀新世から第四紀洪積世の琉球層群琉球石灰岩及び沖積層で形成される。地形は北に天久台地、東に首里台地、南に識名台地及び小嶺台地が囲むような地形をなす。これらの台地上から西海岸へ安謝川、久茂地川、国場川等が流れ、河川周辺に沖積地を形成している。特に国場川と鮎波川の合流地点には汽水干潟の漫湖が形成され、昭和57(1982)年に国指定漫湖鳥獣保護区、平成11(1999)年にはラムサール条約にも登録されている。さらに国場川河口は大きく開いた天然の良港であり、ガスク時代以来、那覇港として琉球・沖縄第一の港となっている。

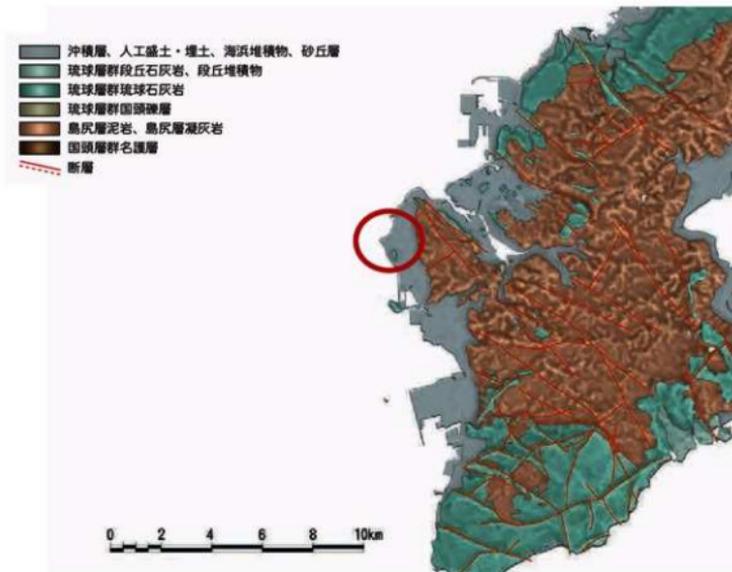
大嶺村跡周辺は、那覇空港西側管理区域となっており、地質上では沖積層及び砂丘・海浜堆積物で形成されている。集落南側には琉球層群琉球石灰岩の隆起した丘陵があり、ウフグシク・タマグシクと呼ばれている。

参考文献

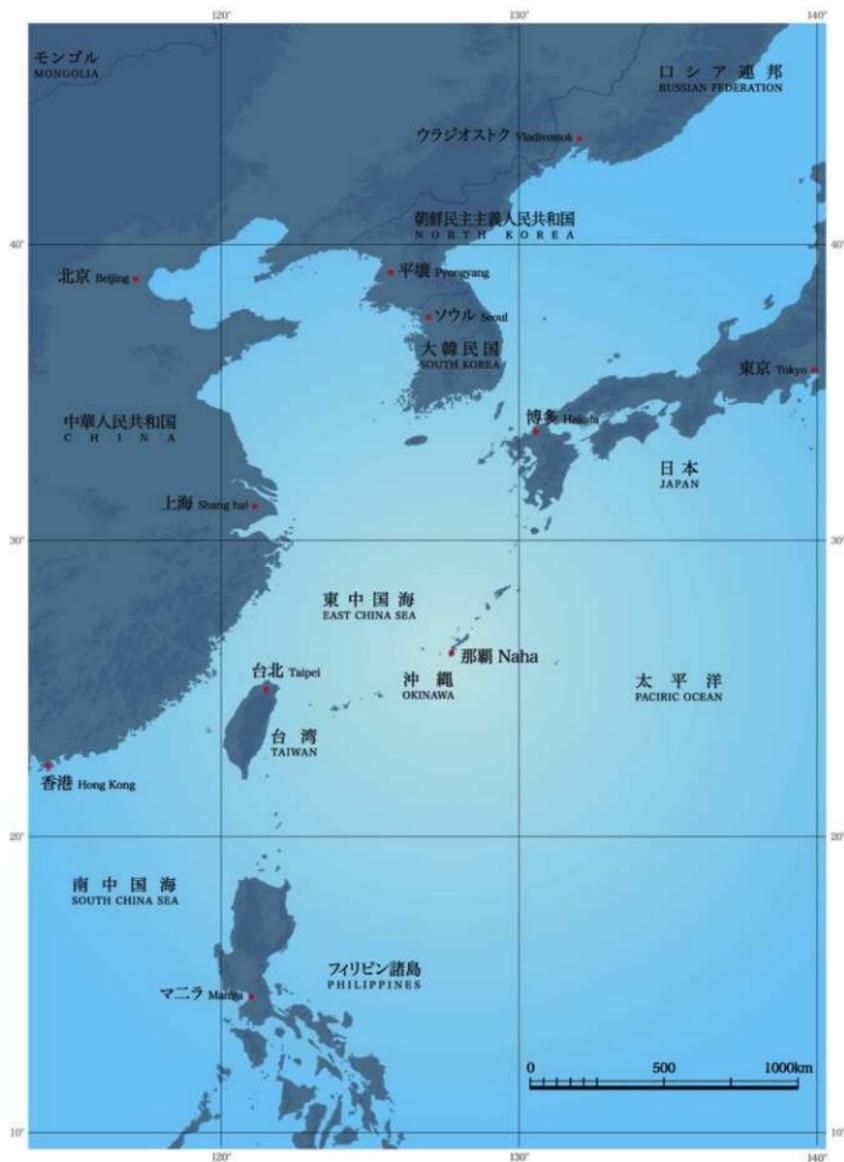
那覇市市勢要覧 2017

那覇市 HP「市のプロフィール」(<http://www.city.naha.okinawa.jp/general/profile/>)

沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2006『風上のすがた』沖縄県教育委員会



第3図 大嶺村跡周辺の地質 ○が大嶺村跡 (沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編 2006)



第4図 沖縄県及び那覇市位置

第2節 歴史的環境

大嶺村跡の周辺には、縄文時代早期～中期の鏡水箕原原C遺跡、縄文時代後期の鏡水箕原原A遺跡や鏡水名座原A遺跡などがあり、続く弥生～平安並行時代の遺跡には鏡水箕原原C遺跡、グスク時代は同初頭で農耕の痕跡が確認された那崎原遺跡、崎原グスク、尻川原遺跡、瀬長グスクなどが所在する。これらの遺跡からは、この地域一帯が縄文時代早期頃より連綿と人が居住していたことを示している（第5図）。

さて、大嶺村跡の記録上の初出は『おもしろそうし』二十巻 1369 首目の歌に、大嶺の領主が西の世の主を招いたというもので、グスク時代には大嶺に領主が居たことを窺わせる。その後、『球陽』の高歌 31～33（1743～1745）年の記述には、小嶺間切が寛文 12（尚貞 5）（1673）年に 15 カ村を包含する間切として始まったとされている。以後、正徳 3（1713）年の『琉球国由来記』に大嶺の土帝君や行事などの記述、康熙 60（1721）年『中山傳信録』には冊封副使の徐葆光が大嶺村の景観についての記録が残っている。なお、18 世紀半ばに作製された「間切集成図」には、集落の範囲が大嶺崎には達していないことや、大嶺村東側に馬場があったことが確認できる（第6図）。

近代になると、明治 29（1896）年「沖繩県ノ郡編制ニ関スル件」の公布により、島尻郡小嶺間切大嶺村、さらに明治 41（1908）年「沖繩県及島嶼町村制」の施行により、小嶺村字大嶺となる。なお明治 14（1881）年「明治 13 年 沖繩県統計概表」によると、大嶺村の戸数は 233、人口 1357 人、馬場の規模は長さ 2.5 町（約 270m）、幅員 10 間（約 18m）、明治 36（1903）年には戸数 306、人口 1498 人へと増加している。主な生業は肥沃な農地を生かした稲、雑穀、野菜等の栽培と、集落前面の海で食用の魚介類や農作物の肥料となる海草やウニ類等を採る漁業であった。また明治末期から太平洋戦争開始までにかけて、換金産業として婦女子による織物と帽子編み業も盛んに行われたとされる。

昭和 6（1931）年より旧日本軍による飛行場建設の測量が始まり、昭和 8（1934）年には、「小嶺海軍飛行場」として建設された。昭和 10（1935）年 6 月 1 日からは、通信省航空部管理の「那覇飛行場」となり、内務航空路として本土と台湾を結ぶ中継基地として整備拡張された。この時期は軍民共同で使用されていたが、昭和 17 年には戦局に合わせて飛行場の拡張工事が行われ、海軍輸送部管理の「海軍小嶺飛行場」となった。昭和 18（1943）年には国家総動員法により字大嶺一帯が接収されて「小嶺海軍飛行場」として拡張された。

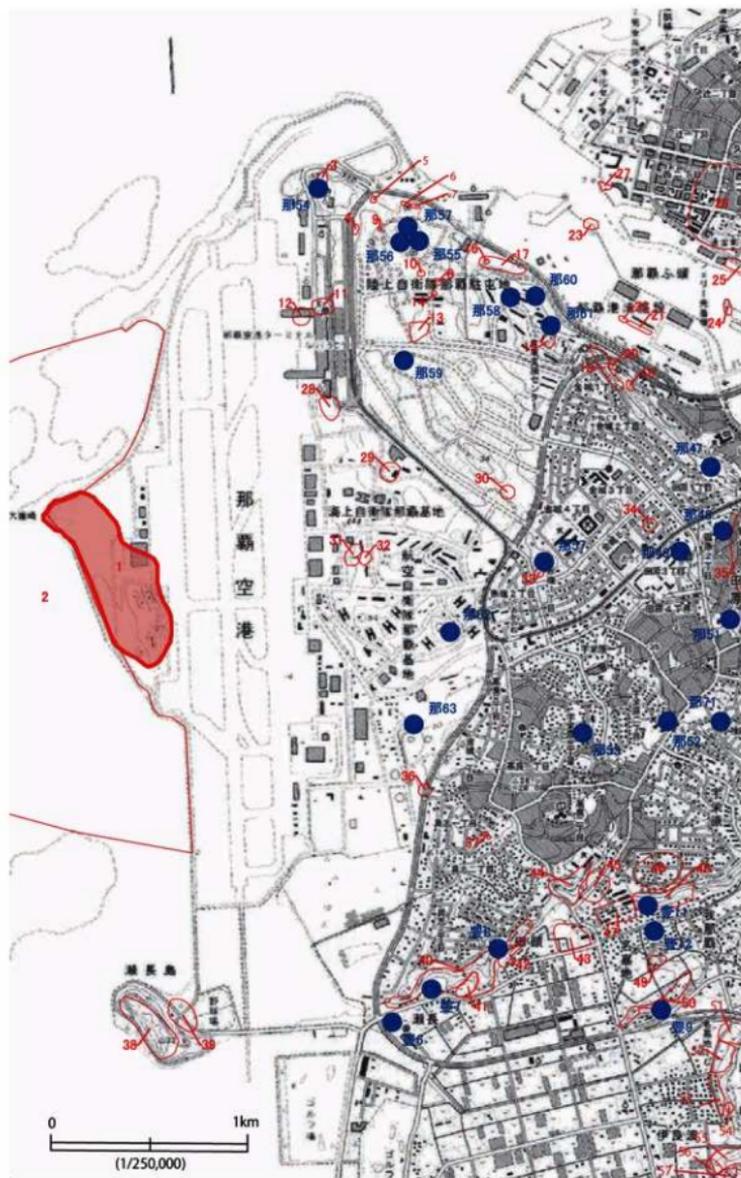
小嶺海軍飛行場及び大嶺村は昭和 20（1945）年 6 月に鏡水から上陸した米軍によって占領され、同年 12 月には米空軍が「那覇飛行場」として整備・拡張を経て運用を開始している。その後昭和 47（1972）年 5 月 15 日の沖縄本土復帰に伴い、運輸省所管の第二種空港に指定（運輸省告示 236 号）され、「那覇空港」と改められると同時に整備拡充が行われ、沖縄県の空の玄関口として今日に至っている。

参考文献

- 那覇市教育委員会編 2012『大嶺村跡—那覇空港消防車庫新築工事に伴う緊急発掘調査報告—』那覇市文化財調査報告書第 89 集
 字大嶺向上会編 2008『大嶺の今昔』
 外間善喜校中 2000『おもしろそうし』（下）岩波書店

遺跡地図作成参考資料等

- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2015『沖縄県の戦争遺跡—平成 22～26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書—』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集）
 那覇市市民文化財部文化財課編 2018『那覇市大嶺海岸の石切場跡』（那覇市文化財調査報告書第 107 集）那覇市
 那覇市 HP「なは MAP（文化財）」（<https://www.sonicweb-asp.jp/naha/>）
 ※意見集約の遺跡分布図については、同市教育委員会よりデータの提供を受けた。



第5図 大嶺村跡とその周辺の遺跡

表1 大嶺村跡周辺の遺跡一覧表

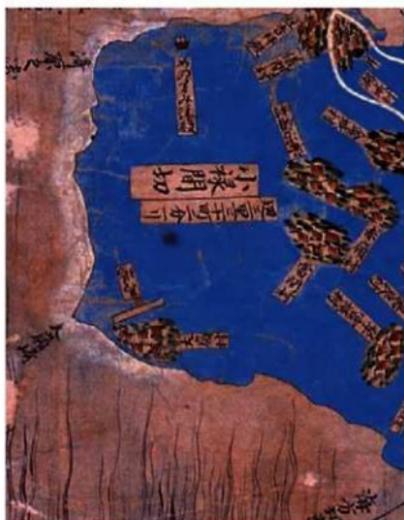
＜周辺遺跡凡例＞

1	大嶺村跡	21	垣花村跡	41	瀬長古島遺跡
2	大嶺海岸の石切場跡	22	住吉遺跡	42	田頭古島遺跡
3	崎原グスク	23	屋良座森グスク	43	瀬長舟無小原遺物散布地
4	鏡水箕原A遺跡	24	御物グスク	44	名嘉地後原古墓群
5	鏡水箕原B遺跡	25	浅地村跡	45	名嘉地古島遺跡
6	鏡水箕原C遺跡	26	西村跡	46	我那覇古島遺跡
7	鏡水箕原D遺跡	27	三重グスク	47	名嘉地原遺物散布地
8	鏡水箕原E遺跡	28	那崎原遺跡	48	我那覇後原遺物散布地
9	鏡水箕原原古墓群	29	嶺野尾原遺跡・古墓群	49	我那覇佐真下原古墓群
10	水置屋原遺跡	30	安次嶺部落跡	50	名嘉地屋無垣原古墓群
11	鏡水古墓群	31	当間安座間原遺跡	51	伊良波先祖原遺物散布地(A地点)
12	鏡水部落跡	32	当間原塚	52	伊良波先祖原遺物散布地(B地点)
13	鏡水土砂場原A遺跡	33	赤嶺部落跡	53	伊良波先祖原遺物散布地(C地点)
14	鏡水土砂場原B遺跡	34	トゥムイ古墓遺跡	54	伊良波西遺跡
15	鏡水名座原A遺跡	35	田頭東原遺物散布地	55	座安若知花原古墓群
16	鏡水名座原B遺跡	36	宮城部落跡	56	座安若知花原遺物散布地(A地点)
17	鏡水名座原古墓群	37	尻川原遺跡	57	座安若知花原遺物散布地(B地点)
18	ガジャンピラ丘陵遺跡	38	瀬長グスク		
19	住吉遺物散布地	39	瀬長古島遺跡		
20	ガジャンピラ古墓群	40	田頭・瀬長北側古墓群		

＜周辺遺跡の凡例(戦争遺跡)＞

那47	山下町大通りの塚	那57	鏡水海軍砲台跡	豊6	アカサチ森軍構築塚
那48	田原2丁目の塚	那58	掩体塚	豊7	瀬長の軍構築塚
那49	こぶき山の陣地塚跡	那59	鏡水海軍司令部塚	豊8	田頭の軍構築塚
那50	小祿の共同防空壕群	那60	正木隊の塚	豊9	名嘉地の住民避難塚
那52	宇栄原2丁目の塚	那61	高射砲部隊の塚	豊11	我那覇の軍構築塚
那53	宇栄原3丁目の塚	那62	当間海軍砲台跡	豊12	メーヌモータ
那54	崎原灯台跡の塚	那63	高良の掩体塚跡		
那55	らくだ山海軍陣地塚①	那71	宇宇栄原の塚		
那56	らくだ山海軍陣地塚②				

※戦争遺跡の番号は「沖縄県の戦争遺跡」（沖縄県立埋蔵文化財センター編2015）戦争遺跡分布図と統一している。



第6図 「間切図」にみられる大嶺村



第7図 「正保国絵図」の大嶺村跡周辺



第8図 昭和20（1945）年1月米軍航空写真の大嶺村と小塚海軍飛行場

第3章 基本層序及び調査方法・経過

第1節 基本層序

発掘調査の結果、管制塔Ⅰ・Ⅱ地区とエプロン地区間で層序の異同が認められたが、出土遺物等から検討した結果、下記を基本層序として設定した。

【人為的堆積層】

- I層：現表土
- Ⅱ層：米軍那覇飛行場及び沖縄空港に伴う造成土層
- Ⅲ層：戦中～戦後直後の造成土層
- Ⅳ層：大嶺村跡期の旧表土

【自然堆積層】

- V層：浅黄色砂層
- Ⅵ層：灰黄色砂層
- Ⅶ層：烏尻泥岩層

※色調は『新版標準土色帖』に準拠

上記のうち、Ⅰ・Ⅱ層は全調査区で共通して認められる。Ⅲ-1・2層は管制塔Ⅰ地区のみで認められる層である。これまでの報告で遺物包含層とされている層であるが、遺物中に戦中戦後とみられる弾丸やガラス瓶などが認められることから、焼失した大嶺村を整地した際の地層と想定される。Ⅲ-3層は管制塔Ⅰ・エプロン両地区の近世・近代遺構の覆土に認められるため、これも大嶺村期直後の堆積と判断される。Ⅳ層はエプロン地区にのみ認められる、近世・近代の旧表土である。ただしⅤ層に比べて硬化が認められることから、人工的な整地層と判断した。

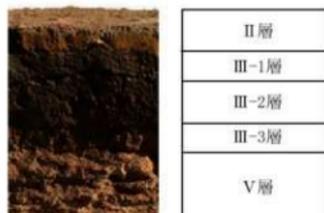
Ⅴ層以降は自然堆積と考えられる。概ね白色でしまりの弱い細粒砂層が上層、貝やサンゴを多量に含む粗砂層が下層という組み合わせで構成されるが、細粒砂層はエプロン地区のトレンチ2以東でのみ確認された。下層の堆積の確認ができたエプロン地区においては、Ⅴ層下にⅤ層粗砂層が灰色化した層が厚く堆積し、その下に烏尻泥岩層が確認された。

なお、各地区における詳細な地層観察所見は各章に詳述する。

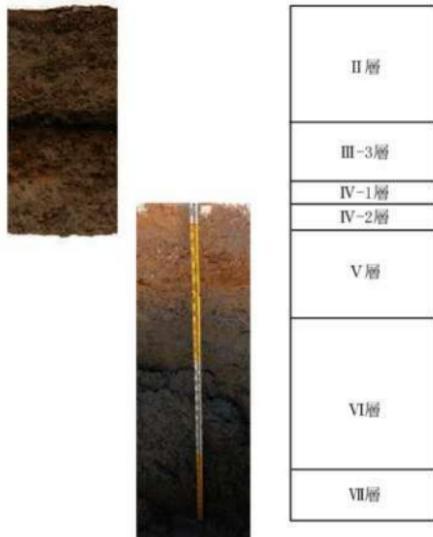
第2節 調査方法と経過

1 調査の方法

調査区設定 まず大阪航空局那覇空港事務所より提供された基準座標より、各調査区に基準となる座標及



第9図 管制塔Ⅰ地区地層柱状図



第10図 エプロン地区地層柱状図

び標高を移動させた。それを基に、大阪航空局より提供を受けた調査対象箇所の図面を基に1mごとに調査杭を落とし、これを基準にグリッド設定及び調査区の設定を行った。

調査順位 全調査区のうち、大阪航空局よりエプロン地区を優先して調査するよう指示を受けたため、同地区より調査を開始した。ただし、後に大阪航空局と沖縄県教育委員会間で調整・協議し、平成28年4月以降は全地区を並行して調査を進めた。

磁気探査及び表土掘削 調査区の設定が完了した調査区より、表層の磁気探査を実施し、異常点の安全確認が完了したのち、重機により表土掘削を行った。磁気探査は深度0.5mごとに行い、管制塔Ⅰ地区はⅢ層、エプロン地区はⅣ-1層が検出されるまで慎重に重機掘削と磁気探査を繰り返した。ただし管制塔Ⅰ地区では、ほぼ調査区全域が異常点と言っても遜色のないほどの結果となった。そのため、Ⅲ層に達するまでは異常点の確認掘削と同様の慎重さをもって重機掘削を行った。また管制塔Ⅰ地区西側及び管制塔Ⅱ地区は、壁面が2m以上に達したため、壁面を法面化して対応した。

遺構の調査 遺構検出及び掘削は人力で行った。遺構検出は沖縄県立埋蔵文化財センター（以後「埋文」）の調査員で実施し、支援業者により検出状況写真の撮影、オルソによる図化を行い、埋文の調査員による確認・承諾を得て半蔵を行った。半蔵後は埋文の調査員が断面の分層を行い、検出時と同様の方法による記録及び確認を行い、さらに埋文の調査員による土層観察記録を行ったのち、完掘した。

遺物の取り上げ 遺物は原則として遺構ごとに取り上げを行った。遺構外遺物の場合は、地区、トレンチ（エプロン地区のみ）、グリッド、層位という単位で取り上げた。

遺物の水洗及び保管 取り上げた遺物は、雨天時等において水洗作業を行った。水洗された遺物のうち重要と判断される遺物は別に管理し、その他の遺物はコンテナに収め、現地の倉庫内に収納した。

調査区全景写真 調査区全景写真は、管制塔Ⅰ地区は調査区西側の丘陵と同北側の残土置き場を利用して撮影した。エプロン地区はスカイマスターによる撮影に加え、JTAのご厚意により、調査区北西側のJTA施設屋上より撮影した。

2 事業経過

上記の経緯により、現地における発掘調査は、平成27・28年度をまたいで実施した。その後、同年より平成29年度まで資料整理作業を行い、平成30年度に成果をとりまとめた上で編集を行い、発掘調査報告書を刊行した。

また、当発掘調査は地元的那覇市小祿地区の住民の高い関心を集め、現地説明会をはじめ、地元からの依頼による調査成果の報告の実施をはじめ、多くの普及公開活用機会を得た。

以下、主な内容を記載する。

【発掘調査】

平成27年度

- 平成28年 2月10日 (有)ティガネーと発掘調査支援業務委託について契約締結。
 2月24日 那覇空港事務所保安防災課へ那覇空港西側管理区域工事立入申請書を提出。
 2月26日 沖縄県赤土等流出防止条例に基づき、事業行為通知書を沖縄県南部保健所に提出。
 2月29日 那覇空港西側管理区域工事への立入申請許可。
 3月1日 沖縄県赤土等流出防止条例に基づく事業行為通知書について、確認済み通知書を受領。現地作業を開始。伐採、測量・調査区設定、磁気探査を開始。
 3月2日 仮設物設置申請書を那覇空港事務所へ提出。
 3月4日 仮設物使用承認書を受領。
 3月7日 重機掘削作業を開始。
 3月10日 埋文第718号にて、沖縄県教育委員会教育長に対し、発掘調査着手について報告。
 3月14日 現場仮設事務所を設置。
 3月15日 発掘作業員を導入した掘削等作業を開始。
 3月22日 エプロン地区Ⅳ-1層及びⅤ層の遺構検出を開始。大嶺村に伴うとみられる遺構が検出され始める。
 3月24日 那覇空港事務所基盤整備担当職員による現地視察。
 3月31日 大阪航空局に対し、平成27年度分の完了報告書を提出。

平成 28 年度

- 4月 9日 同日から翌 10日にかけて降水量 191mmに及び豪雨により、全調査区が冠水。11日より排水作業を開始。
- 4月 18日 エプロン地区排水完了。
- 4月 19日 大阪航空局建設室と現地調整。
- 4月 20日 管制塔Ⅰ地区も一部排水を継続しつつ、発掘作業を再開。
- 5月 10日 管制塔Ⅱ地区の排水完了、発掘調査を再開。
- 5月 16日 管制塔Ⅱ地区の調査を優先的に完了させるため、管制塔Ⅰ地区の発掘調査を一時停止する。
- 5月 25日 完掘状況等の記録を行い、管制塔Ⅱ地区の発掘調査を完了。同日より管制塔Ⅰ地区の発掘調査を再開。
- 5月 27日 管制塔Ⅱ地区に濁水処理機を設置し、以後沈殿池として利用を開始。
- 6月 8日 管制塔Ⅰ地区Ⅴ層の遺構検出作業を開始、同日より遺構が確認され始める。
- 6月 10日 那覇空港事務所並びに沖縄県企業立地推進課及び沖縄県教育庁文化財課向けに現地説明会を実施。
- 6月 16日 県内市町村文化財関係者対象の現地説明会を実施。
- 6月 21日 エプロン地区Ⅳ-1層の完掘状況写真を撮影。
- 6月 25日 エプロン地区Ⅳ-1層を重機掘削し、Ⅳ-2層を検出。
- 6月 29日 管制塔Ⅱ地区の埋め戻し開始。
- 同日 西原中学校・西原東中学校生徒が、職場体験として発掘作業に参加。
- 6月 30日 管制塔Ⅱ地区の埋め戻し完了。
- 7月 1日 沖縄国際大学専任講師の宮城弘樹氏を招聘し、現場指導。
- 7月 2日 管制塔Ⅰ地区の完掘写真を撮影。
- 7月 5日 那覇空港事務所基盤整備担当職員による現場視察。
- 同日 エプロン地区Ⅳ-2層の遺構検出作業を行い、遺構を検出。
- 7月 11日 管制塔Ⅰ地区の埋め戻しを開始。
- 7月 13日 エプロン地区の発掘調査を完了し、埋め戻しを開始。
- 7月 19日 管制塔Ⅰ地区の埋め戻しを完了。
- 7月 20日 エプロン地区の埋め戻し及び種子吹付けを完了。
- 7月 28日 現場仮設事務所、仮設トイレ等を撤去。現地作業完了。
- 8月 30日 大阪航空局へ完了報告書を提出。

【資料整理】

平成 28 年度

- 9月 21日 大阪航空局と沖縄県間において、「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託（資料整理）」契約を締結。
- 9月 29日 （有）ティガネーとの間に資料整理支援業務委託について契約締結。
- 10月 17日 同一袋内での遺物の種別分類・仕分け及び接合作業を開始。
- 11月 9日 分類・仕分けが完了した遺物より、注記作業を開始。
- 12月 16日 注記まで完了した管制塔Ⅱ地区の遺物より、接合作業を開始。
- 12月 20日 管制塔Ⅰ地区出土遺物の接合作業を開始。

平成 29 年

- 1月 6日 エプロン地区の接合作業を開始。
- 2月 15日 実測等対象資料の抜き出し及び遺物集計作業を開始。
- 2月 27日 抜き出し及び遺物集計作業を完了。
- 3月 10日 大阪航空局に対し、完了報告書を提出。

平成 29 年度

平成 29 年

- 4月 26日 大阪航空局と沖縄県間において、「那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託（報告書作成）」契約を締結
- 6月 24日 （有）ティガネーとの間に資料整理支援業務委託について契約締結
- 6月 29日 対象資料を（有）ティガネー資料整理場へ移送

- 7月 5日 実測作業を開始
 7月 13日 千葉県立中央博物館の黒住耐二氏を招聘し、資料整理指導を受ける。
 10月 20日 受託契約について変更契約を締結し、報告書刊行を次年度に移行。
 11月 16日 熊本大学小畑弘己氏を招聘し、資料整理指導
 平成30年 2月 27日 遺物実測・写真撮影・貝類整理集計作業を完了し、成果品を沖縄県立埋蔵文化財センターへ納品。
 3月 16日 大阪航空局に対し、完了報告書を提出。
- 平成30年度
- 6月 26日 大阪航空局と沖縄県教育委員会間において、報告書刊行について協定締結。
 6月 29日 大阪航空局と沖縄県間において、「那覇空港事務所管轄塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査委託（報告書刊行）」契約を締結。
 8月 1日 必要機器のリースを行い、作業を開始。
- 平成31年
- 2月 12日 「大嶺村跡発掘調査報告書印刷製本業務」について、(有)金城印刷と競争見積もりの結果、随意契約。
 3月 15日 発掘調査報告書刊行。

【普及公開活用】

- 平成28年度
- 平成28年 6月 19日 一般向け現地説明会を午前・午後の2回に渡り、参加者40名限定で実施。
- 平成29年度
- 平成29年 6月 22日 「うるくの歴史と文化を語る会」の依頼により、同会総会記念講演（会場：JAおきなわ小嶽支店3階ホール）において、発掘調査成果を報告。
 8月 1日～9月 3日 沖縄県立埋蔵文化財センター主催「発掘調査速報展2017」（会場：同センター企画展示室）において、出土資料を展示。
 8月 5日 沖縄県立埋蔵文化財センター主催第69回文化講座において発掘調査成果を報告。
 1月 16日～2月 4日 沖縄県立埋蔵文化財センター主催「発掘調査速報展2017巡回速報展」（会場：恩納村博物館）において、出土資料を展示。
 2月 16日～2月 25日 沖縄県立埋蔵文化財センター主催「発掘調査速報展2017巡回速報展」（会場：宮古島市総合博物館）において、出土資料を展示。



職場体験



一般者向け現地説明会

図版1 職場体験・現地説明会

第4章 管制塔 I・II地区の調査成果

第1節 位置と層序

管制塔 I 地区では、大嶺崎のおよそ中央部に位置する。標高は約 2 m 前後である。調査区西側には丘陵がみられるが、1945 年当時の写真には記録されておらず、戦後の造成等によって形成された人工的なものであり、本来はほぼ平坦な地形であったとみられる。

堆積状況は、基本層序 I～III 層及び V 層が検出された。特に III 層は硬化した III-1 層と、V 層との混砂層となっている III-3 を含む 3 枚に細別される。また自然堆積の V 層は、貝やサンゴ片等の海浜堆積物層及びピーチロックとなっており、エプロン地区でみられるような細粒の白砂層は検出されなかった。

【人為的堆積層】

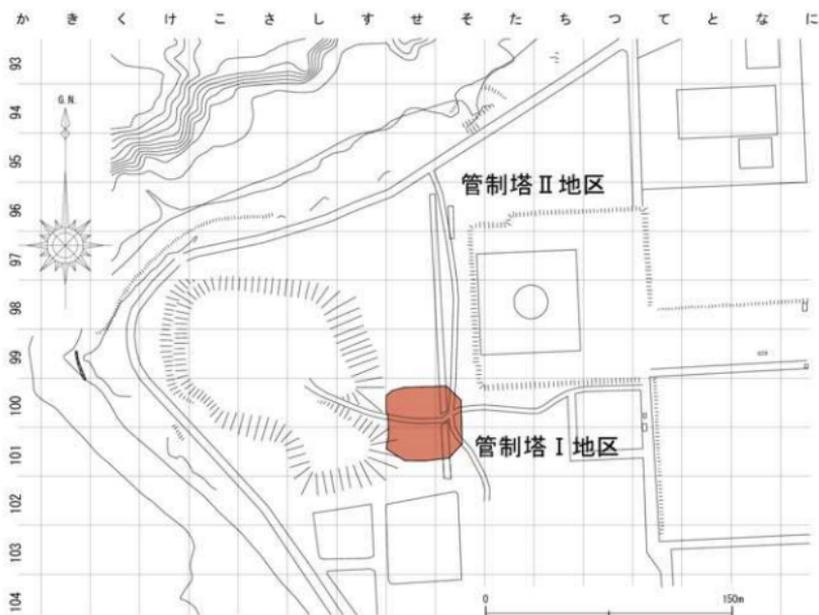
I 層：現表土。近世・近代の沖縄産陶器や瓦などが稀に確認できる。

II 層：米軍那覇飛行場及び那覇空港に伴う造成土層。

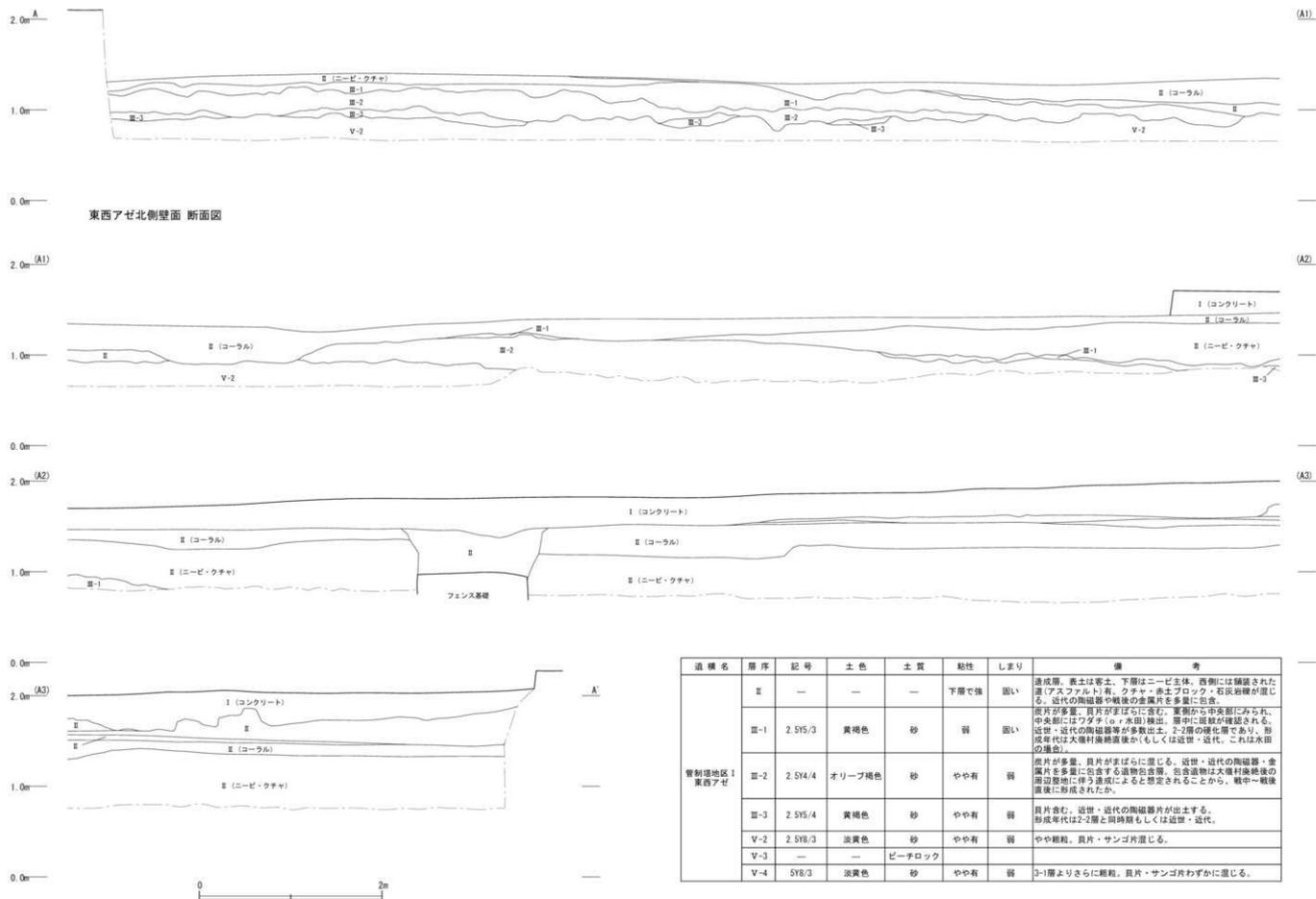
III 層：戦中～戦後直後の造成土層。

【自然堆積層】

V 層：海浜堆積物層



第 11 図 管制塔 I 地区位置 (S=1/3000)



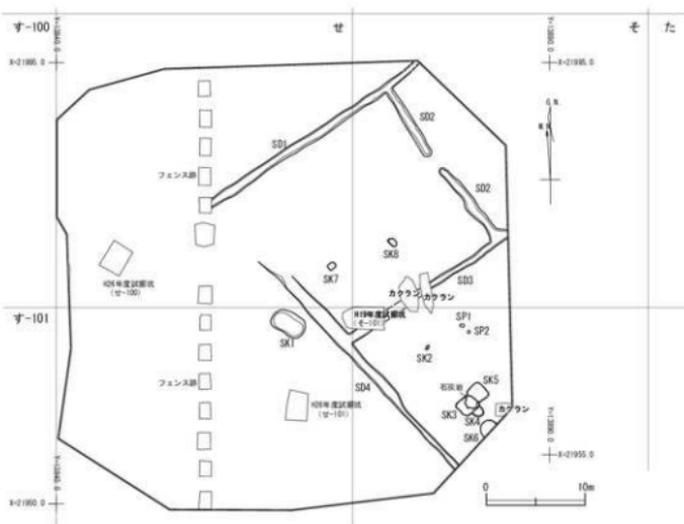
第12図 管制塔1地区地層断面図 (S=1/40)



図版2 管制塔I地区地層断面（オルソ）（S=1/40）

第2節 V層の遺構と遺物

概要 検出した遺構は、土坑(SK) 8基、溝状遺構(SD) 4基、ピット2基である。覆土内から出土した遺物より、いずれも近世・近代の遺構とみられるが、SK 1は後述のように戦前から戦中の可能性が挙げられる。出土遺物も同様に近世・近代がほとんどを占めるが、現代遺物は認められない点はこれより上層と大きく異なる。



第13図 管制塔1地区V層 遺構配置図 (S=1/500)



図版3 管制塔1地区V層 遺構配置図 (オルソ)

1 V層の遺構と遺構内出土遺物

【SD1・2・3・4】

構造 平面形からは4つの溝により方形の区画を形成。

SD1：長さ2,413cm、幅95cm、深さ15cm。

SD2：長さ1,838cm、短軸100cm、深さ11cm。

SD3：長軸1,937cm、短軸74cm、深さ12cm。

SD4：長軸2,891cm、短軸165cm、深さ8cm。

覆土 いずれも上層はⅢ-2層、下層はⅢ-3層及びこれとV層の混砂層。

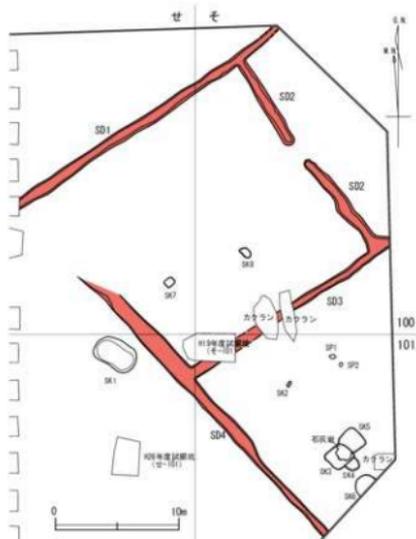
出土遺物

SD1：中国産磁器（第16図1）や沖縄産陶器（同図2）、陶質土器（同図3）。また掲載外だが先史時代の土器1点も出土。

SD2：日本産磁器（第18図4）や沖縄産施軸陶器が出土（同図5・6）。

SD3：円盤状製品（第20図7）が出土。

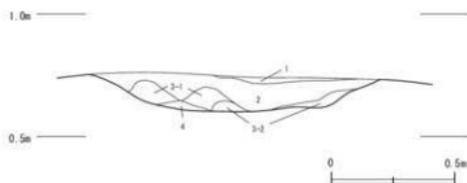
SD4：ボタン状の金属製品（第22図8）が出土。



第14図 管制塔Ⅰ地区SD1・2・3・4平面図
(S=1/400)



図版4 管制塔Ⅰ地区SD1・2・3・4発掘状況（北東から）



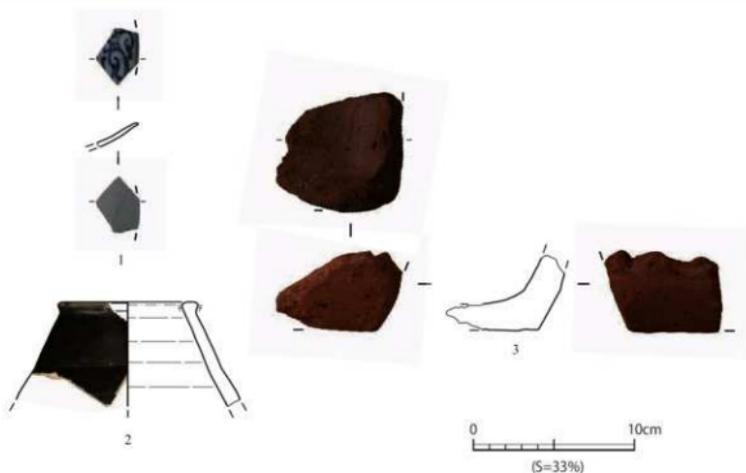
第15図 管制塔I地区SD1断面図 (S=1/20)



図版5 管制塔I地区SD1ベルト (南西から)

表2 管制塔I地区SD1ベルト 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
管制塔地区I SD1ベルト	1	2.5V4/3	オリーブ褐色	砂	有	有	II層とIII-2層下部の層境付近か。	
	2	2.5V5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	III-3層と同じ。	
	3-1	—	—	砂			2層と4層の混層で2層の方が多。	
	3-2	—	—	砂			2層と4層の混層で4層の方が多。	
	4	2.5V8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層。	

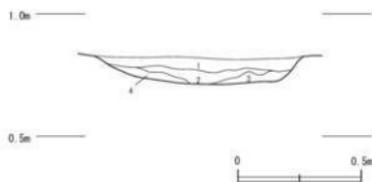


第16図 管制塔I地区SD1出土遺物

第4章 管制塔Ⅰ・Ⅱ地区の調査成果

表3 管制塔Ⅰ地区SD1 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾		印・銘	産地年代	備考	
										軸面	文様				その他
第16図 1	そ100 SD1	中国産 陶磁器	皿	青花 磁器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	3.89	-	白色 硬密	外:透明 内:透明	内:花唐草 文	ペンシルド ローインデ による施文	なし	徳化 18~19c	-
第16図 2	そ100 SD1	沖縄産 陶磁器	皿	沖縄産 藍釉 陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	43.77	口唇部は 磨粉	輝黄白色/ 軟質	外:黒釉 内:無釉	なし	-	-	-	-
第16図 3	そ100 SD1	陶質 土器	火鉢	陶質 土器	底部	口径:- 器高:- 底径:-	166.95	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	沖縄	馬蹄形火 鉢・鼻貝庄 産



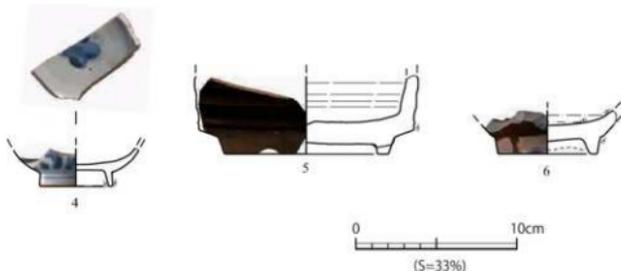
第17図 管制塔Ⅰ地区SD2断面図 (S=1/20)



図版6 管制塔Ⅰ地区SD2ベルト (北西から)

表4 管制塔Ⅰ地区SD2 土層観察表

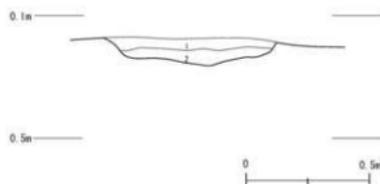
遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
管制塔地区Ⅰ SD2-ベルト	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	III-3層。	
	2	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱		
	3	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層。	
	4	-	-	ビーチロック			V-2層。	



第18図 管制塔Ⅰ地区SD2 出土遺物

表5 管制塔Ⅰ地区SD2 出土遺物観察表

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾		印・銘	産地年代	備考	
										軸面	文様				その他
第18図 4	そ100 SD2	日本産 陶磁器	碗	受付 磁器	底部	口径:- 器高:- 底径:-4.5	22.06	-	白色 やや緻密	外:透明 内:透明	-	-	肥前 不明	-	
第18図 5	そ100 SD2	沖縄産 陶磁器	火鉢	沖縄産 藍釉 陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-10.0	109.54	なし	輝黄白色/ 軟質	外:鉄釉 内:無釉	なし	-	-	-	-
第18図 6	そ100 SD2	沖縄産 陶磁器	碗	沖縄産 藍釉 陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-6.1	73.50	見込靴の 目状輪割 ぎ・返し け・犯布 有・受付足 襷付着	灰白色/緻 密	外:鉄釉 内:鉄釉	-	-	-	-	-



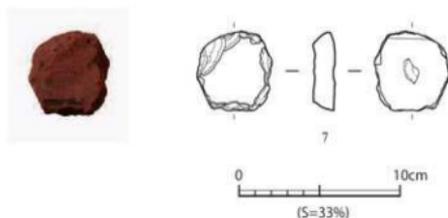
第19図 管制塔I地区SD3断面図 (S=1/200)



図版7 管制塔I地区SD3ベルト (南西から)

表6 管制塔I地区SD3土層観察表

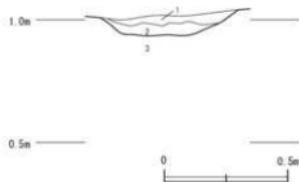
遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区I SD3ベルト	1	2.5V5/4	黄褐色	砂	有	やや有	貝片等まばらに混じる。下層に向かうにしたがって粒径大。
	2	2.5V8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層。



第20図 管制塔I地区SD3出土遺物

表7 管制塔I地区SD3出土遺物観察表

発掘番号	出土地点	種類	器種器形	状態	寸法(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項				備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・跡		その他
第206図	S-100 SD3	円盤状 製品	輪門形	完形	外径:47.5 最大厚:11.0	35.1	瓦	-	打割/割	-	-	-	-	-



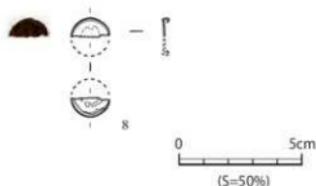
第21図 管制塔I地区SD4断面図 (S=1/200)



図版8 管制塔I地区SD4ベルト (北西から)

表8 管制塔I地区SD4土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区I SD4ベルト	1	2.5V5/3	黄褐色	砂	有	やや有	細粒(>φ1.0mm)炭片・貝片・クチャ小ブ ロック混じる。
	2	2.5V6/3	にぶい黄色	砂	やや有	弱	V-1層。
	3	—	—	ビーチャロック			V-2層。



第22図 管制塔Ⅰ地区SD4出土遺物

表9 管制塔Ⅰ地区SD4出土遺物観察表

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考
									加工痕	使用痕	文様	印・筋	その他	
第22図 8	せ100 SD4	金属 製品	ボタン?	半割	最大径:15.5 最大幅:7.5 最大厚:2.8	0.2	銅	-	なし	確認できず	なし	なし	-	-

表10 管制塔Ⅰ地区SD1～4出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	先史土器	外産産 陶磁器	日本産 陶磁器	沖縄産 漆軸陶器	沖縄産 無軸陶器	陶瓦土器	石材	金属製品	肉質状 製品	ガラス 製品	瓦	煉瓦		
管制塔Ⅰ	SD1	せ100		2	2	1	2	5		1	1			9		
		せ100	1	2	1	5	4	8			1	1		11		
		せ100		1	1	5	7				1			16		
		せ100										3			1	
		せ100	1	3		3			1	1	1		2		1	
管制塔Ⅰ	SD4	せ100			3								3	3		
		せ101				1				1						
		合計		1	6	10	11	17	13	1	3	6	4	40	1	
		地区	遺構	グリッド	貝類	計	遺構計									
		管制塔Ⅰ	SD1	せ100	1	24	58									
せ100				34												
せ100	1			32	32											
せ100	1			5	5											
せ100	25			37	50											
管制塔Ⅰ	SD4	せ101	4	13	50											
		合計	32	145	145											

【SK1】

構造 略楕円形で断面形状は浅いすり鉢状。長軸354cm、短軸220cm、深さ14cm。

覆土 Ⅱ層の単層だが、かなり腐食した状態。

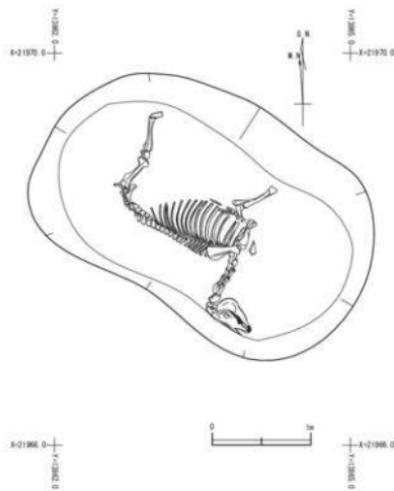
出土遺物 ウマ1頭がほぼ完形で出土しており、出土状況から埋葬されたとみられる。このウマは、体高から在来馬ではない(第6章第3節参照)。ほかに沖縄産陶器、木製品(図版9)など。

表11 管制塔Ⅰ地区SK1出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	日本産 陶磁器	沖縄産 漆軸陶器	沖縄産 無軸陶器	石製品	石材	木製品	木材	煉瓦	貝類	動物 遺存体	合計
管制塔Ⅰ	SK1	せ101	1	1	3	1	5	2	11	1	8	1	34



図版9 管制塔Ⅰ地区SK1出土木製品



第23図 管制塔I地区SK1埋葬馬検出状況平面図
(S=1/50)



図版10 管制塔I地区SK1埋葬馬検出状況(北から)



図版11 管制塔I地区SK1完掘状況(北から)

【SK2】

構造 略楕円形で断面形状は浅いすり鉢状。長軸51cm、短軸24cm、深さ17cm。

覆土 III-2層の単層。

出土遺物 プタの幼獣骨1頭がほぼ完形で出土しており、出土状況から埋葬されたとみられる。その他石材などを含め全13点。



第24図 管制塔I地区SK2プタ幼獣埋葬
検出状況平面図 (S=1/10)



図版12 管制塔I地区SK2プタ幼獣埋葬検出状況
(南東から)

表 12 管制塔Ⅰ地区 SK2 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	石材	木材	ガラス製品	瓦	動物遺存体	合計
管制塔Ⅰ	SK2	ネ101	5	1	1	2	4	13

【SK3・4・5・6】

構 造 SK3・5は略方形だが、SK4・6は略円形。

SK3:長軸191cm、短軸173cm、深さ21cm。

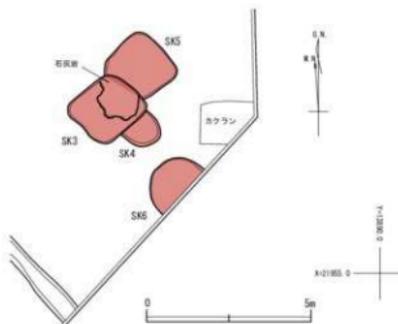
SK4:長軸108cm、短軸88cm、深さ7cm。

SK5:長軸180cm、短軸152cm、深さ11cm。

SK6:長軸181cm、短軸111cm、深さ11cm。

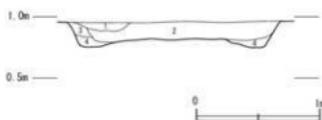
覆 土 SK3はⅢ-2層、それ以外はⅢ-3層の単層。SK4・5がSK3に切られる。

出土遺物 SK3・4・5から近世近代の陶磁器が出土しており、ほぼ同一の年代と目される。陶質土器(第27図9)は、外面に赤色が施される。また未掲載資料中に、先史時代の土器1点が確認される。



第 25 図 管制塔Ⅰ地区 SK3・4・5 平面図

(S=1/150)



第 26 図 管制塔Ⅰ地区 SK3 断面図(S=1/40)



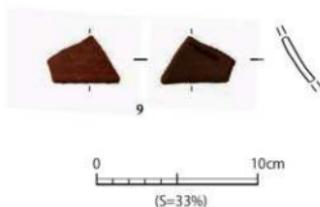
図版 13 管制塔Ⅰ地区 SK3 半截状況(南西から)

表 13 管制塔Ⅰ地区 SK3 土層観察表

遺 構 名	層 序	記 号	土 色	土 質	粘 性	し ま り	備 考
管制塔地区Ⅰ SK3北壁	1	2.5V6/2	灰黄色	砂	有	弱	貝片まばら。Ⅲ-3層に似る。
	2	2.5V5/2	暗灰黄色	砂	有	やや有	破片多く混じる。近代の陶磁器・金属片等多数。本遺構の覆土。
	3	10YR5/6	黄褐色	砂	弱	弱	貝片混じる。粗粒。遺物なし。地山か。
	4	2.5V7/4	浅黄色	砂	弱	やや有	V-3層に似る。遺物なし。地山か。

表 14 管制塔Ⅰ地区 SK3 出土遺物集計表

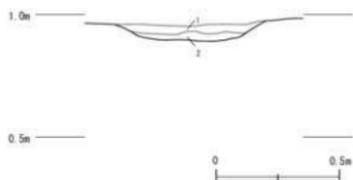
地区	遺構	グリッド	先史土器	日本産陶磁器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石製品	石材	金属製品	円筒状製品	ガラス製品	瓦
管制塔Ⅰ	SK3	ネ101	1	12	5	5	4	1	1	63	1	5	16
地区	遺構	グリッド	埴	煉瓦	貝類	動物遺存体	合計						
管制塔Ⅰ	SK3	ネ101	1	2	9	7	133						



第27図 管制塔I地区SK3出土遺物

表15 管制塔I地区SK3出土遺物観察表

発掘 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量 (cm)	重量 (g)	成形・ 調整	胎土	裝飾			印・銘	産地 年代	備考
										軸線	文様	その他			
第27回 9	そ101 SK3	陶質 土器	蓋	陶質 土器	甲部	白径:- 器高:- 底径:-	6.40	なし	黄褐色	朱色	なし	-	-	沖興	-



第28図 管制塔I地区SK4断面図 (S=1/20)



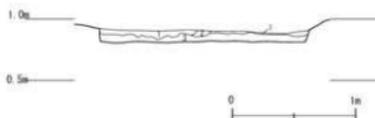
図版14 管制塔I地区SK4半截状況(南西から)

表16 管制塔I地区SK4土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
管制塔地区I SK4	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	III-3層。	
	2	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層。	

表17 管制塔I地区SK4出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	沖積層 無軸陶器	石材	金属製品	合計
管制塔I	SK4	そ101	1	3	1	3



第29図 管制塔I地区SK5断面図 (S=1/40)



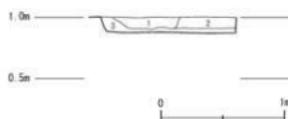
図版15 管制塔I地区SK5完掘状況(北東から)

表 18 管制塔Ⅰ地区 SK5 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK5	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-3層と同質。
	2	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	東西ベルトⅢ-3層と同質。ただし粒径やや大。
	3	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層。

表 19 管制塔Ⅰ地区 SK5 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	沖縄産 無釉陶器	陶質土器	石遺物	石材	金属製品	瓦	貝類	合計
管制塔Ⅰ	SK5	せ101	2	2	1	1	1	2	1	10



第 30 図 管制塔Ⅰ地区 SK6 断面図 (S=1/40)



図版 16 管制塔Ⅰ地区 SK6 半截断面 (南西から)

表 20 管制塔Ⅰ地区 SK6 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区Ⅰ SK6	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	Ⅲ-2層。
	2	—	—	砂	—	—	Ⅲ-2層と同質。3層との混砂層。
	3	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層。

表 21 管制塔Ⅰ地区 SK6 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	日本産 陶磁器	金属製品	合計
管制塔Ⅰ	SK6	せ101	1	3	4

【SK7・8】

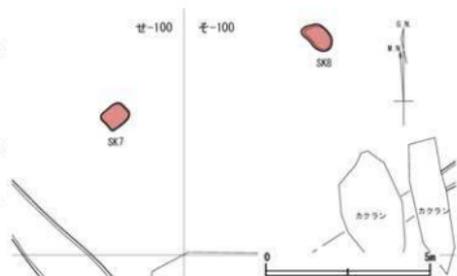
構造 SK7が平面略方形に対し、SK8は略円形。断面は両遺構ともに平坦。

SK7：長軸 79 cm、短軸 66cm、深さ 6cm

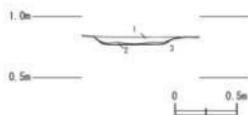
SK8：長軸 97 cm、短軸 64cm、深さ 11cm

覆土 SK7はⅢ-2層の単層。SK8はⅢ-2層とⅢ-3層が堆積。

出土遺物 沖縄産の陶磁器や瓦などが出土しているが僅か。



第 31 図 管制塔Ⅰ地区 SK7・8 平面図 (S=1/150)



第32図 管制塔I地区SK7断面図 (S=1/40)



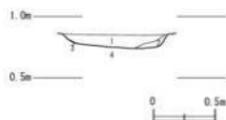
図版17 管制塔I地区SK7半截断面（北西から）

表22 管制塔I地区SK7土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区I SK7	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	III-2層と同層。下方に従って2層と混じる。
	2	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層。
	3	—	—	ビーチロック	—	—	V-2層。

表23 管制塔I地区SK7出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	瓦	貝類	合計
管制塔I	SK7	せ100	1	1	2



第33図 管制塔I地区SK8断面図 (S=1/40)



図版18 管制塔I地区SK8半截断面（南西から）

表24 管制塔I地区SK8土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
管制塔地区I SK8	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	やや有	弱	2層とIII-1層の混層。下層は両層がラミナ状をなす。
	2	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	やや有	弱	III-2層に相当。
	3	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	III-3層に相当。
	4	2.5Y8/3	淡黄色	砂	やや有	弱	V-1層に相当。

表25 管制塔I地区SK8出土遺物集計表

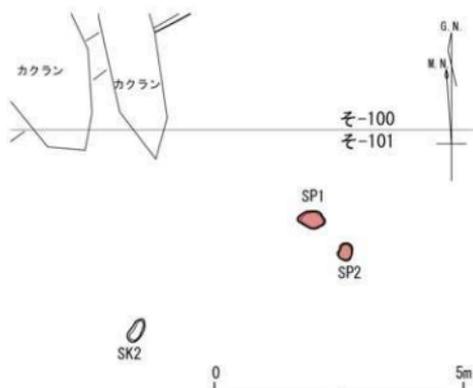
地区	遺構	グリッド	沖縄産 黒胎陶器	陶質土器	金属製品	瓦	貝類	合計
管制塔I	SK8	せ100	1	2	1	1	3	8

【SP1・2】

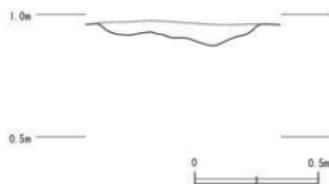
構造 いずれも平面形は円形だが、底面は不定形のため、植栽痕等と思われる。

覆土 いずれもⅢ-2層の単層。

出土遺物 無し。



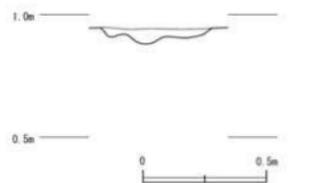
第34図 管制塔 I地区 SP1・2 平面図 (S=1/100)



第35図 管制塔 I地区 SP1 断面図 (S=1/20)



図版19 管制塔 I地区 SP1 半截断面 (北西から)



第36図 管制塔 I地区 SP2 断面図 (S=1/20)



図版20 管制塔 I地区 SP2 半截断面 (南西から)

2 V層遺構外出土遺物

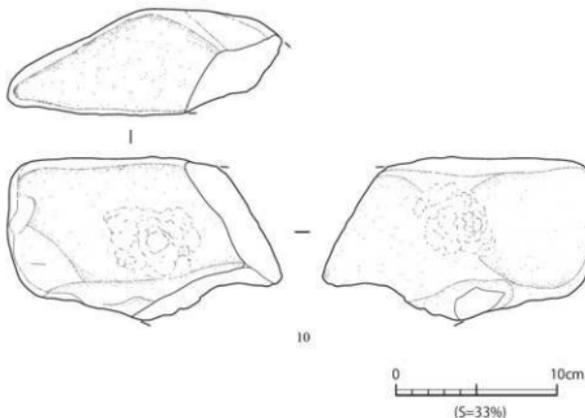
V層からは、遺構外からも241点の遺物が出土している。出土位置では、せ101グリッドに集中する傾向が認められる。種類別の傾向では、石器(第37図10)や中国産陶器(第38図11)も含まれるが、主体は日本産陶磁器(同図12~15)・沖縄産陶器(同図16~19)・瓦・ガラス製品(図版23)などの大嶺村が営まれていた近世・近代の遺物である。ただし、戦後の製品は確認されなかった。

なお、発掘調査中、湧水対策として北側にV-1層よりを掘削して排水溝を設置したが、その残土中より沖縄産無釉陶器片が出土した。発掘調査後の資料整理においてこれらがほぼ完形に接合したことから、本来は埋裏であった可能性が挙げられる(図版22)。

表26 管制塔I地区V層 遺構外出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	外産産 陶磁器	日本産 陶磁器	沖縄産 無釉陶器	沖縄産 陶磁器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石遺物	石材	内装状 製品	ガラス 製品	瓦	
管制塔I	V	せ100		5	17											1
		せ101	4	34	37	57	12	1	1	1	1	2	3	13	45	1
		そ100														
合計			4	39	37	74	12	1	1	1	1	2	3	16	47	

地区	層位	グリッド	煉瓦	貝類	合計
管制塔I	V	せ100			20
		せ101	1	1	213
		そ100			2
合計			1	2	241



第37図 管制塔I地区V層遺構外出土遺物1(陶磁器以外)



図版21 管制塔I地区V層遺構外出土遺物1(陶磁器以外、S=33%)



第38図 管制塔 I地区V層遺構外出土遺物2 (陶磁器)



図版 22 管制塔 I 地区 V 層排水溝掘削時出土 沖縄産無釉陶器甕 (S=20%)



図版 23 管制塔 I 地区 V 層出土ガラス瓶・蓋 (図未掲載資料)

表 27 管制塔Ⅰ地区V層 遺構外出土遺物観察表(陶磁器)

発掘番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	寸法 (cm)	重量 (g)	成形・ 調整	釉土	裝飾・ 文様			印・銘	産地 年代	備考
										輪画	その他	その他			
第385 11	せ101 V層	中国産 陶磁器	壺	無袖 陶器	胴底	口径:- 器高:- 底径:-	34.23	外面に細い 凸線刻、内 面に凸線 あり	灰色	-	なし	-	なし	不明	-
第385 12	せ101 V層	日本産 陶磁器	甗	近代 磁器	口~底	口径:14.2 器高:5.7 底径:4.95	113.79	輪轆 染付輪割 ぎ・底割付 着・底割付 着・底割付 内底目跡あ り	白色やや 軟	外:透明 内:透明	外:点描 地、丸筋文 など 内:濃沈色 竹筒文など	型紙摺り	なし	磁部 近代	-
第385 13	せ101 V層	日本産 陶磁器	甗	近代 磁器	口~底	口径:8.1 器高:4.8 底径:3.8	51.80	輪轆 染付輪割 ぎ・砂付着	白色磁器、 黒色胎土	外:クロム青 磁 内:クロム青 磁	外:縁子 文、刺先文	-	なし	肥前 近代	-
第385 14	せ101 V層	日本産 陶磁器	甗	近代 磁器 大甗	底筒	口径:- 器高:- 底径:10.0	227.51	輪轆 外底:粒の 目・管付ア ルナ	白色磁器、 ガラス質	外:透明 内:透明	外:磨練 内:16割 文、濃沈色 竹筒文	なし	なし	瀬・美 19c	-
第385 15	せ101 V層	日本産 陶磁器	不明	白磁	胴~底	口径:- 器高:- 底径:6.2	22.19	外底無袖 輪轆	白色磁器、 ガラス質	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	-	-
第385 16	せ101 V層	沖縄産 陶磁器	甗	沖縄産 無袖 陶器	胴~底	口径:- 器高:- 底径:6.0	73.33	見込割の 目・管付ア ルナ	赤褐色・ 灰色 粗粒	外:透明 内:透明	花文	白化粧土	-	近代	-
第385 17	せ101 V層	沖縄産 陶磁器	鉢	沖縄産 無袖 陶器	底筒	口径:- 器高:- 底径:10.6	319.73	見込割の 目	灰白色/軟 質	外:透明 内:黒釉	外底に硬加 状文は縁き 取の	-	-	-	-
第385 18	せ101 V層	沖縄産 陶磁器	灯明具	沖縄産 無袖 陶器	胴~底	口径:- 器高:- 底径:4.15	61.46	糸切痕	赤褐色/粗 粒	内外:磨練	なし	-	-	-	-
第385 19	せ101 V層	沖縄産 陶磁器	壺	沖縄産 無袖 陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	118.52	なし	赤褐色	-	なし	-	-	-	-

表 28 管制塔Ⅰ地区V層 遺構外出土遺物観察表(陶磁器以外)

発掘番号	出土地点	種類	器種器形	状態	寸法(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他		
第375 10	せ101 V層	石器	台石	一部欠損	最大長:100 最大寬:64 最大幅:167	1,208	砂岩	-	なし	敲打	-	-	-	-	-

第3節 Ⅲ層の遺物

Ⅲ層からは、管制塔1地区出土遺物の約7割に及ぶ7,977点の遺物が出土しており、日本産陶磁器や沖縄産陶器をはじめとして、多種多様な資料が確認された(表29)。

主体は近世後半から近代の日本産陶磁器、沖縄産陶器、金属製品、瓦、貝類などだが、戦後のものとみられる金属片なども含まれているため、戦中・戦後直後の基地造成に伴うものと理解される。一方で僅かではあるが、弥生～平安並行時代の土器・石器やグスク時代の青磁・白磁などが含まれる。これら大嶺村が営まれる以前とみられる遺物の出土は、遺跡周辺にグスク時代や先史時代に遡る遺跡が存在している(あるいはしていた)可能性を示唆するものである。詳細は観察表に譲り、以下に特記事項を述べる。

陶磁器には中国産(第39図20～35)・ヨーロッパ産(同図36)・日本産(同図37～第41図66)・沖縄産(第41図67～第43図87)・近世近代の日本産土器(同図88)・瓦質土器(同図89～92)がみられる。主体は近世後半から近代の資料であるが、14世紀後半から15世紀前半の青磁や15世紀から16世紀前半の白磁(第39図20～22、24)・中世須恵器が1点(第39図37)が含まれている。また類例の少ない資料として、「D. Bumstead & Co. Royal British Table Salt, 86, Lower Thames St. London c1880」銘のイギリス産陶器(第39図36)や、「日本硬質陶器會社」のカップ用皿も含まれる(第40図59)。一方で沖縄産陶器には厨子甕が含まれており(第42図84～86)、大嶺村にかつて所在していた墓域から流れ込んだものと思われる。

先史時代とみられる石器2点が出土している。中でもチャート製石器は遺跡中この資料のみである(第44図93)。

瓦は赤瓦と灰色瓦とがみられる。また1点には「儀」銘の資料が含まれる(第44図97)。

磁器製品にはおろし器2点が認められた(第45図104・105)。戦時中の金属製品の代用品である。

煙管はこの調査で得られた唯一の資料である(第45図107)。

円盤状製品は数多く出土しているが、その中には上記と同時期の青磁盤を素材とする資料(第45図109)が含まれる。

金属製品は多量に出土したが器種が特定できるものは僅かで、瓶の蓋(第45図117～119)や鉄(同図123)、鍵(同図121)などが確認された。また寛永通宝1点が出土している(同図125)。

石製品には砥石(第45図127～129)や石盤(同図130)、棒状石製品(同図131)などが得られている。

遊具には県内で類例の少ない泥面子とみられる資料(第46図132～135)やおはじき(同図136)がある。

また、仏坐像とみられる土製品(同図137)や、ミニチュアのおろし器(同図138)なども得られている。

表29 管制塔1地区Ⅲ層出土遺物集計表

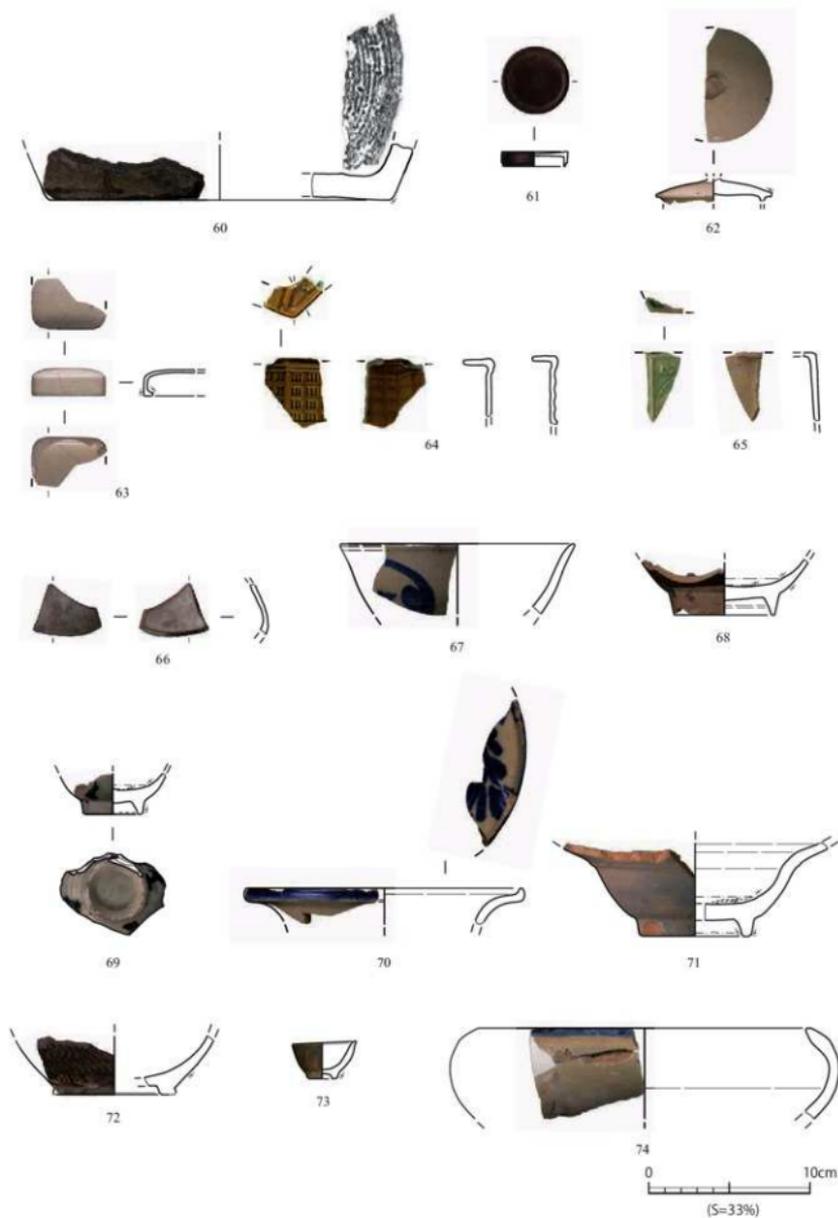
地区	層位	グリッド	先史土器	外産産陶磁器	須恵器	日本産陶磁器	沖縄産瓦器陶器	沖縄産無胎陶器	陶質土器	瓦質土器	近世近代土器	石器	石製品	石遺物	石材	金属製品	
管制塔1	Ⅲ	せ100		8	87	100	75	48	1					1	8	133	
		せ101	1	1	28	59	56	14	2					1		8	
		せ100	2	88	409	437	343	282	13	1	1	3	1	31	306		
		せ101	1	46	1	365	241	308	116	8			1	8	6	62	591
		不明				2	1	2									
合計		4	144	1	1091	838	761	460	24	1	2	12	8	109	1120		
管制塔1	Ⅲ	せ100	1	3		21		38					114		6	4	
		せ101	2	3		3		3					30		1		
		せ100	2	6	1	80	5	1	152	1	4	622		27	2	8	
		せ101			1	62	2	1	193	3	14	507	1	33		9	
		不明											2				
合計		5	12	2	166	7	2	336	4	18	1275	1	67	2	21		
管制塔1	Ⅲ	せ100															
		せ101															
		せ100			6		510	134	1								
		せ101			12		410	115	3								
		不明															
合計			18	1	1108	278	6								7977		



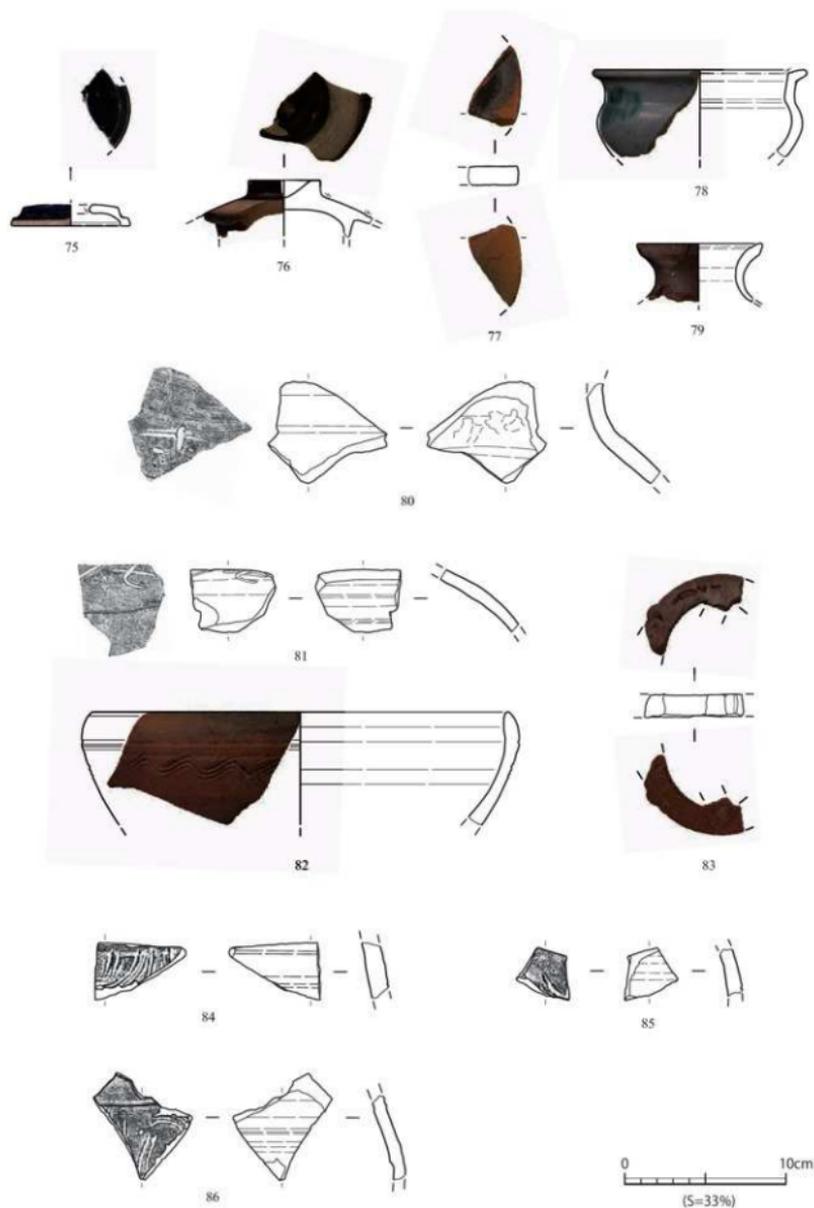
第39図 管制塔 I地区III層出土遺物 1



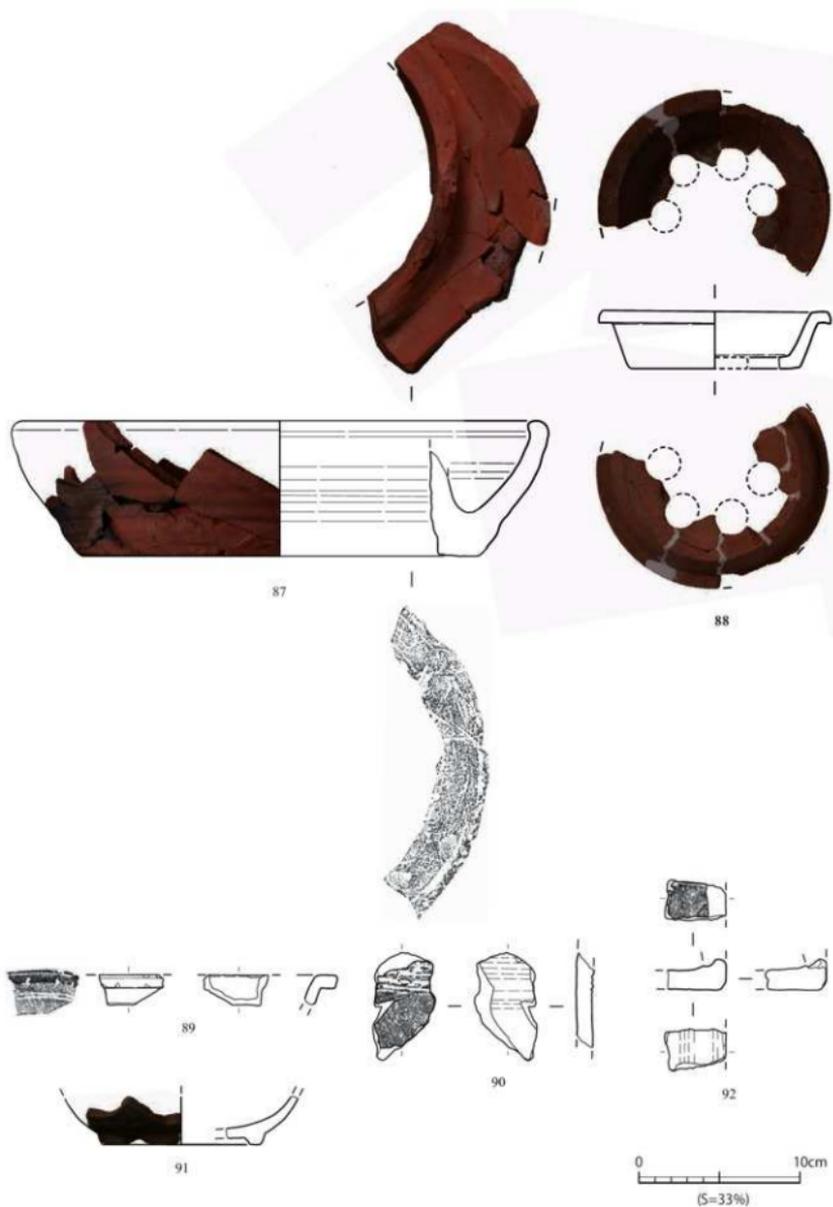
第40図 管制塔I地区III層出土遺物2



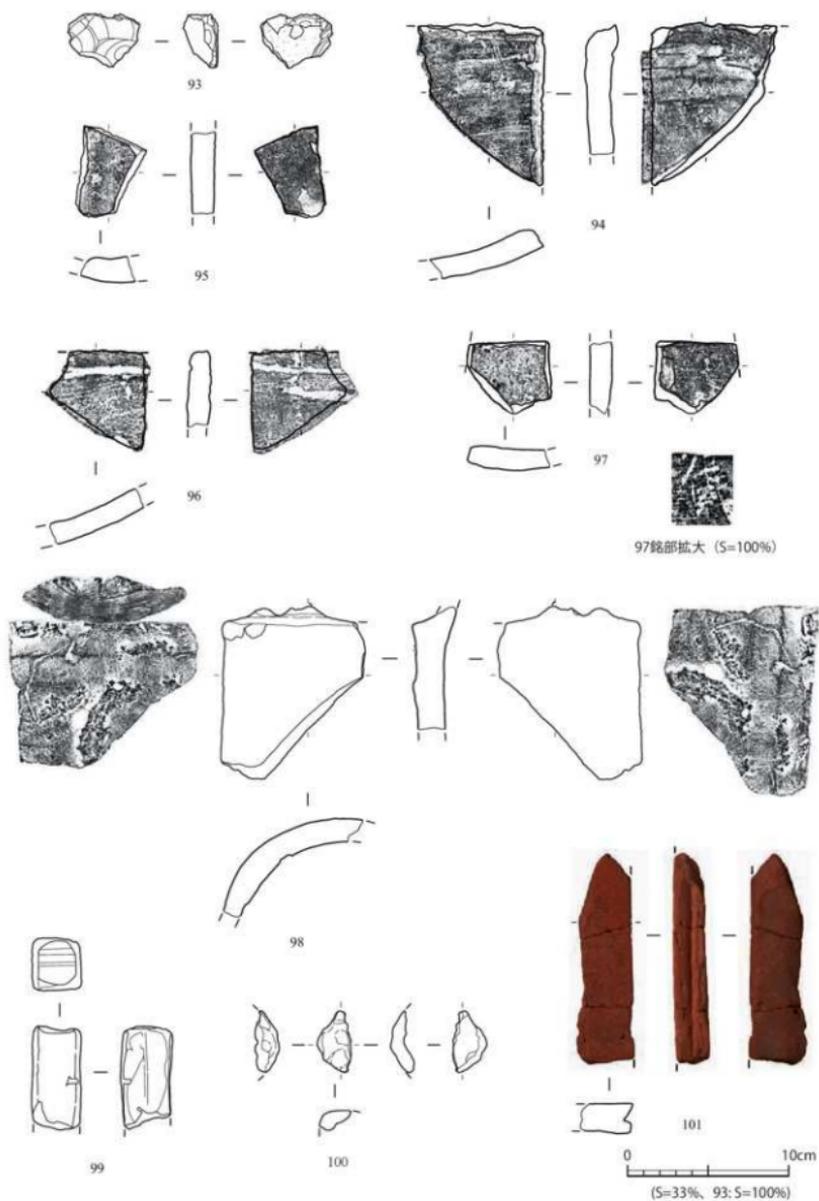
第41図 管制塔 I地区III層出土遺物 3



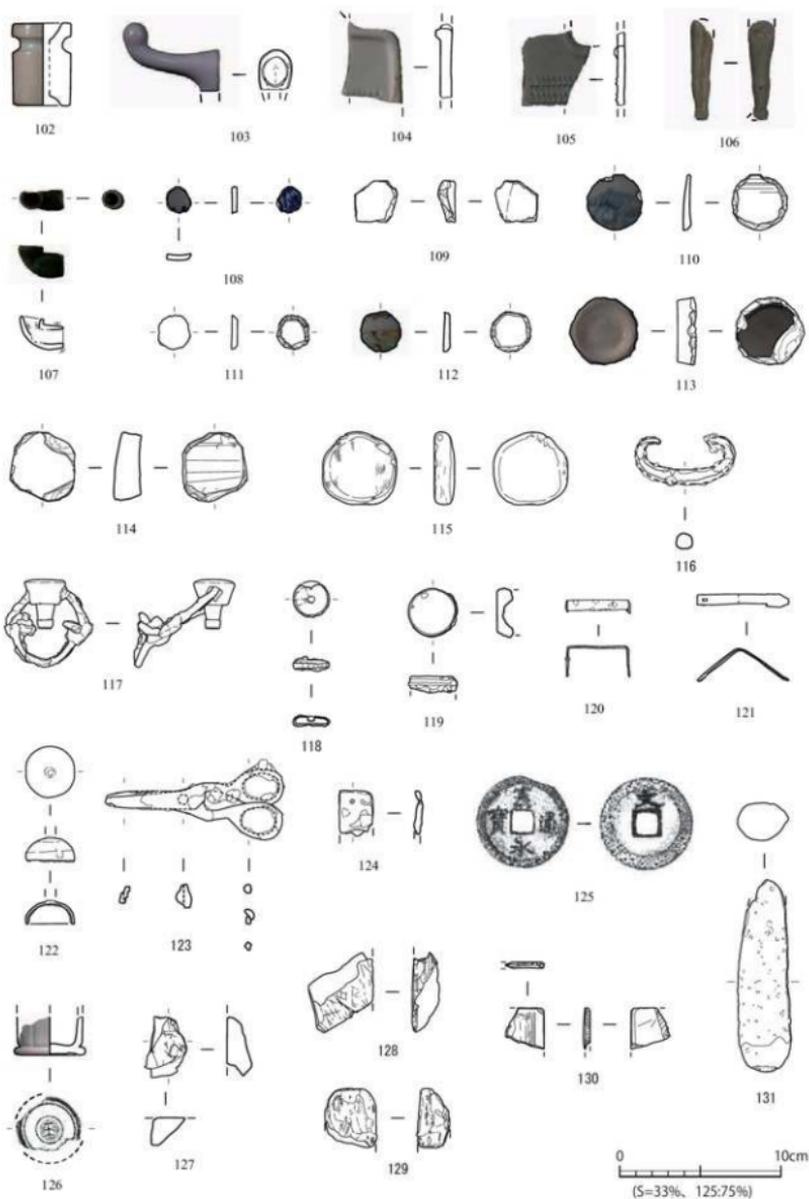
第42図 管制塔I地区III層出土遺物4



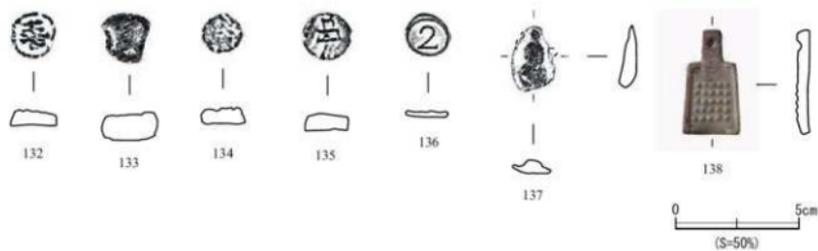
第43図 管制塔 I地区III層出土遺物 5



第44図 管制塔I地区III層出土遺物6



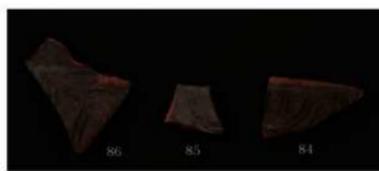
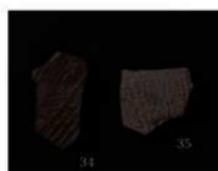
第 45 図 管制塔 I 地区 III 層出土遺物 7



第46図 管制塔I地区III層出土遺物8

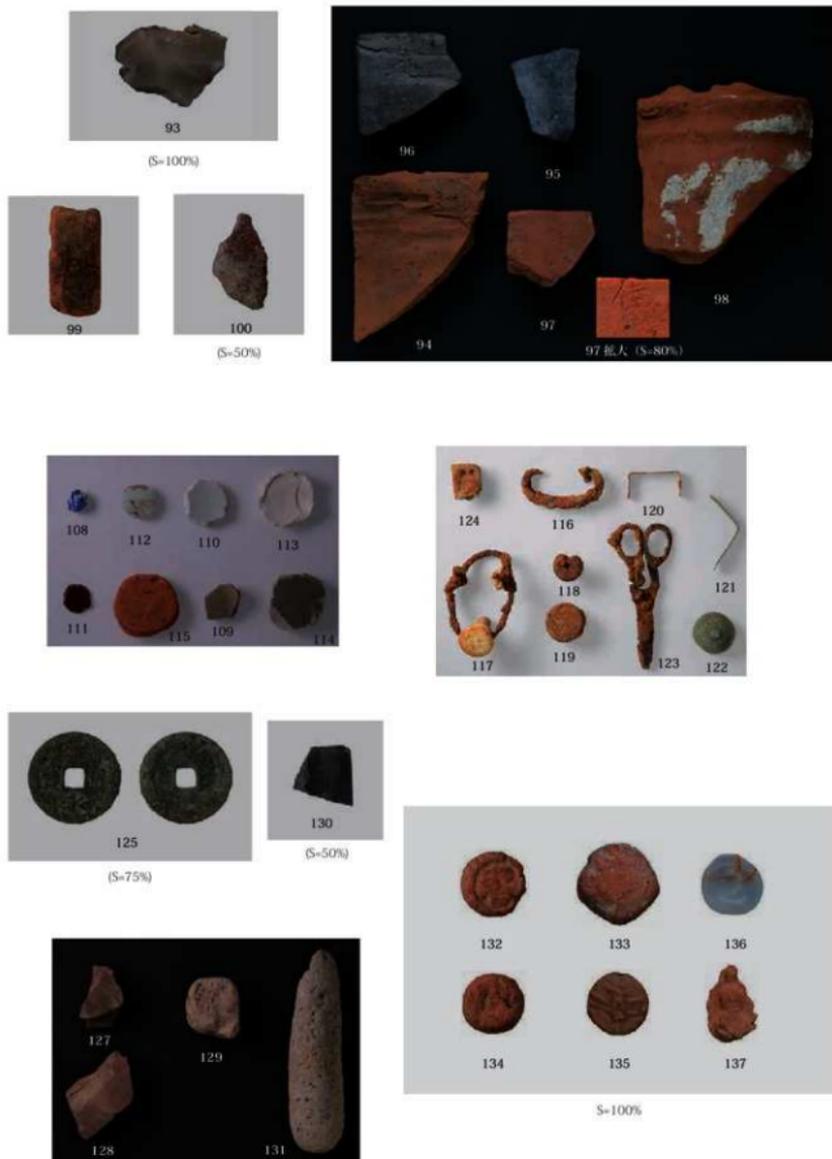


(S=75%)



空白のある沖縄産無軸陶器

図版24 管制塔I地区III層出土遺物1 (指定を除き S=33%)



図版 25 管制塔 I 地区 III 層出土遺物 2 (指定を除き S=33%)



貝製品?



国民食器（「有 14」）



セルロイド製品（歯ブラシ、櫛）



ガラス製造品（ビー玉）(S=50%)



ガラス製品（インクボトル、薬瓶など）

図版 26 管制塔 I 地区 III 層出土遺物 3（図未掲載資料）

表 30 管制塔 I地区 III層出土遺物観察表 1 (陶磁器)

陶磁器番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	寸法 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										軸線	文様	その他			
第39回 20	土100 層	中国産 陶磁器	甕	青磁 底口 口縁	口径:- 器高:- 底径:-	2.86	-	-	灰白色	外:-オリーブ 灰色 内:-オリーブ 灰色	外:-黄文帯	-	なし	龍泉 14歳~ 15歳	-
第39回 21	土101 層	中国産 陶磁器	甕	青磁 底底	口径:- 器高:- 底径:-	27.16	-	-	灰白色	外:-オリーブ 灰色 内:-オリーブ 灰色	なし	片切彫で施文	なし	龍泉 14歳~ 15歳	-
第39回 22	土100 層	中国産 陶磁器	甕	青磁 口縁	口径:- 器高:- 底径:-	47.13	-	-	灰白色	外:-オリーブ 灰色 内:-オリーブ 灰色	内:-顔目文	0.6~0.7mm 幅	なし	龍泉 14歳~ 15歳	-
第39回 23	土100 層	中国産 陶磁器	甕	白磁 底底	口径:- 器高:- 底径:-3.5	8.05	霰付輪測 ぎ・砂付着	白色 網窓	外:-透明 内:-透明	なし	外底:-部露 胎	なし	施化 19c	-	-
第39回 24	土100 層	中国産 陶磁器	甕	白磁 口高台	口径:- 器高:- 底径:-	3.35	内底:-重 ね焼き跡	灰白色や 白色網窓	外:-透明 内:-透明	なし	-	-	なし	龍泉 15c~ 16c前?	-
第39回 25	土101 層	中国産 陶磁器	杯	白磁 口~底	口径:-3.9 器高:-2.35 底径:-1.8	2.91	霰付輪測 ぎ・砂付着	白色 網窓	外:-青白色 内:-青白色	なし	-	-	なし	施化 18~19c?	-
第39回 26	土101 層	中国産 陶磁器	蓋?	白磁 不明	口径:- 器高:- 底径:-	1.19	内面赤みあ り	灰色 網窓	外:-透明 内:-透明	なし	内面途中まで 塗輪。内 面一部露胎	なし	不明	-	-
第39回 27	土100 層	中国産 陶磁器	甕	青花 口縁	口径:-10.8 器高:- 底径:-	3.52	-	灰白色 網窓	外:-透明 内:-透明	外:-花鳥文 内:-黄文帯	-	なし	不明	-	-
第39回 28	土101 層	中国産 陶磁器	甕	青花 口縁	口径:-14.0 器高:- 底径:-	12.44	-	灰白色 網窓	外:-透明 内:-透明	外:-草花文	-	なし	施化 18c	-	-
第39回 29	土101 層	中国産 陶磁器	甕	青花 口~底	口径:- 器高:- 底径:-6.3	33.83	霰付輪測 ぎ・内底跡 の自輪測 ぎ・霰付 砂付着	灰白色 網窓	外:-青白色 内:-青白色	外:-草花文 内底:-有り	-	-	なし	施化 18c	-
第39回 30	土100 層	中国産 陶磁器	甕	青花 底底	口径:- 器高:- 底径:-5.1	10.73	霰付輪測	灰白色 網窓	外:-透明 内:-透明	外:-花唐草 文	-	-	其他焼上 りは施化 18c前~ 19c後	-	-
第39回 31	土100 層	中国産 陶磁器	甕	青花 底底	口径:- 器高:- 底径:-4.6	19.23	霰付輪測	白色 網窓	外:-青白色 内:-青白色	外:-有り 内底:-草花 文	-	施有り	不明	-	-
第39回 32	土101 層	中国産 陶磁器	甕	輪軸 口縁	口径:- 器高:- 底径:-	32.25	口唇部は 輪軸ぎ	赤褐色 白色網窓 む	外:-褐色 内:-褐色	なし	-	なし	不明	-	-
第39回 33	土100 層	中国産 陶磁器	甕	輪軸 口縁	口径:- 器高:- 底径:-	20.19	-	黒褐色 白色網窓 む	-	なし	-	なし	不明	-	-
第39回 34	土101 層	中国産 陶磁器	甕	輪軸 胴部	口径:- 器高:- 底径:-	25.28	格子状の 叩き	赤褐色 白色網窓 む	外:-褐色 内:-無輪	なし	-	なし	不明	-	-
第39回 35	土100 層	中国産 陶磁器	甕	輪軸 胴部	口径:- 器高:- 底径:-	14.81	格子状の 叩き	白~黒 白色網窓 む	外:-灰白色 内:-無輪	なし	-	なし	不明	-	-
第39回 36	土100 層	欧州産 陶器	置物	置物	胴部:- 器高:- 底径:-	-	なし	黄灰色 軟質	内外透明釉	なし	なし	「+意CO. TABLE/ SALT/ HAMES 9c」	イタリス産 近代	-	-
第39回 37	土101 層	煎茶器	不明	中世 煎茶器	口径:- 器高:- 底径:-	11.28	外:-タタキ	黒灰色無 輪。石莖 じり	-	なし	なし	なし	なし	日本	-
第39回 38	土100 層	日本産 陶磁器	甕	霰付 底底	口径:- 器高:- 底径:-3.3	17.27	霰付輪測 ぎ・霰付着	白色や 粗	外:-透明 内:-透明	なし	なし	外底:-大明 /年製)	肥前系 IV期	-	-
第39回 39	土100 層	日本産 陶磁器	甕	霰付 口~底	口径:-10.2 器高:-2.8 底径:-4.35	88.41	輪軸 霰付輪測 ぎ内底跡あ り	白色軟質	外:-透明 内:-透明	内:-櫻山 本文	繪付け	なし	肥前系 V期	-	-
第39回 40	土101 層	日本産 陶磁器	甕	霰付 口~底	口径:-11.2 器高:- 底径:-	23.71	霰付か	白色網窓	外:-透明 内:-透明	外:-区画文・ 宝珠・草花 文・七宝 文・羅線	繪付け	なし	肥前系 V期	-	-
第40回 41	土100 層	日本産 陶磁器	杯	霰付 酒注	口径:-5.4 器高:-3.5 底径:-2.0	8.79	霰付 霰付輪測 ぎむ	白色ガラス 質・黒色 網窓	外:-透明 内:-透明	外:-不明文 帯	イヤチン 外底跡露 胎	なし	瀬ノ高 近代	-	-
第40回 42	土101 層	日本産 陶磁器	鉢	霰付 椀木鉢	口径:- 器高:- 底径:-8.6	44.88	霰付	灰白色や 白色網 窓	外:-露胎 内:-無輪	なし	なし	なし	瀬ノ高 19~20c	-	-
第40回 43	土101 層	日本産 陶磁器	甕	色繪 底底	口径:- 器高:- 底径:-	18.72	窓巾あり	白色網窓 黒色網窓	外:-透明 内:-透明	なし	なし	有り・不明 (朱色繪)	肥前系 不明	円盤状製品 未成品	-

表 31 管制塔1地区III層出土遺物観察表2(陶磁器)

陶磁器番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	寸法(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	裝飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第40図 44	so1	日本産陶磁器	皿	色絵彩	口～底	口径:8.3 器高:1.9 底径:4.1	19.12	窯付輪削り	白色密着	外:透明 内:透明	内:草花文	色絵	なし	瀬・美19～20c	-
第40図 45	so1	日本産陶磁器	杯	色絵彩 陶刻	底面	口径:- 器高:- 底径:3.1	5.21	型作り 窯付砂付 着	灰色軟質	外:透明 内:透明	外:不明文様	青・赤色 塗料	なし	瀬・美19～21c	-
第40図 46	so100	日本産陶磁器	蓋	色絵彩	縁～頂	口径:7.2 器高:1.6 底径:2.4	12.52	型作り 口受部輪削り	白色やや粗, ガラス質	外:透明 内:無釉	外:草花文	色絵	なし	瀬・美不明	-
第40図 47	so100	日本産陶磁器	碗	近代磁器	口～底	口径:8.0 器高:4.2 底径:4.0	25.68	轆轤	白色やや粗, ガラス質	外:透明 内:透明	外:松尾山木文, 羅線	銅版摺り	なし	瀬・美近代	-
第40図 48	so1	日本産陶磁器	碗	近代磁器 陶型	口～底	口径:- 器高:- 底径:3.9	15.28	型作り	白色やや粗	外:透明 内:透明	外:山水, 羅線	型紙摺り	有, 不明	肥前系近代	-
第40図 49	so1	日本産陶磁器	皿	近代磁器	口～底	口径:10.8 器高:2.2 底径:6.6	52.91	窯付輪削り	灰白色, ガラス質	外:透明 内:透明	内:点描地, 八鶴文・丸亀文, 五弁文, 文琴	型紙摺り	なし	瀬・美近代	-
第40図 50	so1	日本産陶磁器	皿	近代磁器	口～底	口径:11.2 器高:2.3 底径:6.2	38.48	窯付輪削り	白色密着	外:透明 内:透明	外:輪花, 二重羅線	銅版摺り	なし	瀬・美近代	-
第40図 51	so100	日本産陶磁器	杯	近代磁器 小杯	底面	口径:- 器高:- 底径:1.8	3.23	型作り 外側下～ 底面無釉	白色密着, ガラス質	外:透明 内:透明	外:文字 内:不明	ゴム版	なし	瀬・美近代	-
第40図 52	so1	日本産陶磁器	大瓶・火取	近代磁器	口縁部	口径:10.0 器高:3.2 底径:-	30.71	轆轤	灰色やや粗	外:深緑・透明 内:無釉	外:青海流	ゴム版	なし	肥前系近代	-
第40図 53	so1	日本産陶磁器	碗	白磁	口～底	口径:10.2 器高:3.9 底径:-	16.20	型作り 外底無釉	灰白色粗粒	外:海青色 内:海青色	内:桜花 外:桜花	型押し	なし	肥前系不明	-
第40図 54	so1	日本産陶磁器	杯	白磁	口～底	口径:4.8 器高:3.4 底径:2.5	18.55	窯付輪削り	白色やや粗	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	肥前系不明	-
第40図 55	so1	日本産陶磁器	青磁 角皿	口～底	口径:7.25 器高:2.2 底径:3.2	37.16	型作り 窯付輪削り	白色密着	外:青磁 内:青磁	内:草花文, 唐草文	象眼	なし	瀬・美19～20c	-	
第40図 56	so1	日本産陶磁器	皿	無釉陶器	口～底	口径:- 器高:2.3 底径:-	19.60	型作り	白色軟質	内外:深緑釉	内:区画文	なし	なし	不明	-
第40図 57	so1	日本産陶磁器	皿	無釉陶器 沖野風	口縁部	口径:15.8 器高:1.3 底径:6.8	10.1	型作り	白色軟質	外:透明 内:透明	内:羅線	なし	なし	不明近代	-
第40図 58	so1	日本産陶磁器	無釉陶器 有野風	底面	口径:- 器高:- 底径:6.4	32.84	轆轤貼付	灰白色	内面:緑色 内:貫入	なし	なし	なし	不明	外面磨げ	-
第40図 59	so1	日本産陶磁器	皿	陶器 片食器	底面	口径:- 器高:- 底径:-	4.74	なし	白色軟質	内外:透明釉	なし	なし	銘「日本製 實陶器社」	金沢1908-1943 カブツ川風	-
第41図 60	so1	日本産陶磁器	蓋	無釉陶器	底面	口径:- 器高:- 底径:20.6	151.43	轆轤	外面:赤褐色 砂流 内面:暗灰色 砂流	外:無釉	なし	なし	なし	慶應堂代川 系	-
第41図 61	so1	日本産陶磁器	蓋	無釉陶器	略形	口径:約 器高:4.05 器底:0.9 厚径:-	8.80	型作り	外:赤褐色 内:赤褐色	なし	なし	なし	なし	不明	-
第41図 62	so1	日本産陶磁器	蓋	無釉陶器	甲～頂	口径:約 器高:7.0 厚径:- 厚径:-	25.18	轆轤	神黄灰色	内外:透明釉	なし	なし	なし	不明	-
第41図 63	so1	日本産陶磁器	蓋	無釉陶器	甲～頂	口径:約 器高:4.5 厚径:- 厚径:-	7.56	型作り	神黄灰色軟質	外:透明釉	なし	なし	なし	関西系か	-
第41図 64	so100	日本産陶磁器	不明	無釉陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	10.44	型作り	神黄灰色軟質	外:透明 内:透明	外:椅子状文	なし	なし	不明	-
第41図 65	so100	日本産陶磁器	不明	無釉陶器	脚底	口径:- 器高:- 底径:-	3.3	型作り	神黄灰色軟質	外:緑釉 内:透明	外:文字文様, 不明文様	なし	なし	不明	-
第41図 66	so100	日本産陶磁器	不明	無釉陶器	脚底	口径:- 器高:- 底径:-	7.11	型作り	茶褐色光沢あり	なし	なし	なし	なし	不明	-
第41図 67	so100	沖崎産陶器	碗	口縁部	口径:14.3 器高:- 底径:-	17.89	なし	なし	灰・黄灰色軟質	内外:白化 胚～透明	コバルト色 で印文?	-	-	近代	-

表 32 管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表3 (陶磁器)

陶磁器番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	寸法 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	裝飾			印・銘	産地年代	備考
										釉薬	文様	その他			
第41図 68	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	底部	口径: 器高: 底径: 6.15	96.24	足込・砂目・内面付着	灰・淡褐色/硬質	内: 灰緑色/外: 灰緑	なし	-	-	-	-
第41図 69	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	底部	口径: 器高: 底径: 3.7	41.73	足込・砂付・器底・器付アルミナ	灰色/硬質	内外: 透明	なし	-	-	-	-
第41図 70	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	口縁部	口径: 器高: 底径: 17.0	19.83	なし	灰白・黄灰色	内外: 白・透明	なし	-	-	-	外面白眉色・草花文色の無袖
第41図 71	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	胴・底	口径: 器高: 底径: 6.8	94.09	足込・砂の目・砂目・付着アルミナ	灰白・淡褐色/硬質	内外: 透明	なし	-	-	-	内: コバルト色で草花文
第41図 72	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	底部	口径: 器高: 底径: 7.5	29.89	浸し掛け	灰色/硬質	内外: 灰緑	二鳥手・斜文字文	-	-	-	ビロケットに白土で象嵌
第41図 73	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	杯	無袖陶器	完形	口径: 器高: 底径: 2.3	16.95	手・穴・お・指ナグ	明黄灰色/硬質	内外: 緑色	なし	-	-	-	-
第41図 74	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	鉢	無袖陶器	口縁部	口径: 器高: 底径: 19.6	32.74	なし	灰・黄褐色/粗粒	口唇: コバルト色 内外: 灰・化粧透明	なし	-	-	-	-
第42図 75	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	蓋	無袖陶器	甲底	記測部径: 1.7 器高: 1.1 底径: 1.1	8.28	なし	明黄白色/硬質	内: 露胎 外: コバルト色	なし	-	-	-	外面白眉部・露胎
第42図 76	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	蓋	無袖陶器	胴・底	記測部径: 1.7 器高: 1.1 底径: 1.1	43.81	外面砂の目・付着アルミナ	褐色/粗粒	内: 露胎 外: 黒色	なし	-	-	-	-
第42図 77	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	蓋	無袖陶器	底部	口径: 器高: 底径: 1.1	20.47	側面コシ	赤褐色/砂目	上面自然結	なし	-	-	-	七福(ナツ)
第42図 78	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	香炉	無袖陶器	口・胴	口径: 器高: 底径: 13.0	42.21	内面のみ	灰色/硬質	外: 白・緑	緑線捺付	-	-	-	-
第42図 79	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	口縁部	口径: 器高: 底径: 7.7	56.83	外側斜方向磨き	赤褐色	なし	なし	-	-	-	-
第42図 80	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	底部	口径: 器高: 底径: 1.1	65.24	なし	赤褐色/暗褐色	-	なし	-	-	-	露胎のみ
第42図 81	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	胴部	口径: 器高: 底径: 1.1	35.89	なし	赤褐色	なし	外面磨	-	-	-	露胎のみ
第42図 82	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	水甗	無袖陶器	口縁部	口径: 器高: 底径: 25.4	85.05	なし	明赤褐色/軟質	なし	外面磨・波形磨	-	-	-	-
第42図 83	せ100 Ⅲ層	沖縄産陶器	瓦器(七土調製)	無袖陶器	-	口径: 器高: 底径: 1.1	22.20	なし	明赤褐色/軟質	なし	なし	-	-	-	外面泥塗付着
第42図 84	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	胴部	口径: 器高: 底径: 1.1	29.49	なし	赤褐色	なし	外面: 草花文	-	-	-	-
第42図 85	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	胴部	口径: 器高: 底径: 1.1	9.46	なし	赤褐色/軟質	なし	外面: 草花文	-	-	-	-
第42図 86	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	甗	無袖陶器	胴部	口径: 器高: 底径: 1.1	27.88	なし	赤褐色/軟質	なし	草文	-	-	-	香具瓶口より
第43図 87	せ101 Ⅲ層	沖縄産陶器	不明	無袖陶器	口・底	口径: 器高: 底径: 31.4 器高: 8.3 底径: 24.0	571.85	なし	赤褐色/灰褐色/硬質	なし	なし	-	-	-	-
第43図 88	せ100 Ⅲ層	奈良古代土器	蓋(手組蓋)	日本土器	胴・底	口径: 器高: 底径: 15.0 器高: 3.55 底径: 10.4	137.32	なし	明赤褐色/砂金雲母多	なし	なし	-	-	-	-
第43図 89	せ101 Ⅲ層	瓦質土器	蓋	-	口縁部	口径: 器高: 底径: 1.1	9.94	内外面: 磨き	赤褐色・砂・金雲母混じり	-	なし	なし	なし	日本	-
第43図 90	せ100 Ⅲ層	瓦質土器	鉢	-	胴上部	口径: 器高: 底径: 1.1	26.33	外面: 磨き 内面: 磨き	赤褐色・砂・金雲母混じり	-	外: 横定	なし	なし	日本	-
第43図 91	せ101 Ⅲ層	瓦質土器	火鉢・火取	-	底部	口径: 器高: 底径: 19.8	32.11	内外面: 磨き	灰色軟質雲母混	-	なし	なし	なし	沖縄か	-
第43図 92	せ100 Ⅲ層	瓦質土器	甗	-	底部	口径: 器高: 底径: 1.1	17.36	内外面: 磨き	赤褐色・砂・金雲母混じり	-	なし	なし	なし	日本	-

表 33 管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表4(陶磁器以外)

所蔵 番号	出土 地点	種類	部種/形状	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項					備考		
									加工痕	使用痕	文様	印・部	その他			
第44回 93	○100 層	石器	砕片	完形	最大長:18.1 最大幅:10.3 最大厚:21.7	3.1	チャート (黒内)	-	打割	なし	-	-	-	-	-	
第44回 94	せ101 層	瓦	明礬系 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:14.0	123.76	粘土・褐色 粒状	広端部	背面有日痕	なし	なし	なし	なし	なし	-	
第44回 95	不明 層	瓦	明礬系 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:14.0	40.76	外面部:灰 褐色 内面部:精 褐色砂質	側部	背面有日痕	なし	なし	なし	持ち締め か	なし	-	
第44回 96	○100 層	瓦	明礬系 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:12.0	54.90	粘土・灰褐 色	広端部	背面有日痕	なし	なし	なし	なし	なし	なし	-
第44回 97	○101 層	瓦	明礬系 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:13.0	31.92	粘土・赤褐 色軟質	側部	背面有日痕	なし	なし	器有り (儀・線刻)	なし	なし	なし	-
第44回 98	○101 層	瓦	明礬系 丸瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:15.0	207.67	粘土・赤褐 色軟質	側部	背面有日痕	なし	なし	なし	なし	外面に塗 付着	なし	-
第44回 99	○100 層	土製品	不明	破片か	最大長:61.6 最大幅:29.1 最大厚:30.6	66.0	陶製	-	なし	なし	なし	なし	なし	なし	-	
第44回 100	○100 層	土製品	不明	破片	最大長:20.5 最大幅:37.8 最大厚:9.0	7.5	陶製	-	なし	なし	なし	なし	なし	塗喰?付 着	なし	-
第44回 101	○101 層	瓦質 土器	瓦質製品 不明	破片か	最大長:30.0 最大幅:129.4 最大厚:19.3	95.21	粘土・褐色 砂・雲母混	-	背面線条痕	なし	なし	なし	なし	なし	片断産	-
第45回 102	○101 層	日本産 陶磁器	磁器製品 砂子	完形	最大長:5.05 最大幅:3.5 最大厚:-	89.98	-	-	なし	なし	なし	なし	なし	外面に透 明釉	-	
第45回 103	○100 層	日本産 陶磁器	磁器製品 フック	完形	最大長:- 最大幅:- 最大厚:-	24.79	型作り	-	なし	なし	なし	なし	なし	全面に透 明釉	瀬戸産か	
第45回 104	○101 層	日本産 陶磁器	磁器製品 おろし器	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:-	23.34	粘土・白色 光沢有り	-	なし	なし	なし	なし	なし	全面に透 明釉	瀬戸産か	
第45回 105	○101 層	日本産 陶磁器	磁器製品 おろし器	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:-	14.60	粘土・白色 光沢有り	-	なし	なし	なし	なし	なし	全面に薄 緑色釉	瀬戸産か	
第45回 106	○100 層	日本産 陶磁器	磁器製品 西洋人形	破片	最大長:18.4 最大幅:28.9 最大厚:3.6	13.0	粘土・灰白 色軟質	側部	型合む世時の 印/模 銅線球 面に印有り	-	西洋人の 意匠	なし	なし	なし	産地不明 近代	
第45回 107	○100 層	土製品	土管	一部欠損	最大長:18.4 最大幅:28.9 最大厚:3.6	4.1	片断産 瀬戸産 粘土・灰色 硬質	側部	内面に 穿孔痕	確認できず	なし	なし	なし	緑釉	なし	
第45回 108	○100 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:16.0 最大幅:3.0	1.1g	日本産 発付	胴上部	打割/内	-	-	-	-	-	-	
第45回 109	○101 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:26.0 最大幅:6.0	5.8	中国産 青磁	胴上部	打割/内	-	-	-	-	-	製?14C後 ~15C	
第45回 110	○100 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:34.0 最大幅:4.5	6.1	中国産 青花	口縁部	打割/外	-	-	-	-	-	-	
第45回 111	○100 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:20.0 最大幅:4.0	2.6	ガラス	側部	打割/外	-	-	-	-	-	-	
第45回 112	○101 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:24.5 最大幅:4.0	3.1	中国産 色絵	側部	打割/外	-	-	-	-	-	-	
第45回 113	○101 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:41.0 最大幅:11.5	17	中国産 白磁	底部 底面 付着	打割/外	-	-	-	-	-	-	
第45回 114	○101 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:41.0 最大幅:16.5	36.7	中国産 青磁	側部	打割/内	-	-	-	-	不明	-	
第45回 115	○101 層	円筒状 製品	略円形	完形	外径:44.5 最大幅:12.1	28.7	陶質土器	側部	研磨	-	-	-	-	-	-	
第45回 116	○100 層	金属 製品	金具	完形	最大長:30.7 最大幅:60.3 最大厚:10.8	19.3	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	なし	なし	把手	
第45回 117	○101 層	金属 製品	蓋	完形	最大長:53.1 最大幅:53.0 最大厚:4.0	32.5	鉄・ブム	-	なし	確認できず	なし	なし	なし	なし	機械柱	
第45回 118	○102 層	金属 製品	蓋	一部欠損	最大長:21.9 最大幅:20.0 最大厚:6.1	2.9	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	なし	なし	-	
第45回 119	○101 層	金属 製品	蓋	完形	最大長:29.3 最大幅:30.7 最大厚:7.6	8.3	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	なし	特になし	-	

表 34 管制塔Ⅰ地区Ⅲ層出土遺物観察表5 (陶磁器以外)

所蔵 番号	出土 地点	種類	器種器形	形状	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項				備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・部		その他
第4500 120	そ103 遺層	金属 製品	鍔	完形	最大長:37.2 最大幅:19.1 最大厚:0.5	1.9	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	なし	-
第4500 121	そ101 遺層	金属 製品	鍔	完形 (変形)	最大長:7.9 最大幅:33.0 最大厚:1.7	3.3	銅	-	なし	確認できず	なし	なし	端部有孔	-
第4500 122	そ100 遺層	金属 製品	不明	完形	最大長:15.6 最大幅:30.2 最大厚:2.4	16.8	銅	-	なし	確認できず	なし	なし	底部有孔	扉閉係品か
第4500 123	そ100 遺層	金属 製品	ハサビ	完形	最大長:108.0 最大幅:48.6 最大厚:5.4	23.2	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	特になし	-
第4500 124	そ100 遺層	金属 製品	不明	完形	最大長:26.3 最大幅:20.4 最大厚:4.7	4.6	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	穿孔	-
第4500 125	そ100 遺層	金属 製品	銭貨	完形	径:25.5 厚:1.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	寛永通宝
第4500 126	そ101 遺層	ガラス 製品	硝子か・ 硝子	破片	最大長:- 最大幅:43.0 最大厚:-	17.74	ガラス	底部	なし	なし	なし	「王」	なし	-
第4500 127	そ100 遺層	石製品	砥石	破片	最大長:37 最大厚:15 最大幅:25	13.8	頁岩	-	研磨	砥面	-	-	-	-
第4500 128	そ100 遺層	石製品	砥石	破片	最大長:50 最大厚:17 最大幅:39	23.9	輝緑 凝灰岩	-	なし	砥面	-	-	-	-
第4500 129	そ101 遺層	石製品	砥石	破片	最大長:37 最大厚:21 最大幅:31	7.1	軽石	-	なし	砥面	-	-	-	-
第4500 130	そ101 遺層	石製品	石鑿	破片	最大長:25 最大厚:4 最大幅:23	3.4	粘板岩	-	研磨・削切	縁条痕・ 研磨	-	-	-	-
第4500 131	せ101 遺層	石製品	棒状製品	完形	最大長:118 最大厚:25 最大幅:33	112.9	細粒砂岩	-	研磨(削)	敲打	-	-	-	-
第4600 132	そ100 遺層	遊具	泥面子	完形	最大長:18.7 最大幅:17.6 最大厚:6.1	2.3	土製 粘土・赤褐色 砂岩	-	ミガキ	なし	なし	不明印 有り	なし	-
第4600 133	そ100 遺層	遊具	泥面子	完形	最大長:20.9 最大幅:21.5 最大厚:10.6	6.3	土製 粘土・褐色	-	ミガキ	なし	なし	なし	なし	-
第4600 134	そ100 遺層	遊具	泥面子	完形	最大長:17.3 最大幅:16.9 最大厚:6.5	2.2	土製 粘土・赤褐色 砂岩	-	ミガキ	なし	なし	なし	なし	-
第4600 135	そ101 遺層	遊具	泥面子	完形	最大長:17.4 最大幅:16.8 最大厚:6.9	2.3	土製 粘土・赤褐色 砂岩	-	ミガキ	なし	なし	不明印 有り	なし	-
第4600 136	そ100 遺層	遊具	おろしき	完形	最大長:17.1 最大幅:16.8 最大厚:2.7	1.1	ガラス	-	なし(製作)	なし	オレンジ色 不規則模様	「2」	なし	-
第4600 137	そ101 遺層	土製品	-	完形	最大長:25.7 最大幅:17.0 最大厚:6.2	1.8	土製 粘土・赤褐色 砂岩	-	なし	なし	側縁部変状 中央広縁か	なし	なし	懐中御守か
第4600 138	そ101 遺層	ミニチュ ア製品	おろし器	完形	最大長:41.5 最大幅:22.5 最大厚:6.1	7.4	磁器 粘土・灰白 色釉	-	なし	なし	なし	なし	なし	瀬戸産か

第4節 I・II層の遺物

I・II層からは2,270点の遺物が出土している(表34)。遺物構成はIII層と同様のため大嶺村期の遺物であると思われるが、III層と同様に先史時代土器や石器(第48図152)、グスク時代の青磁を僅かに含む。また注目される資料に「歩兵第四十五聯隊酒保」銘の歯ブラシが挙げられる(図版27⑤)。旧日本軍小塚飛行場に関連する資料とみられる。



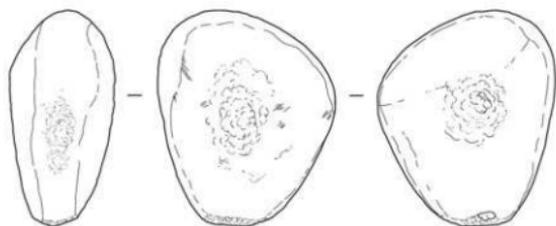
図版27 管制塔I地区I・II層出土遺物1(縮尺不同)

表35 管制塔I地区I・II層出土遺物集計表

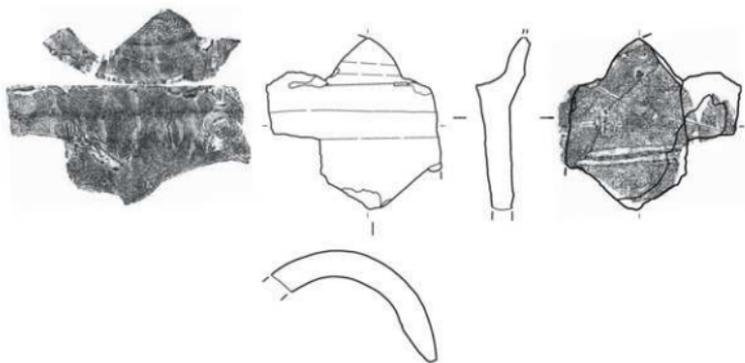
地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産洗釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石遺物	石材	金属製品	木製品	円盤状製品		
管制塔I	I	せ100			6	3	6	1										
		せ101			4	3	1	1										
		せ100		11	93	50	49	34	3					10	27		7	
		せ101			27	7	12	3	2									3
		不明			2	25	8	24	10			1			2	3		5
	II	せ100			3	67	36	40	11	4			1		1			8
		せ101			1	22	26	62	8	10	1	1	1	3			2	1
		せ100			3	86	53	58	23	8					8	1		8
		せ101			1	12	115	84	86	28	3		1	1	7	4		11
		合計			1	32	445	270	338	119	30	2	3	2	32	35	2	41
地区	層位	グリッド	遊具	ガラス製品	漆喰	瓦	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	歯ブラシ	ゴム製品	貝類	動物遺存体	不明	計	層位計			
管制塔I	I	せ100					3						1			21		
		せ101					1									10		
		せ100		1	30		72	6		1	1		3	11	1	410		
		せ101			4		11						1			70		
		不明			6	1	29	1				1				118		
	II	せ100				9		63	5	2			7	1	2	260		
		せ101				7		52	2							199		
		せ100			31		188	17		2			3	3		492		
		せ101			1		253	20		7	2		1	5	3	699		
		合計			2	128	3	671	93		12	3	1	18	22	4	2270	



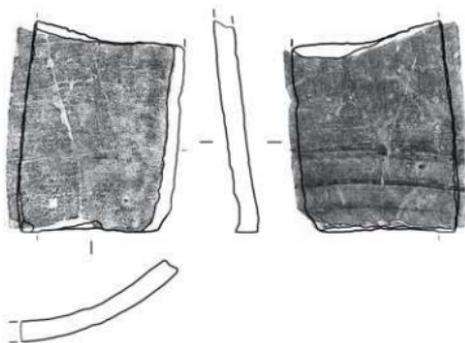
第 47 図 管制塔 I 地区 I・II 層出土遺物 1



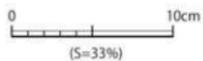
152



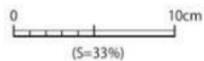
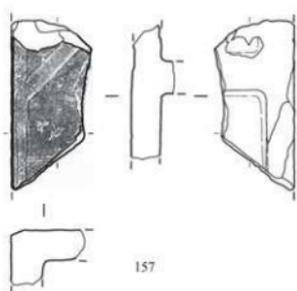
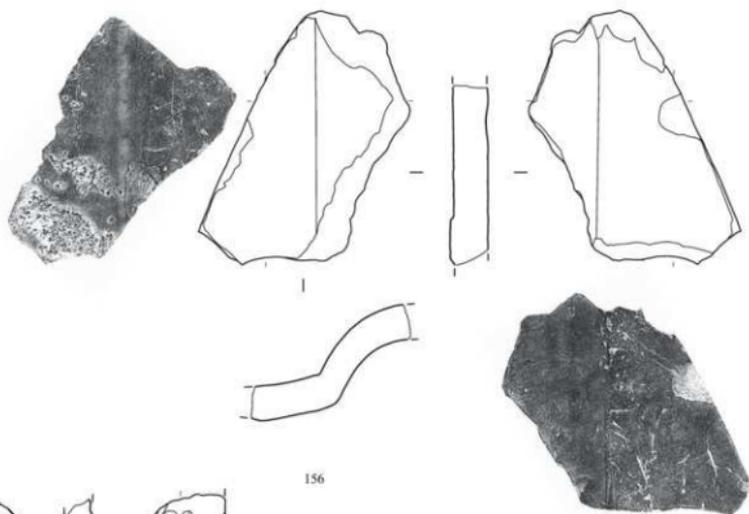
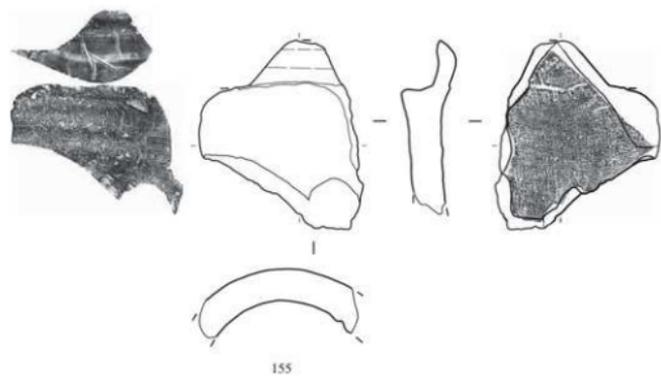
153



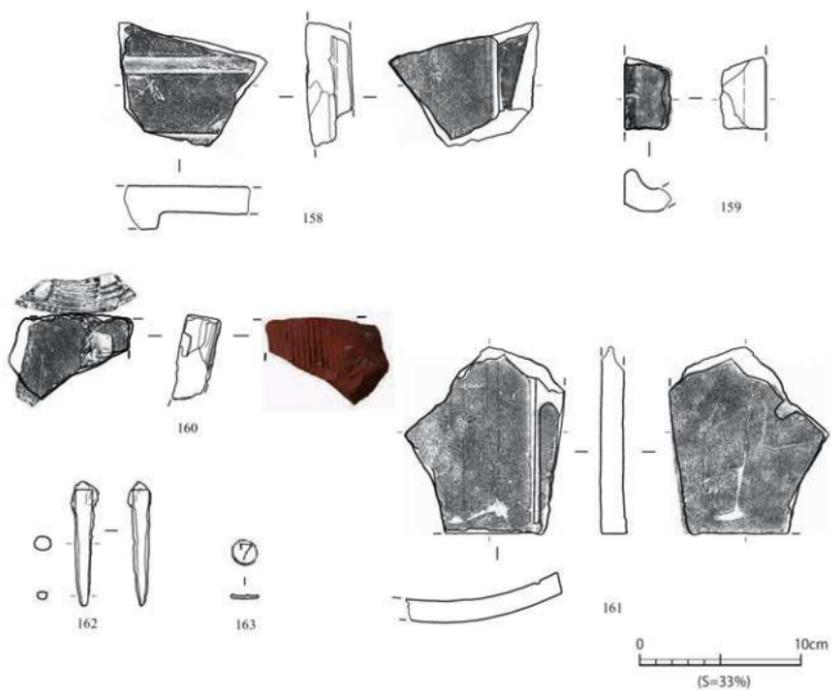
154



第48図 管制塔I地区I・II層出土遺物2



第49図 管制塔 I地区 I・II層出土遺物 3



第50図 管制塔I地区I・II層出土遺物4



図版 28 管制塔I地区I・II層出土遺物2 (163:S=100%、それ以外 S=33%)



図版 29 管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物 3 (S=33%)

表 36 管制塔Ⅰ地区Ⅰ・Ⅱ層出土遺物観察表 1 (陶磁器)

掲載 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	寸法 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	装飾 文様		印・銘	産地 年代	備考	
										胎土	その他				
第47回 139	Ⅱ層	日本産 陶磁器	甕	旋削 陶器	胴～底	口径:- 部高:- 底径:4.0	53.34	轆轤 帯付輪割 ぎ・砂付巻	白色織密・ ガラス質	外:透明 内:透明	なし	なし	「城4」 美・遺 1941-46	-	
第47回 140	Ⅱ層	日本産 陶磁器	甕	近代 磁器 角皿	底部	口径:- 部高:- 底径:-	10.48	製作の 帯付輪割 ぎ	白色やや 粗	外:透明 内:透明	内:梅花 文, 波形文	ゴム版	なし	美・美 近代	-
第47回 141	Ⅰ層	日本産 陶磁器	杯	白磁 酒盃	口～底	口径:5.4 部高:2.3 底径:2.3	4.08	製作の 帯付輪割 ぎ	白色織密・ ガラス質	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	美・美 19-20c	表面劣化
第47回 142	Ⅰ層	日本産 陶磁器	蓋物	染付 磁器 成重	口～底	口径:- 部高:2.85 底径:-	26.77	製作の	灰白色や 平肌, ガラ ス質	外:透明・埋 溝 内:透明	なし	なし	なし	美・美 19c～20c	-
第47回 143	Ⅱ層	日本産 陶磁器	蓋	染付 磁器	甲～特	底淵部径: 5.8 特淵部径: 7.0 部高:-	16.71	口受部泥 質付着	灰白色や 平肌	外:透明 内:透明	外:樹木 文, 羅網	輪付け	なし	肥前 V期	-
第47回 144	Ⅱ層	日本産 陶磁器	不明	白磁	底部	口径:- 部高:- 底径:9.2	46.01	製作の 帯付泥質 付着	白色織密	外:透明 内:透明	なし	なし	なし	美・美 近代	-
第47回 145	Ⅱ層	日本産 陶磁器	杯?	(磁器 小)急付	底部	口径:- 部高:- 底径:3.5	7.87	製作の	白色, 黒色 絞染り	外:透明 内:透明	内:梅花 文, 羅網	輪付け	なし	産地不明 近代	-
第47回 146	Ⅱ層	日本産 陶磁器	鉢	陶器?	口縁部	口径:- 部高:- 底径:-	42.95	なし	赤褐色肌 肌	外:～内口 縁:白色釉	外:丸形文	なし	なし	不明	-
第47回 147	不明Ⅰ 層	沖縄産 陶器	急須	沖縄産 麻鉢 陶器	口～胴	口径:6.2 部高:- 底径:-	17.53	なし	白色/軟質	外:透明 内:透明	なし	-	-	-	-
第47回 148	Ⅱ層	沖縄産 陶器	油壺	沖縄産 麻鉢 陶器	胴～底	口径:- 部高:- 底径:4.2	91.23	なし	暗黄灰色/ 軟質	外:黒釉	なし	-	-	-	-
第47回 149	Ⅱ層	沖縄産 陶器	水瀝	沖縄産 麻鉢 陶器	口～底	口径:- 部高:- 底径:-	12.80	内底有目 肌	白色/織密	外:透明 内:透明	なし	-	-	-	-
第47回 150	Ⅱ層	瓦質 土器	火鉢 火敷	-	底部	口径:- 部高:- 底径:-	178.61	外面:七ガ 牛 内面:刷毛 モ子生	赤褐色砂・ 金雲母混じ り	-	なし	なし	なし	日本産	-
第47回 151	Ⅱ層	瓦質 土器	不明	-	不明	口径:- 部高:- 底径:-	93.92	内外七ガ牛	灰褐色砂 混	-	なし	なし	なし	沖縄	巻貝1個作 証人

表 37 管制塔I地区I・II層出土遺物観察表2(陶磁器以外)

発掘 番号	出土 地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項				備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・銘		その他
第48回 152	せ101 II層	石器	石杵	完形	最大長:132 最大厚:64 最大幅:108	1380	輝緑岩	-	なし	敲打による 凹み	なし	なし	なし	-
第48回 153	せ101 II層	瓦	明礬系 丸瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:15.0	289.66	粘土:赤褐色砂質	玉縁部	背面布目痕	なし	なし	なし	なし	-
第49回 154	せ101 II層	瓦	明礬系 平瓦	一部欠損	最大長:- 最大幅:- 最大厚:11.0	229.50	粘土:赤褐色軟質	拱頂部	背面布目痕	なし	なし	なし	煤付着	-
第49回 155	せ100 II層	瓦	明礬系 丸瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:20.0	287.90	粘土:赤褐色軟質	玉縁部	背面布目痕	なし	なし	なし	なし	-
第49回 156	せ100 II層	瓦	近代瓦	一部欠損	最大長:- 最大幅:- 最大厚:21.0	471.75	粘土:赤褐色硬密	胴部	なし	なし	なし	なし	なし	-
第49回 157	せ100 II層	瓦	近代瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:17.0	142.18	粘土:赤褐色硬密	不明	なし	なし	なし	なし	なし	-
第50回 158	せ100 II層	瓦	近代瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:15.0	124.15	粘土:赤褐色硬密	不明	なし	なし	なし	なし	なし	-
第50回 159	せ100 II層	瓦	近代瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:-	31.25	粘土:赤褐色硬密	不明	なし	なし	なし	なし	なし	-
第50回 160	せ101 II層	瓦	近代瓦 丸瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:19.0	69.31	粘土:赤褐色硬密	端部	外面磨目	なし	なし	なし	外面:漆喰付着	-
第50回 161	せ101 II層	瓦	近代瓦 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:13.0	189.30	粘土:赤褐色硬密	端部	内面溝有り	なし	なし	なし	内面:漆喰付着	-
第50回 162	せ100 I層	金属 製品	釘	完形	最大長:71.5 最大幅:15.7 最大厚:11.7	15.7	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	方形	-
第50回 163	せ100 I層	器具	おぼろ	完形	外径:36.7 最大厚:2.4	1.0	ガラス	-	なし	なし	なし	「7」	なし	-

第5節 管制塔Ⅱ地区の調査成果

1 概要

管制塔Ⅱ地区は、海拔約0.1mまで掘削したがいずれも戦後の造成層が堆積しており、近世・近代及びそれ以前の遺構は確認されなかった。遺物は造成土中より戦後の金属製の建材等に混じって近世・近代の遺物が出土している。

2 堆積状況

Ⅰ・Ⅱ層が深度約2.7mに渡って厚く堆積する。Ⅱ層には様々な土砂がみられるが、水平堆積の最下層以外は北方向へ下傾した堆積が連続することが東壁より確認でき、内陸部から海へ向かって造成が行われた様子を示している。地表下2.7mからⅤ-2層が堆積するが、トレンチ中央部のみ琉球石灰岩が確認された。

3 遺物

管制塔Ⅱ地区では、計1,490点の遺物が出土した(表39)。いずれもⅠ・Ⅱ層からの出土のため、掲載は図版のみに留めた(図版33)。遺物は近世・近代の本土産陶磁器と沖縄産無釉陶器、瓦、貝類が主体で、内容について管制塔Ⅰ地区・エプロン地区と大きな違いはみられない。また集計から外しているが、現代の金属片等も多数出土している。

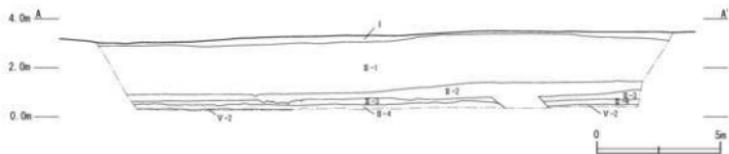
ただし、遺物中に弥生～平安並行時代前半期の浜屋原式もしくは大堂原式とみられる土器片1点(図版33土器・石器①)と、瀬戸哲也氏がV類とする14～15世紀ごろの青磁(図版33中国産陶磁器①)や中国産褐釉陶器(同③)が含まれている(瀬戸ほか2007)。これらは空港造成時の地ならしによって土に混ざって運ばれてきたものであり、那覇空港内に当該時期の遺跡が存在する可能性を示す資料である。



第51図 管制塔Ⅱ地区位置 (S=1/3000)



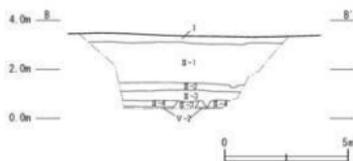
図版 30 管制塔Ⅱ地区完掘状況（北から）



第 52 図 管制塔Ⅱ地区東壁断面図 (S=1/200)



図版 31 管制塔Ⅱ地区東壁（オルソ）



第 53 図 管制塔Ⅱ地区南壁断面図
(S=1/200)



図版 32 管制塔Ⅱ地区南壁（オルソ）

表 38 管制塔Ⅱ地区土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備 考
管制塔地区Ⅱ	I	10YR6/4	にぶい黄褐色	粗砂	なし	なし	灰黄褐色(10YR4/2)細砂(ニービ)、にぶい黄褐色(10YR6/3)砂が混じる。アスファルト層を含む。
	Ⅱ-1	10YR5/8	黄褐色	細砂	やや有	なし	ニービとクチャ(7.5Y5/1)が堆積する。コンクリート片・鉄片含む。
	Ⅱ-2	7.5Y4/1	灰色	クチャ	有	やや有	灰褐色(7.5YR4/2)粗砂含む。Φ5cm大の鐵、コンクリート片・アスファルト混じる。
	Ⅱ-3	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト	有	やや有	明黄褐色(10YR6/8)シルト混じる。クチャ片・ガラス混じる。
	Ⅱ-4	2.5Y6/2	灰黄色	砂	有	やや有	暗灰黄色(2.5Y5/2)シルトとの互層である。針金混じる。
	V-2	2.5Y7/1	灰白色	海砂	なし	有	枝サンゴ含む。

表 39 管制塔Ⅱ地区出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産洗釉陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石遺物	石材	金属製品	木製品	陶製状製品	
管制塔Ⅱ	I	—		3	14	13	22	3					2			1	
	Ⅱ	—	1	20	215	189	250	96	23	3	2	2	33	1	11	13	
	合計		1	23	229	202	272	99	23	3	2	2	35	1	12	13	
地区	層位	グリッド	ガラス製品	漆喰	瓦	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	薬ブラシ	貝類	動物遺存体	合計						
管制塔Ⅱ	I	—	5		115	18		1		1	1	199					
	Ⅱ	—	66	1	213	6		8	2	127	9	1291					
	合計		71	1	328	24		9	2	128	10	1490					



土器・石器



中国産陶磁器



日本産陶磁器



沖縄産施釉・無釉陶器



瓦



円盤状製品



石製品



櫛

図版 33 管制塔Ⅱ地区出土遺物

第5章 エブロン地区の調査成果

第1節 エブロン地区の層序

エブロン地区では、基本層序Ⅰ～Ⅶ層が検出された。Ⅰ・Ⅱ層は管制塔Ⅰ・Ⅱ地区と同じもので、ともに戦後の米軍による造成による土層である。Ⅲ層はエブロン地区では地層中では確認できず、Ⅲ-3層が遺構覆土にのみ認められる。Ⅳ層はエブロン地区にのみ確認される砂層で、填圧の影響でしまりがあることが特徴である。大きくⅣ-1層とⅣ-2層の2つに分けられ、共に遺構が検出される。形成要因は判然としないが、自然堆積層の可能性が高い。

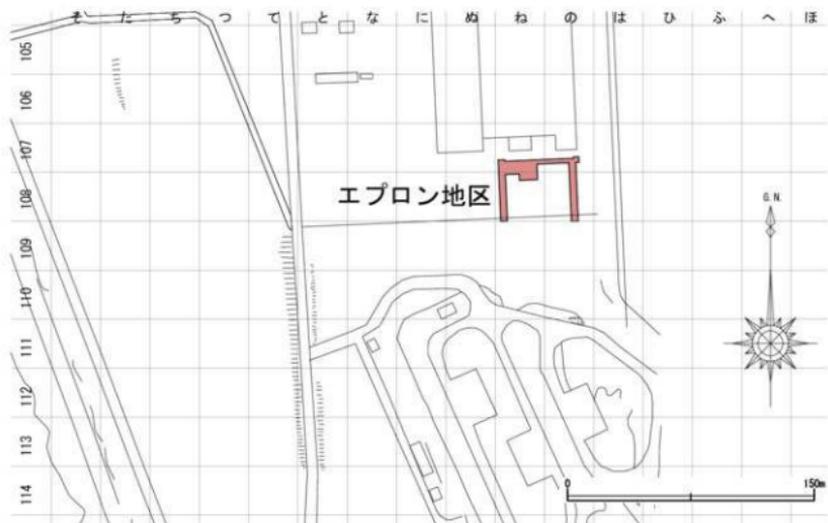
V層は遺物の包含しない自然堆積層であるが、北西側には細粒で貝・サンゴ等の混入がまばらな細砂層(V-1層)が検出される。しかしそれ以外の場所では貝やサンゴ片等の海浜堆積物層(V-2層)が検出される。V層より下には、V-2層が灰色化したⅥ層がトレンチ中央部から東側に堆積し、その下には一部に琉球石灰岩の岩盤が確認されるが、概ねは鳥尻層の泥岩層が堆積する。

【人為的堆積層】

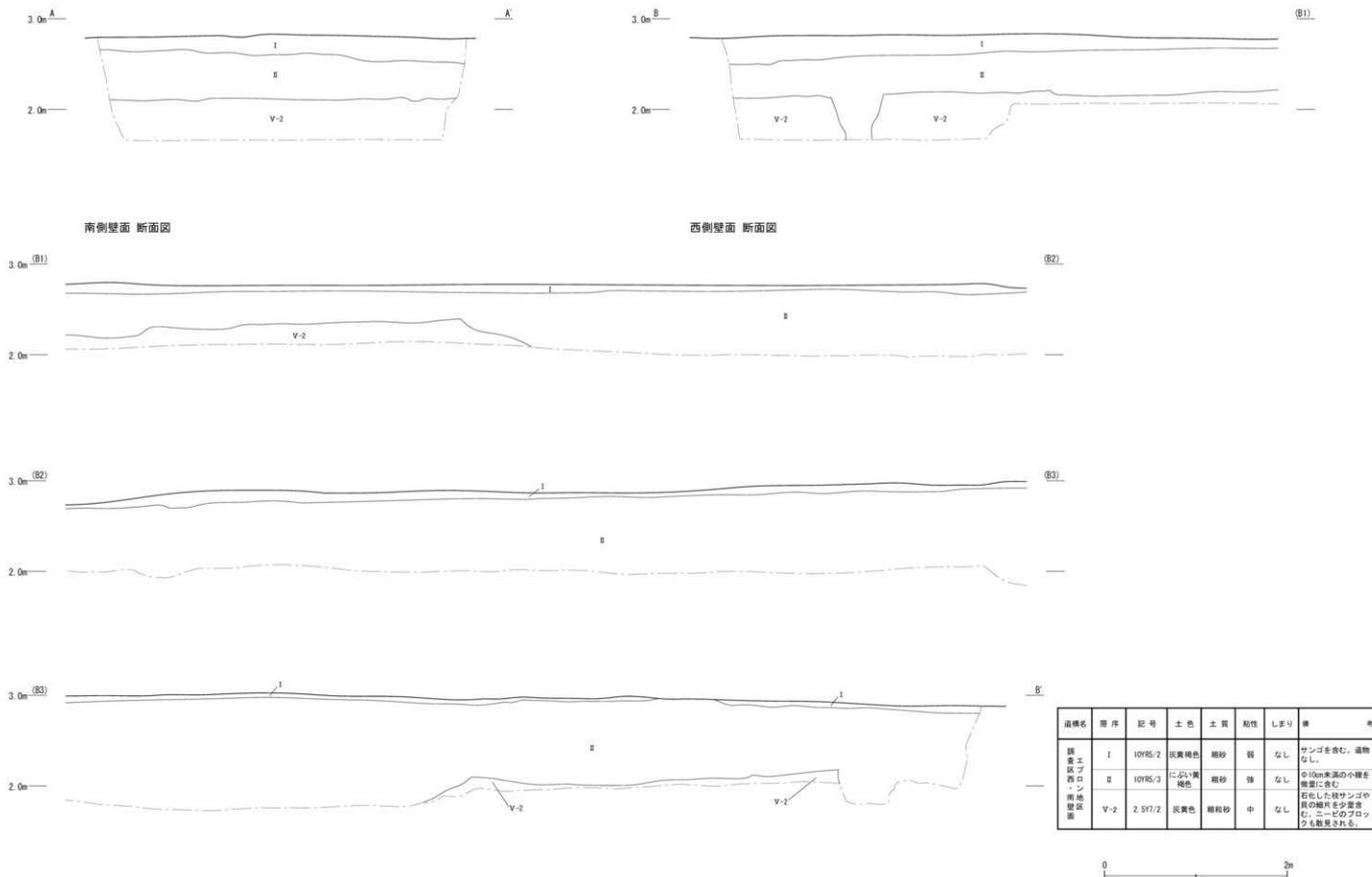
- Ⅰ層：現表土。近世・近代の沖縄産陶器や瓦などが稀に確認できる。
- Ⅱ層：米軍那覇飛行場及び那覇空港に伴う造成土層。
- Ⅲ層：戦中～戦後直後の造成土層。当地区ではⅢ-3層が遺構覆土に確認される。

【自然堆積層】

- Ⅳ層：大きくⅣ-1層とⅣ-2層に大別。Ⅳ-1層は近世・近代の多数の遺構・遺物が確認される。Ⅳ-2層はトレンチ中央部に確認され、覆土中炭化物から $1,210 \pm 30BP$ 年の年代値が得られたピットを含む遺構が検出されている。
- V層：細砂層(V-1層)と海浜堆積物層(V-2層)の2つに大別される。V-1層は一部にⅣ-2層と同様に上面で遺構が検出されるが、総じて層厚が薄い。
- Ⅵ層：灰色海浜堆積物層
- Ⅶ層：鳥尻層泥岩層。基盤層。



第54図 エブロン地区位置 (S=1/3000)



第55図 エブロン地区壁面図1 (西側南壁、西壁) (S=1/40)



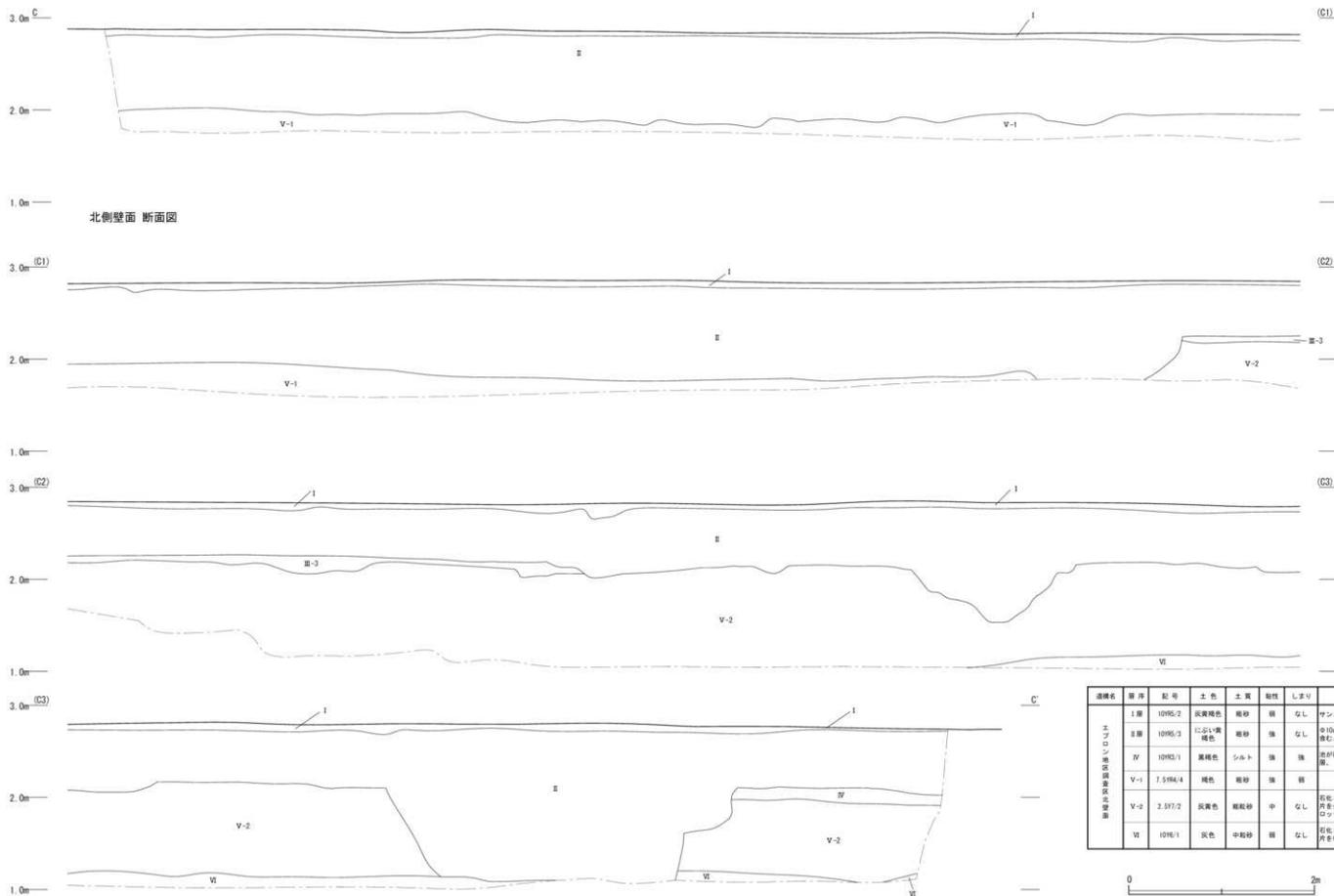
南側壁面 断面オルソ図



西側壁面 断面オルソ図



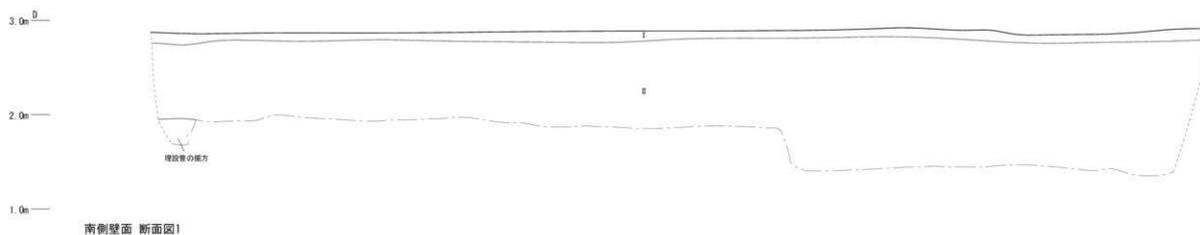
図版 34 エブロン地区壁面オルソ図 (西側南壁、西壁) (S=1/40)



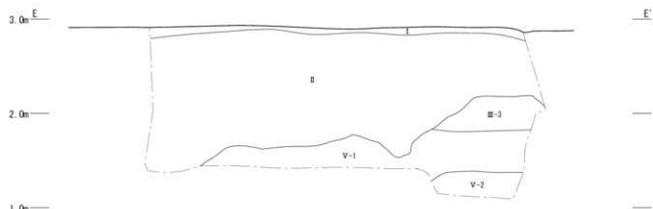
第56図 エブロン地区壁面図2 (北壁) (S=1/40)



図版 35 エブロン地区壁面オルソ図（北壁）(S=1/40)

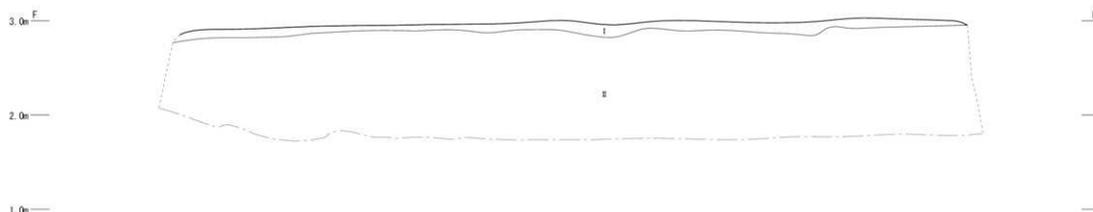


南側壁面 断面図1



中央西壁 断面図

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
遺エ 塚ブ 灰ノ 前 壁地 面区	I層	10YR5/2	灰黄褐色	細砂	弱	なし	サンゴを含む。遺物なし。	
	II層	10YR5/3	にぶい 黄褐色	細砂	強	なし	φ10cm未満の小礫を微量に含む。	
	III-3層	2.5Y5/2	暗灰黄色	細砂	強	なし	φ5mm未満の小石粒を多く含む。貝殻の破片を少量含む。	
	V-1層	2.5Y7/4	淡黄色	粗粒砂	弱	なし	ビーチロツクにブロック状態に見られる砂	
	V-2層	2.5Y7/2	灰黄色	粗粒砂	中	なし	石化した柱サンゴや貝の破片を少量含む。ニービーのブロックも散見される。	



南側壁面 断面図2



第57図 エブロン地区壁面図3 (中央南壁・西壁) (S=1/40)



南側壁面 断面オルソ図1



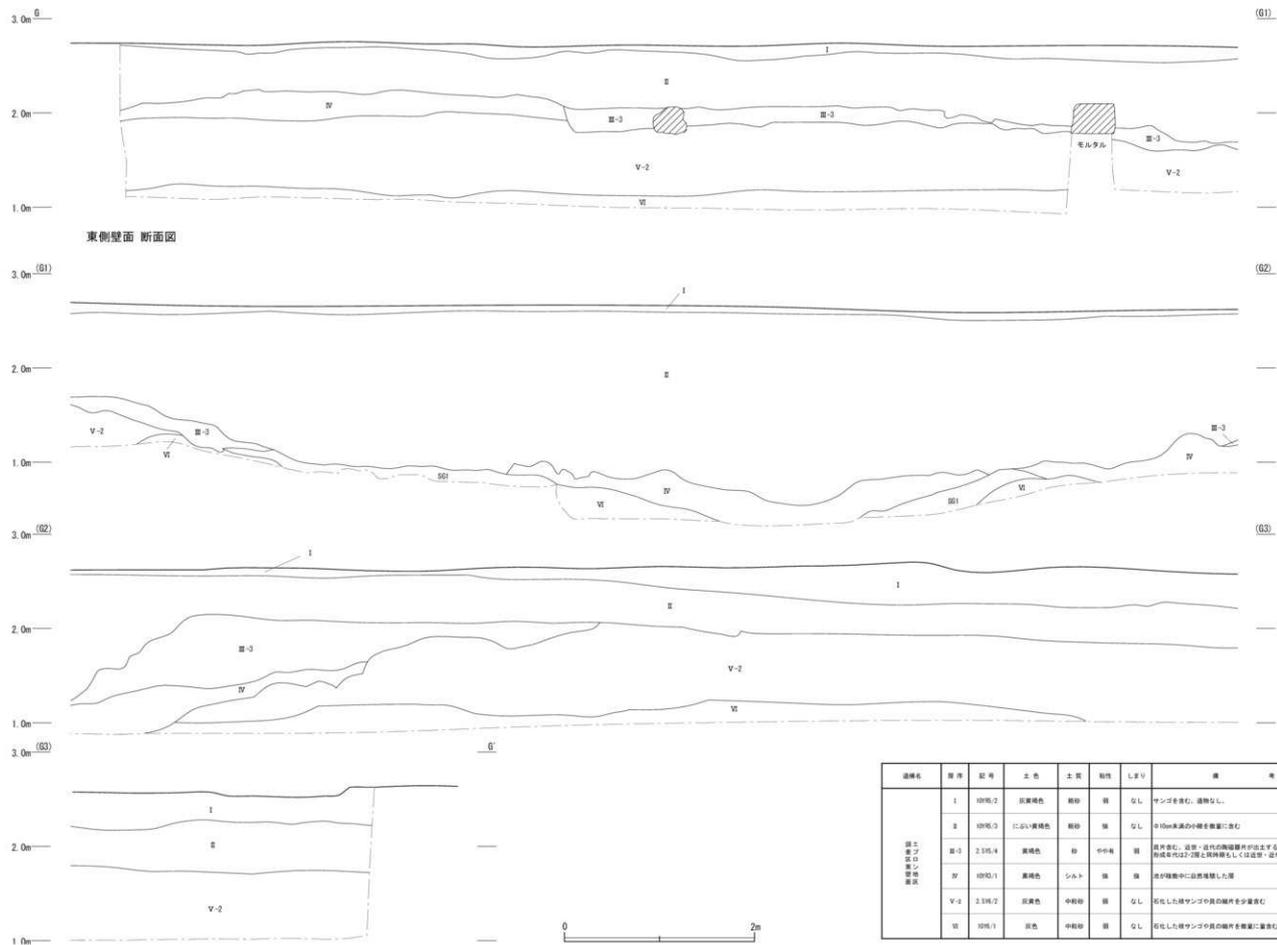
中央西壁 断面オルソ図



南側壁面 断面オルソ図2



図版 36 エブロン地区壁面オルソ図 (中央南壁・西壁) (S=1/40)



層序名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備 考
遺土 層序 及び 層序 調査	I	0000/2	灰黄褐色	細砂	弱	なし	サンゴを含有。遺物なし。
	II	0000/3	にがい黄褐色	粗砂	強	なし	約10m未満の小礫多量層に含む
	III-3	2 136/4	黄褐色	砂	中～弱	弱	腐食帯化、変形・圧化の微細層状の付着する。腐食帯化は2層に連続して付着する。変形。
	IV	0000/1	黄褐色	シルト	強	強	透が層状中に乱層状した層
	V-2	2 136/2	灰黄褐色	中～粗砂	弱	なし	圧化した層サンゴや貝の断片を少量含む
	VI	0000/1	灰色	中～粗砂	弱	なし	圧化した層サンゴや貝の断片を微量に含む

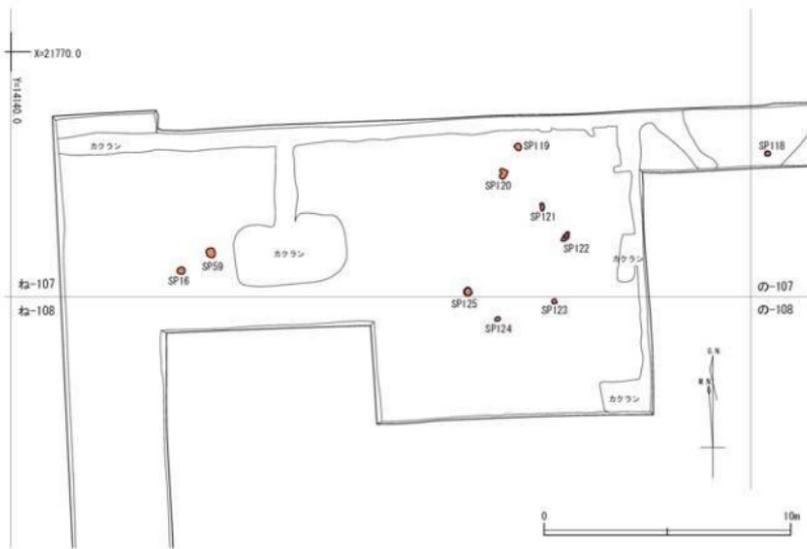
第58図 エブロン地区壁面図4 (東壁) (S=1/40)



図版 37 エブロン地区壁面オルソ図（東壁）(S=1/40)

第2節 下層（IV-2層）の遺構と遺物

概要 ビット10基が検出されたがプラン等は明確でない。覆土中からの出土遺物はみられないが、SP119 覆土内炭化物より1,210 ± 30BPの年代値が得られている。遺物は貝類がほとんどである。



第59図 エプロン地区IV-2層遺構分布図 (S=1/200)



図版38 エプロン地区IV-2層遺構配置図（オルソ）

【SP16・59】

構造 略楕円形で断面形状は浅いすり鉢状。

SP16：長軸 31cm、短軸 27cm、深さ 12cm

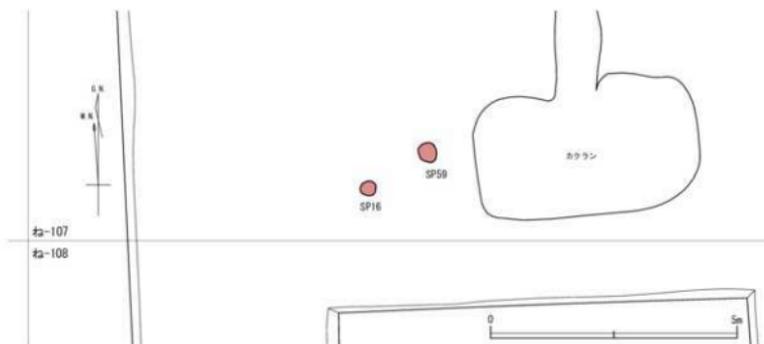
SP59：長軸 27cm、短軸 25cm、深さ 12cm

覆土 基本層序Ⅲ-3層だが、下部及び側縁部は色調や包含物が異なる。

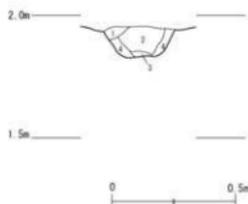
出土遺物 無し。



図版 39 エブロン地区 SP16・59 完掘状況 (南から)



第 60 図 エブロン地区 SP16・59 平面図 (S=1/100)



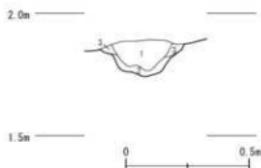
第 61 図 エブロン地区 SP16 断面図 (S=1/20)



図版 40 エブロン地区 SP16 半掘状況 (南から)

表 40 エブロン地区 SP16 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
エブロン地区 SP16	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	弱	やや有		
	2	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	有		
	3	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	やや有	サンゴ殻が約5%混ざる。	
	4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	弱	有	サンゴや小石が約3%混ざる。	

第 62 図 エブロン地区 SP59 断面図
(S=1/20)

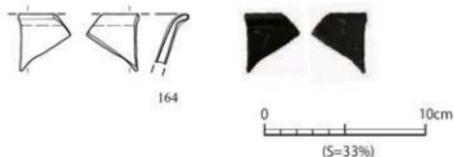
図版 41 エブロン地区 SP59 半截状況（東から）

表 41 エブロン地区 SP59 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
エブロン地区 SP59	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	有	小磯・サンゴ片まばらに混じる。SX1の1-1層に近い。	
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	やや有	1層に比してやや粗粒。	
	3	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	有		
	4	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	固着砂密に混じる。地山が。	

表 42 エブロン地区 SP59 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	外産産 陶磁器	日本産 陶磁器	瓦	合計
エブロン	SP59	ね107	1	1	1	3



第 63 図 エブロン地区 SP59 出土遺物

表 43 エブロン地区 SP59 出土遺物観察表

掲載 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	裝飾			印・銘	産地 年代	備考
										胎土	文様	その他			
第63図 164	ね107 SP59	中国産 陶磁器	餅	青磁	口縁部	口縁部 - 口高 - 底径 -	8.83	-	灰色	暗オリーブ 灰色、肉色	なし	釉薬が厚い	-	鹿児島 15c前	-

【SP118～125】

構造 隅丸方形のもの (SP118,125) と略円形で浅いすり鉢状 (SP119～124) の2種。明確なプランは確認できない。

覆土 灰黄色から暗灰黄色砂層が多い。単層もしくは水平に複数層が堆積。なお SP119 覆土内炭化物より 1,210 ± 30BP の年代値が得られている。

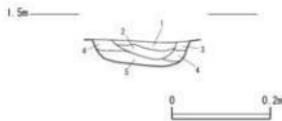
出土遺物 なし。



第 64 図 エブロン地区 SP118～125 平面図 (S=1/100)



図版 42 エブロン地区 SP118～125 完掘状況 (南から)



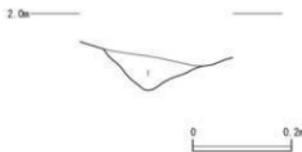
第65図 エブロン地区 SP118 断面図 (S=1/10)



図版43 エブロン地区 SP118 半截状況 (北から)

表44 エブロン地区 SP118 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エブロン地区 SP118	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	やや有	やや有	細粒。
	2	2.5Y6/2	灰黄色	砂	やや有	有	細粒。
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	やや有	弱	やや細粒(≒φ0.5mm)。
	4	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	弱	細粒。
	5	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	やや有	弱	粗粒(φ0.5～φ1.0mm)。



第66図 エブロン地区 SP119 断面図 (S=1/10)



図版44 エブロン地区 SP119 半截状況 (東から)

表45 エブロン地区 SP119 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エブロン地区 SP119	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	強	貝片・サンゴ片まばらに混じる。
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	有	地山か。

第3節 上層（IV－1層）の遺構と遺物

概要 検出した遺構は、SE 3基、SL 2基、SK 5基、SP115基、SF 2基、SG 1基が確認された。これらの遺構は、遺構の切り合い関係や出土遺物の年代観から、概ね以下の3つの時期に分かれる。

近世（遺構の廃絶時期が近代に達しないとみられる遺構）：

SE3

近世～近代（遺構の廃絶時期が近代に達するとみられる遺構）：

SE1・2、SL1・2、SK1・2・3・4・5、SP1～15・17～58・60～117、SG1

近代～戦中・戦後直後（上記近世～近代の遺構より新しい遺構）：

SF1

この中で主体となるのは近世～近代の遺構で、大嶺村跡が営まれてた頃から戦火によって廃絶するまでの時期のものである。遺構には様々な機能のものが確認され、当時の村の様相を把握できる内容のものとなっている。

遺物の方も多種多様で、陶磁器には中国産・日本産・沖縄産、陶磁器以外にも瓦や土製品・磁器製品、円盤状製品、金属製品、木製品、骨製品、プラスチック製品、石製品・石造物などが確認された。特に井戸内からは木製品が多く出土しており、その関連性を窺わせる。また、僅かではあるが縄文時代後期・弥生～平安並行時代の土器や石器、グスク時代の陶磁器も出土しており、大嶺村以前の人の営みの痕跡も確認することができた。中でもグスク時代については、当地区の南側の丘陵がウフグシク・ヤマグシクと呼ばれることから、その関連性が考えられる。

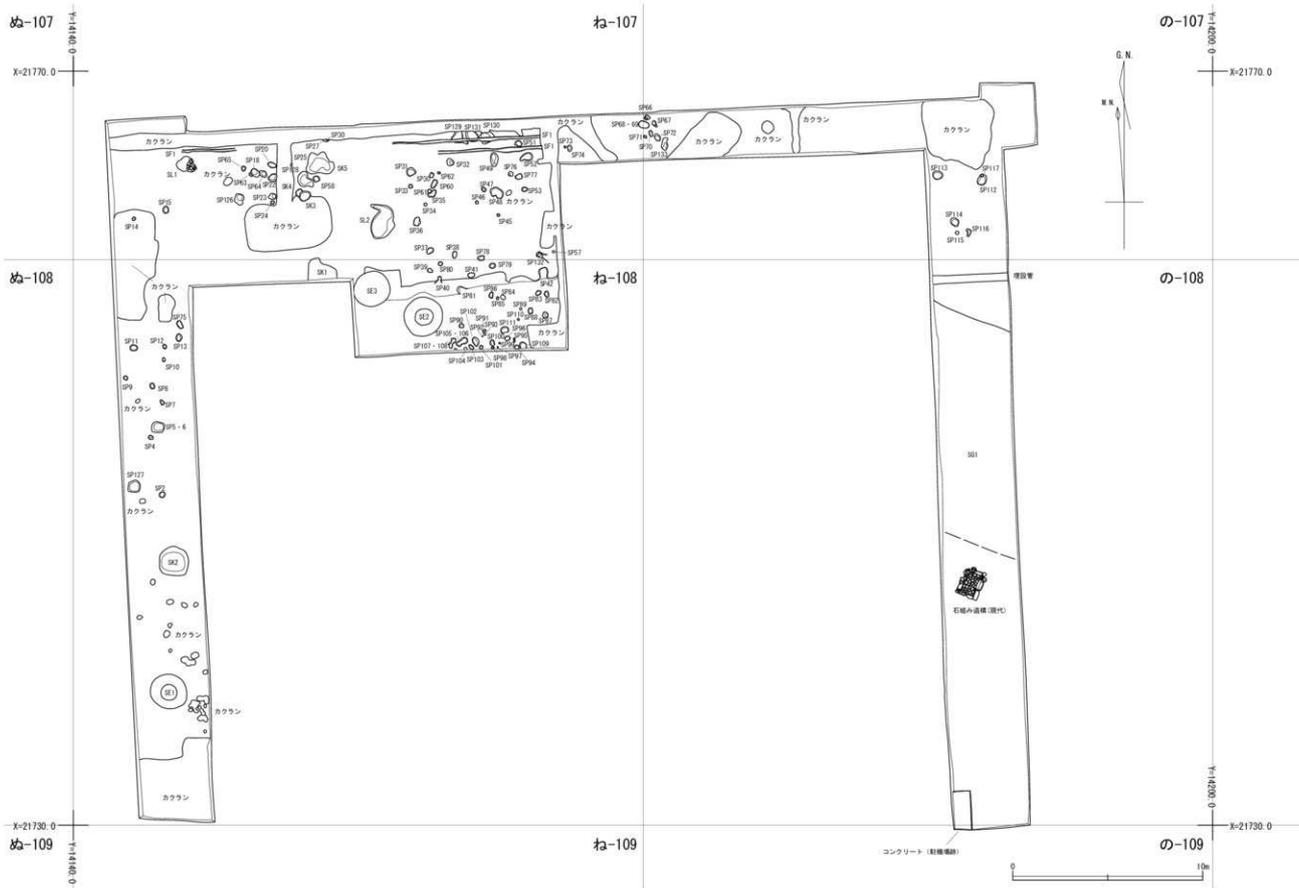
【SE1】

構造 円形。周囲に井筒と同心円状の掘方が確認され、ほぼ垂直に井戸が構築されたことが分かる。井筒の掘削は烏尻泥岩層（VII層）に達してもさらに下にまで及ぶ。このVII層とV層の境から井筒側に面をもつ石と栗石を約1m積んで井戸を構築している。利用石材は琉球石灰岩を主に、ほかにサンゴ石、海浜凝固物（碎屑性石灰岩）などが用いられる（図版47）。直径188cm、深さ303cm。

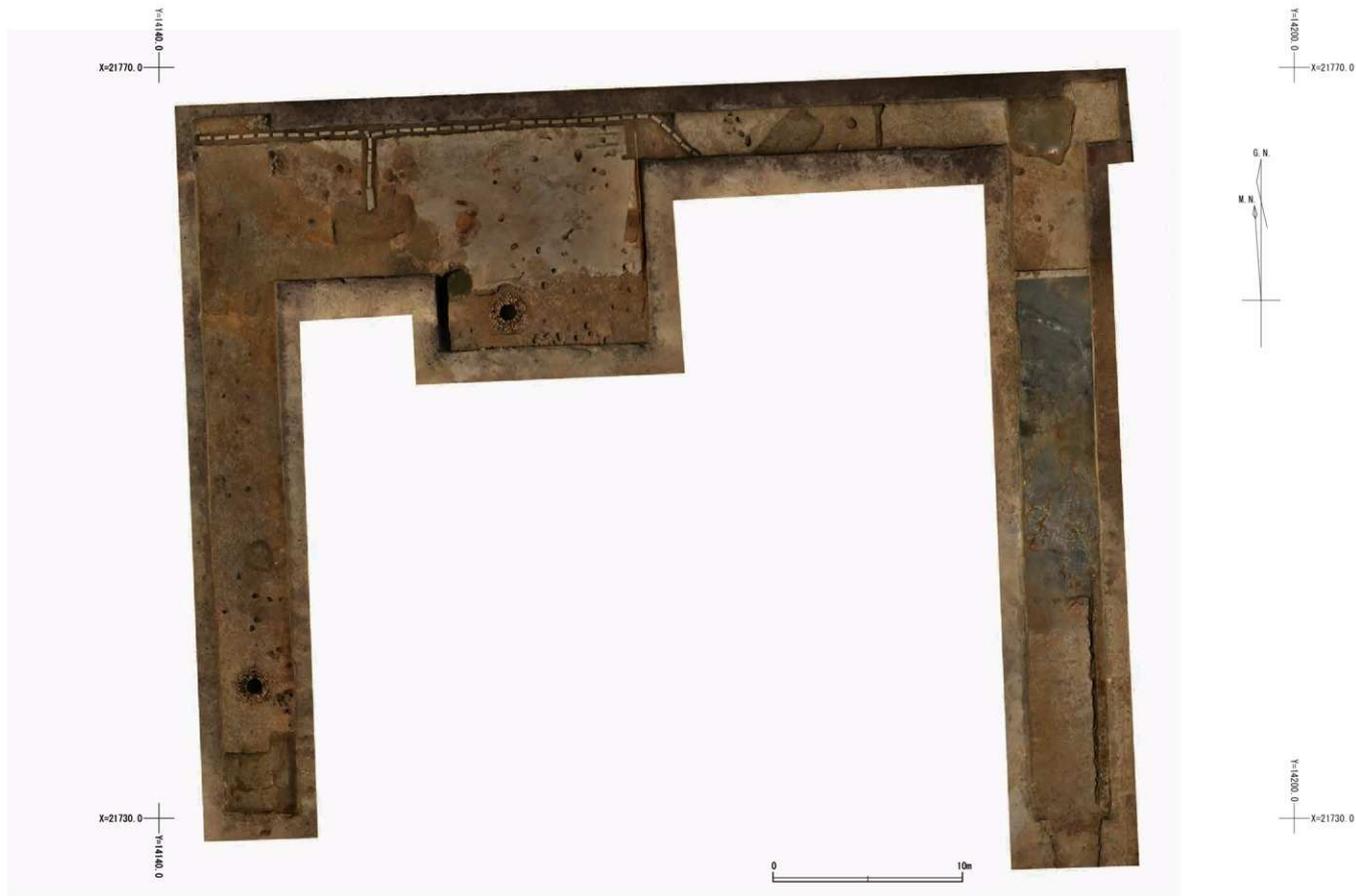
覆土 最上面は拳大の礫が被覆するように堆積。その下はⅢ－3層の砂層が約3m近く堆積し、近世・近代の様々な遺物を包含する。常に水気を含んでおり、井筒石材の内面側や遺物の一部は褐色に変色していた（図版47①）。

出土遺物 陶磁器には中国産（第69図165）・日本産（同図166～172）・沖縄産（同図173～181）、ほかに瓦質土器（第70図182）などが出土した。中でも近代の日本産陶磁器が井筒裏込内から出土していることから、SE1の構築が近代であることが理解される。

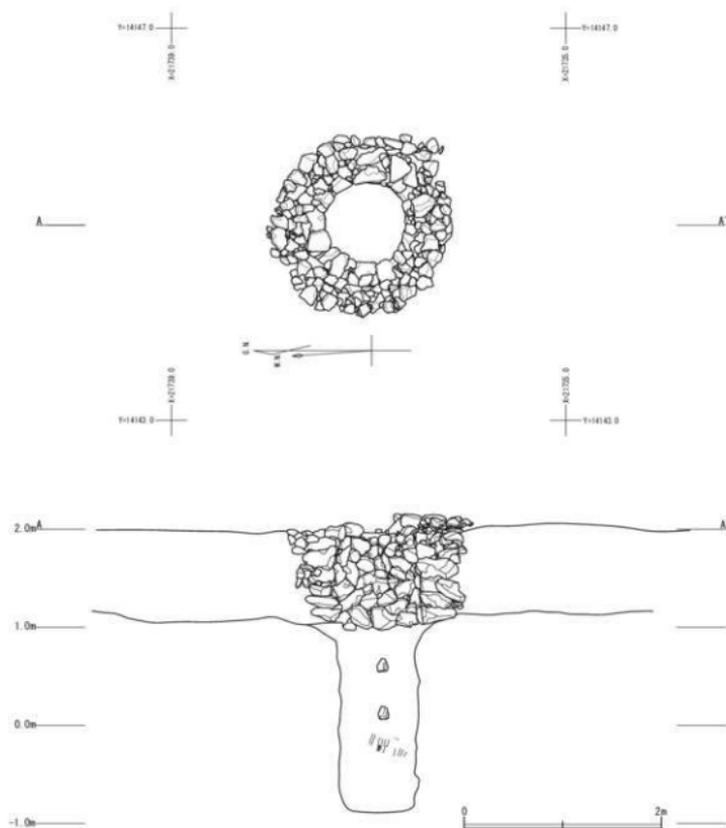
陶磁器以外にも多様な遺物が出土している。瓦（第70図183）は完形で出土した。金属製品は文様のみられる指輪（同図185）、釘には船釘（同図186）が含まれる。銭貨には寛永通宝が井筒裏込内から出土している（同図187）。木製品は木桶のような製品（同図188）がみられる。ほかにプラスチック製ボタン（図版48①）やレンガ（図版48②）、石製品には琉球石灰岩にセメントを塗った香炉（図版48③）の完形品、漆喰が付着する礎石（図版49③）などが出土している。



第 67 図 エプロン地区IV-1層遺構分布図 (S=1/200)



図版 45 エブロン地区IV-1層遺構配置図（オルソ）（S=1/200）



第 68 図 エブロン地区 SE1 平面図・立体断面図 (S=1/50)



検出状況（東から）



半截状況（西から）



完掘状況（西から）



SE1 断ち割り（西から）

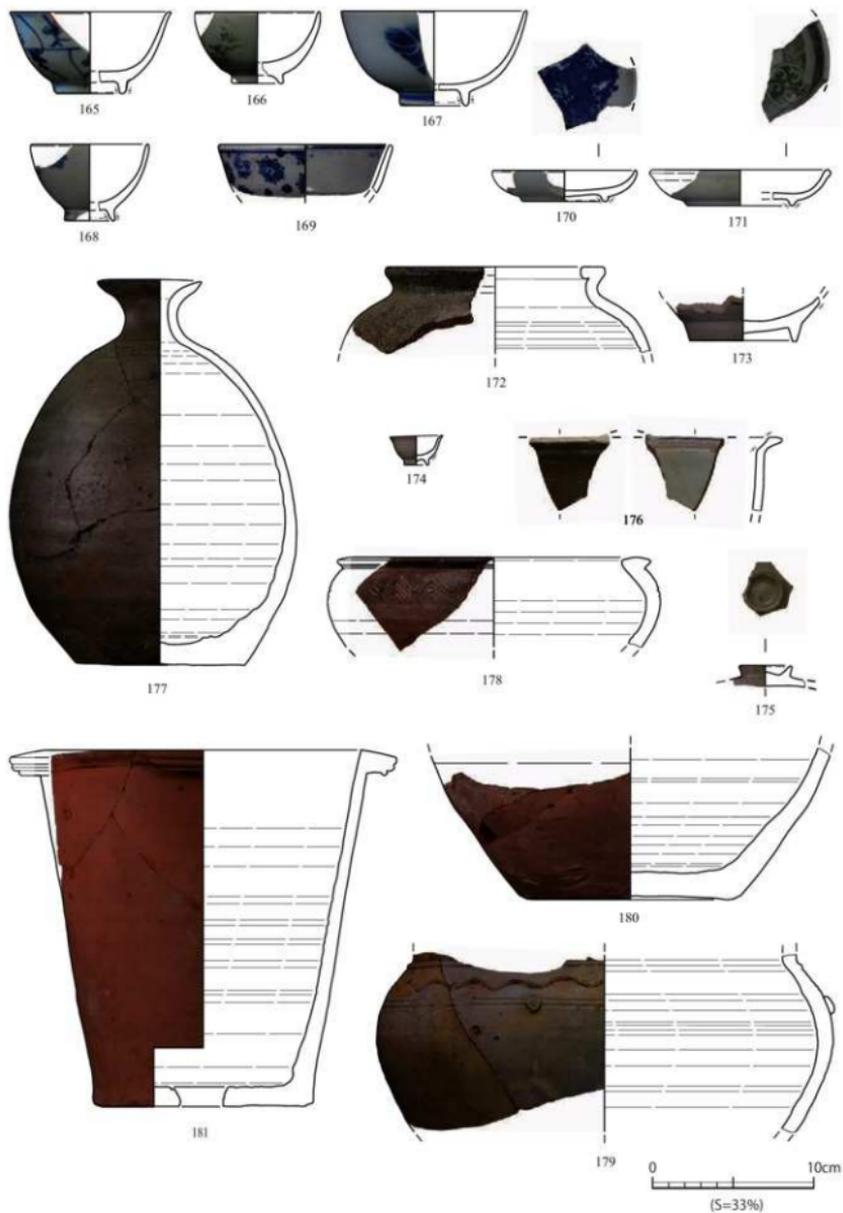
図版 46 エブロン地区 SE1 検出・半截・完掘・断ち割り状況

表 46 エブロン地区 SE1 出土遺物集計表

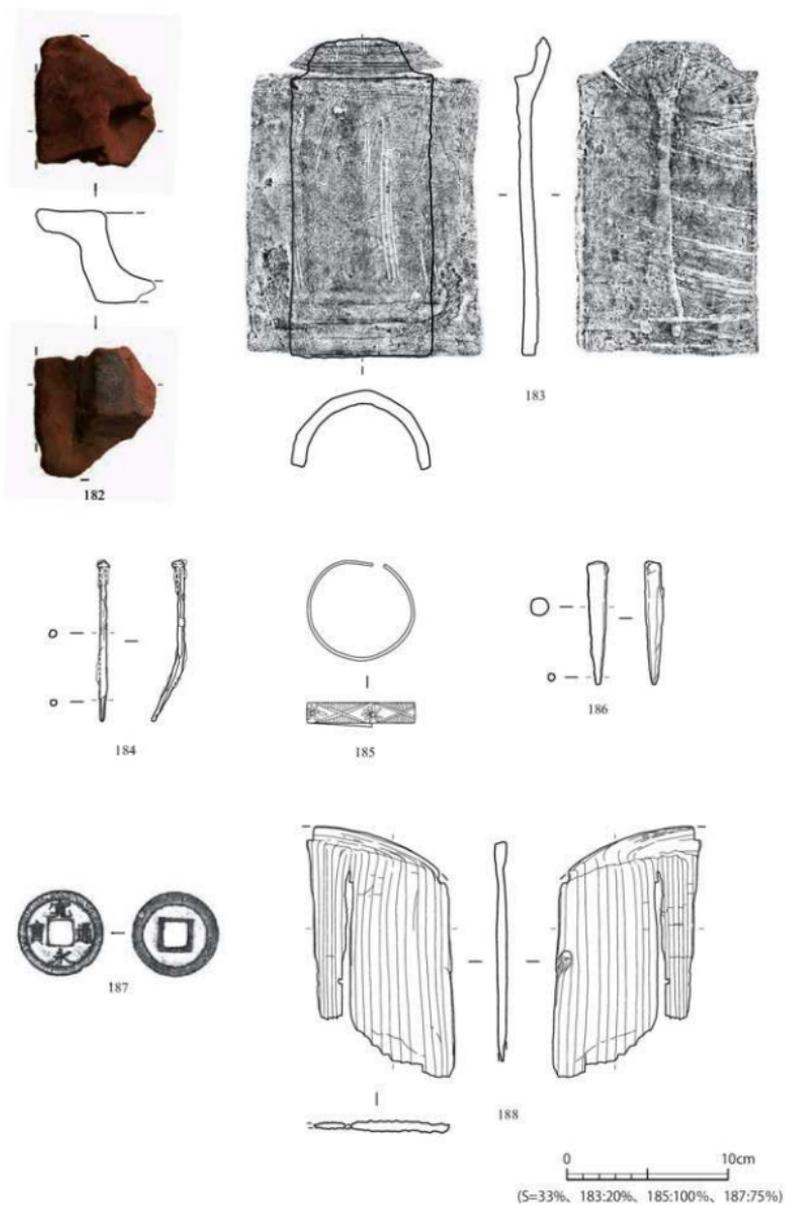
地区	遺構	グリッド	外国産 陶磁器	日本産 陶磁器	沖縄産 漆器陶器	沖縄産 無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石製品	石遺物	石材	金属製品	木製品	円盤状 製品	ガラス 製品	漆喰
エブロン	SE1	ね108	4	44	49	73	6	5	1	13	12	5	3	1	10	5
地区	遺構	グリッド	瓦	煉瓦	セルロイド・ プラスチック製品	歯ブラシ	骨角牙 製品	貝類	動物 遺存体	合計						
エブロン	SE1	ね108	899	27	1	2	1	227	8	1364						



図版 47 エブロン地区 SE1 井筒石材 (S=10%)



第 69 図 エブロン地区 SE1 出土遺物 1



第70図 エブロン地区SE1出土遺物2

(S=33%、183:20%、185:100%、187:75%)

表 47 エブロン地区 SE1 出土遺物観察表 1 (陶磁器)

発掘番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	寸法(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾文様		印・銘	産地年代	備考	
										胎土	その他				
第690図 165	E108 SE1	中国産 陶磁器	碗	青花 磁器	口～底	口径:9.8 器高:5.0 底径:4.4	35.87	帯付木輪割 ぎ	白色 磁器	外:青白色 内:青白色	内:描線 内底:不明 外:白地 青文	-	あり	徳化系 18c前後～ 19c	-
第690図 166	E108 SE1	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器	口～底	口径:7.6 器高:4.4 底径:3.2	24.99	型作り 帯付無施 彩	白色黒色 粒含む	外:青磁 内:青磁	外:草花文	銅版焼 り	なし	瀬・美 近代	-
第690図 167	E108 SE1	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器	口～底	口径:11.25 器高:5.8 底径:4.2	38.64	轆轤	白色磁器 ガラス質 含	外:透明 内:透明	外:草花 文?、描 線	ゴム版	なし	瀬・美 近代	-
第690図 168	E108 SE1	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器	口～底	口径:7.2 器高:4.7 底径:3.0	24.53	轆轤 帯付輪割 ぎ	白色やや 粗、黒色粒 含	外:透明 内:透明	外:草花 文、文字 文	銅版焼 り	なし	肥前か 近代	-
第690図 169	E108 SE1	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器	口縁部	口径:10.6 器高:- 底径:-	15.59	轆轤	白色やや 粗、黒色粒 含	外:透明 内:透明	外:草花 文、描 線	ゴム版	なし	福徳 近代	-
第690図 170	E108 SE1	日本産 陶磁器	皿	近代 磁器	口～底	口径:8.8 器高:1.9 底径:5.3	16.66	型作り 帯付无施 彩	灰白色粗 粒	外:透明 内:透明	内:草花 文、扇字 文	銅版焼 り	なし	瀬・美 近代	-
第690図 171	E108 SE1	日本産 陶磁器	皿	近代 磁器	口～底	口径:11.0 器高:2.2 底径:6.4	17.05	帯付輪割 ぎ	灰白色粗 粒	外:透明 内:透明	内:雷文、 松花文等	銅版焼 り(緑色)	なし	瀬・美 近代	-
第690図 172	E108 SE1	日本産 陶磁器	壺	脇輪 陶器	口縁部	口径:13.35 器高:- 底径:-	72.70	轆轤 口唇部無 施	赤褐色砂 粒入り	外:粗粒 内:粗粒	なし	なし	なし	備前近代川 系 19c	-
第690図 173	E108 SE1	沖縄産 陶器	碗	沖縄産 陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.5	91.43	帯付・足 込に砂付 着	灰色/磁 質	外:灰緑?	なし	-	-	-	-
第690図 174	E108 SE1	沖縄産 陶器	小杯	沖縄産 陶器	完整	口径:3.2 器高:1.8 底径:1.5	8.40	なし	白色/磁 質	内外:透 明	なし	-	-	近世 近代	-
第690図 175	E108 SE1	沖縄産 陶器	蓋	沖縄産 陶器	側部	総高:器高:- 器高:- 器高:- 底径:-	180.8	凹凸あり	灰色/磁 質	外:灰緑	なし	-	-	-	-
第690図 176	E108 SE1	沖縄産 陶器	鉢	沖縄産 陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	143.8	蓋受輪割 ぎ・砂付 着	茶褐色	内:白磁土 →透明 外:緑色	なし	-	-	-	-
第690図 177	E108 SE1	沖縄産 陶器	蓋	沖縄産 陶器	略方形	口径:6.3 器高:23.6 底径:10.2	1508.63	なし	赤褐色	なし	肩部描線3 条	-	-	-	-
第690図 178	E108 SE1	沖縄産 陶器	木鉢	沖縄産 陶器	口～側	口径:19.0 器高:- 底径:-	58.06	なし	赤褐色	なし	外:波状 描線	-	-	-	φ1.0cmの 石を入
第690図 179	E108 SE1	沖縄産 陶器	壺	沖縄産 陶器	側高	口径:- 側高:(推 定)5.8 底径:-	483.33	轆轤	褐色磁 質	なし	外:波状 描線、描 線なし	藍文輪割 ぎ	なし	沖縄	器具類 あり
第690図 180	E108 SE1	沖縄産 陶器	煮出し じ壺	沖縄産 陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:12.5	1147.88	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-	器具類 あり
第690図 181	E108 SE1	沖縄産 陶器	積木鉢	沖縄産 陶器	口～底	口径:23.5 器高:18.1 穴径:12.6 底径:13.4	749.98	轆轤	赤褐色	-	外:口縁に 二重描 線	底部穿孔 外底未 切削痕 残	なし	沖縄	器具類 あり
第700図 182	E108 SE1	瓦質 土器	火鉢 土器	陶質 土器	-	口径:- 器高:- 底径:-	177.45	なし	外:赤褐色 内:黄褐色	なし	なし	-	-	沖縄	器具類 あり

表 48 エブロン地区 SE1 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項				備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・銘		その他
第705回 183	E1108 SE1 井筒	瓦	丸瓦	完形	最大長:320.15 最大幅:136.5 最大厚:13.0	1460.25	-	-	-	-	-	-	-	-
第705回 184	E1108 SE1 井筒	金属 製品	釘	完形(皮形)	最大長:194.2 最大幅:22.1 最大厚:7.8	6.0	鉄	-	なし	なし	なし	なし	なし	丸釘
第705回 185	E1108 SE1 井筒	金属 製品	衝輪	完形	最大長:4.1 最大幅:21.5 最大厚:0.7	1.4	銅	-	なし、彫造	確認できず	花文、斜 格子文、 縦位置線	なし	なし	なし
第705回 186	E1108 SE1 井筒	金属 製品	釘	完形	最大長:75.6 最大幅:11.9 最大厚:0.8	21.5	鉄	-	なし	確認できず	なし	なし	断面方形	舟釘
第705回 187	E1108 SE1 井筒	金属 製品	銭貨	完形	外径:24.3 最大厚:1.3	2.5	銅	-	なし	なし	なし	「寛永 通宝」	なし	寛永通宝
第705回 188	E1108 SE1 井筒	木製品	本棒?	破片	最大長:15.4 最大幅:9.0	19.4	-	-	切断	なし	なし	なし	-	-



図版 48 エブロン地区 SE1 出土遺物 1

(S=①:50%、183~186・188:33%、187:75%、②・③:20%)



図版 49 エブロン地区 SE1 出土遺物 2 (S=10%)

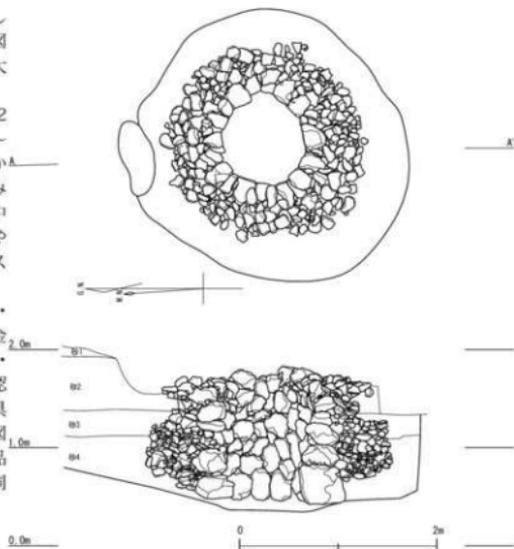
【SE2】

構造 円形。周囲に井筒と同心円状の掘方があり、ほぼ垂直に掘削されている。掘削は SE1 と異なり島尻泥岩層 (VII層) にまでは達していない。井筒側に面をもつ石と栗石を約 1 m 積んで構築されているが、井筒の最上面は後世に削平を受けて失われている。井筒の石材には琉球石灰岩を主に、ほかにサンゴ石や海浜凝固物などが利用されている (図版 51)。直径 205cm、深さ 146cm。

覆土 III-3層が約 1 m 以上堆積し、その中には近世・近代の様々な遺物を包含されていた。水気を常を含んだ状況にあり、井筒石材や一部の遺物はその影響により褐色に変色している (図版 50・51 ①・③、第 72 図 197・199)。最上面は SE1 と同様に拳大の礫で被覆される。

出土遺物 陶磁器には中国産 (第 72 図 189～191)、日本産 (同図 192～196)、沖縄産 (同図 197～204)、ほかに瓦質土器 (同図 205) や陶質土器がみられる。概ね近世・近代の資料だが、中国産には 15 世紀中頃の青磁 (189) や 16 世紀の青花磁器 (191) といったグスク時代に比定されるものが含まれる。

陶磁器以外には瓦 (第 73 図 206・207)、引手金具 (同図 211) などの金属製品、円盤状製品には略円形 (208・210)、と方形 (209) のものが確認された。木製品には釘の残る木製の道具 (第 73 図 212) や建築部材の一部 (同図 213・214) が出土している。ガラス製品には、面取りされた大形のガラス瓶 (同図 215) などがみられる。



第 71 図 エブロン地区 SE2 平面図・立体断面図 (S=1/50)



検出状況（北西から）



半載状況（西から）



完掘状況（西から）

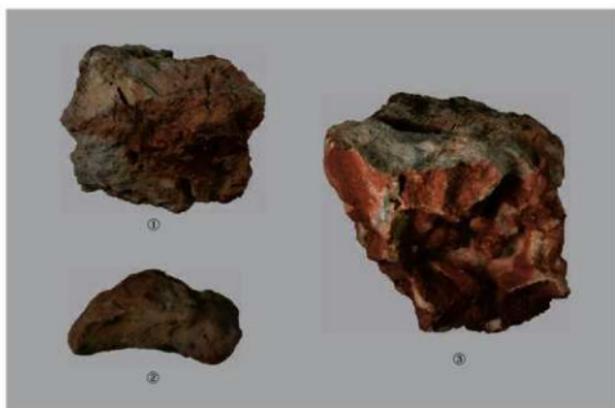


断ち割り状況（西から）

図版 50 エブロン地区 SE2 検出・半載・完掘・断ち割り状況

表 49 エブロン地区 SE2 出土遺物集計表

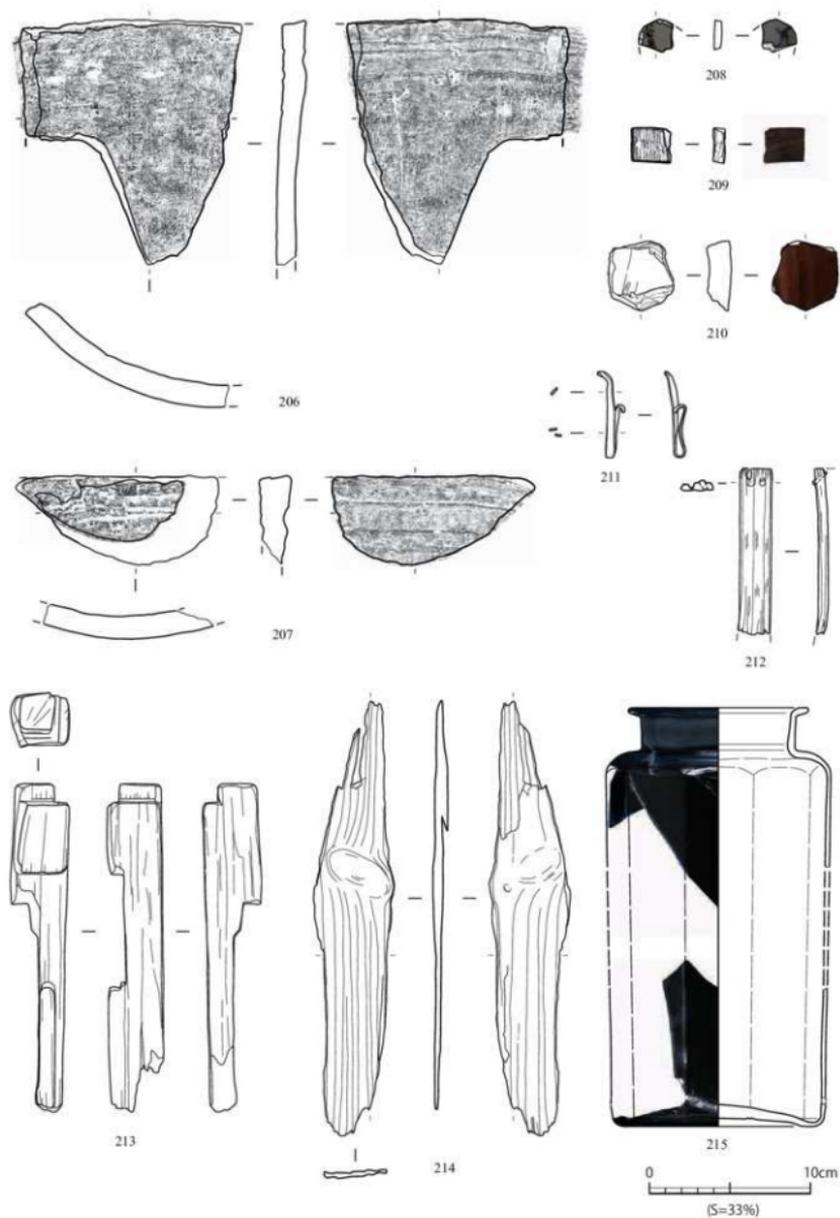
地区	遺構	グリッド	外国産 陶磁器	日本産 陶磁器	沖縄産 施釉陶器	沖縄産 無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石遺物	石材	金属製品	木製品	木材	円盤状 製品	ガラス 製品	瓦
エブロン	SE2	ね100	7	43	104	72	78	9	19	25	11	11	4	8	56	473
地区	遺構	グリッド	煉瓦	セラロイド・ プラスチック製品	貝類	動物 遺存体	不明	合計								
エブロン	SE2	ね100	1		1	600	32	3	1552							



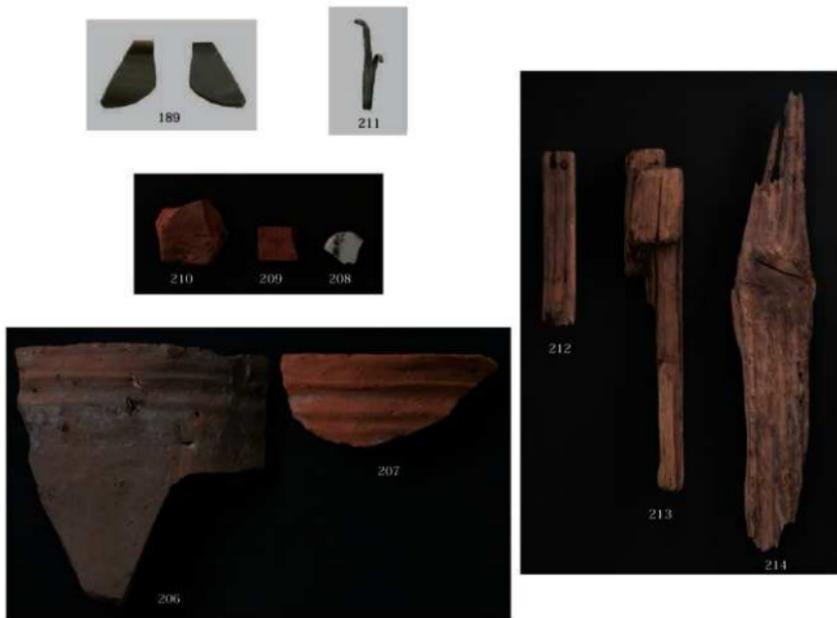
図版 51 エブロン地区 SE2 井筒石材 (S=10%)



第72図 エブロン地区 SE2 出土遺物 1



第73図 エブロン地区 SE2 出土遺物 2



図版 52 エブロン地区 SE2 出土遺物

表 50 エブロン地区 SE2 出土遺物観察表 1 (陶磁器)

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										軸差	文様	その他			
第725号 189	F2108 SE2	中国産 陶磁器	碗	青磁	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	7.26	口唇部を輪 削ぎ	灰白色	両面オリーブ 灰色	なし	-	なし	龍泉 15c中	-
第725号 190	F2108 SE2	中国産 陶磁器	碗	青花 磁器	口縁部	口径:-14.0 器高:- 底径:-	6.95	-	灰白色緻 密	外:透明 内:透明	外:草花文	-	なし	龍化 18c	-
第725号 191	F2108 SE2	中国産 陶磁器	皿	青花 磁器	底面	口径:- 器高:- 底径:-2.2	9.38	基部底、装 付は輪削ぎ	灰白色緻 密	外:青白色 内:青白色	内:有り	-	なし	龍崎 16c	-
第725号 192	F2108 SE2	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器	口~底	口径:-11.4 器高:-4.55 底径:-4.2	67.97	装付輪削ぎ 内底目縁 有り 紫布あり	白色粒粒	外:透明 内:透明	外:草花 文、獅子	銅収捺?	なし	龍崎? 近代	-
第725号 193	F2108 SE2	日本産 陶磁器	皿	近代 磁器	一皿 欠損	口径:-13.35 器高:-2.9 底径:-6.15	192.93	外底:蛇の 目状輪削 ぎ、基部底	灰色、黒色 粒含	外:透明 内:透明	外:草花 文、龍 内:紫子 地、雲 状松竹梅等	紫収捺?	なし	龍崎 近代	-
第725号 194	F2108 SE2	日本産 陶磁器	碗	青磁	口~底	口径:-8.6 器高:-4.0 底径:-3.0	26.29	外底無輪	灰白色や 青磁	外:クワム 内:クワム 青磁	外:無施	なし	なし	美・美 近代	-
第725号 195	F2108 SE2	日本産 陶磁器	杯	白磁	底面	口径:- 器高:- 底径:-2.6	9.54	装付輪削ぎ 内底目縁 あり	白色緻密 黒色粒含	外:薄青色 内:透明	なし	なし	なし	龍崎 不明	-
第725号 196	F2108 SE2	日本産 陶磁器	皿	染織 陶器	底面	口径:- 器高:- 底径:-7.1	11.08	なし	白色	外:染織 内:染織	なし	なし	外底:「G」	不明	-
第725号 197	F2108 SE2	沖縄産 染織陶 器	碗	染織 陶器	口~底	口径:-13.6 器高:-6.8 底径:-6.0	47.08	見込蛇の 目	褐色/粒粒	内外:灰粒	濃緑、黄青	-	-	-	外面赤色に 黄色

第5章 エブロン地区の調査成果

表 51 エブロン地区 SE2 出土遺物観察表 2 (陶磁器)

発掘番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量 (mm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	装飾		印・銘	産地年代	備考	
										胎土	施文				
第7200 198	E1108 SE2	片調産 陶器	甕	片調産 加輪陶器	口～底	口径:12.0 器高:6.0 底径:6.0	91.41	見込乾の 目・袋付ア ルミヤ家 付, 灰白あり	灰色/硬質	内:透明 外:透明結 晶の上にコパ ルト色	なし	-	-	-	-
第7200 199	E1108 SE2	片調産 陶器	甕	片調産 加輪陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.4	118.33	見込に鉄 錆で丸文	赤褐色/粗 粒	内:灰釉 外:鉄釉	なし	-	-	-	赤色に藍 色、土中 で鉄分が付 着?
第7200 200	E1108 SE2	片調産 陶器	蓋	片調産 加輪陶器	甲～持	総高器径:- 6.5 持高器径:- 5.0 器高:- 厚径:-	9.68	なし	厚黄灰色/ 軟質	外:厚硝釉	草花文	-	-	-	-
第7200 201	E1108 SE2	片調産 陶器	蓋	片調産 加輪陶器	甲～持	総高器径:- 12.2 持高器径:- 7.0 器高:4.2 厚径:3.8	117.32	外面乾の 日状輪割ぎ	厚黄灰色/ 粗粒	外:鉄釉	なし	-	-	-	-
第7200 202	E1108 SE2	片調産 陶器	蓋	片調産 加輪陶器	口縁部	口径:7.4 器高:- 底径:-	15.55	なし	灰色/硬質	内外:釉結	なし	-	-	-	口唇部, 輪 割ぎ
第7200 203	E1108 SE2	片調産 陶器	急須	片調産 加輪陶器	口縁部	口径:8.0 器高:- 底径:-	25.55	耳付・注口 部の概あり	淡褐色/軟 質	内外:鉄釉	耳に沈線	-	-	-	-
第7200 204	E1108 SE2	片調産 陶器	水注	片調産 加輪陶器	胴部	口径:- 器高:- 底径:-	46.20	なし	灰白色/硬 質	外:灰釉	ヒビカンナ の痕, 象嵌	圈線	-	-	-
第7200 205	E1108 SE2	瓦質 土器	火鉢?	-	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	145.48	轆轤, 突起 磨胎付	赤褐色	なし	なし	なし	なし	片調 不明	具圧痕あり

表 52 エブロン地区 SE2 出土遺物観察表 3 (陶磁器以外)

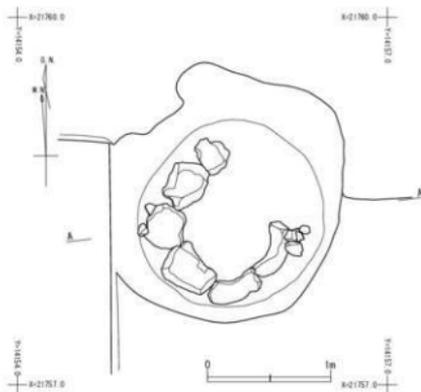
発掘番号	出土位置	種類	器種器形	状態	法量 (mm)	重量 (g)	素材	部位	観察事項					備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・銘	その他		
第7300 206	E1108 SE2 井原裏込	瓦	平瓦	一部欠損	最大長:- 最大幅:- 最大厚:12	294.47	新土: 赤褐色	法隆部	布目痕	なし	なし	なし	-	-	貝原人
第7300 207	E1108 SE2 井原	瓦	平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:-	100.14	新土: 赤褐色砂質	法隆部	布目痕	なし	なし	なし	-	-	貝原人
第7300 208	E1108 SE2 井原	円盤状 製品	略円形	欠損	外径:20.5 最大厚:4.5	2.5	中国産 青花	底部	打割/突	-	-	-	外面:文字	-	-
第7300 209	E1108 SE2 井原	円盤状 製品	方形	完形	最大長:24.0 最大短:21.5 最大厚:0.7	5.9	片調産 無釉陶器	胴部	打割/外・ 研磨	-	-	-	-	種線	方形
第7300 210	E1108 SE2 井原	円盤状 製品	略円形	完形	外径:41.0 最大厚:15.0	28.9	瓦	-	打割/突	-	-	-	-	-	平瓦
第7300 211	E1108 SE2 井原	金属 製品	引手金具	完形(変形)	最大長:53.4 最大幅:18.2 最大厚:1.4	3.7	青銅	なし, 鋳造	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
第7300 212	E1108 SE2 井原	木製品	不明	一部欠損	最大長:101.5 最大幅:4 最大厚:20	3.4	-	-	穿孔	-	なし	なし	なし	釘痕	-
第7300 213	E1108 SE2 井原	木製品	不明	破片	最大長:209 最大厚:34 最大幅:37	51.9	-	-	磨痕	なし	なし	なし	-	-	-
第7300 214	E1108 SE2 井原	木製品	木桶?	破片	最大長:205 最大厚:8 最大幅:49	14.6	-	-	切断	なし	なし	なし	-	-	-
第7300 215	E1108 SE2 井原	ガラス 製品	瓶	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:-	300	青色ガラス	胴～底	なし	なし	なし	なし	なし	なし	面取痕

【SE3】

構造 円形。周囲に井筒と同心円状の掘方があるが、掘削はSE2と同様に烏尻泥岩層（VII層）にまでは及ばない。また井筒はほとんど失われており、底部の1段のみ残存する。残された石材は細粒砂岩（図版55①）とサンゴ石（同②）で、特に①はSE1・2と異なり筒状に加工されている。直径194cm、深さ146cm。

覆土 IV層に類似する砂層が井筒を埋め、その中には近世・近代の様々な遺物を包含している。井筒は約1mほど下に堆積。また、最上面は一部SK1に切られるため、少なくともSK1形成以前には廃絶されたとみられる。

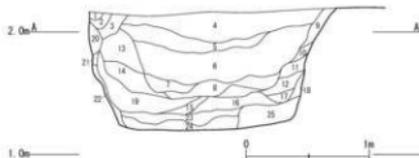
出土遺物 陶磁器には中国産（第76図216～219）・沖縄産（同図220～第77図231）、ほかに沖縄産の陶質土器（第77図232～234）や器種不明の瓦質土器（同図235）が出土している。年代は近世で、近代の日本産陶磁器は最上面を除いて認められない。陶磁器以外には簪（第77図236）や寛永銭（同図237）といった金属製品が出土している。



第74図 エブロン地区SE3平面図(S=1/40)



図版53 エブロン地区SE3完掘状況（北から）



第75図 エブロン地区SE3北壁断面図(S=1/40)



図版54 エブロン地区SE3半截状況（南から）

表 53 エブロン地区 SE3 出土遺物集計表

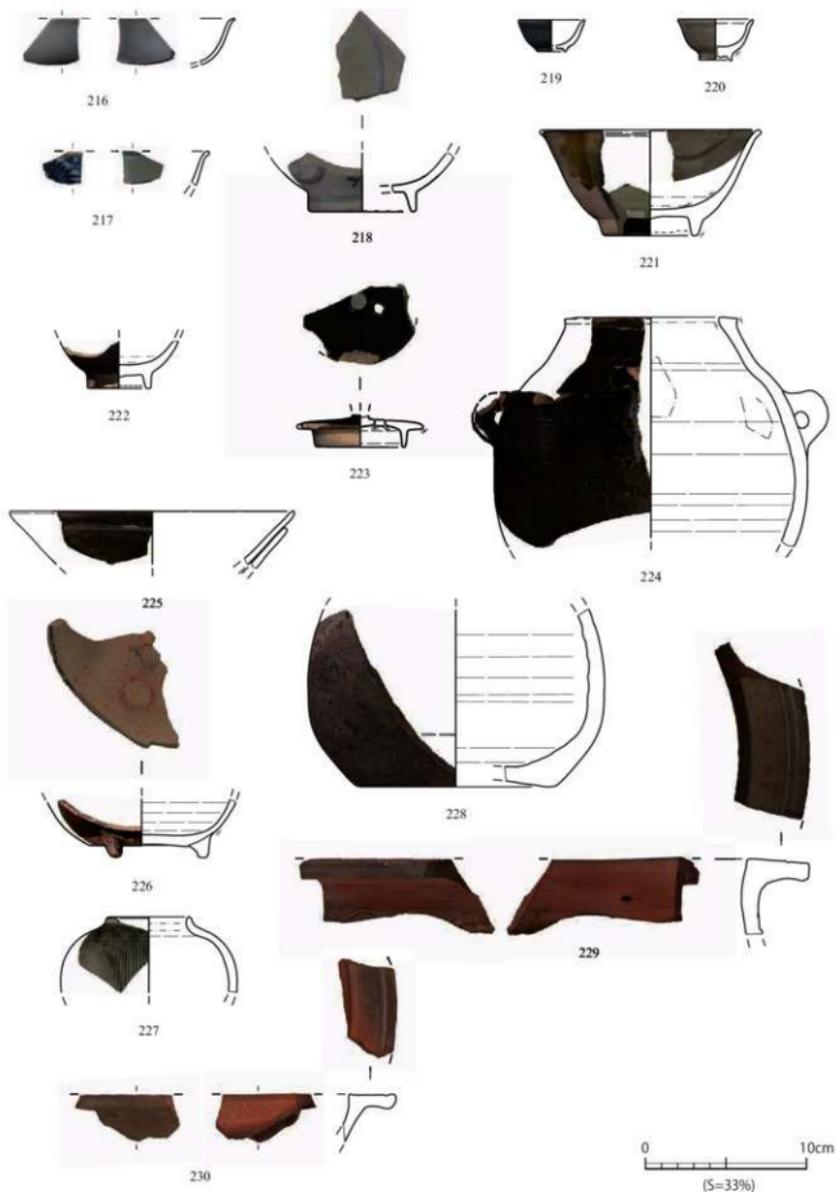
地区	遺構	グリッド	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産地物陶器	沖縄産磨物陶器	陶質土器	瓦質土器	石遺物	石材	金属製品	木材	肉類状製品	ガラス製品	瓦	貝類
エブロン	SE3	ね100	20	2	189	73	160	2	6	29	3	8	3	1	11	319
地区	遺構	グリッド	動物遺存体	不明	合計											
エブロン	SE3	ね100	45	3	873											

表 54 エブロン地区 SE3 土層観察表

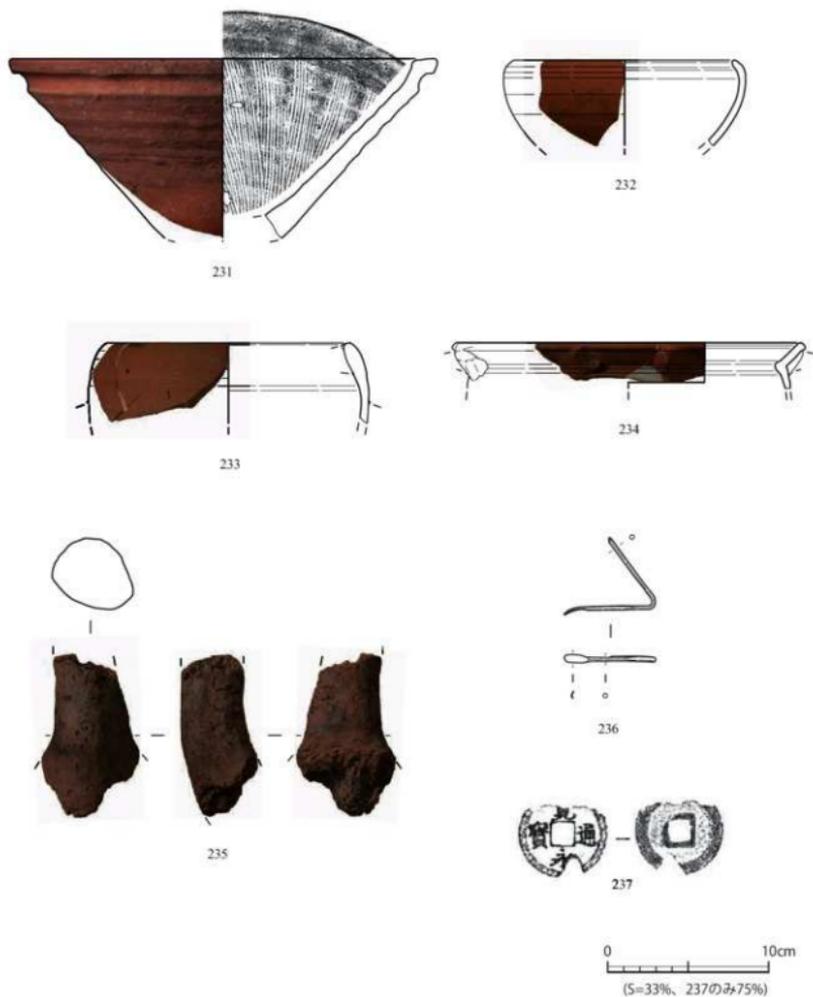
遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備 考
エブロン地区 SE3	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	SK1埋土。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	土質は1層と同じ。ただしサンゴ礫が密に混じる。
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	1層と同質。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	赤色小ブロック・貝片多く混じる。沖無等を多く含む。
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや弱	土質は4層同様だが、4層に比してしまりはやや弱く、赤色小ブロックも少ない。
	6	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	有	有	貝片まばらに混ざる。遺物量は少。
	7	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	強	弱	炭・赤土ブロック混じる。
	8	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	強	弱	7層とほぼ同質だが、炭は含まず赤土ブロックは多。
	9	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	貝片・サンゴ片まばらに含む。
	10	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	有	弱	
	11	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	富	弱	10層とほぼ同質だが、粘性に富み、赤色ブロックが多く混じる。
	12	2.5Y4/6	オリーブ褐色	砂	富	弱	やや粗砂層。赤土ブロック密。沖無等を含む。
	13	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	有	貝片まばら。近代磁器等まばら。
	14	2.5Y5/4	黄褐色	砂	やや有	弱	赤土小ブロックまばらに含む。
	15	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	富	弱	赤色小ブロック含む。
	16	2.5Y5/3	黄褐色	砂	有	弱	赤色小ブロック・小貝片含む。
	17	2.5Y5/3	黄褐色	砂	富	やや有	赤土ブロック・小貝片・礫・沖無等含む。
	18	2.5Y4/1	黄灰色	砂			11と17層の混層。
	19	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	弱	やや有	赤土小ブロックを多く含む。沖無等含む。
	20	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	有	貝片・サンゴ片多量に混じる。陶質土器含む。
	21	2.5Y5/4	黄褐色	砂	弱	弱	
	22	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂	弱	弱	貝片・サンゴ片混じる。
	23	2.5Y4/1	黄灰色	砂	有	弱	貝片・礫片・赤土ブロック多く混じる。沖無・ガラス片等多く含む。
	24	2.5Y4/1	黄灰色	砂	有	弱	23層とほぼ同質だが、混入物を含まない。沖無等まばらに含む。
	25	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	弱	貝小片(タニシ等も含)混じる。



図版 55 エブロン地区 SE3 井筒石材 (S=10%)



第76図 エブロン地区 SE3 出土遺物 1



第 77 図 エブロン地区 SE3 出土遺物 2



図版 56 エブロン地区 SE3 出土遺物 (左: S = 50%、右: S = 75%)

表 55 エブロン地区 SE3 出土遺物観察表 1 (陶磁器)

陶磁器 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量 (mm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	裝飾事項		印・銘	産地 年代	備考	
										胎土	その他				
第7600 216	E1108 SE3	中国産 陶磁器	皿	白磁	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	5.06	口縁部を軸 削ぎ	白色 磨面	外:透明 内:透明	なし	-	徳化 19c	-	
第7600 217	E1108 SE3	中国産 陶磁器	碗	青花 磁器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	2.30		灰白色磁 器	外:透明 内:透明	外:花唐草 文	-	基徳新 18c~19 c	-	
第7600 218	E1108 SE3	中国産 陶磁器	碗	青花 磁器	底部	口径:- 器高:- 底径:-6.6	23.79	葉付に軸 削ぎ	白色 磨面	外:灰白色 内:灰白色	外:丸文字 折杖文	-	徳化 18c	-	
第7600 219	E1108 SE3	中国産 陶磁器	杯	磁器	口~底	口径:-4.0 器高:-1.95 底径:-1.8	6.95	口唇部を軸 削ぎ	灰白色 磨 面	外:瑠璃釉 内:瑠璃釉	なし	-	徳化 18c~19c	-	
第7600 220	E1108 SE3	沖縄産 陶器	杯	沖縄産 無釉陶 器	口~底	口径:-4.6 器高:-2.5 底径:-2.0	9.83	なし	灰白色/黒 色	内外:透明	なし	-	-	-	
第7600 221	E1108 SE3	沖縄産 陶器	碗	沖縄産 無釉陶 器	口~底	口径:-13.4 器高:-6.5 底径:-5.8	113.29 (復元込 み)	夏込粉の 目・器付ア ラミツナ	灰白色/黒 色	内外:透明	口縁縁部釉	-	-	-	-
第7600 222	E1108 SE3	沖縄産 陶器	小碗	沖縄産 無釉陶 器	胴~底	口径:- 器高:- 底径:-3.9	26.31	夏込粉の 目・器付ア ラミツナ	灰・黄灰色 /軟質	内:透明 外:鉄釉	なし	-	-	-	
第7600 223	E1108 SE3	沖縄産 陶器	蓋	沖縄産 無釉陶 器	胴~弁	記測器径:- 7.4 押測器径:- 5.5 器高:- 底径:-	24.11	なし	灰・黄灰色 /粗粒	黒釉	なし	-	-	-	
第7600 224	E1108 SE3	沖縄産 陶器	油壺	沖縄産 無釉陶 器	口~胴	口径:-10.5 器高:- 底径:-	218.04	なし	淡褐色/軟 質	内外:褐色	なし	-	-	-	
第7600 225	E1108 SE3	沖縄産 陶器	鉢	沖縄産 無釉陶 器	口縁部	口径:-17.3 器高:- 底径:-	24.91	なし	灰色/粗粒	内外:灰釉	なし	-	-	外面に空胴 体が見える	
第7600 226	E1108 SE3	沖縄産 陶器	急須	沖縄産 無釉陶 器	底部	口径:- 器高:-6.0	41.18	内底重地 底-器付ア ラミ	黄灰色/粗 粒	外:褐色	なし	-	-	有脚?	
第7600 227	E1108 SE3	沖縄産 陶器	急須	沖縄産 無釉陶 器	口~胴	口径:-15.2 器高:- 底径:-	21.86	なし	灰色/軟質	内:白化粧 外:白化粧 →透明	外:土器子 文・縦文及 線文	-	-	-	
第7600 228	E1108 SE3	沖縄産 陶器	蓋	沖縄産 無釉陶 器	胴~弁	口径:-18.0 器高:-12.0	177.98	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	巻貝痕圧あ り	
第7600 229	E1108 SE3	沖縄産 陶器	壺	沖縄産 無釉陶 器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	142.91	なし	赤褐色	なし	外底波形 線・口唇二 重線	-	-	-	
第7600 230	E1108 SE3	沖縄産 陶器	鉢	沖縄産 無釉陶 器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	32.96	なし	赤褐色	なし	口唇縁線	-	-	-	
第7700 231	E1108 SE3	沖縄産 陶器	插鉢	沖縄産 無釉陶 器	口縁部	口径:-26.0 器高:- 底径:-	388.50	なし	暗赤褐色	なし	なし	なし	沖縄	巻貝痕圧あ り	
第7700 232	E1108 SE3	陶質 土器	鉢	沖縄産 陶質土 器	口縁部	口径:-13.4 器高:- 底径:-	20.30	なし	明赤褐色/ 粗雲母混	なし	外面:環線	-	沖縄	-	
第7700 233	E1108 SE3	陶質 土器	火が 大取	沖縄産 陶質土 器	口縁部	口径:-14.8 器高:- 底径:-	37.88	なし	赤褐色黒 白混	なし	外面:環線	施文線刻	なし	沖縄	不明圧痕あ り
第7700 234	E1108 SE3	陶質 土器	満	沖縄産 陶質土 器	肥子	口径:-21.4 (推定) 器高:- 底径:-	28.10	なし	明赤褐色	なし	なし	-	沖縄	-	
第7700 235	E1108 SE3	瓦質 土器	不明		口径:- 器高:- 底径:-	171.73	ミダキ、多 面体	褐色	なし	なし	なし	なし	南田?	イボ痕圧痕 あり	

表 56 エブロン地区 SE3 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)

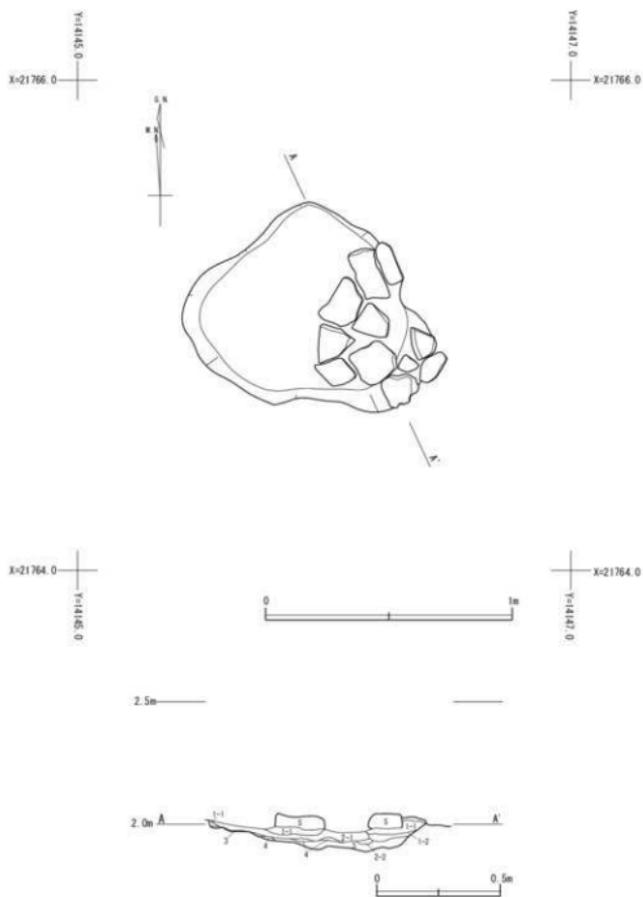
陶磁器 番号	出土 地点	種類	器種器形	状態	法量 (mm)	重量 (g)	素材	部位	観察事項				備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・銘		その他
第7700 236	E1108 SE3	金属 製品	簪	完形(変形)	最大長:55.0 最大幅:54.0 最大厚:5.0	3.6	銅	-	なし、鍛造	なし	なし	なし	基徳新面 六角形	男性用副 簪(押差)
第7700 237	E1108 SE3	金属 製品	鏡筒	一部欠損	最大長:23.5 最大厚:1.0	2.3	銅	-	なし	なし	なし	「寛永 通宝」	なし	寛永通宝

【SL1】

構造 略円形。上部は平板状の細粒砂岩が敷かれ集石をなす。これら石と石の間や石の下には、平面形が方形となる黒色の砂層が堆積する。

覆土 集石の下には黒色の砂層が、断面すり鉢状に堆積。集石付着炭化物及び黒色砂層中の炭化物から理化学年代が約 200 年前の前後という測定値が得られたことにより、近世・近代の遺構であることが分かった。

出土遺物 なし。



第 78 図 エブロン地区 SL1 平面図・断面図 (S=1/20)



図版 57 エブロン地区 SL1 検出状況（南から）



図版 58 SL1 半截状況（西から）

表 57 エブロン地区 SL1 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エブロン地区 SL1	1-1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粘質土	強	強	琉球石灰岩小礫(φ1.0mm)、赤土ブロック混じる。2層も混じる。
	1-2	2.5Y5/2	暗灰黄色	土			1-1層と2層の混土層。白磁・土器片・陶質土器?あり。
	2-1	2.5Y3/2	黒褐色	土	やや強	有	炭・焼土・被熱小骨片・貝片混じる。
	2-2	—	—	土/砂			2-1層と3層の混土層。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	やや有	やや有	細粒、炭化物ブロック(1mm大)混じる。
4	2.5Y7/1	灰白色	硬化砂	なし		表面硬質。上面は2-1層の土色がうつる。	
5	2.5Y7/3	浅黄色	砂	やや有	やや有	細粒、ニーベ砂混じる。地山か。	

表 58 エブロン地区 SL1 出土遺物集計表

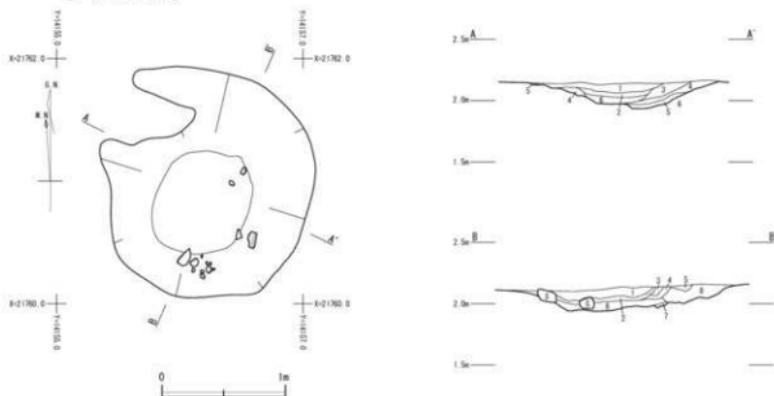
地区	層位	グリッド	外産 陶磁器	沖縄産 陶磁器	沖縄産 無釉陶器	陶質土器	石材	瓦	貝類	合計
エブロン	SL1	ね107	1	1	1	1	2	2	3	13

【SL2】

構造 略円形。ただし炭層は鍵穴状で中央部に向かって断面すり鉢状。

覆土 検出面はII層が堆積、その下は炭と砂層が互層をなして堆積する。最下面はV層の白砂層が検出されたが、中央部は被熱等の影響から硬く締まる。

出土遺物 陶磁器には日本産や瓶（第80図238）をはじめとする沖縄産、ほかに陶質土器がみられる。年代は概ね近代頃が主体。陶磁器以外では石製品やガラス製品、木材などがあるが、金属製品が多くみられた。



第79図 エブロン地区 SL2 平面図・断面図(S=1/40)



図版 59 エブロン地区 SL2 2層 (炭層)
検出状況 (東から)



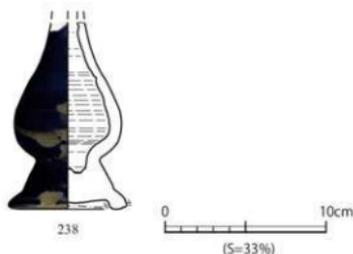
図版 60 エブロン地区 SL2 南西側ベルト断面
(南西から)

表 59 エブロン地区 SL2 土層観察表

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
エブロン地区 SL2	1	10YR5/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	金属片(鉄)が混ざる。	
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	弱	やや有	すじ状の炭が約50%混ざる。	
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	やや有	2層より粘性があり、しまりもない。炭もすじ状に部分的に入るが、約5%。一部、黄褐色砂30%にふい、黄褐色砂と互層状の範囲あり(3-2層)。	
	4	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	有		
	5	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	中	やや有	約1cmのクチャ粒が混ざる。	
	6	2.5Y5/4	黄褐色	砂	中	強		
	7	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	強	部分的に明黄褐色砂質土がブロック状に混じる。	
	8	10YR5/3	にぶい、黄褐色	砂	弱	有	上層の土がしみ出して有色化した層。	
	9	10YR5/4	にぶい、黄褐色	土	弱	有	SL1に関連するPitと考えられる。	
	10	—	—	白砂				
	11	—	—	白砂				硬化した面。

表 60 エブロン地区 SL2 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	本土産 陶磁器	沖縄産 漆器陶器	沖縄産 無釉陶器	陶質土器	石製品	石遺物	石材	金属製品	木材	ガラス 製品	瓦	貝類	合計
エブロン	SL2	ね107	2	6	11	3	1	1	9	14	1	7	10	36	101



第 80 図 エブロン地区 SL2 出土遺物

表 61 エブロン地区 SL2 出土遺物観察表

発掘 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	裝飾			印・銘	産地 年代	備考
										数量	文様	その他			
第80図 238	ね107 SL2	沖縄産 陶器	瓶	沖縄産 漆器陶器 部	胴~底	11径- 22高- 底径-7.2	202.00	底部にアル ミナ付着	灰-黄灰色 /硬質	内:黄褐色 外:オリーブ 色	なし	-	-	-	-

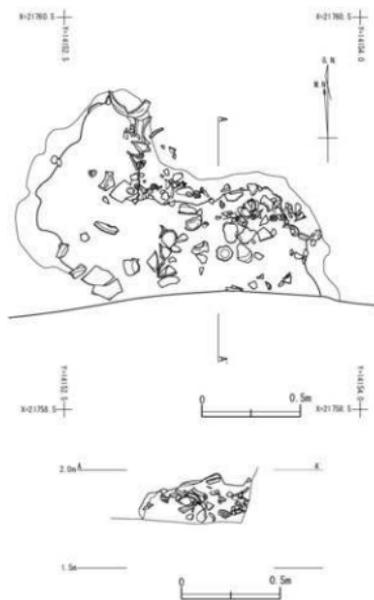
【SK1】

構造 平面は不定形だが、断面は略方形。

覆土 覆土はⅡ層が堆積、その下は遺物が集中し、その隙間をⅣ-1層の砂層が埋める。以上の状況からは、当時遺物が露出した状態だったとみられる。

出土遺物 陶磁器には中国産(第82図239～241)、日本産(同図242)、沖縄産(同図243～第83図258)がみられ、ほかに陶質土器(第84図259～266)がみられる。年代は近代が主体である。これらの陶磁器は破片の状態が多量に出土したが、接合によって完形もしくは一部欠損の状態まで復元できた資料も多い。陶磁器以外には土製品(第84図267)、近代瓦(第85図268)、中国産青花磁器を素材とする円盤状製品(同図269)、銭貨には寛永通宝(同図270)、石製品に軽石製砥石(同図271)、貝製品の可能性のある資料(図版62)などがみられる。ほかに貝・骨などの食糧残渣やそれに寄生した陸棲貝も多数確認される。

備考 出土遺物とその接合状況から、廃棄土坑と理解される。



第81図 エブロン地区SK1平面図・断面図(S=1/25)



検出状況(北から)

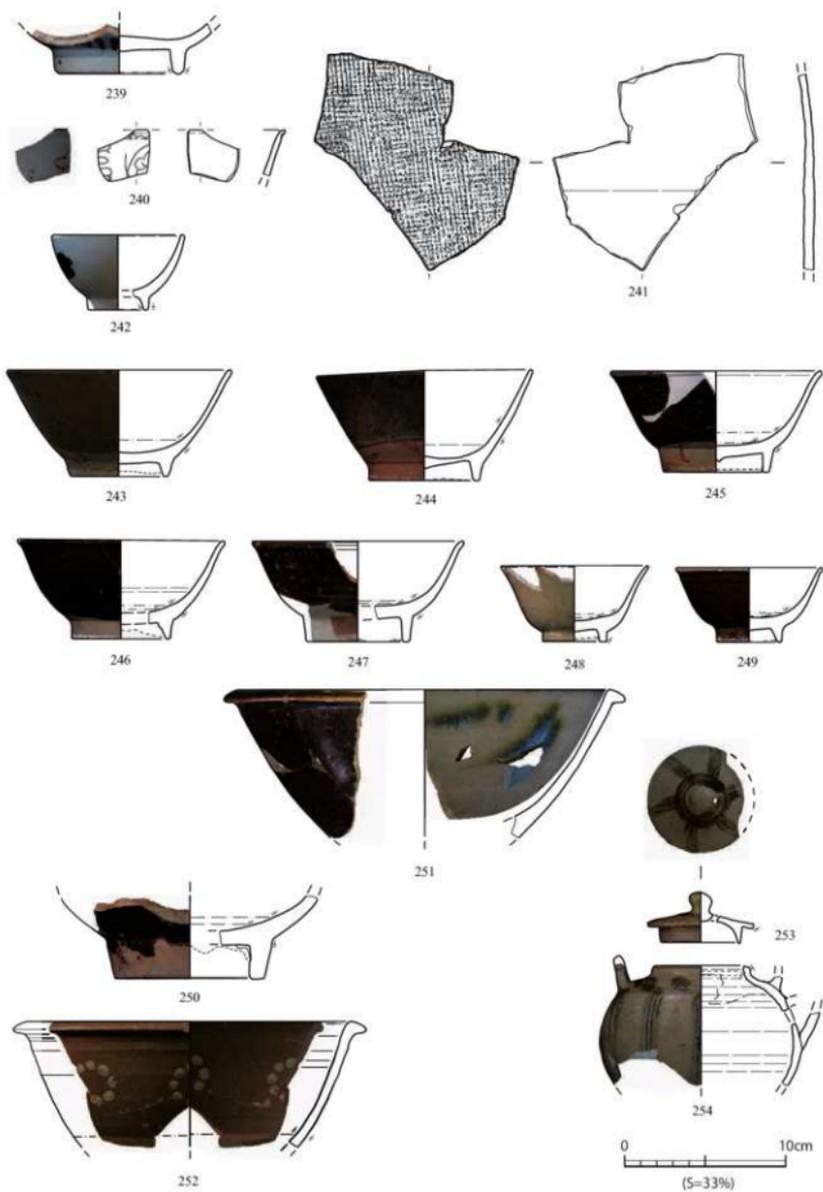


半載状況(西から)

図版 61 エブロン地区SK1遺物検出・半載状況

表 62 エブロン地区SK1出土遺物集計表

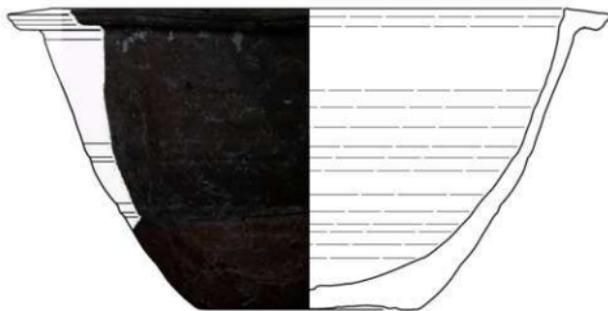
地区	遺構	グリッド	グスク土器	外産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産陶磁器	沖縄産陶磁器	陶質土器	瓦質土器	石製品	石材	金属製品	木材	円盤状製品	ガラス製品	土製品
エブロン	SK1	ね107		3	6	52	45	145	7		1					1
		ね108	1	15	2	194	80	711	10	1	16	5	1	2	3	1
		合計	1	18	8	246	125	876	17	1	17	5	1	2	4	1
地区	遺構	グリッド	漆喰	瓦	煉瓦	セルロイド・プラスチック製品	貝類	動物遺存体	不明	合計						
エブロン	SK1	ね107	2	17	8		28	28	1	340						
		ね108		10			695	75		1540						
		合計	2	27	8	1	723	103	1	2193						



第 82 図 エブロン地区 SK1 出土遺物 1



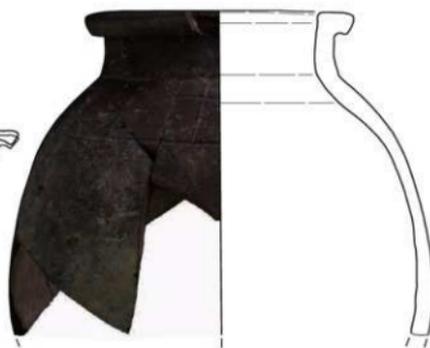
255



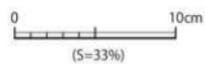
257



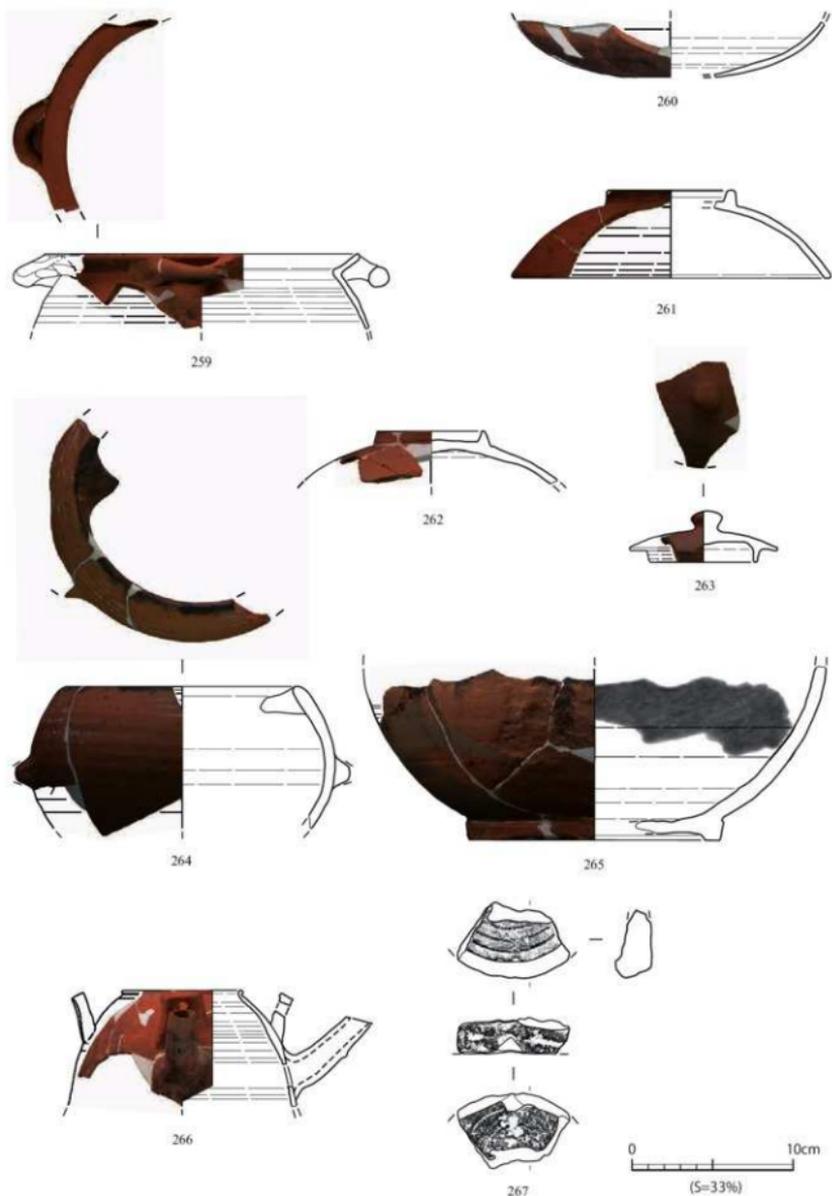
256



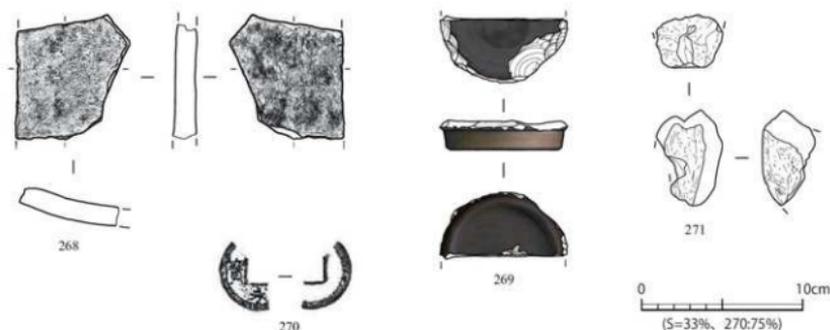
258



第 83 図 エブロン地区 SK1 出土遺物 2



第84図 エブロン地区SK1出土遺物3



第85図 エブロン地区SK1出土遺物4



図版62 エブロン地区SK1出土遺物 (S=30%。銭貨：S=75%)

表63 エブロン地区SK1出土遺物観察表1 (陶磁器)

採集番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	寸法(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	裝飾			印・銘	産地年代	備考
										輪畫	文様	その他			
第82回 239	E108 SK1	中国産 陶磁器	碗	青花 磁器	底面	口径:- 器高:- 底径:- 7.8	142.96	雲付金輪割 き	白色 磁器	外:青白色 内:青白色	内底:点文	-	-	徳化 18c	-
第82回 240	E108 SK1	中国産 陶磁器	碗	色絵 磁器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	5.82	-	白色 磁器	透明、両面	外:赤で草 花文	-	-	徳化 18c~19c	-
第82回 241	E108 SK1	中国産 陶磁器	盃	施釉 磁器 (印き目)	胴部	口径:- 器高:- 底径:-	99.62	格子状の 印き	にぶい茶褐色 白色釉舎 け	褐色、外面 色のみ	なし	-	-	不明	-
第82回 242	E107 SK1	日本産 陶磁器	碗	近代 磁器	口~底	口径:8.1 器高:4.6 底径:3.6	21.22	雲付輪割割 き	白色磁器、 光沢有り	内外:透明 釉	外:草花文	-	-	瀬・美 近代	-
第82回 243	E108 SK1	沖縄産 陶磁器	碗	沖縄産 施釉陶 器	口~底	口径:13.7 器高:6.5 底径:6.0	173.51	耳立蓋印・ 返し縁付・ 雲付アムヒ ナ	灰色/硬質	内外:灰釉	なし	-	-	-	-

表 64 エブロン地区 SK1 出土遺物観察表 2 (陶磁器)

掲載 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	寸法 (cm)	重量 (g)	形状・装飾	胎土	裝飾			印・銘	産地 年代	備考	
										釉薬	文様	その他				
第82回 244	J108 SK1	沖縄産 陶器	碗	沖縄産 無釉陶器	口～底	口径:13.2 器高:6.9 底径:6.8	121.32	器付にアルミナ	灰・赤褐色	内外・鉄釉 (底面黒胎)	なし	-	-	-	-	
第82回 245	J108 SK1	沖縄産 陶器	碗	沖縄産 無釉陶器	口～底	口径:12.85 器高:6.2 底径:6.5	185.26	見込杯の 目状釉割 き・器付ア ルミナ・底 面黒胎	灰色/黒密	内外・透明 鉄・鉄釉	なし	-	-	-	-	
第82回 246	J108 SK1	沖縄産 陶器	碗	沖縄産 無釉陶器	口～底	口径:12.6 器高:6.9 底径:6.9	199.49	器付アルミ ナ・見込杯 の目状釉 割き・底面 黒胎	灰白色	内外・黒釉	なし	-	-	-	-	
第82回 247	J108 SK1	沖縄産 陶器	碗	沖縄産 無釉陶器	口～底	口径:12.9 器高:6.2 底径:6.6	60.69 (復元込 26)	見込杯の 目・器付ア ルミナ	灰・緑黄灰 色/粗粒	内外・黒釉	なし	-	-	-	高台内面に 粘土地付着	
第82回 248	J107 SK1	沖縄産 陶器	小碗	沖縄産 無釉陶器	口～底	口径:9.0 器高:4.65 底径:3.9	43.30	見込杯の 目状釉割 き・器付ア ルミナ	灰白色/粗 質	内外・透明 鉄 口唇・鉄釉	なし	-	-	-	-	
第82回 249	J108 SK1	沖縄産 陶器	小碗	沖縄産 無釉陶器	口～底	口径:8.9 器高:4.6 底径:4.0	86.16	器付に器 着有・見込 杯の目状・ 底面黒胎	黄灰色	内外・透明 鉄・鉄釉	なし	-	-	-	-	
第82回 250	J107 SK1	沖縄産 陶器	鉢	沖縄産 無釉陶器	底径	口径:- 器高:- 底径:9.1	267.76	見込杯の 目状釉割 き・底面黒 胎	厚黄白色/ 軟質	内:底面・ 透明 外:黒色	なし	-	-	-	-	
第82回 251	J108 SK1	沖縄産 陶器	鉢	沖縄産 無釉陶器	口縁部	口径:24.4 器高:- 底径:-	161.80	内面に一 層緑釉を 施す	厚黄灰色/ 軟質	内外・透明 鉄・鉄釉	なし	-	-	-	-	
第82回 252	J108 SK1	沖縄産 陶器	鉢	沖縄産 無釉陶器	口縁部	口径:- 器高:21.4 底径:- 底径:-	63.90	復元口径: 21.4 器高:- 底径:-	なし	灰色	内外・鉄釉	内外に花文 (白土)	-	-	-	-
第82回 253	J108 SK1	沖縄産 陶器	急須蓋	沖縄産 無釉陶器	略方形	器高部径:6.5 器高:3.1 器径:1.4	38.81	なし	灰白色/粗 粒	外:透明	表裏(緑釉 無釉)	-	-	-	254とセット	
第82回 254	J107 SK1	沖縄産 陶器	急須	沖縄産 無釉陶器	口～胴	口径:- 器高:- 底径:-	116.63	なし	黄灰色/軟 質	文様部に緑 釉 外:白化粧 透明鉄 釉	×文字・履 位朱線文	-	-	-	253とセット	
第83回 255	J107 SK1	沖縄産 陶器	瓶	沖縄産 無釉陶器	胴～底	口径:- 器高:- 底径:6.4	137.15	輪轆	灰・黄灰色 /軟質	外:緑釉・ 鉄釉・透明 鉄・透明鉄 釉 外底:黒色	-	-	-	-	-	
第83回 256	J107 SK1	沖縄産 陶器	楕鉢	沖縄産 無釉陶器	略方形	口径:24.9 器高:13.2 底径:6.8	1002.04	輪轆	明赤褐色	-	外:白化粧 口縁に黒線	口唇有り	-	-	-	
第83回 257	J108 SK1	沖縄産 陶器	鉢	沖縄産 無釉陶器	口～底	口径:36.6 器高:18.4 底径:13.4	1142.93	外底:繫目 目状	赤褐色/粗 粒	なし	口唇黒線	-	-	-	-	
第83回 258	J108 SK1	沖縄産 陶器	蓋	沖縄産 無釉陶器	口～胴	口径:16.4 器高:- 底径:-	1203.44	輪轆	赤褐色	-	外:黒線	-	蓋印?あり	-	沖縄	
第84回 259	J108 SK1	陶質 土器	罐	沖縄産 陶質土器	口縁部・ 把手	口径:19.0 器高:- 底径:-	43.23	なし	明赤褐色	なし	内外・多条 黒線	-	-	-	沖縄	
第84回 260	J108 SK1	陶質 土器	罐	沖縄産 陶質土器	甲～底	口径:- 器高:- 底径:-	73.33	なし	明赤褐色	なし	なし	-	-	-	外底×ス付 着	
第84回 261	J107 SK1	陶質 土器	蓋	沖縄産 陶質土器	蓋～底	器高:19.4 器高:- 器径:5.4 器径:7.8	55.00	なし	明赤褐色/ 赤黄目含	なし	なし	-	-	-	器底×ス付 着	
第84回 262	J108 SK1	陶質 土器	蓋	沖縄産 陶質土器	蓋～甲	器径:- 器高:- 器径:6.6	96.12	なし	褐色	なし	なし	-	-	-	器の蓋が	
第84回 263	J108 SK1	陶質 土器	蓋	沖縄産 陶質土器	蓋～特	器径:9.0 器径:6.4 器径:3.15 器径:1.9	23.72	器巾あり	褐色×緑 灰色	なし	なし	-	-	-	器底×ス付 着	
第84回 264	J108 SK1	陶質 土器	火取	沖縄産 陶質土器	口～胴	口径:- 器高:- 底径:-	144.34	なし	明赤褐色	なし	外底:白化粧 紅土の黒線	-	-	-	沖縄	
第84回 265	J108 SK1	陶質 土器	火取・ 火取	沖縄産 陶質土器	底径	口径:- 器高:- 底径:15.2	386.94	輪轆	灰褐色	なし	なし	なし	なし	沖縄	胴部×ス付 着・肩圧痕	
第84回 266	J108 SK1	陶質 土器	急須	沖縄産 陶質土器	胴～口 縁	口径:- 器高:- 底径:-	62.33	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-	沖縄	
第84回 267	J108 SK1	土製品	不明	土製品	端部	口径:- 器高:- 底径:-	53.95	胡毛目	赤褐色	なし	上:赤帯	なし	なし	不明	器物に痕あ り	

表 65 エブロン地区 SK1 出土遺物観察表 3（陶磁器以外）

発掘番号	出土地点	種類	器種器形	状態	寸法(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項				備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・銘		その他
第85回 266	E1108 SK1	瓦	近代瓦 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:-12.0	109.25	粘土: 灰褐色	側面	背面 布目肌	なし	なし	なし	なし	-
第85回 269	E1108 SK1	円盤状 製品	輪門形	欠損	外径:- 最大厚:-18.0	58.2	中国産 青花	底面 発行有	打割・汚	-	-	-	-	-
第85回 270	E1108 SK1	金属 製品	鍍金	破片	外径:58.8 最大厚:-1.1	9.7	青銅	-	なし	なし	なし	「水・質」	なし	寛永通宝
第85回 271	E1108 SK1	石製品	磁石	破片	最大長:-58 最大厚:-22 最大幅:-40	19.3	輝石	-	なし	砥面	-	-	-	-

【SK2～5】

構造 平面が隅丸方形で断面は平坦。性格不明。

覆土 III-3層が堆積。

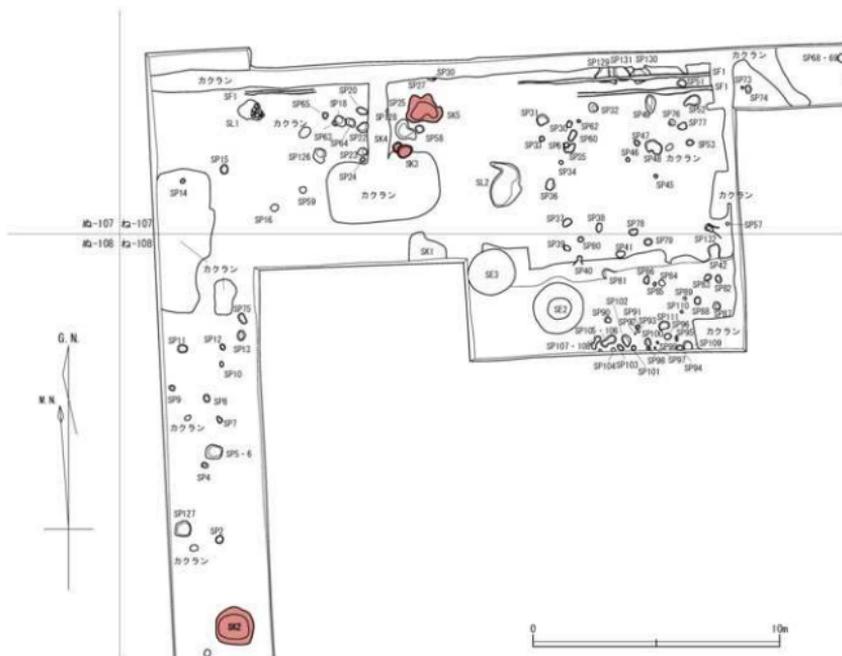
出土遺物

SK2：近代の日本産陶磁器が主体。先史時代の土器も出土。ほかに貝類多数。

SK3：沖縄産施釉陶器と貝類が出土。

SK4：出土遺物なし

SK5：近代の日本産陶磁器主体。



第 86 図 エブロン地区 SK 遺構分布図 (S=1/200)

表 66 エブロン地区 SK2～5 出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	外周産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産陶磁器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	石材	金属製品	瓦	貝類	動物遺存体	不明	合計
エブロン	SK2	ね108	1	2	2	4	5		12		1	311	3	1	342
	SK3	ね107				1						17			18
	SK5	ね107		4	23	2	5	5		3			9		51
	部計		1	6	25	7	10	5	12	3	1	328	12	1	411

【SP 1～15、17～58、60～117、126～133】

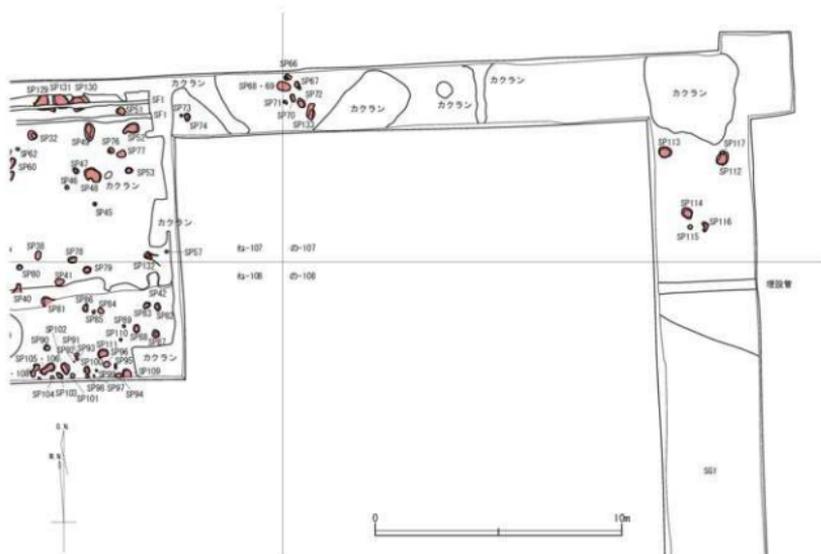
構造 平面・断面形ともに隅丸方形のもの（SP52・63など）と、平面形が略円形で断面がすり鉢状のもの（SP58など）の2種に分けられる。形状からは、前者を礎石抜穴、後者を柱穴と想定するが、明確なプランは確認できない。

覆土 どちらも基本的にはⅢ-3層が中央部に堆積し、側縁部はⅣ・Ⅴ層との混層となっている。ただしSP94、104は覆土が暗褐色砂層で基本層序にない土壌のため、Ⅲ-3層を覆土にもつピットとは年代が異なる可能性がある（SP104）。

出土遺物 SP23から沖縄産施釉陶器（第89図273）、SP81から中国産青花杯（同図272）、SP127からは台石（同図274）がそれぞれ出土している。ただしいずれも覆土はⅢ層のため、戦後の基地造成時に遺構内に埋没した遺物だと理解される。



第 87 図 エブロン地区上層 SP 検出状況（西側）(S=1/200)



第88図 エブロン地区上層 SP 検出状況 (東側) (S=1/200)



SP52 (東から)



SP58 (北東から)



SP63 (北東から)



SP103・104 半截断面 (北から)

図版 63 エブロン地区上層 SP 半截断面

表 67 エブロン地区上層 SP 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産陶磁器	沖縄産陶磁器	陶質土器	石器	石製品	石遺物	石材	金属製品	戸嚢状製品	ガラス製品	瓦	
エブロン	SP1	の107				1	1										
	SP2	ね108			1												
	SP5-6	ね108				2							2				
	SP18	ね107				2											
	SP23	ね107															
	SP24	ね107		1				1									
	SP27	ね107						1									
	SP58	ね107						1									
	SP60	ね107						1								6	
	SP64	ね107				2			1								
	SP81	ね108			1												
	SP112	の107					4										
	SP114	の107							1								
	SP117	の107					1						1			1	
SP126	ね107		2			1					1	4					
SP127	ね108		1						1								
SP128	ね107					1							2				
SP132	ね107				1	4											
SP134	ね107					1	2			1						4	
合計			4	2	4	17	6	3	1	2	4	1	4	1	6	4	
地区	遺構	グリッド	貝類	動物遺存体	合計												
エブロン	SP1	の107	14		14												
	SP2	ね108	27		27												
	SP5-6	ね108	32		32												
	SP18	ね107	3	4	11												
	SP23	ね107			3												
	SP24	ね107			2												
	SP27	ね107			1												
	SP58	ね107	1	1	9												
	SP60	ね107	1		2												
	SP64	ね107	5		8												
	SP81	ね108			4												
	SP112	の107			1												
	SP114	の107			1												
	SP117	の107			3												
SP126	ね107	4	3	15													
SP127	ね108	32		34													
SP128	ね107	10	3	16													
SP132	ね107	7		12													
SP134	ね107	1		9													
合計			137	11	207												

表 68 エブロン地区上層 SP 土層観察表 1

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備	考
エブロン地区 SP2	1	2.5Y7/3	浅黄色	砂	なし	弱	サンゴを含む。遺物なし。	
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	弱	1層より砂を多く含む。サンゴを含む。遺物なし。	
	3	2.5Y7/2	灰黄色	海砂	なし	なし	貝やサンゴを多く含む。1-2層の貝やサンゴ±この層のものと思われる。	
エブロン地区 SP18-SF1	1	2.5Y7/4	浅黄色	粗砂	弱	弱		
	2	10YR3/4	褐色	砂	弱	弱		
	3	10YR3/4	暗褐色	砂	有	有	SP126-1層と同じ。	
	4	10YR/4	褐色	砂	やや有	やや有	6層の砂が小ブロック状に含む。	
	5	10YR/3	にぶい黄褐色	砂	有	有	貝片や粗砂混じる。	
	6	2.5Y8/4	淡黄色	粗砂	弱	やや有	SP126-12層と同じ。地山か？	
エブロン地区 SP20	7	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	有	有	5層と同質だが混入物少。	
	8	2.5Y7/3	浅黄色	砂	やや有	弱	SP126-13層と同じ。	
エブロン地区 SP22	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	中	有	粘性のある土が小さなブロック状に入る。礫石散在か？	
	2	10YR3/1	黒褐色	土	中	有	にぶい、黄褐色砂質土(10YR4/3)が混ざる層。	
エブロン地区 SP23	1	10YR6/4	にぶい黄褐色	粗砂	弱	有	小貝片・サンゴ片多く含む。	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	強	炭化物片1点有。	
	3	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	1層と同色だが混入物なし。	
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有		
	5	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有		
	6	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有		
	7	10YR4/4	褐色	砂	弱	やや有		
	8	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	5層と同じ。	
	9	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	6層と同じ。	
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有		
	11	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	貝片や粗砂が混じる。	

表 69 エブロン地区上層 SP 土層観察表 2

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エブロン地区 SP27	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	礎石抜次の埋土か?
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR5/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	1層よりも若干粘性があり、しまりがない。 2・3層は現在の検出面(大塚村の面より下)の層のPEIか?
エブロン地区 SP31	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	中	有	褐色土(10YR4/4)が混ざる。約20cmの炭のしみが広がる(地面の割れにしみこんでいつている様子)。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	
エブロン地区 SP32	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	黒く焼けた小石が40%程度。その他にはサンゴ・小石が混ざる。
	2	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	やや有	焼けた木片がある。
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
エブロン地区 SP35	1	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂	なし	やや有	サンゴが混ざる。他の層に比べ砂粒が大きい。
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	弱	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	焼土粒が1%未満含まれる。
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	炭粒が1%未満含まれる。
	5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	このSP35より5cm下の焼土片が出土。
エブロン地区 SP36	1	10YR4/4	褐色	砂	弱	弱	2cm大の炭塊を含む。
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	約1%の炭片を含む。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	4	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
エブロン地区 SP38	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	植栽痕か?
エブロン地区 SP39	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
エブロン地区 SP41	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	有	二枚貝が約1%混ざる。
エブロン地区 SP42	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	1層より砂粒が細かい。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	砂粒が1層よりも粗い。
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	3層と似ているが、この層の方が少し砂粒が細かい。
	5	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	6	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	なし	
エブロン地区 SP48	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	土	弱	有	
	2	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	枝サンゴが50%程度含まれる。
	3	—	—	砂	弱	有	サンゴが圧を受け固くなった層。このSPの床面と考えられる。
エブロン地区 SP49	1	2.5Y3/2	黒褐色	砂	弱	有	貝片や赤色化した小石が混ざる。
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	二枚貝が混ざる。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	小石やサンゴが約3%混ざる。
エブロン地区 SP51	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	二枚貝が混ざる。
	2	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	3	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	
	4	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂	弱	なし	サンゴ混ざる。
	5	10YR7/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	砂粒が細かい。
エブロン地区 SP52	1	10YR3/3	暗褐色	砂	中	やや有	砂層であるが土感がある。2~4層から成るSPを切る。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	3	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	2層より砂粒が粗い。
	4	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	なし	やや有	3層より砂粒が粗い。
エブロン地区 SP54・SP1	1	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	SP1の埋土。
	2	10YR4/6	褐色	砂	弱	有	SP54の埋土。1層よりも粘性があり、しまりもある。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	なし	SP54の埋土。SP54をSP1が切る。
エブロン地区 SP57	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	有	貝片等混じる。
エブロン地区 SP58	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	弱	有	径较大(≧φ1.0mm)地山か。
エブロン地区 SP60	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	2	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	良	このSPの土は他のところに比べるとしまりは良い。
エブロン地区 SP61	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	なし	有	貝片。
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂	なし	やや有	SP35-1
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	SP35-5
エブロン地区 SP62	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
エブロン地区 SP63	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	中	有	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	

表 70 エブロン地区上層 SP 土層観察表 3

通称名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備 考
エブロン地区 SP65	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	
エブロン地区 SP66	1	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
エブロン地区 SP67	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	1層より砂粒が粗い。
	3	2.5YR6/3	にぶい褐色	砂	弱	やや有	
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
エブロン地区 SP68・69	1	10YR6/3	灰黄褐色	砂	有	有	SP68の埋土。 SP69の埋土。
	2	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	サンゴ礁が混ざる。
エブロン地区 SP70	1	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	2	10YR7/2	にぶい黄褐色	砂	なし	やや有	
	3	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂	中	やや有	
エブロン地区 SP71	1	10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	有	植栽痕。
エブロン地区 SP72	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	植栽痕もしくはしみ。
エブロン地区 SP73	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	弱	なし	
	2	2.5Y6/2	灰黄色	砂	弱	やや有	
エブロン地区 SP73・74・ SP128(東西軸)	1	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	1%未満の炭粒を含む、SP73の埋土。
	2	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10YR4/4	褐色	砂	弱	有	
	4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	2~4層はSP74の埋土。
	5	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	6	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
エブロン地区 SP74	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	弱	弱	微小貝片が混じる。 1層よりさらに弱。
	2	2.5Y5/3	黄褐色	砂	弱	有	1・2層よりは強、1・2層に比してやや粒子が粗い。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	
エブロン地区 SP79	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	弱	
エブロン地区 SP80	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	なし	二枚貝が混ざる。
	2	10YR6/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
エブロン地区 SP85	1	2.5Y5/4	黄褐色	砂	有	弱	別録のみ暗オリーブ褐色。根痕か。 SP86の4層と同じ。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	
エブロン地区 SP86	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	やや弱	弱	やや粗粒、3と5の混層。
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	1と4の混層。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	地山か。
	4	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	貝・サンゴ片産に混じる。地山か。
	5	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	弱	2つの植栽痕か。
エブロン地区 SP94	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	植栽痕か。
エブロン地区 SP95	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	有	弱	植栽痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エブロン地区 SP103	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	有	弱	貝小片まばらに含む。根痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
	3	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	弱	有	SP86の5層と同じ。
エブロン地区 SP104	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	やや強	やや有	ビット。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エブロン地区 SP109	1	10YR5/2	灰黄褐色	砂	有	弱	にぶい黄褐色やオリーブ褐色砂が混じる。 植栽痕か。
	2	2.5Y7/3	浅黄色	砂	有	弱	
	1	2.5Y5/3	黄褐色	砂	有	弱	SP86の4層と同じ。
エブロン地区 SP115	1	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	弱	
	2	2.5Y6/3	にぶい黄色	砂	有	弱	
エブロン地区 SP126	1	10YR3/4	暗褐色	砂	やや有	有	赤土小ブロックまばらに含む。粗砂多量に 混ざる。
	2	10YR3/4	暗褐色	砂	やや有	有	1層とはほぼ同じだが、赤土小ブロックが混 ざらない。
	3	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	やや有	有	赤土小ブロック混じる。
	4	—	—	砂	—	—	3と5の混層。
	5	2.5Y7/3	浅黄色	砂	弱	弱	
	6	2.5Y7/4	浅黄色	砂	弱	弱	
	7	10YR4/4	褐色	砂	有	弱	
	8	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂	有	弱	粘土小ブロック混じる。1~8層ビット覆土。 貝片多量に混じる。地山か。
	9	2.5YR/3	淡黄色	砂	弱	弱	
	10	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	強	礫石抜穴覆土。
	12	2.5YR/4	淡黄色	粗砂	弱	有	地山か。
	13	2.5Y7/3	浅黄色	砂	やや有	弱	細砂。地山か。
	エブロン地区 SP127	1	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂	弱	やや有
2		10YR7/2	にぶい黄褐色	砂	弱	有	貝やサンゴがほとんど混ざらない。この層 からガス(?)と貝片が出た。
3		10YR6/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	

表 71 エブロン地区上層 SP 土層観察表 4

遺構名	層序	記号	土色	土質	粘性	しまり	備考
エブロン地区 SP128	1	10VR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	2	10VR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	3	10VR5/2	灰黄褐色	砂	弱	有	
	4	10VR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	5	10VR4/1	褐色	砂	中	やや有	
	6	10VR5/1	褐色	砂	中	有	炭片が混ざる。北へ行くにつれ白っぽくなる。
	7	10VR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	8	—	—	白砂	—	—	地山、V層。
エブロン地区 SP129	1	10VR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	礫石抜け穴か？
	2	10VR4/4	褐色	砂	弱	有	1層よりサンゴ礫が混ざらない。
エブロン地区 SP130	1	10VR4/4	褐色	砂	弱	やや有	二枚貝が5%程度混ざる。
	2	10VR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	3	10VR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	2層よりしまりは少しなく、貝片や小石が多く混ざる。
エブロン地区 SP131	1	10VR4/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
	2	10VR4/4	褐色	砂	弱	やや有	1層より粘性はある。
	3	10VR6/3	にぶい黄褐色	砂	弱	有	
	4	10VR6/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	
エブロン地区 SP132	1	10VR5/4	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	礫石抜け穴に堆積した土と考えられる。
	2	10VR5/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	貝片が混ざる。
エブロン地区 SP133	1	10VR6/3	にぶい黄褐色	砂	弱	やや有	黄褐色土がブロック状に1%未満混ざる。
	3	10VR6/2	灰黄褐色	砂	弱	やや有	植物の根がある。
	4	10VR6/2	灰黄褐色	砂	弱	有	3層よりしまりがあり、砂粒が粗い。
	4	10VR6/2	灰黄褐色	砂	弱	有	



第 89 図 エブロン地区 SP 覆土内出土遺物



図版 64 エブロン地区 SP 覆土内出土遺物 (S=33%)

表 72 エブロン地区上層 SP 出土遺物観察表 1 (陶磁器)

掲載番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量(cm)	重量(g)	成形・調整	胎土	装飾			印・銘	産地年代	備考
										輪筆	文様	その他			
第950図 272	E1108 SP81	中国産 陶磁器	杯	青花 磁器	口縁部	口径:1.6 器高:-- 底径:--	3.34	--	白色 釉面	透明、陶面	外:梵字文	--	--	徳化 18c~19c	--
第950図 273	E1107 SP23	沖縄産 陶器	急須蓋	沖縄産 黒刺陶器	冠~持	冠部径:-- 持取部径:-- 器高:-- 軸径:--	26.21	なし	灰色/網目	外:縁軸	外縁位吹線 文	--	--	--	黒破損

表 73 エブロン地区上層 SP 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)

掲載番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項				備考	
									加工痕	使用痕	文様	印・銘		その他
第950図 274	E1108 SP127	石器	台石	破片	最大長:197 最大厚:80 最大幅:115.5	2490.5	緑砂砂岩	--	なし	敲打・研磨	--	--	--	--

【SF1】

構造 東西方向に轍1対が直行する。間隔は約0.8m。
断面はすり鉢状。またその南側には筋状に細い堆積も残る。

覆土 Ⅲ層が堆積するが、SP131覆土を切っており、上層のSK・SPより新しい遺構であることが分かる。

出土遺物 特に無し



検出状況(東から)

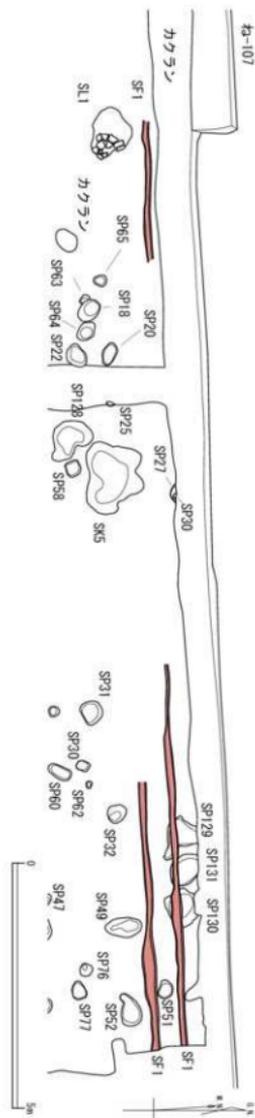


SF1断面(東から)



SP131・SF1切り合い関係(西から)

図版 65 エブロン地区SF1検出・断面状況



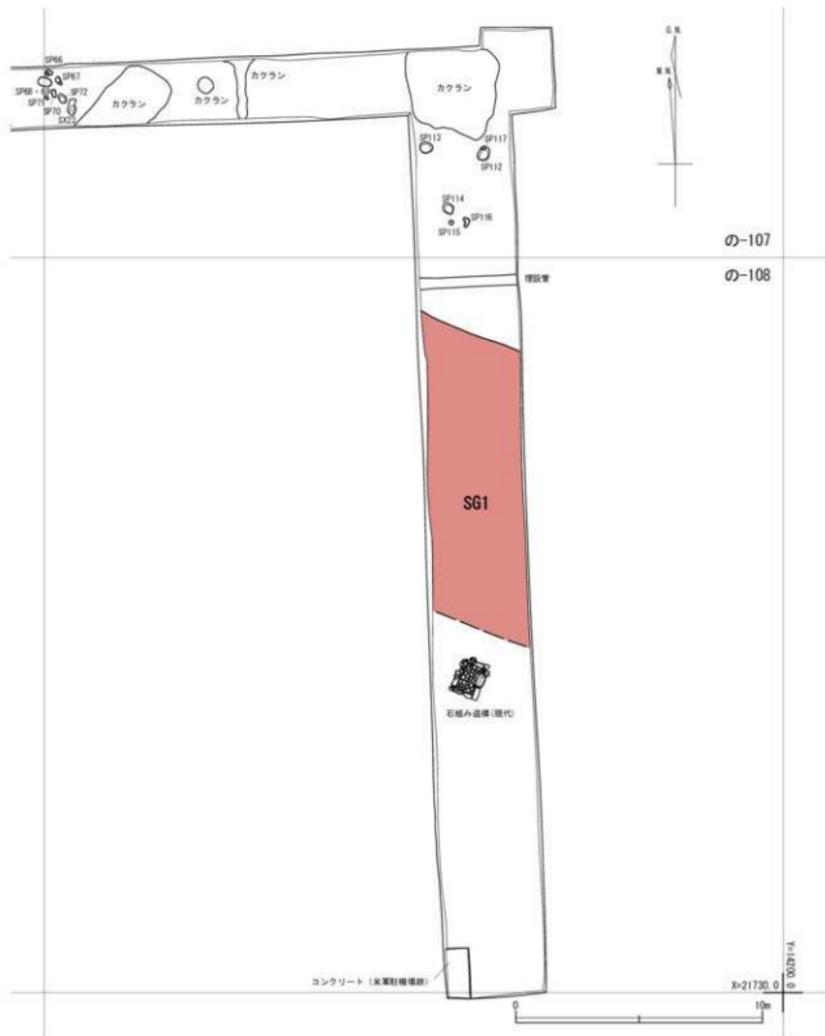
第90図 エブロン地区SF1平面図
(S=1/100)

【SG1】

構造 平面形は不明。断面はすり鉢状。

覆土 ほぼⅠ・Ⅱ層が堆積するが、下層はⅣ層と灰色に変色したとみられるⅣ層がラミナ状に堆積し、互層をなす。

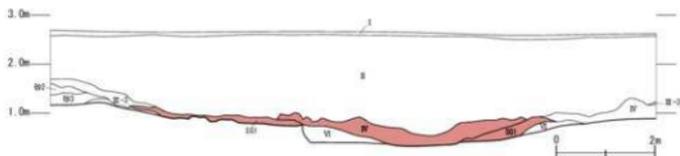
出土遺物 約200点を超える遺物が出土しており、特に下層から出土した資料は残存状態の良い資料が多い。陶磁器には中国産・日本産（第93図275・276）・沖縄産（同図277～288）及び陶



第91図 エブロン地区SG1平面図 (S=1/200)

質土器（同図 289）・瓦質土器（第 94 図 290～292）が出土している。

陶磁器以外の資料には、円盤状製品には略円形（同図 293・295）と略方形のもの（同図 294）とが認められたほか、塗金された簪（第 94 図 296）がほぼ欠損することなく残されていた。ほかに靴底や凹部のある海砂性凝固物性の石製建材が確認されている（図版 67）。



第 92 図 エブロン地区 SG1 断面図 (S=1/100)



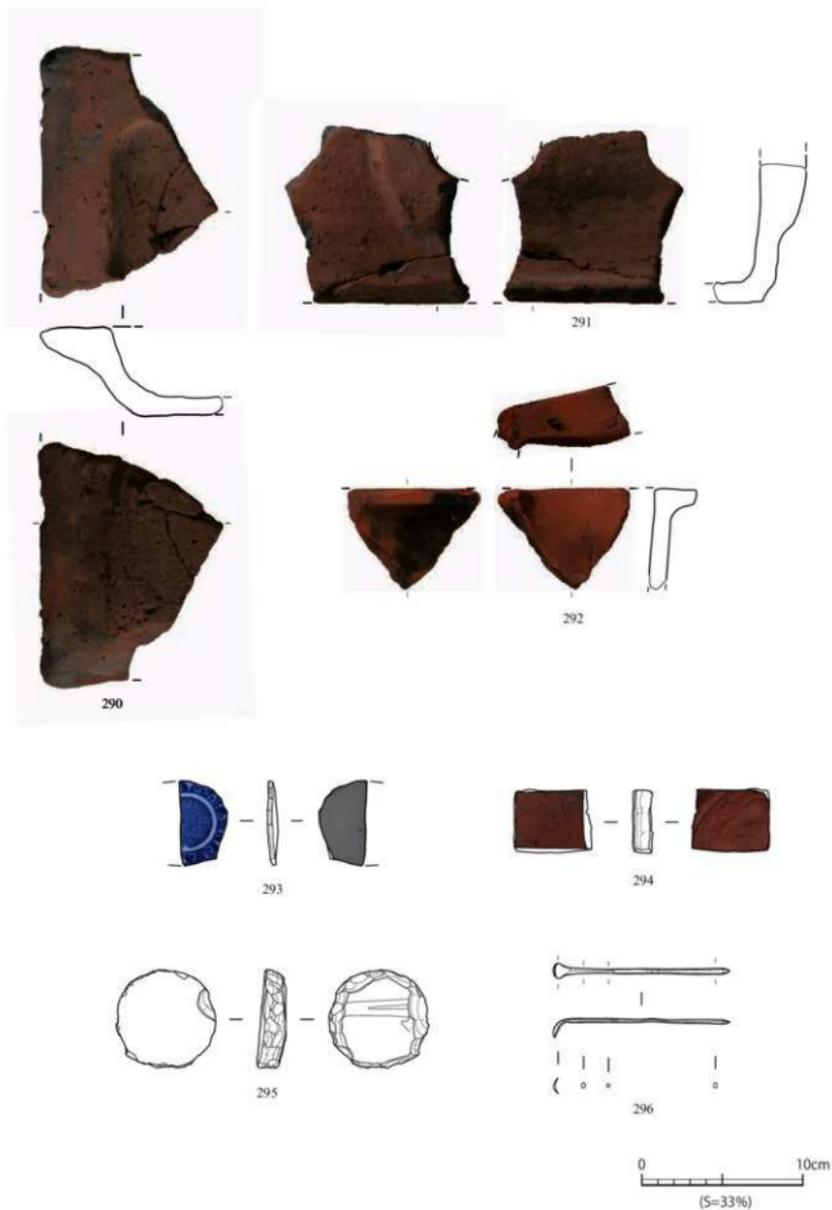
図版 66 エブロン地区 SG1 断面（南西から）

表 74 エブロン地区 SG1 出土遺物集計表

地区	遺構	グリッド	外国産 陶磁器	日本産 陶磁器	沖縄産 無軸陶器	沖縄産 無軸陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石遺物	石材	金属製品	木製品	本材	円盤状 製品	ガラス 製品
エブロン	SG1	の108	6	6	44	96	0	3	1	1	2	3	5	2	10	3
地区	遺構	グリッド	瓦	煉瓦	ゴム製品	貝類	動物 遺存体	不明	合計							
エブロン	SG1	の108	57	2	1	8	1	1	261							



第93図 エブロン地区SG1出土遺物1



第94図 エブロン地区SG1出土遺物2

表 75 エブロン地区 SG1 出土遺物観察表 1 (陶磁器)

採集番号	出土位置	材質	器種	分類形状	部位	法量 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	裝飾		印・銘	産地年代	備考	
										胎土	文様				その他
第93回 275	の108 SG1	中国産 陶磁器	碗	青花 細部	底部	口径:- 器高:- 底径:-8.0	103.87	胴部途中まで 施釉。口 内底に藍 の目録刺ぎ	灰白色 外:青白色 内:青白色	外:有り 内:透明			施・底 口:後 ~ 18c頃		
第93回 276	の108 SG1	日本産 陶磁器	碗	近代 細部	口~底	口径:-8.0 器高:-4.7 底径:-3.6	27.34	帯状輪刺 ぎ・帯付無	白色麻布 ガラス質	内:透明 外:透明	外:捺文	陶板焼り (多色)	なし	施・近代	
第93回 277	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	碗	沖縄産 無刺陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	26.41	見込靴の 目状輪刺ぎ	灰-黄灰色	内:透明 外:鉄線	なし	-	-	-	-
第93回 278	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	碗	沖縄産 無刺陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-6.9	92.81	惣曲みの 見込刺付 着	淡褐色/粗 粒	内:灰輪 外:灰輪?	なし	-	-	-	-
第93回 279	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	碗	沖縄産 無刺陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-6.2	37.33	見込靴の 目状輪刺 ぎ・重燒肌 刺付アムク ナ	灰白色/軟 質	内:白化 靴→透明	肩帯で丸文	-	-	-	-
第93回 280	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	碗	沖縄産 無刺陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-6.3	80.81	見込靴の 目状輪刺ぎ 重燒肌	赤褐色/粗 粒	白化粧→透 明	口:ハット 色 草花文	-	-	-	近代
第93回 281	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	皿	沖縄産 無刺陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-6.4	52.72	見込靴の 目状輪刺 ぎ・帯付ア ムクナ	褐色	内:白化 靴→透明	口:ハット 色 色線線	-	-	-	-
第93回 282	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	皿	沖縄産 無刺陶器	胴部	口径:- 器高:- 底径:-	230.28	なし	卵黄白色/ 軟質	外:透明	外:ハット 色 模立連 統帯状文 斜格子文	-	-	-	近代
第93回 283	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	鉢	沖縄産 無刺陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	66.45	なし	灰-黄灰色 /麻布	内:化粧土 外:黒色	なし	-	-	-	-
第93回 284	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	蓋	沖縄産 無刺陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-20.4	404.26	重ね焼き あり	赤褐色	-	なし	なし	なし	沖縄	貝圧痕
第93回 285	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	水甕	沖縄産 無刺陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	272.47	なし	赤褐色	なし	外:二重 線 線	-	-	-	-
第93回 286	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	鉢	沖縄産 無刺陶器	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	78.30	なし	赤褐色	なし	口唇 線線	-	-	-	-
第93回 287	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	鉢	沖縄産 無刺陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-11.0	256.35	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-	外底黒色
第93回 288	の108 SG1	沖縄産 陶磁器	灯明皿	沖縄産 無刺陶器	口縁部	口径:-10.8 器高:- 底径:-	8.46	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-	-
第93回 289	の108 SG1	陶質 土器	鉢	沖縄産 陶質土器	口縁部	口径:-14.2 器高:- 底径:-	30.81	なし	赤褐色~灰 色	なし	なし	-	-	-	沖縄
第94回 290	の108 SG1	瓦質 土器	火鉢・ 火取	高脚形 口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	376.52	なし	なし	外:褐色 内:灰色	なし	なし	なし	なし	沖縄	イネ和圧痕 多数
第94回 291	の108 SG1	瓦質 土器	火鉢・ 火取	-	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	248.03	外面ナゲミ ガキ	外:褐色 内:灰色	-	なし	なし	なし	沖縄	イネ和圧痕 多数
第94回 292	の108 SG1	瓦質 土器	火鉢・ 火取	-	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	86.99	内外:ミガ キ	赤褐色	-	なし	なし	なし	沖縄	外面強打痕

表 76 エブロン地区 SG1 出土遺物観察表 2 (陶磁器以外)

採集番号	出土地点	種類	器種器形	状態	法量 (mm)	重量 (g)	素材	部位	観察事項				備考		
									加工痕	使用痕	文様	印・銘		その他	
第94回 293	の108 SG1	円盤状 製品	略円形	欠損	外径:- 最大厚:-5.0	10.2	日本産 染付	底部 裏付無	打割/内	-	-	-	-	-	-
第94回 294	の108 SG1	円盤状 製品	方形	完形	最大長:-17 最大短:-28.5 最大厚:-1.1	35.4	沖縄産 無刺陶器	底部 裏付無	研ぎ	-	-	-	-	-	四角成形
第94回 295	の108 SG1	円盤状 製品	略円形	完形	外径:-60.0 最大厚:-17.5	64.8	沖縄産 無刺陶器	胴部	打割/両	-	-	-	-	-	-
第94回 296	の108 SG1	金属 製品	管	完形	最大長:-130.8 最大幅:-3.3 最大厚:-1.6	4.5	鋼	-	なし、鋳造	確認できず	なし	なし	鎌倉 末期出土 四角	なし	



図版 67 エプロン地区 SG1 出土遺物 (石造物を除き S=33%)

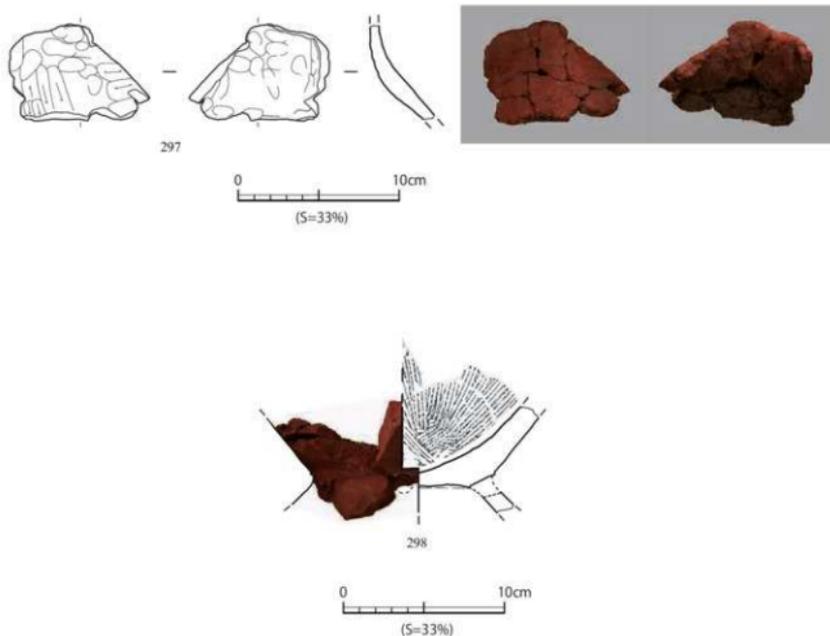


図版 68 エプロン地区 SG1(○部分、南東から)

【IV・V層遺構外遺物】

IV層中からは沖縄産無軸陶器（第95図298）のように大嶺村の頃とみられる近世・近代の遺物が多数出土しており、出土遺物とその傾向ともに遺構内出土遺物と大きな違いはみられない（表77）。しかしその中でも弥生～平安並行時代前半期（貝塚時代前1期）の土器（第95図297）なども確認することができる。ただし保存状態は遺構内出土遺物に比して良好ではなく、破片が多い。

一方、明確にV層からの出土と確認できる資料は僅か2点しか得られなかった。しかしこの2点とも先史時代のもものと目される土器であることから、大嶺村以前の遺跡の存在とその包含する地層について示唆する資料と言える。



第95図 エブロン地区IV・V層出土遺物

表 77 エブロン地区IV・V層出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	日本産陶磁器	沖縄産 原始陶器	沖縄産 無軸陶器	陶質土器	瓦質土器	石遺物	石材	木製品	木材	ガラス 製品	漆喰	瓦	煉瓦	
エブロン	IV	ぬ107		1	4	5	4	1					1		15	1	
		ぬ108				8					6					4	3
		ぬ107 の107			1		1										
	IV-1	ぬ107		9	11	15	7		1	2			1			40	
		ぬ108		1	5	7	4										
		ぬ107 の108		1	5	7	4									3	
	IV-2	ぬ108		2	3	3	8	5		3			1	1	1	26	
ぬ108 の108					1	2									11		
V	ぬ108		2														
合計			5	19	27	43	17	1	1	11	2	1	4	1	99	4	
地区	層位	グリッド	セルロイド・ プラスチック製品		貝類	動物 遺存体	不明	合計									
エブロン	IV	ぬ107			177	4	1	214									
		ぬ108			374	59		454									
		ぬ107 の107			2			4									
	IV-1	ぬ107			1	19	3	109									
		ぬ108						2									
		ぬ107 の107				3	1	24									
	IV-2	ぬ108						27									
ぬ108 の108					84		102										
V	ぬ108						2										
合計			1	636	67	1	990										

表 78 エブロン地区IV・V層出土遺物観察表1（土器）

掲載 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量 (cm)	重量 (g)	成形・ 調整	胎土	裝飾			備考
										軸畫	文様	その他	
第958回 297	ぬ107 IV-1層	先史 土器	甕	派用形or 大当形式	胴部	口径:- 器高:- 底径:-	58.85	内外面:指ナグ(内 面は指明痕明瞭)	泥質で白色釉を 含む	-	なし	なし	-

表 79 エブロン地区IV・V層出土遺物観察表2（陶磁器）

掲載 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	裝飾			備考	
										軸畫	文様	その他		
第958回 298	ぬ108 IV層	沖縄産 陶器	鉢鉢	無軸 陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:-	167.75	なし	赤褐色	なし	なし	-	-	-

第4節 I・II層の遺物

概要 地層自体は戦後の基地・空港造成に伴う攪乱等であるが、先史時代の土器や石器から近代の陶磁器等まで様々な時代の多種多様な遺物 3,150 点が出土した。

陶磁器には中国産・日本産（第96図302～308）・沖縄産（同図309～312）及び陶質土器（同図313）をはじめ、今次調査では出土数の少ないタイ産褐袖陶器（同図301）も確認された。

陶磁器以外では、僅かではあるが土器が出土しており、弥生～平安並行時代前半期（貝塚時代後1期）の浜屋原式土器（第96図300）や、同後半期のフェンサ下層式土器（同図299）が確認される。また敲石類（第97図314）も出土しており、土器とともに先史時代の遺跡の存在を示す資料である。

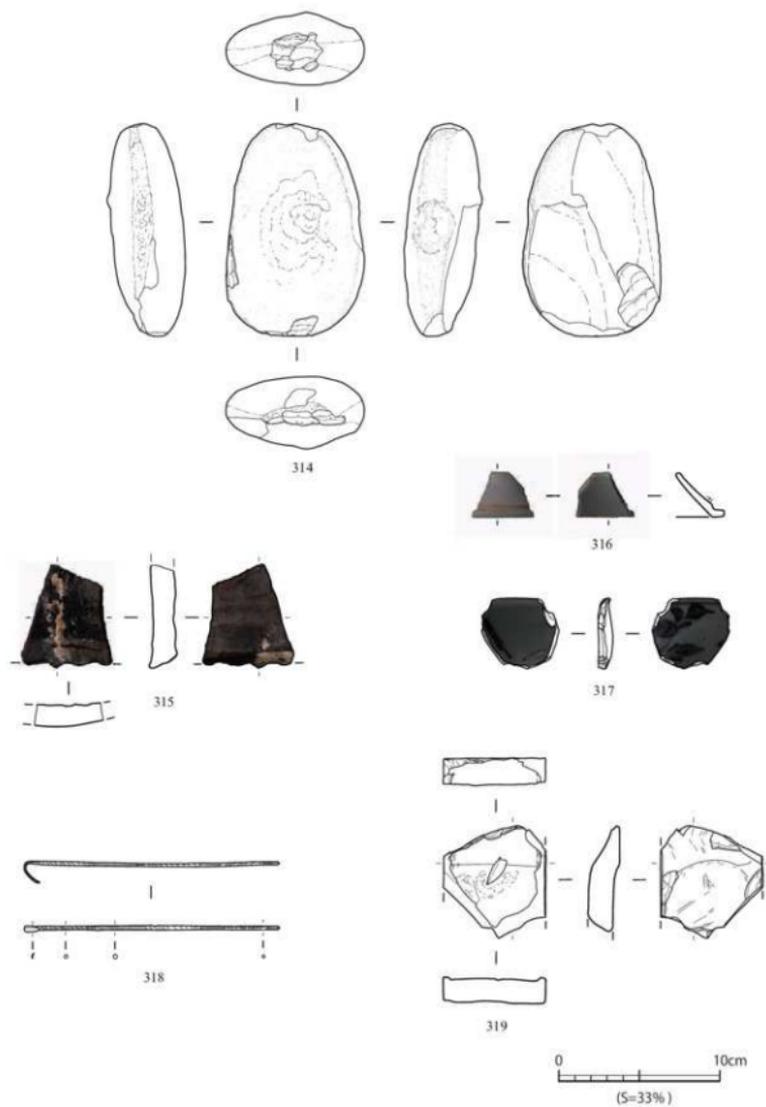
瓦は多量に出土しており、近代の瓦（第97図315）も含まれる。磁器製品にはランプの傘部（同図316）とみられる製品が得られている。円盤状製品は中国産青花磁器を素材とするもの（同図317）がみられる。金属製品には鍍金された男性用副簪（同図318）が確認された。石製品には砥石に転用された硯（同図319）が出土している。

表 80 エブロン地区 I・II層出土遺物集計表

地区	層位	グリッド	先史土器	外国産陶磁器	日本産陶磁器	沖縄産漆器陶器	沖縄産無釉陶器	陶質土器	瓦質土器	石器	石製品	石遺物	石材	金属製品	木製品	木材	
エブロン	I	ね107				2	3	2				1	2				
		ね108	1	3	1	2	2										
		の107		1	7	10	7	1	1					3			
		の108															
	I・II	不明	4	5	15	28	48	18	12			1		7		1	1
		ね107			2	8	9	2	1				5	1			
		ね108			1		1										
		の107		2	10	68	45	27	1				5				
	II	の108	1		5		3										
		ね107	5	6	78	119	173	24	4				7	30	1	2	3
		ね108	6	1	8	24	43	10	2	2			1	17	1		
		の107		4	11	37	34	8	1	1			1	11		1	1
	II-IV	の108	2	9	7	49	64	26					2	2	2	1	4
		の108		1	7	12	22	9	1							1	
		II-V			1	1	26						1				1
		の108															1
合計			19	32	153	360	480	127	23	3	1	18	78	4	6	10	
地区	層位	グリッド	内服衣製品	ガラス製品	漆喰	瓦	煉瓦	珪口	セルロイド・プラスチック製品	貝類	動物遺存体	合計					
エブロン	I	ね107					2					12					
		ね108					1					10					
		の107	1	2			7		3			9	53				
		の108					1						1				
	I・II	不明	5	6		268	5				7	3	434				
		ね107	2	1		12							43				
		ね108				2							4				
		の107	1			90	1					17	267				
	II	の108	1	1		9						12	32				
		ね107	9	19	1	767	22			2	124	16	1412				
		ね108	1	4		57	2			1	4	4	188				
		の107	2	9		27					6	6	160				
	II-IV	の108	5	5		62	1	2			77	17	337				
		の108	1			28					4	2	88				
		II-V				2						73	1	109			
		の108	3														
合計			31	47	1	1335	31	5		7	300	79	3150				



第96図 エブロン地区I・II層出土遺物1



第 97 図 エブロン地区 I・II 層出土遺物 2

表 81 エブロン地区 I・II層出土遺物観察表 1 (土器)

掲載 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	裝飾			備考
										輪筆	文様	その他	
第96図 299	え107 II層	先史土 器	甕	ファンサ下 層式か	口縁部	口径:- 器高:- 底径:-	6.39	外面:指ナゲ 内面:へつ状工具ナゲ	灰質で白色粒を含む	-	なし	外反口縁 で、口唇部 平直。	-
第96図 300	え107 II層	先史土 器	深鉢	浜原厚式	底部	口径:- 器高:- 底径:3.9	103.12	内外面:指ナゲ	砂質で白色粒(多量) ・黒色炭粉を含む	-	なし	乳房状生 底。底厚 (2.3cm)	-

表 82 エブロン地区 I・II層出土遺物観察表 2 (陶磁器)

掲載 番号	出土 位置	材質	器種	分類 形状	部位	法量 (cm)	重量 (g)	成形・調整	胎土	裝飾			印・銘	産地 年代	備考
										輪筆	文様	その他			
第96図 301	え107 II層	タイ産 陶器	甕	筒形	底部	口径:- 器高:- 底径:-	376.00	底部は圓 形	に赤・褐色 白色粒含 む	褐色。両面	なし	-	-	タイ 不明	-
第96図 302	え107 II層	日本産 陶磁器	甕	袋付 磁器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.1	53.72	袋付輪割 ぎ・砂付 着。底にみ ねの目状 輪割ぎ	灰白色緻 密ガラス 質。黒色粒 含む	外:薄青色 内:薄青色	外底:不明 内底:不明	-	-	既見 V期	-
第96図 303	不明 I層	日本産 陶磁器	甕	袋付 磁器	底部	口径:- 器高:- 底径:6.4	28.25	袋付輪割 ぎ	灰白色。黒 色炭粉子 含む	外:透明 内:透明	外:草花文 内:山水文	型紙張り	-	瀬・美 近代	-
第96図 304	の107 II層	日本産 陶磁器	甕	近代 磁器	口へ底	口径:11.1 器高:6.0 底径:4.6	55.77	袋付輪割 ぎ	白色緻密。 ガラス質	外:埋頭・透 明 内:透明	外:樹木文・ 樹先文 内:四方障 文。龍伏松 竹梅文	ゴム版	-	瀬・美 近代	-
第96図 305	え107 I・II 層	日本産 陶磁器	甕	近代 磁器	口へ胴	口径:- 器高:- 底径:4.2	18.44	轆轤	灰白色 やや粗	外:透明 内:透明	外:曲文・ 獅子、牡丹	型紙張り	-	既見 近代	-
第96図 306	え107 II層	日本産 陶磁器	甕	近代 磁器	胴へ底	口径:- 器高:- 底径:4.2	42.03	袋付輪割 ぎ。砂付 着	灰白色 やや粗	外:透明 内:透明	外:唐草 地。窓文 内:龍伏松 竹梅文	型紙張り	-	既見 近代	-
第96図 307	え108 II層	日本産 陶磁器	水筒	近代 磁器	胴部	口径:- 器高:- 底径:-	9.62	型作り	白色粒粒。 ガラス質	外:埋頭・透 明 内:無飾	外:文字文	なし	-	瀬・美 19・20c	-
第96図 308	の107 II層	日本産 陶磁器	急須	脇輪 陶器	茶蓋し 部	口径:6.0 器高:- 底径:-	8.61	轆轤	灰色砂質じ り	口:緑色釉	なし	なし	-	不明	-
第96図 309	の108 II層	沖縄産 陶器	甕	沖縄産 脇輪 陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:5.2	60.53	見込筋の 目状輪割 ぎ	赤褐色/緑 色炭粉	外:透明 内:透明	濃緑色の文 様有	白化痕土	-	-	-
第96図 310	え108 II層	沖縄産 陶器	小甕	沖縄産 脇輪 陶器	底部	口径:- 器高:- 底径:3.8	32.63	面取・形合 あり	灰白色/緑 質	外:透明 内:透明	なし	-	-	-	-
第96図 311	え107 II層	沖縄産 陶器	甕	沖縄産 脇輪 陶器	口へ胴	口径:- 器高:- 底径:-	22.19	蛇の目状に 輪割ぎ	黄褐色軟 質。砂質じ り	外:帯輪 内:無飾	なし	-	-	-	-
第96図 312	不明 I層	沖縄産 陶器	双耳瓶	沖縄産 脇輪 陶器	胴へ持 手	口径:8.05 器高:- 底径:-	101.78	なし	灰白色/軟 質	内外:透明 内面一部は 鉄粒	貝質で花文	双耳獅子 頭	-	近代	一部黒密
第96図 313	え107 II層	陶質 土器	土輪	陶質 土器	筒部	口径:- 器高:- 底径:-	25.96	泥漿塗付	明赤褐色/ 軟質	なし	なし	-	-	沖縄	-

表 83 エブロン地区 I・II 層出土遺物観察表 3 (陶磁器以外)

発掘 番号	出土 地点	種類	器種器形	状態	法量(mm)	重量(g)	素材	部位	観察事項				備考		
									加工痕	使用痕	文様	印・銘		その他	
第97回 314	ε108 目層	石器	礫石類	完形	最大長:130 最大厚:41.5 最大幅:94	730.0	輝緑岩	-	-	なし	敲打	-	-	-	-
第97回 315	ε107 目層	瓦	明細系 平瓦	破片	最大長:- 最大幅:- 最大厚:13.0	69.30	外:灰褐色 内:暗褐色 砂質	鉄端部	青面布目痕	表面に漆 喰付着	なし	なし	なし	焼き締め6	-
第97回 316	ε107 目層	日本産 陶磁器	磁器製品 ランプ	破片	最大長:- 最大幅:- 器高:2.7	8.8	磁器	-	なし	なし	なし	なし	なし	全面透明 釉	-
第97回 317	ε108 目層	円盤状 製品	粘円形	完形	直径:4.5 最大厚:5.0	14.0	中国産 青花	-	打割/外	-	-	-	-	-	-
第97回 318	ε108 目層	金属 製品	簪	完形(変形)	最大長:154.8 最大幅:3.7 最大厚:2.6	4.69	青銅	-	なし、鍛造	なし	なし	なし	なし	鍍金 基部断面 六角形	男性用副 簪(押込)
第97回 319	不明 I層	石製品	硯	破片(腰部)	最大長:69 最大厚:17 最大幅:62	98.4	赤色頁岩	-	研磨	砥面	-	-	-	砥石に転 用	-



図版 69 エブロン地区 I・II 層出土遺物 (S=33%)

第6章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定・土壌分析

矢作健二・松元美由紀・上田圭一
(株式会社パリオ・サーヴェイ)

はじめに

大嶺村跡は、那覇空港敷地内の管制塔庁舎建設予定地箇所ほかに所在する、戦前まで存在していた大嶺村の痕跡である。大嶺村は、古文書などから王府時代～近世・近代まで存続していたことが確認されており、戦後米軍に接収された。戦前は海岸線に面し、半農半漁の部落であったとされる。発掘調査は、管制塔Ⅰ地区、管制塔Ⅱ地区、エプロン地区の3箇所で行われており、轍跡や井戸、土坑、石組み遺構、集石遺構、かまど跡などが確認されている。

本報告では、遺構や遺物、堆積層の年代の情報を得る目的として放射性炭素年代測定、調査区ベルトの基本土層を対象に古植生、土壌特性の関する情報を得ることを目的として、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析、土壌理化学分析を実施する。

1. 試料

試料は、エプロン地区のトレンチ1はVI層バックリーフから3点、トレンチ2はSL、SPなどの遺構とサブトレンチから38点、管制塔Ⅰ地区東西ベルトより7点の合計48点の試料を採取している。また、沖縄産無釉陶器と明朝系丸瓦の圧痕内に充填された貝、くびれ平底土器付着炭化物も対象とした。

エプロン地区トレンチ2のSL1(集石遺構)の炭化物回収については、現地で回収したもの、土壌サンプルから回収したもの、遺構内から取り上げた礫を一旦持ち帰り、礫に付着した炭化物を回収したものがある。礫は現地で1から5までの番号を付し、炭を保護するため、礫ごとにアルミホイルで包んだ。また、礫取上げ後に、複数ピットの切り合い関係が想定されたので、便宜上ブロック1から3まで区画した。

また、管制塔Ⅰ地区東西ベルトは断面よりNo.1～No.5の5点が採取されており、No.1～No.5の5点を分析対象とした。いずれも粗粒～極粗粒砂を主体としており、No.1、No.2がやや暗色を示す。この層には鉄跡に似る痕跡も認められる。いずれ層準も貝片、サンゴ片などを含むが、No.3で貝片・サンゴ片が多く、No.4、No.5ではこれらが主体をなす。また、No.5採取層準には、ビーチロックも含まれていた。

沖縄産無釉陶器と明朝系丸瓦の圧痕内に充填された貝の回収は先端の突ったピンセット等で抜き出し、前処理を省略している。

以上の試料から放射性年代測定を24点、管制塔Ⅰ地区東西ベルトの5点は花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析、土壌理化学分析を実施した。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。炭化材試料は、試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ-酸処理:AAA)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M～1Mまで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1Mの水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合はAAAと記す。一方、試料が脆弱で1Mの水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合はAaAと記す。精製された試料を燃焼してCO₂発生させる。

貝殻は、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。試料の表面をHClを用いて約30%溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する(Edg処理)。試料中の炭酸カルシウム(CaCO₃)を分解し、CO₂を発生させる。

CO₂を真空ラインで精製する。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。

表 84 試料表

地区	トレンチ名	試料No.	遺構名、層序、試料など	分析項目					
				年代	花粉 微粒炭	珪酸体	微細物	土理	
エブロン 地区	トレンチ1	No.1	VI層	バックリフ内	○				
		No.2	VI層	バックリフ内	○				
		No.3	VI層	バックリフ最下層	○				
	トレンチ2	No.4	SL1	ブロック1	3層				
		No.5	SL1	ブロック1	2-1層				
		No.6	SL1	ブロック2	1-1層	○			
		No.7	SL1	ブロック2	2-1層	○			
		No.8	SL1	ブロック3	1-1層				
		No.9	SL1	ブロック3	2-1層				
		No.10	SL1	ブロック2					
		No.11	SL1	ブロック2					
		No.12	SL1	ブロック3					
		No.13	SL1	ブロック3					
		No.14	SP16	1層		○			
		No.15	SP57	1層					
		No.16	SP59	1層					
		No.17	SP119	1層		○			
		No.18	SP120	2層					
		No.19	SP120	3層					
		No.20	SP123	1層					
		No.21	SP124	1層					
		No.22	SP124	2層					
		No.23	SP125	1層					
		No.24	SP125	2層					
		No.25	SP125	3層					
			SP104						
			SL1	1		○			
			SL1	2					
			SL1	3					
	SL1	4		○					
	SL1	5		○					
	SL1	ブロック①							
	SL1	ブロック①下層		○					
	SL1	ブロック②							
	SL1	ブロック②							
	SL1	ブロック③							
	SL1	ブロック③下層		○					
トレンチ2 サブトレンチ	No.26	V層			○				
	No.27	V層			○				
	No.28	VI層			○				
	No.29	VI層			○				
					○				
管制塔 I 地区		ベルトⅢ-1層	No.1		○	○	○	○	
		ベルトⅢ-2層	No.2			○	○	○	
		ベルトⅢ-3層	No.3		○	○	○	○	
		ベルトV層	No.4			○	○	○	
		ベルトV層	No.5		○	○	○	○	
		Ⅲ-1層上面硬化面							
	Ⅲ-1層上面硬化面								
エブロン地区トレンチ1		明朝系丸瓦		○					
		圧痕内充填貝片1							
管制塔 I 地区		沖縄産無釉陶器		○					
		圧痕内充填貝片2							
エブロン地区トレンチ1		土器(299)付着炭化物		○					

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma,68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一枚目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウェアは、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0、較正曲線は Intcal13(Reimer et al.2013)である。なお、貝類は、 $\delta^{13}\text{C}$ の値などから海棲貝類と想定されるものは、リザーバー効果を考慮した Marine13(Reimer et al.2013)を使用した。一方、圧痕内貝類に関しては海棲貝類ではないと想定されるので、この限りではない。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5,730 \pm 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪(年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している)等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13(Reimer et al.2013)である。また、較正年代を求めるソフトウェアはいくつか公開されているが、今回は CALIB を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが(Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値(1 年単位)を記す。また、中央値は、確率分布の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

(2) 花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重 2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容し



分析試料拾い出しの様子



年代測定 前処理



年代測定 グラファイト合成



年代測定装置

図版 70 年代測定作業風景

てから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に200個以上同定・計数する(化石の少ない試料ではこの限りではない)。同定は、当社保有の現生標本や鳥倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)等を参考にする。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭(微細な炭化植物片)の含量が、自然植生に対する人類干渉の指標として有効であるとされていることから(安田,1987など)、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井(1996)、井上ほか(2002)等を参考にする。計数は、山野井(1996)などを参考にし、長径が約20 μ m以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、山野井(1996)などを参考にし、分析土壌量(cc)、分析残渣量(ml)、プレパラート作成量(μ l)を測定し、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

(4) 微細物分析

土壌試料から炭化物を可能な限り壊さずに回収するために、以下の方法を実施する。

1) 水洗前抽出

試料を常温乾燥後、肉眼観察で確認された炭化種実や炭化材、動物遺存体、土器片等の遺物を抽出する。

2) 水洗

水を満たした容器に乾燥後の試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩に回収された炭化物主体の試料と、0.5mm篩水洗後の残土(砂礫主体)を、それぞれ粒径8mm、4mm、2mm、1mmの篩を通し、粒径別に常温乾燥させる。

3) 抽出分類

水洗乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実、炭化材(主に2mm以上)、保存状態が良好な動物遺存体(骨片、歯、巻貝類、二枚貝類、貝類(主に8mm以上)、甲殻類、ウニ類)、サンゴ片(主に8mm以上)、土器片、ガラス片等の遺物を抽出する。

抽出物は、個数または重量と一部の最大径を計測し、結果を一覧表で示す。分析残渣は、炭化材主体と砂礫主体、植物片主体に大まかに分け、粒径別の重量を計測し、結果を一覧表に併記する。分析後は、一部の炭化材を樹種同定対象とし、他の抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

(5) 土壌理化学分析

分析は、人為的利用の痕跡を明らかにするため、pH(H₂O)、電気伝導度、有機炭素、全窒素、MI(Melanic index)、全リン酸、全カルシウム、可給態リン酸、リン酸吸収係数を選択した。pH(H₂O)はガラス電極法、電気伝導率は白金電極法、有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解-水蒸気蒸留法、MIは腐植簡易分析法(本名・山本,1992)、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法、可給態リン酸はトルオーグ法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法でそれぞれ行った(土壌標準分析・測定法委員会,1986;土壌環境分析法編集委員会,1997)。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

pH(H₂O)は、風乾細土10.0gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H₂O)を測定する。

電気伝導率[EC]は、風乾細土試料 10.0g を秤とり、50ml の純水を加えて 1 時間振とうする。振とう後、すみやかに電気伝導率計(白金電極法)で電気伝導率(dS/m)を測定する。

有機炭素は、粉碎土試料 1.000 ~ 3.000g を 100ml 三角フラスコに正確に秤とり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200°C の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C 乾土%)を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量(%)を算出する。

全窒素は、粉碎土試料 2.00g をケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約 3.0g と硫酸 10ml を加え加熱分解した。分解後、蒸留水約 30ml を加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(T-N%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

MI(Melanic Index)による腐植簡易分析は、炭素 50mg に相当する微粉碎試料(但し、5.0g を上限とする)を 50ml 容過心管に入れ、分注器で 0.5%NaOH 溶液約 25ml を加える。過心管に蓋をしてテープで密封し、室温で 1 時間振とうした後、0.1% 高分子凝集剤溶液 1 ~ 2 滴を加え、よく振り混ぜた後、4.000rpm、15min の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約 1ml を試験管にとり、0.1%NaOH 溶液 20ml を分注器で加え(NaOH の濃度は約 0.1%となる)、分光光度計により 450、520nm の吸光度を測定する(450nm の吸光度が 1 を越えた試料は、さらに 0.1%NaOH 溶液で希釈して測定)。測定は抽出後、3 時間以内に行い、結果の表示を $MI=(K_{450}/K_{520})$ で示す。

全リン酸、全カルシウムは、粉碎土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

可給態リン酸は、風乾細土試料 1.00g を 300ml 三角フラスコに秤とり、0.002 N 硫酸溶液(pH3)200ml を加え、室温で 1 時間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの可給態リン酸量(P₂O₅mg/乾土 100 g)を求める。

リン酸吸収係数は、乾土として 10.00g になるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5% リン酸アンモニウム液(pH7.0)20ml を加え、時々振り混ぜながら室温で 24 時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液 100 μl を 50ml メスフラスコに正確にとり、水約 35ml とリン酸発色 a 液 10ml を加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後 30 分間放置し、420nm で比色定量する。定量された試料中のリン酸量を 2.5% リン酸アンモニウム液(pH7.0)のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数(mg/100g)を求める。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表 85 から 87 に示す。

試料の測定年代(補正年代)はエブロン地区トレンチ 1 バックリーフの No.1 が 5,050 ± 30BP、No.2 が 5,660 ± 30BP、No.3 が 4,150 ± 30BP の値を示す。

エブロン地区トレンチ 2 の SL1 から回収した 7 点の補正年代は、礫番号 1、礫番号 4、礫番号 5 がそれぞれ 1,300 ± 20BP、230 ± 30BP、210 ± 20BP、ブロック 1 下層が 210 ± 20BP、ブロック 2 の 1-1 層と 2-1 層が 190 ± 30BP、250 ± 20BP、ブロック 3 の下層が 230 ± 20BP の値を示す。また、SP16 1 層は 340 ± 20BP、SP119 1 層は 1,210 ± 30BP の値を示す。

エブロン地区トレンチ 2 サブトレンチ浅黄色砂層(No.26)が 2,990 ± 20BP、サブトレンチ浅黄色粗砂層(No.27)が 2,400 ± 20BP、の値を示す。サブトレンチ灰黄色砂層(No.28) 4,510 ± 30BP、4,250 ± 30BP、サブトレンチ灰黄色シルト層(No.29)が 6,270 ± 30BP、6,220 ± 30 であった。

管制塔 1 地区ベルト No.1 が 130 ± 20BP、ベルト No.3 が 185 ± 20BP、ベルト No.5 が 1,250 ± 20BP の値を示す。

明朝系丸瓦圧痕内充填貝片 1 が 310 ± 20BP、沖繩産無軸陶器圧痕内充填貝片 2 が 280 ± 20BP、土器(299) 附着炭化物は 1,730 ± 20BP の値を示す。

測定誤差を 2σ として計算させた結果、エブロン地区トレンチ 1 バックリーフ内の 3 点の暦年代は最も

表 85 放射性年代測定結果

地区	トレンチNo.	試料No.	採出面、遺構名、遺物番号など	試料種類	測定年代	$\delta^{13}\text{C}$	Code No.
						(‰)	
エブロン地区	トレンチ1	No.1	VI層バックリーフ内	炭化物	5.050±30	-22.17±0.45	IAAA-172264
		No.2	VI層バックリーフ内	貝	5.660±30	4.74±0.44	IAAA-172265
		No.3	VI層バックリーフ最下層	炭化物	4.150±30	-24.06±0.40	IAAA-172266
	トレンチ2	SL1 礫番号1	炭化物	1.300±20	-27.64±0.50	IAAA-160460	
		SL1 礫番号4	炭化物	230±30	-25.47±0.57	IAAA-160461	
		SL1 礫番号5	炭化物	210±20	-20.39±0.55	IAAA-160462	
		No.6 SL1 ブロック2 1-1層	炭化物	190±30	-29.05±0.56	IAAA-160454	
		No.7 SL1 ブロック2 2-1層	炭化物	250±20	-28.78±0.54	IAAA-160455	
		SL1 ブロック1 下層	炭化物	210±20	-25.04±0.46	IAAA-160463	
		SL1 ブロック3 下層	炭化物	230±20	-26.52±0.35	IAAA-160464	
		No.14 SP16 1層	炭化物	340±20	-29.16±0.52	IAAA-160456	
		No.17 SP119 1層	炭化物	1.210±30	-28.28±0.55	IAAA-160457	
		No.26 V層 浅黄色砂層	貝	2.990±20	4.84±0.35	IAAA-172267	
		No.27 V層 浅黄色粗砂層	貝	2.400±20	2.75±0.43	IAAA-172268	
		No.28 VI層 灰黄色砂層	炭化材(広葉樹) 炭化物	4.510±30 4.250±30	-27.36±0.65 -28.55±0.44	IAAA-160458 IAAA-172269	
No.29 VI層 灰黄色砂層	炭化材 炭化物	6.270±30 6.220±30	-30.87±0.48 -26.29±0.49	IAAA-160459 IAAA-172270			
管制塔I地区東西ベルト			ベルトⅢ-1層 No.1	炭化物	130±20	-31.77±0.42	YU-5535
			ベルトⅢ-3層 No.3	炭化物	185±20	-32.06±0.51	YU-5536
			ベルトV層 No.5	貝	1.250±20	2.30±0.43	YU-5537
エブロン地区	トレンチ1		明朝系丸瓦 圧痕内充填貝片1	貝	310±20	-15.24±0.38	IAAA-172261
管制塔I地区			沖縄産無軸陶器 圧痕内充填貝片2	貝	280±20	-17.93±0.33	IAAA-172262
エブロン地区	トレンチ1		土器(299)付着炭化物	炭化物	1.730±20	-25.58±0.45	IAAA-172263

古いNo.2が6,167-5,979 cal BP、次にNo.1が5,898-5,735 cal BP、最も新しいものはNo.3が4,822-4,578 cal BPであった。

エブロン地区トレンチ2のSL1の礫番号1、礫番号4、礫番号5がそれぞれcal AD664-768、cal AD1642-1950+、cal AD1649-1950+、ブロック1下層がcal AD1,650-1,950+、ブロック2の1-1層(No.6)と2-1層(No.7)がcal AD1,655-1,950+、cal AD1,528-1,950+、ブロック3下層はcal AD1,643-1,950+であった。SP16 1層(No.14)がcal AD1,475-1,636、SP119 1層(No.17)がcal AD717-888であった。

サブトレンチ浅黄色砂層(No.26)が2,827-2,713 cal BP、浅黄色粗砂層(No.27)が2,119-1,950 cal BP、灰黄色砂層(No.28)が5,300-5,048 cal BP、4,862-4,709 cal BP、灰黄色シルト層(No.29)が7,267-7,157

表 86 暦年較正結果 1

試料名	補正年代 (BP)		暦年較正年代(cal)				相対比	Code No.
No.1 エロン地区トレンチ1 窪溝/バックリーフ内	5,052±27	σ	cal BC 3,940	- cal BC 3,858	cal BP 5,889	- 5,807	0.812	IAAA-172284
			cal BC 3,815	- cal BC 3,797	cal BP 5,764	- 5,746	0.188	
No.2 窪溝/バックリーフ内	5,662±25	2σ	cal BC 3,949	- cal BC 3,868	cal BP 5,892	- 5,725	1.000	IAAA-172285
			cal BC 4,163	- cal BC 4,054	cal BP 6,112	- 6,003	1.000	
No.3 エロン地区トレンチ1 窪溝/バックリーフ最下層	4,145±26	σ	cal BC 2,865	- cal BC 2,835	cal BP 4,814	- 4,784	0.217	IAAA-172286
			cal BC 2,817	- cal BC 2,805	cal BP 4,766	- 4,754	0.077	
		2σ	cal BC 2,760	- cal BC 2,665	cal BP 4,709	- 4,614	0.689	
			cal BC 2,443	- cal BC 2,440	cal BP 4,592	- 4,589	0.016	
No.6 エロン地区トレンチ2 SL1 ブロック 1-1層	188±25	σ	cal BC 2,673	- cal BC 2,629	cal BP 4,822	- 4,778	0.193	IAAA-160454
			cal BC 2,823	- cal BC 2,629	cal BP 4,772	- 4,578	0.807	
		2σ	cal AD 1,665	- cal AD 1,661	cal BP 285	- 269	0.229	
			cal AD 1,738	- cal AD 1,753	cal BP 212	- 197	0.151	
		σ	cal AD 1,762	- cal AD 1,785	cal BP 188	- 165	0.311	
			cal AD 1,793	- cal AD 1,803	cal BP 157	- 147	0.128	
		2σ	cal AD 1,937	- cal AD 1,950	cal BP 13	- 0	0.191	
			cal AD 1,855	- cal AD 1,687	cal BP 295	- 263	0.219	
		σ	cal AD 1,730	- cal AD 1,809	cal BP 220	- 141	0.600	
			cal AD 1,926	- cal AD 1,950+	cal BP 24	- 0	0.181	
No.7 エロン地区トレンチ2 SL1 ブロック 2-1層	246±24	σ	cal AD 1,644	- cal AD 1,665	cal BP 306	- 285	0.843	IAAA-160455
			cal AD 1,766	- cal AD 1,792	cal BP 164	- 156	0.157	
		2σ	cal AD 1,528	- cal AD 1,550	cal BP 422	- 400	0.035	
			cal AD 1,634	- cal AD 1,670	cal BP 316	- 280	0.704	
		σ	cal AD 1,779	- cal AD 1,799	cal BP 171	- 151	0.238	
			cal AD 1,943	- cal AD 1,950+	cal BP 7	- 0	0.023	
No.14 エロン地区トレンチ2 SP16 1層	339±24	σ	cal AD 1,492	- cal AD 1,525	cal BP 458	- 425	0.326	IAAA-160456
			cal AD 1,557	- cal AD 1,602	cal BP 393	- 348	0.473	
		2σ	cal AD 1,613	- cal AD 1,632	cal BP 337	- 318	0.200	
			cal AD 1,475	- cal AD 1,636	cal BP 475	- 314	1.000	
No.17 エロン地区トレンチ2 SP118 1層	1,210±30	σ	cal AD 771	- cal AD 779	cal BP 1,179	- 1,171	0.090	IAAA-160457
			cal AD 789	- cal AD 868	cal BP 1,161	- 1,082	0.910	
		2σ	cal AD 717	- cal AD 742	cal BP 1,233	- 1,208	0.086	
			cal AD 866	- cal AD 888	cal BP 1,184	- 1,062	0.914	
No.26 エロン地区トレンチ2 V層	2,990±20	σ	cal BC 531	- cal BC 750	cal BP 2,780	- 2,729	1.000	IAAA-172287
			cal BC 878	- cal BC 764	cal BP 2,827	- 2,713	1.000	
No.27 エロン地区トレンチ2 V層	2,400±20	σ	cal BC 132	- cal BC 42	cal BP 2,081	- 1,991	1.000	IAAA-172288
			cal BC 170	- cal AD 0	cal BP 2,119	- 1,950	1.000	
No.28 エロン地区トレンチ2 窪溝	1,4510±30	①σ	cal BC 3,341	- cal BC 3,318	cal BP 5,290	- 5,267	0.154	IAAA-160458
			cal BC 3,292	- cal BC 3,289	cal BP 5,241	- 5,238	0.041	
		②σ	cal BC 3,279	- cal BC 3,168	cal BP 5,215	- 5,117	0.442	
			cal BC 3,165	- cal BC 3,112	cal BP 5,114	- 5,061	0.346	
		③σ	cal BC 3,351	- cal BC 3,262	cal BP 5,300	- 5,211	0.343	
			cal BC 3,250	- cal BC 3,099	cal BP 5,199	- 5,048	0.657	
④2,428±28		④σ	cal BC 2,901	- cal BC 2,878	cal BP 4,850	- 4,827	1.000	IAAA-172289
			cal BC 2,913	- cal BC 2,862	cal BP 4,814	- 4,709	0.137	
No.29 エロン地区トレンチ2 窪溝	①6,266±30	①σ	cal BC 5,298	- cal BC 5,247	cal BP 7,247	- 7,196	0.804	IAAA-160459
			cal BC 5,234	- cal BC 5,221	cal BP 7,183	- 7,170	0.196	
		②σ	cal BC 5,318	- cal BC 5,208	cal BP 7,267	- 7,157	1.000	
			cal BC 5,282	- cal BC 5,275	cal BP 7,231	- 7,224	0.037	
		③σ	cal BC 5,226	- cal BC 5,204	cal BP 7,175	- 7,153	0.230	IAAA-172270
			cal BC 5,168	- cal BC 5,075	cal BP 7,117	- 7,024	0.733	
		④σ	cal BC 5,296	- cal BC 5,196	cal BP 7,245	- 7,145	0.409	
			cal BC 5,179	- cal BC 5,063	cal BP 7,128	- 7,012	0.591	
エロン地区トレンチ2 SL1 検査号1	1,296±24	σ	cal AD 672	- cal AD 695	cal BP 1,278	- 1,255	0.474	IAAA-160460
			cal AD 700	- cal AD 710	cal BP 1,250	- 1,240	0.151	
		2σ	cal AD 745	- cal AD 764	cal BP 1,205	- 1,186	0.374	
			cal AD 664	- cal AD 726	cal BP 1,296	- 1,224	0.663	
エロン地区トレンチ2 SL1 検査号4	226±25	σ	cal AD 738	- cal AD 768	cal BP 1,212	- 1,182	0.337	IAAA-160461
			cal AD 1,649	- cal AD 1,668	cal BP 301	- 282	0.551	
		2σ	cal AD 1,782	- cal AD 1,797	cal BP 168	- 153	0.449	
			cal AD 1,542	- cal AD 1,681	cal BP 308	- 269	0.492	
		σ	cal AD 1,739	- cal AD 1,734	cal BP 211	- 216	0.007	
			cal AD 1,763	- cal AD 1,802	cal BP 187	- 148	0.418	
		σ	cal AD 1,938	- cal AD 1,950+	cal BP 12	- 0	0.084	
			cal AD 1,655	- cal AD 1,674	cal BP 295	- 276	0.333	
		σ	cal AD 1,778	- cal AD 1,799	cal BP 172	- 151	0.502	IAAA-160462
			cal AD 1,942	- cal AD 1,950+	cal BP 8	- 0	0.165	
		2σ	cal AD 1,649	- cal AD 1,662	cal BP 301	- 286	0.323	
			cal AD 1,737	- cal AD 1,757	cal BP 213	- 193	0.065	
		σ	cal AD 1,761	- cal AD 1,804	cal BP 189	- 146	0.475	
			cal AD 1,936	- cal AD 1,950+	cal BP 14	- 0	0.138	
エロン地区トレンチ2 SL1 ブロック①下層	206±23	σ	cal AD 1,657	- cal AD 1,675	cal BP 293	- 275	0.331	IAAA-160463
			cal AD 1,769	- cal AD 1,770	cal BP 181	- 180	0.012	
		2σ	cal AD 1,791	- cal AD 1,799	cal BP 173	- 151	0.467	
			cal AD 1,541	- cal AD 1,950+	cal BP 9	- 0	0.170	
		σ	cal AD 1,650	- cal AD 1,682	cal BP 300	- 268	0.307	
			cal AD 1,737	- cal AD 1,757	cal BP 213	- 193	0.077	
		2σ	cal AD 1,761	- cal AD 1,804	cal BP 189	- 146	0.474	
			cal AD 1,936	- cal AD 1,950	cal BP 14	- 0	0.143	
エロン地区トレンチ2 SL1 ブロック②下層 ペルト	225±23	σ	cal AD 1,651	- cal AD 1,667	cal BP 299	- 283	0.543	IAAA-160464
			cal AD 1,782	- cal AD 1,797	cal BP 168	- 153	0.467	
		2σ	cal AD 1,543	- cal AD 1,679	cal BP 307	- 271	0.496	
			cal AD 1,764	- cal AD 1,800	cal BP 186	- 150	0.426	
			cal AD 1,939	- cal AD 1,950+	cal BP 11	- 0	0.079	

表 87 暦年校正結果 2

試料名	補正年代 (BP)	暦年校正年代(cal)						相対比	Code No.
管制塔 I 地区東西ベルト No.1 Ⅲ-1層	130±20	σ	cal AD 1683	- cal AD 1699	cal BP 267	-	251	0.156	YU-5535
			cal AD 1721	- cal AD 1736	cal BP 229	-	214	0.130	
			cal AD 1805	- cal AD 1818	cal BP 145	-	132	0.109	
		cal AD 1833	- cal AD 1879	cal BP 117	-	71	0.430		
		cal AD 1915	- cal AD 1935	cal BP 35	-	15	0.174		
		cal AD 1680	- cal AD 1764	cal BP 270	-	186	0.350		
2σ	cal AD 1801	- cal AD 1891	cal BP 149	-	59	0.491			
	cal AD 1908	- cal AD 1939	cal BP 42	-	11	0.159			
	cal AD 1666	- cal AD 1681	cal BP 284	-	269	0.240			
管制塔 I 地区東西ベルト No.3 Ⅲ-3層	184±20	σ	cal AD 1739	- cal AD 1745	cal BP 211	-	205	0.078	YU-5536
			cal AD 1762	- cal AD 1783	cal BP 188	-	167	0.354	
			cal AD 1796	- cal AD 1802	cal BP 154	-	148	0.107	
		cal AD 1938	- cal AD 1950+	cal BP 12	-	0	0.221		
		cal AD 1663	- cal AD 1684	cal BP 287	-	266	0.198		
		cal AD 1733	- cal AD 1807	cal BP 217	-	143	0.812		
2σ	cal AD 1929	- cal AD 1950+	cal BP 21	-	0	0.190			
	cal AD 1123	- cal AD 1203	cal BP 827	-	747	1.000			
	cal AD 1072	- cal AD 1225	cal BP 878	-	725	1.000			
管制塔 I 地区東西ベルト No.5 Ⅴ層	1,250±20	σ	cal AD 1521	- cal AD 1575	cal BP 429	-	375	0.772	YU-5537
			cal AD 1625	- cal AD 1641	cal BP 325	-	309	0.228	
			cal AD 1494	- cal AD 1508	cal BP 456	-	442	0.036	
		2σ	cal AD 1511	- cal AD 1601	cal BP 439	-	349	0.738	
			cal AD 1616	- cal AD 1645	cal BP 334	-	305	0.225	
			cal AD 1528	- cal AD 1550	cal BP 422	-	400	0.363	
明朝系丸瓦 庄内内充填貝片 1	312±21	σ	cal AD 1634	- cal AD 1654	cal BP 316	-	296	0.637	IAAA-172261
			cal AD 1521	- cal AD 1578	cal BP 429	-	372	0.448	
			cal AD 1622	- cal AD 1664	cal BP 368	-	359	0.014	
		2σ	cal AD 1511	- cal AD 1601	cal BP 439	-	349	0.738	
			cal AD 1616	- cal AD 1645	cal BP 334	-	305	0.225	
			cal AD 1528	- cal AD 1550	cal BP 422	-	400	0.363	
沖繩産無釉陶器 庄内内充填貝片 2	276±22	σ	cal AD 1634	- cal AD 1654	cal BP 316	-	296	0.637	IAAA-172262
			cal AD 1521	- cal AD 1578	cal BP 429	-	372	0.448	
			cal AD 1622	- cal AD 1664	cal BP 368	-	359	0.014	
		2σ	cal AD 1511	- cal AD 1601	cal BP 439	-	349	0.738	
			cal AD 1616	- cal AD 1645	cal BP 334	-	305	0.225	
			cal AD 1528	- cal AD 1550	cal BP 422	-	400	0.363	
土器(299)付着炭化物	1,728±23	σ	cal AD 255	- cal AD 300	cal BP 1695	-	1,650	0.589	IAAA-172263
			cal AD 317	- cal AD 346	cal BP 1833	-	1,604	0.373	
			cal AD 372	- cal AD 376	cal BP 1,578	-	1,574	0.037	
		2σ	cal AD 250	- cal AD 382	cal BP 1,700	-	1,568	1.000	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0を使用。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算と比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

cal BP、7,245-7,012 cal BPであった。また、灰黄色砂層 (No.28) の炭化材は広葉樹と同定された。

管制塔 I 地区東西ベルト No.1、No.3、No.5 の暦年代はそれぞれ、cal AD1,680-1,939、cal AD1,663-1,950+、cal AD1,072-1,225 であった。

明朝系丸瓦庄内内充填貝片 1 が cal AD1,494-1,645、沖繩産無釉陶器庄内内充填貝片 2 が cal AD1,521-1,791、土器 (299) 付着炭化物は cal AD250-382 であった。

(2) 花粉分析

結果を表 88 に示す。いずれの試料も花粉化石の産出状況が悪く、堆積物 1cc あたりの花粉・胞子数は No.1 で約 100 個、それ以外は 100 個未満で、No.4 に関しては無化石であった。わずかに検出された種類をみると、木本花粉ではモミ属、マツ属、サルスベリ属が、草本花粉はイネ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科などが確認された。

微粒炭数は No.1 で約 39,600 個/cc、No.2 で約 40,600 個/cc と多く、No.3 では約 1,500 個/cc と少なくなり、No.4、No.5 では 200 ~ 100 個/cc と極端に少なくなる。なお、検出された微粒炭は、ほとんどが母材の推定が難しい不明型であったが、わずかに壁孔などの木材組織を有するものも確認された。また、No.1 からは寄生虫の卵である鞭虫卵も確認されたが、その含量は少なく、堆積物 1cc あたり 100 個未満であった。

(3) 植物珪酸体分析

分析した 5 試料のいずれからも、植物珪酸体は 1 個体も検出されなかった。鏡検時には、分析プレパラート内に鉱物粒子が散在するに過ぎない。

(4) 微細物分析

結果を表 89 に示す。分析に供された 5 試料 4.66kg より、炭化材 2.8g、炭化材主体 0.5g、骨片 37 個 0.2g、骨片 73 個 0.1g、歯 730 個 0.1g、巻貝類 2,196 個 22.9g、二枚貝類 255 個 4.3g、貝類 62 個 14.5g、甲殻類の爪 67 個 0.3g、ウニ類の棘 694 個 6.4g、殻板 40 個 1.0g、サンゴ片 162 個 221.9g、土器片 71 個 0.0g、ガラス片 71 個 0.0g、砂礫主体 (サンゴ片・貝類・ウニ類・有孔虫等含む) 3.45kg、植物片 0.1g が検出された。以下、試料別出土状況を述べる。

・No.1

表 88 花粉分析結果

種 類	管制塔 I 地区 東西ベルト				
	Ⅲ-1層 No.1	Ⅲ-2層 No.2	Ⅲ-3層 No.3	V 層 No.4	V 層 No.5
木本花粉					
モミ属	1	-	-	-	-
マツ属	1	-	-	-	1
サルスベリ属	-	-	-	-	1
草本花粉					
ガマ属	-	-	-	-	1
イネ科	1	1	-	-	5
クワ科	-	1	-	-	-
アカザ科	3	1	-	-	-
アブラナ科	14	4	2	-	-
キク亜科	-	-	-	-	4
タンポポ科	-	-	1	-	-
不明花粉					
不明花粉	1	1	-	-	1
シダ類胞子					
シダ類胞子	9	7	-	-	1
合 計					
木本花粉	2	0	0	0	2
草本花粉	18	7	3	0	10
不明花粉	1	1	0	0	1
シダ類胞子	9	7	0	0	1
合計(不明を除く)	29	14	3	0	13
その他					
塵虫卵	1	-	-	-	-
微粒炭数(個/cc)	39600	40600	1500	100	200
花粉・胞子数(個/cc)	100	<100	<100	0	<100
寄生虫卵数(個/cc)	<100	0	0	0	0

1)微粒炭数、花粉・胞子数、寄生虫卵数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

2)<100:100個未満。

試料 480g より、炭化材 2.4g(最大 1.6cm)、炭化材主体 0.3g、骨片 16 個 0.1g、歯? 2 個 0.0g、巻貝類 446 個 3.9g、二枚貝類 34 個 0.2g、貝類 8 個 0.1g、ウニ類 182 個 2.3g、サンゴ片 5 個 8.2g、ガラス片? 1 個 0.0g(3.0mm)、砂礫主体 314.6g、植物片 0.0g が検出された。炭化材が多産し、サンゴ片が減少する。

・No.2

試料 520g より、炭化材 0.4g(最大 1.5cm)、炭化材主体 0.2g、骨片 19 個 0.1g、骨片? 1 個 0.1g、歯? 8 個 0.0g、巻貝類 431 個 10.1g、二枚貝類 44 個 2.4g、貝類 8 個 1.2g、甲殻類 21 個 0.1g、ウニ類 261 個 2.9g、サンゴ片 24 個 21.4g、土器片? 1 個 0.0g(4.7mm)、砂礫主体 357.8g が検出された。炭化材やウニ類、巻貝が多産する。

・No.3

試料 440g より、炭化材 0.0g(最大 1.5mm)、骨片 1 個 0.0g、骨片? 2 個 0.0g、歯? 5 個 0.0g、巻貝類 368 個 2.4g、二枚貝類 61 個 0.4g、貝類 10 個 0.9g、甲殻類 12 個 0.0g、ウニ類 60 個 0.4g、サンゴ片 31 個 21.6g、砂礫主体 303.9g が検出され、巻貝類が多産する。

・No.4

試料 780g より、炭化材 0.0g(最大 1.9mm)、骨片 1 個 0.0g、歯? 9 個 0.0g、巻貝類 540 個 3.5g、二枚貝類 81 個 0.8g、貝類 16 個 4.6g、甲殻類 20 個 0.1g、ウニ類 127 個 0.9g、サンゴ片 40 個 46.6g、砂礫主体 514.3g が検出され、巻貝類が多産する。

・No.5

試料 2.44kg より、炭化材 0.0g(最大 1.4mm)、歯? 6 個 0.0g、巻貝類 411 個 3.0g、二枚貝類 35 個 0.4g、貝類 20 個 7.8g、甲殻類 14 個 0.1g、ウニ類 104 個 0.8g、サンゴ片 62 個 124.1g、砂礫主体 1.96kg、植物片 0.0g が検出され、巻貝類が多産する。

(5) 土壌理化学分析

結果を表 90 に示す。試料はいずれもサンゴ片や貝殻片が視認できるものであり、野外土性(ペドロロジー学会編, 1997)は、いずれの試料も S(砂土)である。土色は No.1、No.2 で 2.5Y4/3 オリーブ褐、No.3 ~ No.5 では 2.5Y6/4 にぶい黄~2.5Y7/4 浅黄と同様である。

pH(H₂O)は各試料共に 8.0 以上と強アルカリ性を呈する。電気伝導率は 0.09-0.14dS/m と大きな差異はなく、pH(H₂O)の値から考えると水溶性塩類が少ない。腐植含量は No.1 で 0.71%、No.2 で 0.38%、No.3 ~ No.5 では 0.19-0.21% と下層から上層へ増加する。全窒素は 0.02-0.03% と差異がない。C/N 比は No.1 で 14、No.2 で 11、他の試料では 6 と腐植含量による差異が示された。MI はいずれの試料においても検出されなかった。

全リン酸は No.1 で 2.35mg/g、No.2 で 1.42mg/g、他の試料では 0.54-0.81mg/g と腐植同様の傾向を示す。カルシウム含量は、458-492mg/g と多い。可給態リン酸は No.1 で 22.5mg/100g、No.2 で 19.5mg/100g、他の試料では 4.7-6.7mg/100g であり、リン酸吸収係数は No.1、No.2、No.3 で 760-830mg/100g と同様、No.4 で 1050mg/100g、No.5 で 1440 といずれも腐植含量同様の傾向を示す。

表 89 微細物分析結果

分類群・部位・状態	管制塔 I 地区 東西ベルト					合計	備考	
	Ⅲ-1層 No.1	Ⅲ-2層 No.2	Ⅲ-3層 No.3	V層 No.4	V層 No.5			
炭化材	16.4	15.3	1.5	1.9	1.4	-	最大径(mm)	
>2mm	2.4	0.4	0.0	0.0	0.0	2.8	(g)、一部樹種同定	
炭化材主体	0.2	0.1	-	-	-	0.2	(g)	
1-0.5mm	0.1	0.1	-	-	-	0.3	(g)	
動物遺存体(主に状態良好な2mm以上)								
骨片	16	19	1	1	-	37	(個)	
	0.1	0.1	0.0	0.0	-	0.2	(g)	
骨片?	-	1	2	-	-	3	(個)	
	-	0.1	0.0	-	-	0.1	(g)	
歯?	2	8	5	9	6	30	(個)	
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	(g)	
巻貝類	殻(破片含む)	446	431	368	540	411	2196	(個)
		3.9	10.1	2.4	3.5	3.0	22.9	(g)
二枚貝類	殻(破片含む)	34	44	61	81	35	255	(個)
		0.2	2.4	0.4	0.8	0.4	4.3	(g)
貝類	殻片	8	8	10	16	20	62	(個)
		0.1	1.2	0.9	4.6	7.8	14.5	(g)
甲殻類	爪(破片含む)	-	21	12	20	14	67	(個)
		-	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3	(g)
ウニ類	棘(破片含む)	167	236	60	127	104	694	(個)
		2.1	2.2	0.4	0.9	0.8	6.4	(g)
	殻板片	15	25	-	-	-	40	(個)
		0.2	0.7	-	-	-	1.0	(g)
サンゴ片		5	24	31	40	62	162	(個)
		8.2	21.4	21.6	46.6	124.1	221.9	(g)
土器片?		-	1	-	-	-	1	(個)
		-	4.7	-	-	-	-	(mm)
		-	0.0	-	-	-	0.0	(g)
ガラス片?		1	-	-	-	-	1	(個)
		3.0	-	-	-	-	-	(mm)
		0.0	-	-	-	-	0.0	(g)
砂礫主体(サンゴ片・貝類・ウニ類・有孔虫等接着)								
>8mm		19.4	3.8	3.1	-	426.5	452.7	(g)
8-4mm		13.5	12.7	8.2	22.4	431.5	488.5	(g)
4-2mm		18.5	19.0	19.7	57.2	295.1	409.4	(g)
2-1mm		93.7	115.6	120.1	261.5	502.2	1093.0	(g)
1-0.5mm		169.5	206.7	152.8	173.2	303.4	1005.6	(g)
植物片主体(混入の可能性)		0.0	-	-	-	0.0	0.1	(g)
分析量		480	520	440	780	2440	4660	(g)

表 90 土壤理化学分析結果

試料名	土性	土色	pH (H ₂ O)	電気 伝導率 dS/m	有機 炭素 (%)	窒素 (%)	全窒素 (%)	C/N	炭酸形態 Melanic Index [M]	全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	可溶性リン酸 P ₂ O ₅ (mg/100g)	リン酸 吸収係数	備考			
															炭酸 の型		
管制塔 I地区 東西ベ ルト	Ⅲ-1層 No.1	S	2.5Y4/3	オリブ緑	8.9	0.13	0.41	0.71	0.03	14	-	-	2.35	458	22.5	790	種強石灰質
	Ⅲ-2層 No.2	S	2.5Y4/3	オリブ緑	9.1	0.12	0.22	0.38	0.02	11	-	-	1.42	482	19.5	760	種強石灰質
	Ⅲ-3層 No.3	S	2.5Y6/4	にぶい黄	9.4	0.09	0.12	0.21	0.02	6	-	-	0.81	474	6.7	830	種強石灰質
	V層 No.4	S	2.5Y7/4	淡黄	9.5	0.09	0.11	0.19	0.02	6	-	-	0.89	492	4.9	1050	種強石灰質
	V層 No.5	S	2.5Y7/4	淡黄	9.2	0.14	0.11	0.19	0.02	6	-	-	0.54	483	4.7	1440	種強石灰質

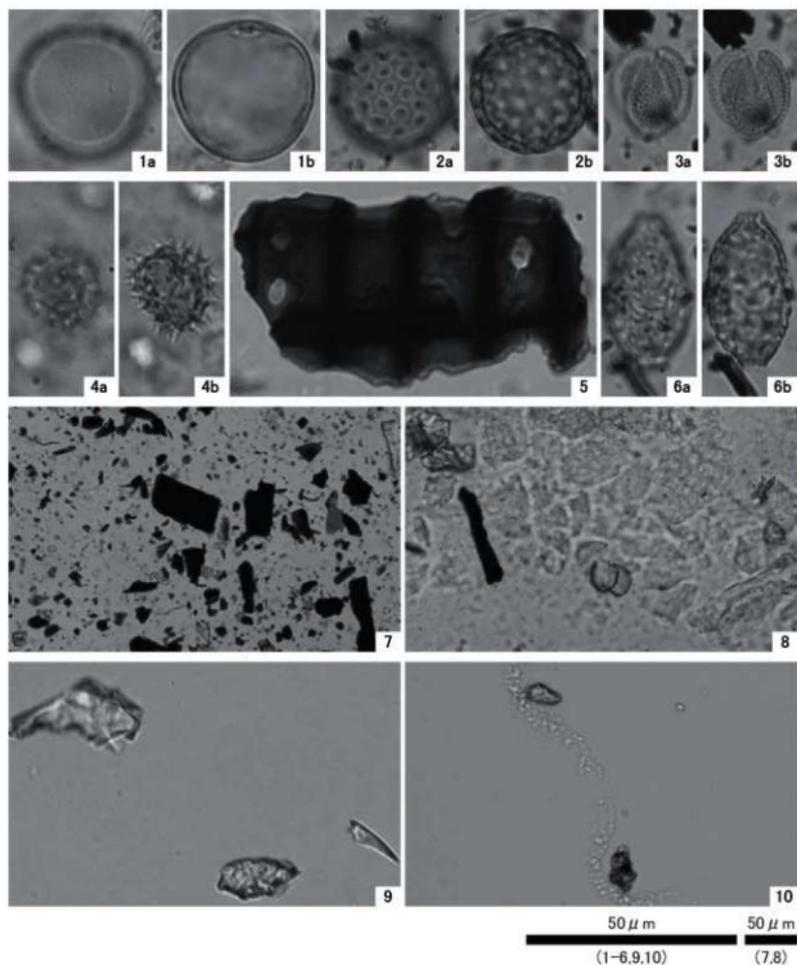
1) 土色:マンセル表色系に準じた新原標準土色貼(農林省農林水産技術会議監修1967)による。

2) 土性:土壤調査ハンドブック改訂版(日本ペトロリソ学会編1997)の野外土性による。

3) S:一砂土(粘土0~5%、シルト0~15%、砂85~100%)

4) C/N:有機炭素量×1.724。

5) C/N:有機炭素量×全窒素量。



- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| 1. イネ科(試料No.5) | 2. アカザ科(試料No.2) |
| 3. アブラナ科(試料No.1) | 4. キク亜科(試料No.5) |
| 5. 微粒炭(木本由来)(試料No.4) | 6. 鞭虫卵(試料No.1) |
| 7. 花粉分析プレパラート内の状況(試料No.1) | 8. 花粉分析プレパラート内の状況(試料No.5) |
| 9. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況(試料No.4) | 10. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況(試料No.4) |

図版 71 花粉化石・微粒炭・寄生虫卵・植物珪酸体

4. 考察

(1) 年代測定結果から

1) 堆積層の年代と地形発達

エブロン地区トレンチ1の堆積層の年代についてみると、3点のうち暦年代の最も古いNo2が6,167-5,979 cal BP、次にNo1が5,898-5,735 cal BP、No3が最も新しく、4,822-5,578 cal BPであった。得られた年代は地層累重の法則には整合せず、年代値が逆転する結果となっている。No2の分析試料は貝であることを考慮すると、古い時代のものが混入した可能性もある。

エブロン地区トレンチ2の堆積層の試料は浅黄色砂層、浅黄色粗砂層はそれぞれ1点、灰黄色砂層、灰黄色シルト層はそれぞれ2点の計6点である。暦年代は浅黄色砂層が2,827-2,713 cal BP、浅黄色粗砂層が2,119-1,950 cal BP、灰黄色砂層が5,300-5,048 cal BP、4,862-4,709 cal BP、灰黄色シルト層が7,267-7,157 cal BP、7,245-7,012 cal BPであった。調査所見によると浅黄色砂層がIV層、浅黄色粗砂層がV層、灰黄色砂層と灰黄色シルト層がVI層とされる。年代はIV層とV層が逆転する結果であった。両者は砂層と粗砂層とされ、砂層形成時に古い貝殻が取り込まれた可能性が考えられる。上層のIV層からV層は貝塚時代前5期から後1期に相当する。VI層の灰黄色砂層と灰黄色シルト層はそれぞれ2点の年代測定結果は、どちらも近い値が得られていることから、堆積年代を反映しているものと判断される。年代は貝塚時代前1期から前3期に相当する。

管制塔1地区東西ベルトの3点の堆積層の暦年代はNo1がcal AD1,680-1,939、No3がcal AD1,663-1,950+、No5がcal AD1,072-1,225であった。これらの年代値は、堆積層序の累重関係と矛盾しないことから、堆積年代を反映していると推測される。

ここで、上述した年代測定試料の出土層位で測定結果をまとめてみると、基本層序のVI層出土試料からは7,267-4,822cal BP(2以下同)、V層からは2,119-1,950 cal BP、IV-2層からは1,233-1,062 cal BPという年代が得られている。さらにこれらの年代を河名(2011)による過去約8000年間の海面変動およびサンゴ礁の発達史に当てはめてみると、VI層は完新世の海面上昇期から高頂期を経て礁嶺の形成時期までを含み、V層は海面低下期、IV-2層は現海面よりも若干高い時期にそれぞれ相当する。一方、黒住氏による調査地における貝類の分析から推定された各層の堆積環境は、VI層が潮間帯中部～上部の海藻藻場、V層が潮間帯上部、IV-2層が飛沫帯とされている。両者の所見をまとめると、VI層は海進期の沿岸域の堆積層であり、上部は礁嶺形成後の堆積物すなわち礁池の堆積層に相当する可能性がある。V層は海面低下により、水深の浅くなったあるいは場所によってはほとんど離水した礁池上の堆積物の可能性がある。IV-2層は年代からみると若干の海進期であるが、細粒の固結した砂などの堆積層の状況からは潮上帯の堆積層であることが推定される。おそらく、調査地においては、約1000年前頃までの海進の影響は低く、V層形成時の海退から海面の低い状況が継続していたと考えられる。

2) 遺構の年代

エブロン地区トレンチ2の遺構の年代について検討する。集石遺構SL1の結果は、16世紀前半から20世紀以降のまとまった年代を示す。しかし礫番号1の1点は7世紀中頃から8世紀中頃で、他のものと間きがあることから、取り込まれた古い炭化物を測定した可能性があり、これを除外すると、SL1は近世以降の遺構と想定される。

ビットはSP16とSP119の2点の年代測定を実施した。SP16は15世紀後半から17世紀前半、SP119は8世紀の前半から9世紀後半で、前者は近世、後者は貝塚時代後2期に相当する。

3) 遺物の年代

明朝系丸瓦圧痕内充填貝片1の暦年代は15世紀末から17世紀中頃、神繩產陶器圧痕内充填貝片2の暦年代は16世紀前半から18世紀末であった。明朝系瓦は那覇市の渡地村跡の発掘調査で、15世紀後半から16世紀前半の遺構から数多く得られた(那覇市教育委員会, 2012)とされることから、調和する結果となった。

土器付着炭化物の暦年代は3世紀中頃から4世紀後半で貝塚時代後1期に相当する。土器は調査所見によると貝塚時代後2期のくびれ平底土器とされることから、やや古い値となった。

(2) 古植生

今回、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析などを実施し、古植生に関する情報を得ようとしたが、いずれも植物化石の産出状況が悪かった。花粉やシダ類胞子は、一般的に堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。植物珪酸体も、亜熱帯湿潤気候の下では、堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶解作用

が起こるほか(松井,1988)、湿潤な土壌や土壌温度が高い堆積物の方が風化の度合いが高いとされている(近藤,1988)。これらのことを踏まえると、堆積後の経年変化により、植物化石が分解されたと考えられる。

わずかに認められる種類についてみると、マツ属などの針葉樹、サルズベリ属などの落葉広葉樹、イネ科、アカザ科、アブラナ科、キク亜科などの草本類が認められ、これらの生育の可能性が窺える。

(3) 土地利用状況

微粒炭についてみると、No.5、No.4では堆積物1ccあたり200～100個/cc、No.3では約1,500個/cc程度であるが、No.2で約40,600個/cc、No.1で約39,600個/ccと多く認められる。土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる(例えば安田,1987;山野井,1996;井上ほか,2002)。層相をみると、いずれも粗粒～極粗粒砂を主体としており、No.5、No.4では貝片・サンゴ片が主体をなし、No.3でも貝片・サンゴ片が多く含まれる。これに対し、No.2、No.1がやや暗色を示しており、この土色の差は微粒炭などの含量を反映している可能性がある。

また、No.1からは寄生虫の卵である鞭虫卵も確認された。当社でこれまで全国各地で実施した花粉分析結果では、遺構内や堆積層から微量の(1ccあたり数個未満)の寄生虫卵が検出されることはそれほど珍しくなく、これらはある程度の人口密度のある集落の範囲内と考えられる(金原ほか,1995など)。No.1における寄生虫卵の含量は、堆積物1ccあたり100個未満であることから、当時の汚染の範囲内と考えられる。

さらに、各層の土壌特性をみると、分析試料中では試料No.2、No.1においてある程度特徴的な値を示した。また、下層から上層へ腐植含量やリン酸含量、可給態リン酸量が多くなる傾向にある。試料No.2、No.1では腐植含量が相対的に多く、C/N比も10を超える。試料No.1ではリン酸含量も相対的に多いことから未分解有機物や植物遺体などの混入が示唆される。この点は、微粒炭の産状とも調和的である。

ただし、耕作の可能性があったかについては、可給態リン酸が多く、リン酸吸収係数が低いことから、リン酸を固定しづらく、作物が吸収利用しやすと考えられる。砂土と養分保持には不向きであり、強アルカリ性と耕作地としては改善点が多いが、耕作痕跡があった可能性を否定できるものではない。ただし、耕作履歴があったと仮定すると、電気伝導率が低い。また、腐植化や土壌化の進行が乏しい。これらの点については、調査区内における堆積層の位置づけや分析の類例を集めて、改めて検討することが望まれる。

これに対し、試料No.3以下の層位では特徴的な値が示されず、土壌環境としてはNo.5～No.3のいずれも同様であったと考えられる。貝片・サンゴ片が多い、あるいは主体となすことも踏まえると、人為的影響は少なかった可能性が高い。

引用文献

- Bronk, R. C. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51, 337-360.
- 土壌標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壌標準分析・測定法, 博友社, 354p.
- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法, 博友社, 427p.
- 藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島堆積植物花粉図鑑, アクアコーラル企画, 155p.
- 木本俊正・山本定博, 1992, 腐植の簡易分析法, 土壌構成成分解析法, 博友社, 7.35.
- 井上 淳・吉川周作・千々和一豊, 2002, 琵琶湖周辺域に分布する黒色土中の黒色土片について, 日本第四紀学会講演要旨集, 32.74-75.
- 金原正明・金原正子・中村俊仁, 1995, 大宮跡(副跡)における自然科学的分析, 史跡石動山環境整備事業報告書2, 石川県能登町教育委員会, 51-70.
- 河名俊男, 2011, 琉球列島におけるサンゴ礁形成史と地産・洋産, 考古学リーダー19 先史・歴史時代の琉球列島～ヒトと景観～, 六一書房, 63-86.
- 近藤謙三, 1988, 植物珪酸体 (Opal Phytolith) からみた土壌と年代, ペドロジスト, 32, 189-203.
- 近藤謙三, 2010, プラント・オパール図譜, 北海道大学出版会, 387p.
- 松井 健, 1988, 土壌地理学序説, 築地書館株式会社, 316p.
- 三宅 高・中庭信和, 1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態, 植生史研究, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑, 北海道大学出版会, 824p.
- 那覇市教育委員会, 2012, 渡地村跡, 臨港道路那覇1号線整備事業に伴う発掘調査, 那覇市教育委員会, 91 集, 339p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析, 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12.13集, 91p.
- 農林省森林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- ペドロジー学会編, 1997, 土壌調査ハンドブック改訂版, 博友社.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk, Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T.

J. Hoffmann, D. L. Hogg, A. G. Hughes, K. A. Kaiser, K. F. Kromer, B. Manning, S. W. Niu, M. Reimer, R. W. Richards, D. A. Scott, E. M. Southon, J. R. Staff, R. A. Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

高倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ^{14}C Data, Radiocarbon, 19, 355-363.

徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

山野井 徹, 1996, 里上の成因に関する地質学的検討, 地質学雑誌, 102, 526-544.

安田喜憲, 1987, 文明は緑を食べる, 読売新聞社, 227p.



試料番号1 SL1 ブロック2 1-1層
採取試料



試料番号2 SL1 ブロック2 2-1層



試料番号3 SP16 1層
採取試料



試料番号4 SP119 1層
採取試料



試料番号5 サブトレンチVI層 灰黄色砂層
採取前試料



試料番号5 サブトレンチVI層 灰黄色砂層
採取試料



試料番号6 サブトレンチVI層 灰黄色シルト層
採取前試料



試料番号6 サブトレンチVI層 灰黄色シルト層
採取試料

図版 72 年代測定試料 1



土器瓦痕内充填貝片1



土器瓦痕内充填貝片1



土器瓦痕内充填貝片1 試料採取後



土器瓦痕内充填貝片1



土器瓦痕内充填貝片1



土器瓦痕内充填貝片1 試料採取後



土器附着炭化物



土器附着炭化物 試料採取後

図版 73 年代測定試料 2



トレンチ1 No.1 試料の様子



トレンチ1 No.1 抽出された炭化物



トレンチ1 No.1 No.2 試料の様子



トレンチ1 No.2 抽出された貝殻



トレンチ1 No.3 試料の様子



トレンチ1 No.3 抽出された炭化物



トレンチ2 No.26 試料の様子



トレンチ2 No.26 抽出された貝殻

図版 74 年代測定試料 3



トレンチ2 No.27 試料の様子



トレンチ2 No.27 抽出された貝殻



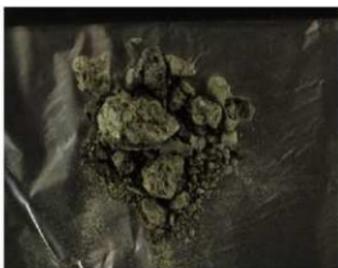
トレンチ2 No.28 試料の様子



トレンチ2 No.28 抽出された炭化物



トレンチ2 No.29 試料の様子



トレンチ2 No.29 抽出された炭化物

図版 75 年代測定試料 4



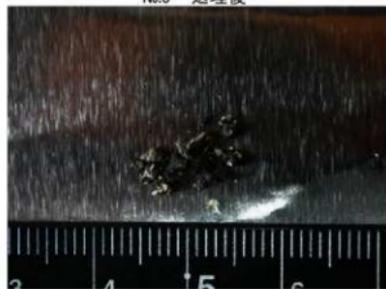
No.5 処理前



No.5 処理後



年代測定試料 No.1 炭化材



年代測定試料 No.3 炭化材



年代測定試料 No.5 貝殻

図版 76 年代測定試料 5

第2節 大嶺村跡の海浜部堆積物中の貝類群

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

沖縄島南西部、現那覇空港に存在した大嶺村跡の発掘調査時に海浜堆積物が採取され、本地域の海岸部の環境変遷を考察する材料として貝類の分析を行った。サンゴ礁域の沖縄においても、海浜部の変遷に関する研究は様々な面から報告されてきたが（例えばサンゴ礁地域研究グループ、1990）、これまでに遺跡出土貝類を除いて（例えば中村、1989；黒住、1998、2001、2010）、完新世における詳細な貝類群（与化石群・遺体群）の記載等はほとんど行われていないのが現状である。

今回は、小形種まで定量的に検討を行うことができ、本地域の海浜部の環境変遷に関して復元できたと考えており、その結果を報告する。

検討サンプル

今回検討したサンプルは、沖縄県立埋蔵文化財センターによって、大嶺村跡のエプロン地区の3層準から採取された堆積物である（第98図）。その詳細は、本報告書の第3章に詳述されているが、下部のVI層・中部のV層・上部のIV-2層であり、その情報を表91に示した。

これらの堆積物を筆者のこれまでの遺跡堆積物の処理方法（黒住、1996）と同様の方法（乾燥させたのち、9.52・4.0・2.0・1.0mmの標準フルイによる水洗選別と浮遊部分（LF）の0.5mmメッシュ未満のネットによる回収する）によって処理した。9.52mmと4.0mmメッシュ残渣から、貝類を抽出し、種の同定・確認部位・生死や磨滅の状況等を記録した。なお、都合により、4.0mmでは全量の1/2を抽出対象とした。

結果および考察

1 堆積物の状況

今回対象とした堆積物の各メッシュの残渣量が表91で、9.52mmメッシュ上のものを第99図に示した。今回の処理では、通常の粒度分析とは異なるが、粒度の傾向は示せるものと考えられる。以下に、各層の状況を記す。

VI層：表91のように、この層の年代は約7,000～5,000年 cal BPで、その堆積物は灰色に変色した磨滅した枝サンゴ片が多く、貝殻も二枚貝のみで、磨滅・破損が認められ、状態はそれほど良好ではない（第99図）。堆積物では2.0～0.5mmのものがおおよそ同じ割合で、比較的細かいことがわかる（表91）。

V層：この層の年代は紀元前後で、磨滅した枝サンゴ片が多く、その一部は粗粒な砂で固結していた。貝類では二枚貝が目立ち、一部には合弁個体も存在していたが、かなり磨滅・破損が認められた。堆積物では、2.0mmの割合が高く、粗いことがわかる。

IV-2層：年代はグスク時代の年代が示され、本採取地点よりも陸側では旧集落土2となり、近世期までの遺物が含まれている。9.5mmメッシュ上では細粒の砂が固結しており、貝類は確認できなかった。堆積物では、0.5mmのものが粗いものよりも多かった。

2 貝類組成

今回の処理で、少なくとも巻貝類（腹足綱）18科23種、二枚貝類（綱）12科21種、その他の海産無脊椎動物5分類群が確認できた（表92）。

種数はVI層で最も多い40種、IV-2層が最も少なく、6種であった。下部から上部にかけて種数が減少しているものの、種組成としては、3つの層準で貝類は大きく異なっているとは考えられなかった。個体数（NISF：同定標本数）でも、3層準は類似しており、巻貝のヒメクワノミカニモリ・フトコロガイが、二枚貝ではオキナワヒシガイ・カブラツキガイが優占していた。浮遊部分（LF）には、陸上の貝塚で多く抽出される陸産および淡水産種は認められなかった。ただ、貝類以外のものでは、大形底生有孔虫のゼニイシと十脚甲殻類の破片はVI層に多く、特にゼニイシは還元層中であつたためと考えられる黒色に変化していた（表92のR）。

また、筆者が現生種から想定した生息場所類型（黒住、1987）では、二枚貝の大多数と巻貝の約半数が



第 98 図 大嶺村跡の海浜部の堆積物採取断面（採取箇所：右上地図の○）

表 91 大嶺村跡の海浜部に採取された分析サンプルの詳細

	VI層		V層		IV-2層	
	海浜堆積層		海浜堆積層/白砂層		粗砂層	
考古年代	縄文時代早期～中期 (貝塚時代前1～3期)		弥生～平安平行時代 (貝塚時代後1期)		ゲル時代～近世	
炭素年代	cal BP 7,267～4,578		cal BP 2,827～1,950		cal BP 1,233～1,062	
現地採取レベル/m	+1.6m		+2.7m		+3.05m	
標高/m	約0～1.0m		約1.0～1.5m		約1.5～1.9m	
		%*1		%		%
全体	1600cc/1914g		700cc/832g		320cc/412g	
9.52mm	400cc/310g		350cc/265g		200cc/152g	
4.0mm	270cc/240g		260cc/233g		65cc/54g	
2.0mm	175cc/166g	12.17	78cc/68g	20.36	23cc/20g	9.71
1.0mm	170cc/184g	13.49	62cc/66g	19.76	18cc/18g	8.74
0.5mm	150cc/178g	13.05	26cc/30g	9.00	43cc/50g	24.27
>0.5mm	N/836g	61.29	N/170g	50.90	N/118g	57.28

* 1 : 2.0mm以下での%, N : 未計測

内湾域、特に潮下帯の砂泥底に生息する種であった(表92のII-2-c)。

今回の貝類組成と類似した現生貝類相の例として、沖縄市泡瀬干潟の例がある(ウルマ貝類調査グループ、2007)。そして、その生息密度は砂泥底のオキナワヒシガイ・カブラツキガイの多いこと、海草藻場のヒメクワノミカニモリ、海草上のフトコロガイ・イワカワチグサ・ハシナツツブエ等の種が優占することも一致する(黒住・大須賀、2007)。

循環論的ではあるが、今回の大嶺村跡の海浜堆積物と現在の内湾の貝類組成が極めて類似していることから、この堆積物は内湾域のものであることがわかる。

3 磨滅・破損の状況

今回の3サンプルでは、巻貝・二枚貝とも、磨滅したもの(表92のe)や被捕食孔を有する死殻(表92のH)の個体が比較的高率で含まれていた。ただ、詳細に検討すると、V層とIV-2層では磨滅しているものが多く、一方、VI層では磨滅は比較的小さい。特に、4.0mmメッシュ残滓では(第100図)、優占種の巻貝・フトコロガイ・ヒメクワノミカニモリや薄質な小形二枚貝で、この磨滅に大きな差異が認められた。一方、磨滅はしていないものの、巻貝では、捕食者(主にカニが想定される)によって、殻全体や殻口が破損している個体が、VI層・V層ともに多い(第101図)。これは、捕食されたまま、VI層に堆積したものと理解される。

また、V層でマスオガイの合弁個体(表92のcv)が得られているが、浮遊部分等で抽出された微小個体を除き、他には埋性二枚貝の合弁個体はほとんど確認できなかった。

4 堆積環境の推定

これまでに述べてきたことから、まず各層の堆積状況を考察してみる。

VI層: 貝類では葉上性のフトコロガイ・イワカワチグサが多く、ヒメクワノミカニモリ、カブラツキガイ・オキナワヒシガイが多く、環境としては内湾の潮間帯中部～上部の海藻藻場が推定される。そして、堆積物はやや細かく、開発ら(2007)の示した泡瀬干潟の海藻藻場のものに類似していると考えられる。藻場で

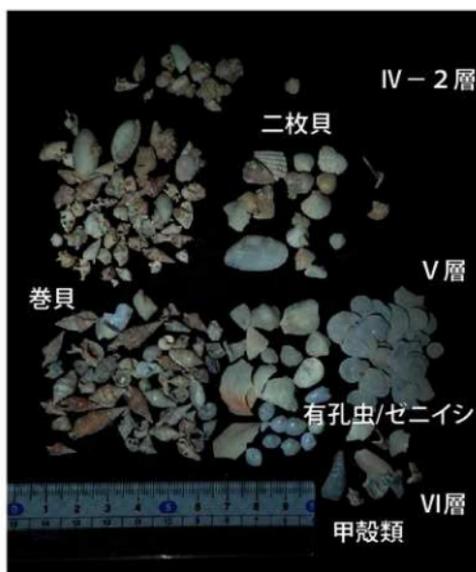
表 92 大嶺村跡の堆積物から抽出された貝類等

層名	VI層				V層				IV-2層			
	9.52mm	4.0mm	LF	NISP	9.52mm	4.0mm	LF	NISP	4.0mm	LF	NISP	
巻貝 (限定種)												
ヒメクワノミカニキリ		4(1H,1mL,1mL,1a,1ae,5abe,4(2mL),1je,2u)	17			4ae,3abe,3(1H),1je,4e		15	1am,1e,2be,1je		4	H-2-c
ハシナガツノブエ						2abe		2				H-2-c
カヤノミカニキリ		1mL,R	1									H-1-b
カニキリガイ類/同定不能		1we	1			3e,5be		8				
カニキリガイ類?										1sj	1	
リュウキュウウミニナ		1ab	1									H-1-c
フトコロガイ		6a,1ae,R,2b,3u	12			1a,2ae,2abe,3jbe		8				H-2-d
イワカワチダサ		4a,1ab	72ju	7		2ae		2				H-2-d
カイコガイ		1au,1b,1j		3		2a,1j,1au,1be		5	1fe		1	H-2-c
ヒメオリイロムシロ?		1ab		1		1ae		1				H-2-c
クサイロカノコ		1mL		1		1ae		1				H-2-d
キマツ貝類			3	3								H-2-c
リュウキュウヒメカタベ		1ae		1		1j		1				I-2-b
ニシキウス		1ue		1								I-2-a
サラサダマ		1j		1								I-2-c
ウズラガイ		1f		1								I-2-c
コウシレイシダマシ		1mL		1								I-1-a
キイロダカラ		1f		1								I-1-a
コシダカアマガイ?		1je		1								I-1-a
ヒトスジツノタダマキ		1a		1								I-1-b
ヒメインダタミアマオブネ		1e		1								I-0-a
カラマツガイの一種		1jd		1								I-0-a
ヘソアキトミガイ						1e						I-2-c
ヘビガイ類								2je				2
マツムシ類?								1ue				1
ミジンツツガイ類									1mj			1
二枚貝類												
カブラツキガイ	1H/0,1f	0/1u		3	1j/0,1fe	0/2(1d)u		4				H-2-c
オキナワヒシガイ		2u/1d		3	1/0	3(1d)/1j		5	1jcv,1j/0		2	H-2-c
リュウキュウザル	1fe			1	1e/0	1fe		2				H-2-c
ナンノハナガイ		0/1j		1		2(1d)/0		2				H-2-c
ハスメザクラ		1j/0		1		0/1		1				H-2-c
カワラガイ	1fe			1	1jH/0			1				H-2-c
ミガキヒメザラ		3j/4j		7								H-2-c
ウラキツキガイ	0/1			1								H-2-c
ノコギリガキ	1/0			1								H-2-a
ウスハマグリ類	0/1ud			1								H-2-c
オトセノハナガイ		0/1u		1								H-2-c
リュウキュウバカガイ		1f		1								H-2-c
シロヒメガキ?		0/1e?		1								H-2-b
アコヤガイ?		0/1ud		1								H-2-b
オオヒシガイ	1ue/0			1								I-2-c
マスオガイ					1cv			1				H-1-c
オノノカガミ					1jd/0			1				H-2-c
タママキ								1fe				H-1-c
ヒメツツキガイ					1/0			1				I-2-c
ハネマツカゼ								1jd/0				I-2-a
オリハキ類?		2sjcv		2				1sjcv		1sjcv		1
二枚貝不明/同定不能								1fe		1		3fe
他の無脊椎動物												
十脚甲殻類		8f										
ゴカイ類 (摩滅)	1feR			1	1f			1				
ナガウニ類/綿								1		1		
ゼニシシ/有孔虫	1R	26(21R),12(10R)u		38				1e		1		
有孔虫(2の等含まない)		ca.100	100					20	20		10	10
放射虫		ca.300	300					30	30		20	20
炭化物		27f						2				
炭化種子/非炭種		1										
種		1										
木片								1f			3f	

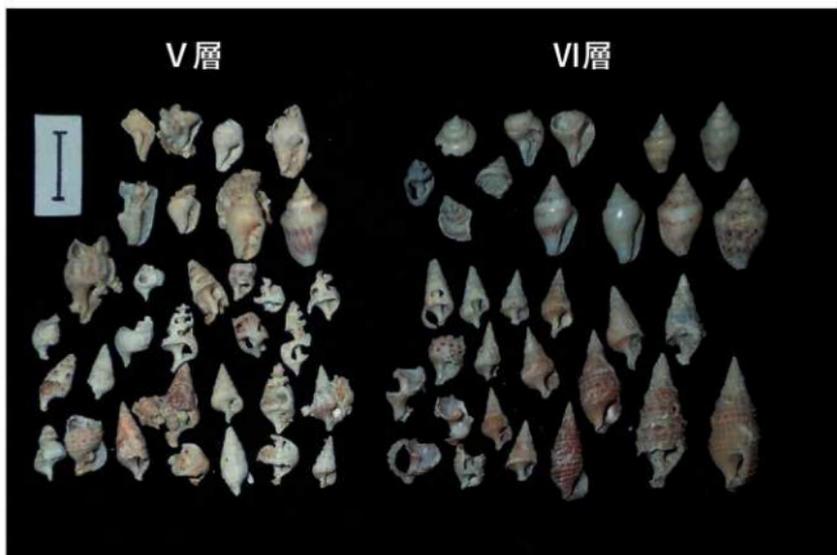
*1:3mm以上; NISP:同定標本数; 詳細 a:成貝, b:休養, cv:合併, d:壳頂, e:磨滅, f:破片, j:幼貝, mL:扇口欠, H:被種孔, R:選光層中の集化石, u:殻頂, w:螺層, 二枚貝は左/右:生息場所は集住(1987)。



第 99 図 9.52mm メッシュ残渣



第 100 図 4.0mm メッシュ残渣



第101図 4.0mmメッシュ上のフトコロガイ(上)とカニモリガイ類(下)の磨滅・破損状況

あるために、磨滅した枝サンゴ片等は海草の根等にトラップされ、その場の還元層に埋入していたことによる黒い着色が認められ、巻貝では捕食された殻が残存しており、他のサンプルではほとんど認められなかったゼニシヤや甲殻類片も得られた訳である。また、小形二枚貝のミガキヒメザラを除き、完形の二枚貝類も少なく、微小種以外の合弁個体は確認されていないことから、堆積物は干潟の干出する面やそこから数cm程度の深度であったことも想定される。つまり、干出面から5cmよりも深い場所の堆積物とは考えにくい。このことは、内湾干潟と推定しており、本来、この場所に生育していない枝サンゴ等は当然、他所から運ばれてきて藻場で堆積したものと考えられることから理解されよう。

V層：貝類はVI層とおおよそ類似した種組成ながら、磨滅したものが多くなっている。堆積物の粒度が比較的粗く、固結しており、還元層による着色も認められなかった。これらのことから、いわゆる砂浜の潮間帯の上部の堆積物だと考えられる。

IV-2層：9.52mmメッシュでは貝殻が得られず、4.0mmでもごく稀である。粒度も細かく、砂は固結している。これらのことから、砂浜の飛沫帯で形成された堆積物と考えられる。4.0mmメッシュで僅かながら貝殻が存在していたので、“砂丘”ではないようである。

ここで復元した各層の状況を松田(2007)の北谷町・伊礼原遺跡での例と比較しても、VI層～IV層-2は、ビーチフェイスとなり、海浜部の高まり(バーム)を超えた砂丘とは考えられない。同じく、北谷町の伊礼原E遺跡の“サンゴ砂利層”も、今回の堆積物と同様の可能性も高い。伊礼原E遺跡のVII層は「青灰色枝サンゴ粗砂層」で、この層の上面の標高はおおよそ+0.8m～1.8mで、この層から曾畑式土器が出土とされ、VII層下部では「明黄褐色を呈し大量の枝サンゴ砂利に拳大や大型の礫が含まれ」、VII層上部は「淡黄白色粗砂から細かい貝殻破片や白色サンゴ砂利」とされる(山城・島袋, 2010)。おおよそVII層が今回のVI層に、VII層下部がV層に、VII層上部がIV-2層に相当するのかもしれない。そして、伊礼原E遺跡の貝類遺体では、主に5区においてオキワヒシガイ・イソハマグリ・リュウキュウミニナ・フトコロガイが優占し、内湾の打上げ「自然貝層」と考えられており(黒住, 2010)、大嶺村跡の組成と類似し、リュウキュウミニナが多いことから、伊礼原E遺跡では、より遮蔽された内湾の堆積物であることがわかる。サンゴ礁域の現世堆積物としては、山内(1990)の研究があるが、ここでは、外洋-サンゴ礁域、その中でも特に干瀬の有孔虫に注目して検討されており、今回のような内湾域の海草藻場とは異なっていることも当然理解される。

また、VI層からは種子を含め比較的多くの炭化物が浮遊部分から抽出されているものの、V層・IV-2層からは炭化物は少ないか、認められなかった(表92)。まず、炭化物は自然ではなく人間活動に由来するものと考えられ、VI層の時代にも周辺に遺跡等の存在を示唆しており、流れ着いたものが枝サンゴ片と同様に海草の根にトラップされたものであろう。一方、当時の遺構が確認されているV層とIV-2層で炭化物がごく稀であったことは、上述のように砂浜であったために、流れ着くなどした炭化物が風により移動させられたためと想定される。このような海浜部の堆積物中の炭化物や微細遺物(微小陸産貝類も含めて)の風による堆積の場所からの消失に関しては、瀬戸内海島嶼の遺跡でも同様なことを想定しており(黒住, 2018b)、遺跡における遺物の残存という現象を理解する上で重要だと考えられる。

なお、陸上の堆積物に多い浮遊部分から根(維管束植物)がほとんど抽出されなかったことも(表92)、これまで示してきた海域潮間帯および飛沫帯であったことを示している。当然のことであるが、1) 維管束植物である海草の根は分解されて残らないこと、2) 陸上の貝塚等の堆積物から抽出される根は、“遺跡形成時のものではなく、現代の混入によるもの”であることも明瞭に示されている。

また、土田・黒住(1997)で示したように、現在の奄美・沖縄の海岸では、打ち上げられた貝類に陸産・淡水産の貝類が比較的多く含まれていることも稀ではない。これは、河川を通じて海岸に流れ込むことが多いが、今回のサンプルには、カツムリもカワナナ類等も含まれていなかった。そして、今回のサンプルには、伊礼原E遺跡で優占していたリュウキュウウミナ等々の僅かな淡水の影響のある環境を好む種(黒住, 2010)が欠落しており、伏水流や小河川からの淡水の流れ込みの少ない環境であったと考えられる。

5 “縄文海進期”の環境

今回確認できた合計25種の貝類(巻貝と二枚貝)のうち、約7,000~5,000年前の“縄文海進期”に相当するVI層でも、1mm未満の微小で分類学的検討の遅れているキマツボ類とした種を除き、確認された他の種はこれまで沖縄の現生種として報告されてきた種のみであり、ヤマト(本土土本州~九州)で見られるような温暖種(松島, 1984)はなく、筆者がこれまで示してきた状況(黒住 2010, 2014)と同じであった。熱帯海域の沖縄では、縄文海進期に海水温の上昇は存在したかもしれないが、貝類の組成という点では、大きな変化は認められなかったということを再確認できた。

ただ、琉球列島においてもサンゴ礁域のオオジャコ等のごく少数の消滅種(=種としては絶滅していないが、ある地域からは絶滅したもので、人間の関与を含む; 松島, 1984の“温暖種”は消滅種のうち、南から分布を拡大してきた種で、人間の関与を想定しないもの)が存在するものの、河口干潟-マングローブ域では、いくつかの消滅種が知られている。特に小菅(2000)は西表島仲間川の河口をさかのぼった地点から、年代測定は行われていないが、完新世のものである可能性の極めて高い消滅種のクラマドガイを報告した。また、大城(1987, p. 61)は沖縄島石川市山城から、完新世の貝類群として、オストレア・ギガス(マガキ, 17cm; シマガキやニセマガキ類の可能性もある)やゲロイナ的一种(シレナシジミ類)さらにムシロガイ?(消滅種?)とアラムシロ類が優占し、カニモリ類・ヘナタリ類・ウミナナ類・ホウジュノタマ目立ち、少数のヒメキリガイダマシ・マドモチウミナ・ホソジュセイラ?・ムラサキヨフバイ等からなる化石群を图示している。詳細な産出地は图示されていないが、地名から標高は50m以上のようである。この地域が隆起した可能性もあるが、もしかすると、大城(2001)が報告した石川市楚南の後期更新世の化石群、あるいは黒田・小澤(1996)が同じく石川市楚南および喜瀬武原の露頭から「マングローブ沼に生息したシレナシジミやウミナナ類の化石を豊富に含む内湾性の」化石群と同一なかもしれない。

また黒田・小澤(1996)は伊是名島のボーリングコア中の最終氷期の海産種として、貝類のカンギクとヨフスジカニモリの2種の貝類やマージノポーラ [=ゼニシ]・エダミドリシを挙げ、当時の海域環境は「熱帯~亜熱帯性の海生動物化石」からも、花粉で示された「気温の低下があったとしても、せいぜい、1.0~2.0°Cの範囲と考えられる」としているものも、石川市山城の化石群に類似しているようにも思える。ただ、ここで和名ヨフスジカニモリとのみ表記されているが、ヨフスジカニモリは *Cerithium (Proclava) tenuifilum* に与えられた和名で(波部・奥谷, 1985)、图示された種は現在まで琉球列島を含む日本から報告されていない(例えば長谷川, 2017)。誤同定の可能性が高いと考えられるが、もしヨフスジカニモリであったとすると、“当時は、より海水温の高い熱帯的であった”ということになる。

一方、筆者は、沖縄島南部・サキタリ洞遺跡から出土した最終氷期最寒冷期頃の貝類遺体から、当時の海水温は現在よりも低く、「種子島から紀伊半島程度の海域であった」と推定し(黒住, 2018a)、上記の黒田・小澤(1996)の見解とは異なることを示した。上記の石川市山城を含む沖縄島中部の貝化石群の正式な論

文発表が待たれ、それに基づいて、再度完新世の海水準を議論する必要があるだろう。

ただ、前述のように、西表島のクラマドガイの産出から縄文海進期の高海水準も想定されるものの、今回の大嶺村跡の堆積物からは、VI層とV層のサンプル採取レベルは1m程度異なる程度であり、潮位差の範囲内でもあり、明瞭なそれ以上の海水準の上昇は認められないと考えられる。

結論

今回の海浜部の堆積物の貝類を中心とした分析から、およそ7,000～5,000年前頃のVI層は潮間帯中部～下部の海藻藻場を有する内湾域、V層は潮間帯上部の打上堆積物で、内湾の状況は変化せず。IV～2層は飛沫帯で風と波の営力で形成され、砂丘ではないと考えられた。このイメージを、第102図に示した。2004年の沖縄市泡瀬干潟で、広く潮位差のない潮間帯中部～下部が存在し（VI層）、岸側の砂浜にV層とIV～2層が存在するという訳である。

そして、これまでに、沖縄のサンゴ礁域、特にその内湾での海浜部の変化を貝類（化石）から具体的に示したものはなかったと思われ、今回の結果から、組成および磨滅・破損状況から、かなり詳細に環境復元ができると考えられた。また、“縄文海進期”の高海水準は明瞭には認められず、この時期から復帰以前まで海域環境に大きな変化はなかったと推測された。

謝辞：本報告の一部には、科学研究費（15H05966 代表：奈良教育大学・金原正明教授）を用いた。

引用文献

- 波部忠重・奥谷壽司(訳) 1985. アポト, R.T. & S.P. ダンス. 世界海産貝類図鑑. 442pp. 平凡社, 東京.
- 長谷川和範. 2017. オニノツノガイ科. In 奥谷壽司(編), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], pp. 100-105, 788-793. 東海大学出版部, 平塚市, 神奈川県.
- 開発法子・廣瀬光子・高川晋一. 2007. 泡瀬干潟の海岸群落モニタリング調査. 埋立事業が泡瀬干潟に与える影響と保全の提言—泡瀬干潟自然環境調査報告書一, 日本自然保護協会報告書, (95): 49-74.
- 黒住 龍二. 1987. 遺跡出土貝類の生息場所系化の試み. 古我地原貝塚. 沖縄県文化財調査報告書, (84): 359-362.
- 黒住 龍二. 1996. 用見崎遺跡のコラムサンプルから得られた貝類遺存体(予報). 用見崎遺跡, 熊本大学文学部考古学研究室活動報告, (31): 31-37.
- 黒住 龍二. 1999. 1998年のナガラ原東貝塚調査で得られた貝類遺存体(予報). ナガラ原東貝塚. 考古学研究室活動報告, (34): 40-48. 熊本大学文学部.
- 黒住 龍二. 2001. 伊是名貝塚の貝類分析. In 伊是名貝塚学術調査団(編), 伊是名貝塚, pp.328-345. 勉誠出版.
- 黒住 龍二. 2010. 伊礼原E遺跡から得られた貝類遺体. 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (31): 41-56. 北谷町教育委員会, 沖縄.
- 黒住 龍二. 2014. 貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化. In 高宮広上・新里貴之(編), 琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究, 研究論文集, 第2集, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷, pp. 55-70. 六一書房.
- 黒住 龍二. 2018a. サキタリ洞遺跡出土の貝類遺体. In 山崎真治(編), サキタリ洞遺跡発掘調査報告書1, pp. 173-189. 沖縄県立博物館・美術館.
- 黒住 龍二. 2018b. 貝類遺体からみた宮ノ浦遺跡—第6・7次発掘調査—, 愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡—第6・7次発掘調査報告一, 愛媛大学法文学部考古学研究室報告, (14): 87-106.
- 黒住 龍二・大須賀 健. 2007. 泡瀬干潟とその周辺地域における貝類を中心とした動物の生息密度調査. 埋立事業が泡瀬干潟に与える影響と保全の提言—



第102図 大嶺村跡の海浜部の復元イメージ. 沖縄市泡瀬干潟 (2004年)

泡瀬干潟自然環境調査報告書、日本自然保護協会報告書、(95): 115-128.

黒田登美雄・小澤智生、1996. 花粉と海生動物化石からみた琉球列島の第四紀の環境変動. 月刊地球, (206): 516-523.

小菅文治、2000. 西表島のクラマダガイ. ちりぼたん 31(2): 39-44.

松田順一郎、2007. 伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地層遺跡. 伊礼原遺跡. 北谷町文化財調査報告書, (26): 44-60.

松島義章、1984. 日本列島における後氷期の浅海性貝類群集—特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷—. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学)(15): 37-109.

中村 恵、1989. 伊礼原 B 遺跡. 北谷町文化財調査報告書, (8): 1-54, 24 pls. 北谷町教育委員会. 沖縄. 中村, 1989

大城造朗、1987. 失われた生物—沖縄の化石—, シリーズ沖縄の自然④. 126 pp. 新星図書. 沖縄.

大城造朗、2001. 琉球列島産第四紀陸生脊椎動物遺骸の地質学的研究. 野原朝秀教授退職記念論文集, pp. 37-136. 琉球大学教育学部自然環境教育コース.

サンゴ礁地域研究グループ(編)、1990. 日本のサンゴ礁. 1. 熱い自然. xii+372 pp. 古今書院.

土田英治・黒住耐二、1997. 奄美諸島地島、島の海岸の貝類: 特に外洋性砂浜群集について. ちりぼたん 27(3-4): 75-81.

ウルマ貝類調査グループ、2007. 泡瀬干潟とその周辺域の貝類相. 埋立事業が泡瀬干潟に与える影響と保全の提言—泡瀬干潟自然環境調査報告書—, 日本自然保護協会報告書, (95): 99-114.

山内秀夫、1990. サンゴ礁海岸の砂. In サンゴ礁地域研究グループ(編). 日本のサンゴ礁. 1. 熱い自然, pp. 101-118. 古今書院.

山城安生・島袋春美(編)、2010. 伊礼原 E 遺跡. 北谷町文化財調査報告書, (31), 118+364 pp.

補記 1: 発掘された貝類遺体に関するコメント

大嶺村跡から出土した貝類遺体に関しては、表 93～98 に詳細な集計が示されている。種々の都合で、詳細な分析は行えなかったが、いくつかの興味深い点についてコメントしておきたい。なお、この組成は現場でのピックアップ法(見つけ採り)によるものと想定され、小形種の割合は過少評価されていることも考えられる。

グスク時代～近世(IV層)の貝類遺体

エブロン地区のね 108 グリッド中の様々な遺構(遺物廃棄土坑を含め)から多くの貝類遺体を確認されている。ウラキツギガイ・カワラガイ・リュウキュウシラトリ・オノノカガミ等の内湾干潟の二枚貝類が優占するものの、破片も多いがサラサバテイル・ギンタカハマも目立つ。一方、マガキガイ・ハナマルユキキ・シャコガイ類・ヤコウガイ・小形種を含むイモガイ類等は低い割合となっている。沖縄本島のグスク時代から増加するカンギクウモニナ類は、小形でサンプリング時の取り上げ状況に起因する可能性もあるものの、極めて少ない。アマオブネ類も僅かであり、利用されることが少なかったことと、本遺跡では海浜部に立地しているながらオカヤドカリ類の宿貝はあまり含まれていなかった可能性も示唆している。

内湾の二枚貝類のうち、ウラキツギガイが優占する傾向は、沖縄本島南西部の同時期の遺跡でも知られており(伊良波西遺跡:花城 1986, 渡地村跡:島 2012)、リュウキュウシラトリ・カワラガイが多いことは本島中部西岸の北谷町の遺跡の傾向(例えば伊礼原 D 遺跡:黒住 2008)と類似する。基本的には、サンゴ礁の干瀬までは貝類採集空間とはなっておらず、農耕に従事し海域での採集活動が制限されていた結果と考えられる(例えば黒住 2002)。ただ、サラサバテイル等の採集意図は不明である。

また、この時期のみ、シュリマイマイ等の陸産貝類と淡水産のマルタニシが 1 個体のみ、遺構群から集中して確認されている。林縁に生息するシュリマイマイは他の層や地区からは得られておらず、村のなかにはガジュマルのような木立の存在していた環境が復元される。一方、水田に生息するマルタニシの少なさは、穀類農耕の場として水田は広い面積ではなかったことを示しているのかもしれない。

この時期の他の地点・地区からの貝類遺体の出土はかなり少なく、特に同時期とされる管制塔 I 地区の V 層ではほとんど出土していない。I 地区は耕作地等と想定されており、貝類の廃棄場所ではなかったことも想定される。

戦争直後と想定されている堆積物中の貝類遺体

管制棟 I 地区の III 層は戦争直後の堆積層と考えられており、少ないながら貝類が発掘されているものの、他地区ではほとんど確認されていないようである。このことは、大嶺村の時代から人々の活動の場=貝類廃棄場所が変わった可能性もあろう。その組成でも、ウラキツギガイ・カワラガイ等の内湾の二枚貝類が激減し、マガキガイ・シャコガイ類・イモガイ類等のサンゴ礁の貝類が目立つようになっている。海域環境の変化とは考えにくく、むしろ漁業者(うみんちゅ)の確立というように捉えられるのかもしれない。

引用文献

- 黒住 嗣二 2002 「貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』p67-86 熊本大学文学部
 黒住 嗣二 2008 「伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体」『伊礼原D遺跡、北谷町文化財調査報告書』第28集 p168-183
 島弘編 2012 「渡地村跡、那覇市文化財調査報告書」第91集
 花城 潤子 1986 「貝殻」『伊良波西遺跡、豊見城村文化財調査報告書』第1集 p11-18, 64-67

補記2：圧痕等の貝類に関するコメント

本遺跡出土の遺物に関して、注意深く検討され、貝殻の含まれているものやその圧痕が認められ、記載・考察されている。ここでは筆者の受け取った状態の良い資料（与同定できる可能性のあるもの）の写真による結果について、第6章第4節表109に同定結果を示したので、簡単にコメントしておきたい。

同定できたものは、ヌノメカワニナとオオオカチョウジガイの2種の巻貝であった。

ヌノメカワニナ *Melanoides tuberculatus* (トウガタカワニナ科)

水田を含む淡水の止水域に、高密度で生息する細長い巻貝で、殻はやや厚く、殻長4cm程度で成長することもある。細長く、各層は弱く膨らみ、縫合も弱くくびれる。各層に3-4本の螺肋を有することが多いものの、螺肋数や螺肋および螺肋上の顆粒状彫刻にも強弱に大きな変異が認められる。琉球列島へは、先史時代以降に人によって水生タロイモとともに持ち込まれたと想定している（黒住 2007）。

オオオカチョウジガイ *Allopeas gracile* (オカチキレガイ科)

人家周辺や耕作地周辺の陸域に生息する細長い巻貝で、殻は薄く、殻高8mm程度の微小な種である。細長くやはり各層は弱く膨らみ、縫合のくびれも弱い。殻表はほぼ平滑。細長い陸産のキセルガイ類にも類似するが、キセルガイ類が左巻きなのに対し、この科の種は右巻きである。この種は、熱帯地域からの移入種で、サトウキビの苗等に付随して持ち込まれたと考えられてきたが（黒田 1958）、首里城銭蔵東の15世紀後半～16世紀前半の石積内から多数抽出されたことから（黒住 2016）、サトウキビではなく、他の物資に伴って中国南部から持ち込まれたものようである。

圧痕の貝類の由来

今回の観察では、圧痕だけではなく、遺物中に多くの貝殻が認められている。ただ、いわゆる土器の混和剤との判断はなされていないようであり、単に溶けていなかっただけで理解される。

陸産のオオオカチョウジガイは人家周辺にも生息し、薄質で、風等で飛ばされることも想定され、また確認数も稀であることから、考察されているように非意図的な混入の可能性が高いと思われる。

一方、淡水産のヌノメカワニナは少数ではあるものの比較的多く認められており、また1cm以上の中形の個体も多く、水田の床土のような胎土中に存在していた場合、除去されるように思われる。他の確認例もあり、むしろ意図的に用いられた可能性も想定されると考えられる。

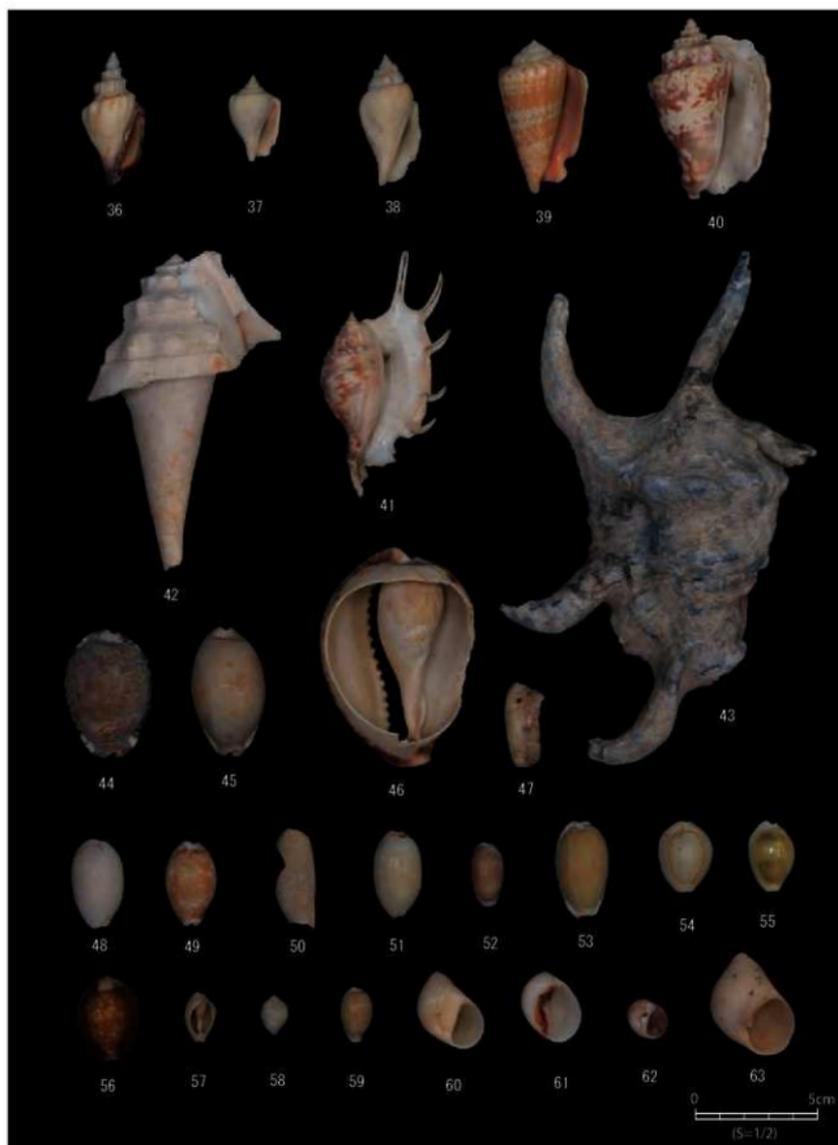
引用文献

- 黒住 嗣二 2007 「衛生淡水産貝類からみた先史時代の沖縄諸島における根栽農耕の可能性」『南島考古』26号 p121-132
 黒住 嗣二 2016 「首里城跡銭蔵東地区から得られた貝類遺体」『首里城跡、銭蔵東[地]区発掘調査報告書、沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第80集 p220-238
 黒田 徳米 1958 「日本及び隣接地域産陸棲貝類相 (4)」『Venus』20巻1号 p132-158



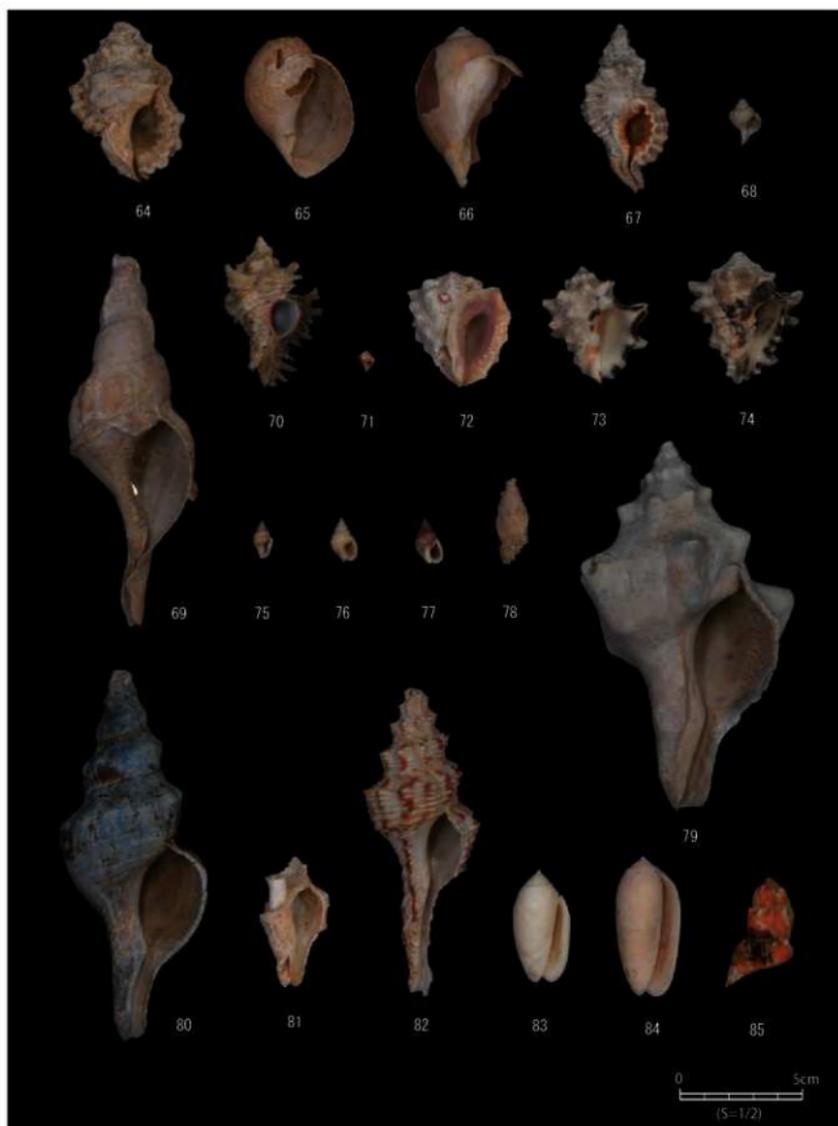
図版 77 貝類遺体 (巻貝) 1

1: 材ベッコウガキ 2: ヲコカクウ/ツ 3: ヲコカクウガキ イ 4: 依'アツ 5: ニシケル 6: キ'ツカハ 7: ツツハ'ヒ 8: 材'ウツダ'ヒ 9: ツツハ'マ 10: ヲコツツ
 11: ツツガ'イ 12: ツツガ'イ 13: ツツガ'イ 14: ツツガ'イ 15: ツツガ'イ 16: ツツガ'イ 17: ツツガ'イ 18: ツツガ'イ 19: ツツガ'イ
 20: ツツガ'イ 21: ツツガ'イ 22: ツツガ'イ 23: ツツガ'イ 24: ツツガ'イ 25: ツツガ'イ 26: ツツガ'イ 27: ツツガ'イ
 28: ツツガ'イ 29: ツツガ'イ 30: ツツガ'イ 31: ツツガ'イ 32: ツツガ'イ 33: ツツガ'イ 34: ツツガ'イ 35: ツツガ'イ



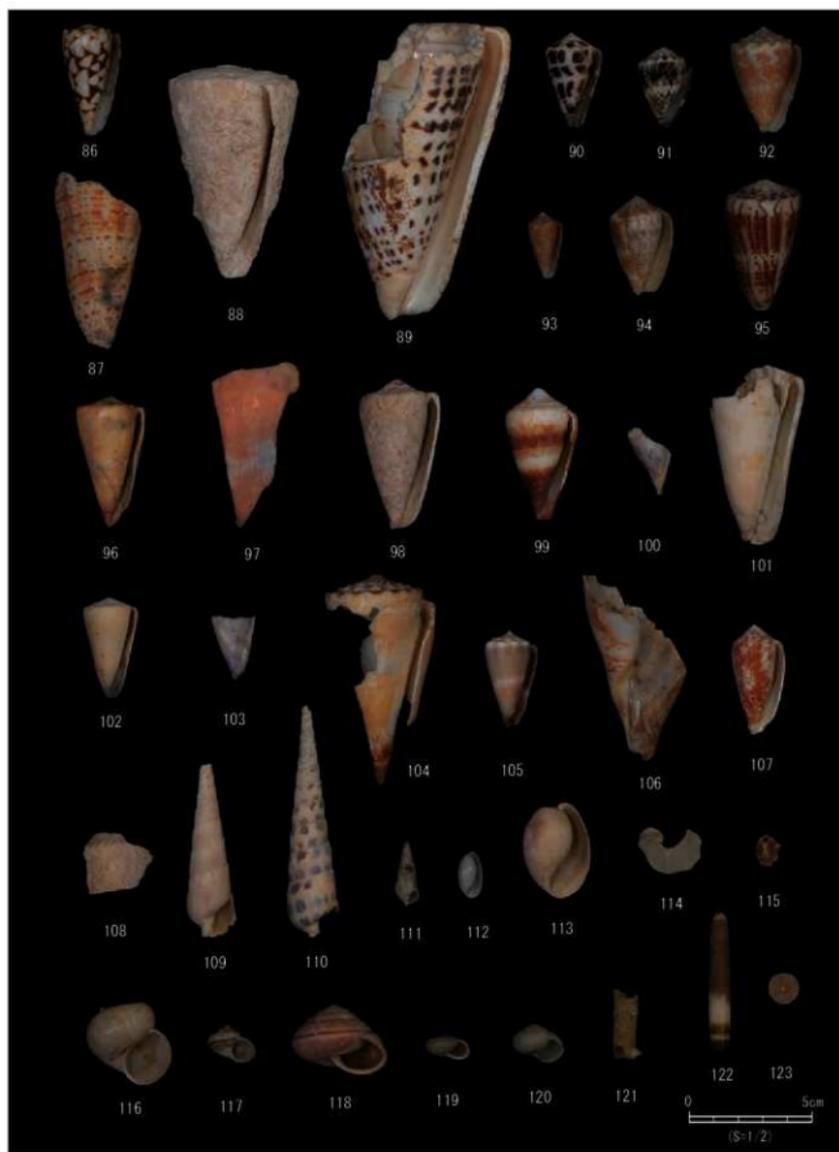
図版 78 貝類遺体 (巻貝) 2

36: 新ノ 助イ 37: 山ノ 助イ 38: 新ノ 助イ 39: 新ノ 助イ 40: 新ノ 助イ 41: 新ノ 助イ 42: 新ノ 助イ 43: 新ノ 助イ 44: 新ノ 助イ
 45: 新ノ 助イ 46: 新ノ 助イ 47: 新ノ 助イ 48: 新ノ 助イ 49: 新ノ 助イ 50: 新ノ 助イ 51: 新ノ 助イ 52: 新ノ 助イ 53: 新ノ 助イ
 54: 新ノ 助イ 55: 新ノ 助イ 56: 新ノ 助イ 57: 新ノ 助イ 58: 新ノ 助イ 59: 新ノ 助イ 60: 新ノ 助イ 61: 新ノ 助イ 62: 新ノ 助イ 63: 新ノ 助イ



図版 79 貝類遺体 (巻貝) 3

64: 科ニシ 65: ヌメノガイ 66: シロメノガイ 67: シロメノガイ 68: シロメノガイ 69: シロメノガイ 70: シロメノガイ 71: シロメノガイ 72: シロメノガイ
 73: シロメノガイ 74: シロメノガイ 75: シロメノガイ 76: シロメノガイ 77: シロメノガイ 78: シロメノガイ 79: シロメノガイ 80: シロメノガイ
 81: シロメノガイ 82: シロメノガイ 83: シロメノガイ 84: シロメノガイ 85: シロメノガイ



図版 80 貝類遺体 (巻貝) 4

86:カヨウロシカ 87:ミカドミカ 88:アホノカサメ 89:カサトキ 90:マダライ 91:マダライ 92:ササライ 93:ササライ 94:756-イ 95:ササライトキ
 96:カササシカ 97:カシカ 98:イサライ 99:ササライ 100:カサトキ 101:ササライ 102:ササライ 103:ササライ 104:ササライ 105:ササライ
 106:アホノ 107:アホノ 108:ササライ 109:ササライ 110:ササライ 111:ササライ 112:カサトキ 113:ササライ 114:ササライ 115:ササライ
 116:ササライ 117:ササライ 118:ササライ 119:ササライ 120:ササライ 121:ササライ 122:ササライ 123:ササライ



図版 81 貝類遺体 (二枚貝) 1

1: 15イ 2: 15カ 3: 15キ 4: 15ク 5: 15ケ 6: 15コ 7: 15カ 8: 15キ 9: 15ク 10: 15ケ 11: 15コ
 12: 15カ 13: 15キ 14: 15ク 15: 15ケ 16: 15コ 17: 15カ 18: 15キ 19: 15ク 20: 15ケ 21: 15コ
 22: 15カ 23: 15キ 24: 15ク 25: 15ケ 26: 15コ 27: 15カ 28: 15キ 29: 15ク 30: 15ケ 31: 15コ



図版 82 貝類遺体 (二枚貝) 2

32:ツボウウ 33:ヒソウコ 34:ヒソウコ 35:ナシツボウ 36:ナシツボウ 37:ツボウコ 38:ツボウコ 39:ツボウコ 40:ツボウコ 41:ツボウコ
42:ツボウコ 43:ツボウコ 44:ツボウコ 45:ツボウコ 46:ツボウコ



図版 83 貝類遺体 (二枚貝) 3

47: 砂質 砂質 48: 石灰質 砂質 49: 石灰質 砂質 50: 石灰質 砂質 51: 石灰質 砂質 52: 石灰質 砂質 53: 石灰質 砂質 54: 石灰質 砂質 55: 石灰質 砂質
 56: 石灰質 砂質 57: 石灰質 砂質 58: 石灰質 砂質 59: 石灰質 砂質 60: 石灰質 砂質 61: 石灰質 砂質 62: 石灰質 砂質 63: 石灰質 砂質
 64: 石灰質 砂質 65: 石灰質 砂質 66: 石灰質 砂質 67: 石灰質 砂質 68: 石灰質 砂質 69: 石灰質 砂質

表 98 エブロン地区出土貝類集計表（二枚貝）2

種別	種名	1950												1951												1952												1953												1954												1955												1956												1957												1958												1959												1960												1961												1962												1963												1964												1965												1966												1967												1968												1969												1970												1971												1972												1973												1974												1975												1976												1977												1978												1979												1980												1981												1982												1983												1984												1985												1986												1987												1988												1989												1990												1991												1992												1993												1994												1995												1996												1997												1998												1999												2000												2001												2002												2003												2004												2005												2006												2007												2008												2009												2010												2011												2012												2013												2014												2015												2016												2017												2018												2019												2020												2021												2022												2023												2024												2025																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1004	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199	1200	1201	1202	1203	1204	1205	1206	1207	1208	1209	1210	1211	1212	1213	1214	1215	1216	1217	1218	1219	1220	1221	1222	1223	1224	1225	1226	1227	1228	1229	1230	1231	1232	1233	1234	1235	1236	1237	1238	1239	1240	1241	1242	1243	1244	1245	1246	1247	1248	1249	1250	1251	1252	1253	1254	1255	1256	1257	1258	1259	1260	1261	1262	1263	1264	1265	1266	1267	1268	1269	1270	1271	1272	1273	1274	1275	1276	1277	1278	1279	1280	1281	1282	1283	1284	1285	1286	1287	1288	1289	1290	1291	1292	1293	1294	1295	1296	1297	1298	1299	1300	1301	1302	1303	1304	1305	1306	1307	1308	1309	1310	1311	1312	1313	1314	1315	1316	1317	1318	1319	1320	1321	1322	1323	1324	1325	1326	1327	1328	1329	1330	1331	1332	1333	1334	1335	1336	1337	1338	1339	1340	1341	1342	1343	1344	1345	1346	1347	1348	1349	1350	1351	1352	1353	1354	1355	1356	1357	1358	1359

第3節 大嶺村跡から出土した動物依存体 一埋葬馬を中心に—

丸山真史（東海大学海洋学部）

1) 動物依存体の概要

近世の『琉球国由来記』によって、その存在が初めて確認される大嶺村は、昭和8年には日本軍小塚飛行場が建設された。出土した動物依存体は、日本軍小塚飛行場があった頃のものとして推定され、現代の動物利用について知ることができる。

動物依存体は、甲殻類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出土している（表99～102）。甲殻類はカニ類で、魚類は、サメ類、クロダイ属、タイ科、ナガブダイ、フエキタイ科、マグロ属、ハリセンボン属の7種類が出土しており、サメ類が多い。爬虫類は、ウミガメ科が大量に出土している。哺乳類は、イヌ、ウマ、ウシ、ブタ、ヤギ、ネズミ科、ジュゴンが出土しており、ブタの出土が多い。また、以下で詳述する埋葬馬1頭分の骨格部位が出土している。

2) 埋葬馬について

a) 形質的特徴

埋葬馬の依存体の保存状態は良く、骨の生々しさが残っている。日本軍が当地を使用していた頃のものとして推定され、頭部、胴部、四肢が交連状態で出土していることから、埋葬されたものと考えられる。埋葬坑は浅い掘り鉢状を呈し、体躯を横倒しにした状態で検出された。体躯の右側は地面と接し、左側が上になっており、現地表面に近い。足先や左の上腕骨、橈骨など大きな骨が出土していないことは、地表に近い部分が攪乱を受けた可能性がある（表103）。以下に、頭部、胴部、前肢、後肢に分けて、各部分の特徴を記載する。

頭部 頭蓋骨は破片となり、欠損部分があるため、全体の接合は困難である。上顎白歯および犬歯は左右すべて揃っているが、切歯が一部ない。下顎骨は左右が出土しており、切歯の歯槽は破損する。切歯、犬歯、白歯がすべて揃っている。出土した歯牙について、白歯の計測値は表104、表105に示し、観察事項は後述する。

胴部 椎骨は頸椎7点、胸椎18点、腰椎5点、仙骨1点、肋骨は34点(左17右17)とすべて揃っている。計測は行っていないが、肋軟骨も複数出土している。

前肢 肩甲骨と尺骨は左右が揃い、上腕骨、橈骨は右のみ、中手骨は左のみが出土しており、手根骨、指骨はない。上腕骨と尺骨は、左右ともに近位端が癒合していない。計測した部位は、表106に示した。

後肢 大腿骨、膝蓋骨、脛骨は左右が揃い、踵骨と距骨は右のみ出土しており、足根骨、指骨はない。大腿骨は、左右ともに近位端が癒合しておらず、遠位端は骨端線がのこる。計測した部位は、表106に示した。

b) 歯牙および歯槽の観察

以下では、切歯をI (Incisor)、犬歯をC (Canine)、前臼歯をP (Premolar)、後臼歯をM (Molar)と番号で表記し、乳歯にはd(deciduous)を各歯種に付す。この埋葬馬の歯式は、上顎がd1・d2・d3・C・dP2・dP3・dP4・M1・M2、下顎がI1・I2・dI3・C・dP2・dP3・dP4・M1・M2である。以下に、出土した歯牙について記載する。

i) 上顎歯 I2・I3・C・P2・P3・P4・M1、M2、M3、およびd1,d2,d3,dP3、dP4が出土しており、これらのうち左はd3がないが、他は左右揃っている。dP2が脱落し、P2の咬耗は若干の進行をみるが、咬合面はまだ丸みを帯びている。M1、M2は咬耗が一定進行し、咬合面が平坦化している。dP3の歯根は消滅しており、脱落する頃と推定される。C・P3・P4・M3は咬耗が進行しておらず、未萌出の状態である。左右のdP3、dP4の象牙質に孔があり、蝕蝕の可能性がある。また、歯槽周辺は多孔質になっている。

ii) 下顎歯 左右ともにI1・I2・I3・C・P2・P3・P4・M1・M2・M3、およびdI3・dP2・dP3・dP4が出土している。M1、M2は、咬耗が一定進行し、咬合面が平坦化している。dP2、dP3の歯根は消滅しており、歯牙が脱落する頃と推定される。I1・I2・I3・C・P3・P4・M3は咬耗が進行しておらず、未萌出の状態である。左のdP4、右のdP2、dP3、dP4の象牙質に孔があり、蝕蝕の可能性がある。また、歯槽周辺は多孔質になっている。

c) 埋葬馬の特徴

表 99 動物遺存体出土集計表 (管制塔 I・II 地区)

地区	グリッド 順位	管制塔 I													管制塔 II		合計	
		区100			区101		区100			区101					—	—		
		II	III	不明	III	SK1	II	III	不明	II	III	SK2	SK3	不明	II	不明		
獣骨	イヌ										1							1
	ユキトリ							2			3					2		7
	トナリ							1										1
	ウシ							2			1							3
	ウシ or ウマ			1					1		3					1		6
	ジュゴン										1							1
	タイムイ	1																1
	ブタ			10	1	1		2	55	6	1	54	1	2	1	3		137
	ブタ or ヤギ										1					1		2
	ヤギ								1	1		4				1		7
	不明			16				1	68	3	4	42				1	1	136
	ウマ						1											1
	ネズミ									1								1
鳥骨	サメ								1		2						3	
	クロダイ	1																1
	ナガブダイ											1						1
	タイ科不明												1					1
	ハタ科不明								1					1				2
	不明								1		3		4					8
	甲殻類													1				1
骨不明													1				1	
合計 (詳細)		2	27	1	1	1	3	134	11	5	115	4	7	1	9	1	322	
合計 (グリッド)			30					148			132						322	
合計 (地区)								312							10		322	

※分類・測定は宮屋武明子による

i) 年齢・性別・体高の推定

出土したウマは、Conwall(1956)の歯の萌出段階および四肢骨の骨端癒合時期に做えば、前臼歯が乳歯から永久歯に置換し、M1、M2の咬耗が一定進行する状態であることから、生後2～3年の幼齢馬と推定される。上下顎ともに犬歯を有することから、牡馬であったと推定される。また、林田重幸・山内忠平(1952)による四肢骨の計測値による体高推定に做えば(註)、肩甲骨(右)では135～140cm、上腕骨(右)では140～145cm、橈骨(左)では140～145cm、中手骨(左)では145～150cm、大腿骨(右)では145～150cm、脛骨(右)では150～155cmと推定される。肩甲骨でやや低い体高を示すが、体高140cm以上であることは確実であり、おおよそ145～150cmと推定しておく。

ii) 馬政計画との関連について

近代国家を目指した明治からアジア・太平洋戦争まで、軍馬の育成は国家事業となり、日本在来種とされ

表 100 出土ブタ遺存体部位別集計表 (管制塔 I・II 地区)

部位	残存部	地区 グリッド 層位	管制塔 I										管制塔 II — II	合計	
			せ100		せ101		そ100		そ101						
			Ⅲ	不明	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	SK2	SK3	不明				
全身	完形	—													1
頭蓋骨	破片	Ⅲ			1										1
	基部部	Ⅲ			1										1
	頂枕	Ⅲ	1												1
	破片	不明			2				1						3
上顎骨	破片	Ⅲ			1										1
	破片	不明			2										2
歯	破片	Ⅲ	1												1
	不明	不明			1										1
肋骨	近位端	不明			1				1						2
	近位端～骨体	不明							1						1
	骨体	不明	2			5	3		2		1		1	14	
	破片	不明			1				16						17
椎骨	有筋部	—			1										1
	椎弓	—			1										1
	棘突起	—			1										1
	椎体	—			1				1						2
肩甲骨	棘突起	—			1										1
	骨体	Ⅲ			1	1		1							3
上顎骨	近位骨端	Ⅲ			1										1
	近位端	Ⅲ			1				1						2
	近位部	Ⅲ			1				1						2
	近位部	Ⅲ			1				1						2
	近位部～骨体	Ⅲ			1				1						2
	骨体～遠位部	Ⅲ			1				1						2
	遠位部	Ⅲ			1				1						2
	遠位部	Ⅲ			1				1						2
	骨体	Ⅲ	1						1			1			3
	破片	Ⅲ			1				1						2
髌骨	両骨端はずれ	Ⅲ			1										1
	近位端～骨体	Ⅲ							1						1
	遠位部	Ⅲ				1									1
尺骨	近位端	Ⅲ			1										1
	骨体	Ⅲ				1			2						3
	破片	Ⅲ							1						1
中手骨	完形	Ⅲ			1										1
	近位端	Ⅲ			1										1
	近位端～骨体	Ⅲ			1										1
	近位部～遠位部	Ⅲ			1				1						2
腕骨	骨体	Ⅲ	1						2						3
	臼部	Ⅲ			1				1						2
	椎骨部	Ⅲ			1										1
大蹠骨	近位部	Ⅲ			1										1
	遠位端	Ⅲ							1						1
	遠位骨体	Ⅲ	1								1			2	
	骨体	Ⅲ							1						1
	破片	Ⅲ	1			1	1		1						4
	破片	Ⅲ			1	1	1		1						4
脛骨	近位骨端はずれ～骨体	Ⅲ							1						1
	骨体～遠位部	Ⅲ							1						1
	遠位部	不明							1						1
	遠位部～遠位端	Ⅲ							1						1
	遠位部	Ⅲ				1									1
	遠位部骨端はずれ	Ⅲ				1									1
	骨体	Ⅲ			2				1						3
破片	不明		1					1						2	
中手・中足骨	完形	不明							1						1
	近位部～遠位骨端はずれ	不明							1						1
跗骨	骨体～遠位端	Ⅲ							1						1
	遠位端	Ⅲ							1						1
距骨	完形	Ⅲ							2						2
	破片	Ⅲ							2						2
中足骨	近位端～骨体	Ⅲ										1			1
	完形	Ⅲ				1									1
基節骨	完形	Ⅲ			1										1
	不明	不明							1						1
不明	近位端～骨体	不明							1						1
	破片	不明	2			6			12				1	21	
合計 (詳細)			10	1	1	2	55	6	1	54	1	2	1	3	
合計 (グリッド)			11	1		63			59				3	137	
合計 (地区)							134								

※分類・同定は高橋武明子による

表 102 出土ブタ遺存体部位別集計表 (エプロン地区)

部位		種別		エプロン													合計		
				E107				E108				M107		M108					
				II	SK1	SP08	SP128	II	SK1	SK2	SK3	SK1	I・II	II	II・IV	SG1			
頭蓋骨	前頭骨	破片	L	1									1					2	
	側頭骨	破片	L							1								1	
	額骨	破片	L							1	3	2	1					7	
		破片	R	1						2	1	3						7	
	側頭骨	破片	L	1									2					3	
		破片	R	1									1	1				3	
	後頭骨	破片	-	3														3	
	顔骨	破片	L								1							1	
	鼻骨	骨体	R										1					1	
顎蓋骨	破片	不明		11						1	2	24	1				29		
上顎骨	前	L															1		
	前	破片	R															1	
	前	破片	R															1	
下顎骨	前	破片	L	1														1	
	前	破片	L									2						2	
	前	破片	R								1							1	
	前	破片	R	1								1						2	
	前	破片	R												1			1	
	前	下顎関節結合部	-							1		1						2	
歯	切歯	破片	不明		1													1	
	犬歯	破片	不明							2	1							3	
助骨	前	骨体	R															1	
	前	骨体	不明							1	1	1						3	
	前	破片	不明							2								2	
椎骨	軸椎	破片	-								1							1	
	頸椎	破片	-										1					1	
肩甲骨	前	骨体～遠位端	L								1							1	
	前	骨体	R								1							1	
	前	遠位端	R										1					1	
	前	近位部	R								1							1	
上腕骨	前	完形	L									1						1	
	前	近位部	L									1	1					2	
	前	遠位骨端	L								1							1	
	前	遠位部	L								1							1	
橈骨	前	近位骨端はずれ～骨体	R										1					1	
	前	遠位端	R			1												1	
尺骨	前	近位骨端はずれ～近位部	L													1		1	
	前	骨体	R									1						1	
橈腕手根骨	前	破片	不明	2														2	
	前	完形	R								1							1	
寛骨	前	完形	L								1							1	
	前	臼部	L								1							1	
大腸骨	前	近位部	L									1						1	
	前	遠位部骨端はずれ	L									1						1	
脛骨	前	遠位端	L									1						1	
	前	遠位部	L				1											1	
	前	破片	R								1							1	
踵骨	近位骨端はずれ～骨体	L										1					1		
距骨	完形	R									1						1		
中足骨	完形	L						1									1		
中部骨	完形	R												1			1		
不明	前	遠位部	不明									1						1	
	前	破片	不明		1	2					2	1	1	1				8	
合計 (詳細)					3	24	1	1	1	1	7	16	22	42	7	1	2	1	
合計 (グリッド)																			29
																		88	
																		7	
																		4	
																		128	

※分類・同定は喜屋武明子による



图版 84 右上顎齒列



图版 85 左右下顎齒列



图版 86 右上下顎骨

表 103 埋葬馬の出土部位

部位	部分	左右	備考
頭蓋骨(上顎骨)	破損	-	歯列は表 6 参照
下顎骨		左右	歯列は表 7 参照
椎骨	完形	-	頸椎 7, 胸椎 18, 腰椎 5
仙骨	完形	-	
肋骨	完形	左	左 17 点
肋骨	完形	右	17 点
肩甲骨	完形	左	
肩甲骨	完形	右	
上腕骨	完形	左	未癒合(近位端)
上腕骨	完形	右	未癒合(近位端)
橈骨・尺骨	完形	右	未癒合(近位端)
尺骨	関節部	左	未癒合(近位端)
中手骨	完形	左	
寛骨	腸骨一部欠損	左	
寛骨	完形	右	
大腿骨	大転子欠損	左	未癒合(近位端)、癒合中(遠位端)
大腿骨	完形	右	未癒合(近位端)、癒合中(遠位端)
膝蓋骨	完形	左	
膝蓋骨	完形	右	
脛骨	完形	右	
距骨	完形	右	
踵骨	完形	右	

表 104 上顎歯の計測値 (mm)

上顎 永久歯	左						右					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	未萌出	29.7	29.3	未萌出	萌出中	-	-	萌出中	未萌出	29.3	29.8	未萌出
歯冠幅		25.1	25.8							25.6	23.2	
臼歯列長												
全臼歯列長												
乳歯							dP4	dP3	dP2	dP2	dP3	dP4
歯冠長							26.9	-			27.9	27.2
歯冠幅							24.0	23.9			24.2	24.2

表 105 下顎歯の計測値 (mm)

下顎 永久歯	左						右					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
歯冠長	未萌出	31.4	29.3	未萌出	萌出中	萌出中	萌出中	萌出中	未萌出	30.7	31.6	未
歯冠幅	-	12.4	13.9							13.9	12	
臼歯列長												
全臼歯列長												
乳歯							dP4	dP3	dP2	dP2	dP3	dP4
歯冠長							27.9	-	31.8	32	28.2	26.8
歯冠幅							14.5	-	14.3	13.9	13.8	17.7

表 106 大嶺村跡出土ウマ計測値 (mm)

部位	項目	左	右
肩甲骨	GLP	101.2	100.3
	SLC	63.9	63.6
	HS	335.0	340.7
	DHA	344.9	344.1
	Ld	-	176.9
上腕骨	Bp	98.9	100.5
	SD	39.8	39.1
	Bd	88.6	87.1
	GLC	295.3	249.2
	GLI	304.6	306.9
橈骨	Bp	93.1	-
	BFp	82.7	
	SD	42.1	
	Bd	80.3	
	GL	362.4	
	PL	339.2	
尺骨	DPA	65.4	63.8
	SDO	50.0	49.9
橈骨・尺骨	LO	不可	不可
	GL	不可 (未適合)	不可 (未適合)
中手骨	GLI		
	Bp	58.3	-
	Dp	38.9	
	SD	36.4	
	Bd	52.9	
	GL	240.7	
	GLI	237.4	
Ll	230.2		

部位	項目	左	右
寛骨	GL	412.9	-
	SH	49.4	47.3
	Lfo	68.3	68.9
	LS	184.2	186.6+
	LA	73.1	72.5
	SB	29.5	30.1
	GBA	247.000	
	GBI	114.1	
	GBTI	190.6	
	BFcr	51.6	
仙骨	HFcr	22.000	
	Bp	-	131.7
大腿骨	SD	46.48	45.7
	Bd	102.5	4
	GL	-	426.5
	GLC	388.01	390.3
膝蓋骨	GL	77.97	78.3
	GB	76.28	78.0
脛骨	Bp	-	103.2
	SD		46.2
	Bd		84.0
	Dd		50.7
	GL		386.8
距骨	Ll		350.0
	GH	-	68.2
	GB		73.4
	ImT		65.9
BFd	58.1		
踵骨	GL	-	124.8

第4節 大嶺村跡出土資料の土器等圧痕について

小畑弘己^{*}・大塚皓平

※(熊本大学大学院人文社会科学研究所)

はじめに

沖縄県那覇市大嶺に所在する大嶺村跡から出土した近世・近代の瓦質土器と沖縄産無軸陶器、陶質土器、瓦質土器、瓦、及び左記加工の円盤状製品の胎土に混入した混和物について、圧痕法を用いて、検出を行った。本論はその成果の報告である。

1. 対象資料と調査方法

(1) 調査対象資料

今回調査した資料は、平成28年の発掘調査によって、大嶺村跡から出土した土器をはじめ、沖縄産陶器・瓦質土器・陶質土器・瓦・円盤状製品12,655点を対象とした。その結果、1点の大型不明種実(図103:3)を除き、イネ粃と巻貝が判明したので、それぞれ1点ずつのレプリカを作成して、観察を行った。このイネ粃および巻貝は、肉眼観察により、表面に露出しているもののみ、その点数を個体ごとに計数を行った。

(2) 調査方法

圧痕調査および調査後の作業手順は、以下のとおりである。なお、この手法は基本的に、印象材以外は、福岡市埋蔵文化財センター方式(比佐・片多2005)と同じものである。

①資料土器のうち、種実圧痕と思われる資料1点と、混和材として混入しているイネ粃および巻貝を肉眼と実体顕微鏡で1点ずつ選択する。

②圧痕部を水で洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。

③離型剤(バラロイドB-72 5%アセトン溶液)を圧痕部に塗布し、シリコンゴム:アグサジャパン株式会社製ブルーミックスソフトを圧痕部に充填する。

④やや硬化したシリコンゴムをマウント(走査型電子顕微鏡用ピントタイプ試料台)に盛り、圧痕部と接合して硬化させる。

⑤硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。

⑥作製したレプリカを走査型電子顕微鏡(日本電子製JCM-5700型)で観察・撮影・同定する。

⑦デジタルマイクロスコープ(KEYENCE VHX-2000)の2点間計測機能を用いて種実の長さ・幅・厚さを計測する。

2. 調査成果

検出した資料は、表107から109のとおり、イネ粃9点、巻貝25点、不明種実1点である。

イネ *Oryza sativa* 粃

長さ7mm、幅3mmほどの紡錘形の種実であり、中央長軸に幅1.5mmほどのゆるい隆起部がみられる。その表面には乳頭状突起が列状に配置されている。イネであるが、厚さ1.18mmと、扁平であり、果実は入っていない可能性があり、粃殻と判断した。側辺部に劣化が認められ、護穎も除去されていることから、脱粒後のものと判断される。

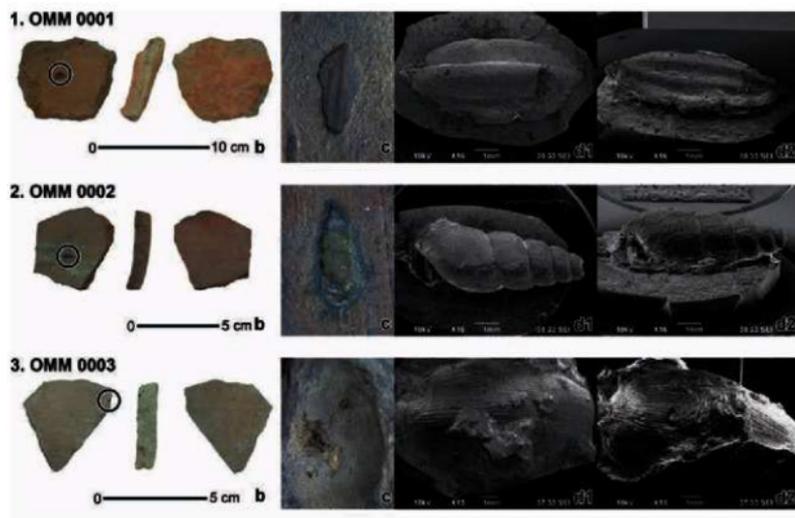
オオオカチョウジガイ *Allopeas gracile*

オカクチネレガイ科の腹足類で、琉球列島の陸域に広く分布する種である。

不明大型種実

長さ1cmを超える長楕円形の種実である。厚さ・幅は不明である。表面に細かな縦方向の溝が多数走る。着点らしきものが観察できるが、種は特定できなかった。

(小畑)



第103図 大嶺村跡土器圧痕・レプリカSEM画像

表107 大嶺村跡出土土器等圧痕属性表

遺物番号	資料番号	注記	種類	器形	検出面	圧痕の種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備 考
1	OMM 0001	エブロン地区表辰	精	大鉢	内面	イネ粉	7.20	3.41	1.18	
2	OMM 0002	カンセイイネ地区2・3層	精	余(陶器)	内面	オオカキウツボイ	6.97	2.64	2.48	
3	OMM 0003	エブロン地区 Tr.2層	精	瓦(平瓦)	内面	不明大型種実	12.08	6.19幅	4.53厚	

※微損部

3. 考察

イネ粉が確認された資料は、瓦質土器 137 点中の 9 点だが、混入している資料では、表層圧痕だけでも 1 点中に多いものでは 64 箇所ものイネ粉が確認されている。またイネ粉が確認されているのは沖縄産の瓦質土器のみで、後述の巻貝と両方が確認される資料は確認されなかった。このような諸要素から、製作者が気づかずに混入したとは考えにくく、意図的な混入の可能性が挙げられる。意図的に混入する目的として、イネ粉に含まれるシリカ分によって胎土の強化を図ることが挙げられる。

これに対し、巻貝圧痕は 10,000 点以上の資料中から 23 点と確認された資料が少ないことに加え、少なくとも表層では資料 1 点中に多くても 2・3 箇所程度で、ほとんどが 1 箇所のみである。また第 6 章第 1 節の混入貝の放射性炭素年代測定の結果からは、貝化石が胎土の原料中に含まれる可能性も低い。黒住氏はヌメカワニナについて意図的な混入の可能性を指摘しているが（第 6 章第 2 節）、現状ではいずれの陸棲及び淡水棲巻貝も陶器製作中に混ざったものであると考える。同様に不明大型種実も 1 点のみであることから、偶然混入したものと推測される。

4. まとめ

大嶺村跡から出土した沖縄産の陶器類から、イネ粉、陸棲及び淡水棲巻貝、不明種実圧痕が確認された。確認された圧痕の量的特徴などから、イネ粉は意図的、陸棲巻貝及び不明種実は非意図的な混入と考察した。

イネ籽では湧田古窯跡、淡水棲巻貝では新里による報告がみられるが（沖縄県教育委員会編1993、新里2015）、現状では類例が少ないことからあくまで推測に域を出るものではなく、今後の類例増加と研究の進展を期待したい。

(大塚)

参考文献

沖縄県教育委員会編1993「湧田古窯跡（I）—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査—」沖縄県文化財調査報告書第111集
新里貴之2015「トカラ列島・横当島の遊居跡」本田道輝先生退職記念事業会編『Archaeology from the South, 3』p317-330

表 108 大嶺村跡出土イネ籽圧痕確認資料一覧

地区名	グリッド	遺構名	ナンバリング名	分類	器種	部位	確認点数	備考
エブロン	ね108	SE3	オオミネNo236エフTr2 ね108SE3下層 160512	瓦質土器	不明	不明	64	第77図235
エブロン	の108	SG1	オオミネNo265エフTr3 の108SG1内Ⅱ層 160601	瓦質土器	火炬・火取	口～底部	19	第94図290
エブロン	の108	SG1	オオミネNo286エフTr3 の108IV2層SG1内 160620	瓦質土器	火炬・火取	口縁部	49	第94図291
エブロン	ね108	SE2	オオミネNo324エフTr2 ね108SE2ウラゴメ 160712	瓦質土器	不明	口縁部	25	掲載外
エブロン	ね108	SK1	オオミネNo214エフTr2 ね108SK1 160427	瓦質土器	火炬・火取	口縁部	15	掲載外
エブロン	不明	不明	オオミネNo214エフウツ サイ 160712	瓦質土器	火炬・火取	胴部	31	掲載外
エブロン	不明	不明	オオミネNo214エフウツ サイ 160712	瓦質土器	火炬・火取	胴部	14	掲載外
エブロン	不明	不明	オオミネNo214エフウツ サイ 160712	瓦質土器	火炬・火取	胴部	6	掲載外
エブロン	不明	不明	オオミネNo214エフウツ サイ 160712	瓦質土器	火炬・火取	胴部	2	掲載外
イネ籽圧痕確認資料総点数:							9	/137 (6.6%)

表 109 大嶺村跡出土巻貝圧痕確認資料一覧

地区名	グリッド	遺構名	ナンバリング名	分類	器種	部位	確認 点数	備考
管制塔 I	せ100	SD1	オオミネNo267かん1せ 100SD1 160602	陶質土器	火炉・火取	底部	1	第16図3
管制塔 I	そ100	III	オオミネNo262かん1そ 100III2-3層上面 160531	陶質土器	蓋	底部	1	ヌノメカワニナ
管制塔 I	そ100	III	オオミネNo156かん1そ 100III2-3層160408	沖縄産無釉陶器	壺	底部	2	
管制塔 I	そ101	III	オオミネNo276かん1そ 101III2-3層160608	沖縄産無釉陶器	蔵骨器(身)	胴部	1	第42図86
管制塔 I	そ101	III	オオミネNo276かん1そ 101III2-3層160608	円盤状製品	—	胴部	1	
管制塔 I	せ101	II	オオミネNo124かん1せ 101II2層160405	沖縄産無釉陶器	播鉢	底部	3	年代測定 ヌノメカワニナ
管制塔 I	せ101	II	オオミネNo124かん1せ 101II2層160405	瓦質土器	不明	不明	1	第47図151
管制塔 I	そ100	II	オオミネNo158かん1そ 100II2層160408	陶質土器	火炉・火取	胴部	1	
管制塔 II	—	II	オオミネNo107かんII 層160402	瓦	平瓦	狭端部	3	
管制塔 II	—	II	オオミネNo234かんII 層ヒカシ側コガ160512	円盤状製品	—	完形	1	
エブロン	ね108	SE1	オオミネNo183エブTr1 ね108SE1井ヅツ	沖縄産無釉陶器	甕	胴部	1	第69図179
エブロン	ね108	SE1	オオミネNo108エブTr1 ね108SE1 160402	沖縄産無釉陶器	壺もしくは甕	底部	1	第69図180
エブロン	ね108	SE1	オオミネNo321エブTr1 ね108SE1井ヅツ	沖縄産無釉陶器	植木鉢	口～底	2	第69図181
エブロン	ね108	SE1	オオミネNo183エブTr1 ね108SE1井ヅツ	瓦質土器	火炉・火取	口～底	1	第70図182
エブロン	ね108	SE1	オオミネNo183エブTr1 ね108SE1井ヅツ	沖縄産無釉陶器	不明	底部	3	ヌノメカワニナ
エブロン	ね108	SE1	オオミネNo132エブTr1 ね108SE1井ヅツ	瓦	丸瓦	筒部	3	年代測定 ヌノメカワニナ
エブロン	ね108	SE2	オオミネNo324エブTr2 ね108SE2ケラゴメ	瓦質土器	不明	口縁部	2	第72図205
エブロン	ね108	SE2	オオミネNo198エブTr2 ね108SE2ケラゴメ	瓦	平瓦	広端部	1	第73図206
エブロン	ね108	SE2	オオミネNo209エブTr2 ね108SE2 160426	瓦	平瓦	広端部	2	第73図207 ヌノメカワニナ
エブロン	ね108	SE3	オオミネNo179エブTr2 ね108SE3 160420	沖縄産無釉陶器	播鉢	口縁部	2	第77図231 ヌノメカワニナ
エブロン	ね108	SK1	オオミネNo176エブTr2 ね108SK1 160420	陶質土器	火炉・火取	底部	1	第84図265
エブロン	の108	SG1	オオミネNo286エブTr3 の108IV2層SG1内 160620	沖縄産無釉陶器	壺	底部	1	第93図284
エブロン	ね107	II	オオミネNo70エブTr2ね 107II 160329	瓦	平瓦	胴部	1	
エブロン	ね107	II	オオミネNo70エブTr2ね 107II 160329	瓦	平瓦	胴部	1	
エブロン	ね107	II	オオミネNo70エブTr2ね 107II 160329	瓦	平瓦	胴部	2	

貝圧痕確認資料総点数: 25/12,617(0.18%)

※備考欄の貝種は黒住耐二氏同定

第7章 総括

第1節 地層の年代観と古環境

今回の発掘調査では、I層からVI層までの地層を確認することができた。これら各地層について、調査所見に加えて、年代測定値（第6章第1節）と黒住氏の研究成果（同第2節）を加味すると、それぞれ下記のような地層と理解される。

- I層：客土。現代の構造物片やガラス・プラスチックなどが多量に包蔵している。
- II層：客土。近世・近代を主体にそれ以前の遺物や現代の構造物やガラス・プラスチックなどが多量に包蔵している。管制塔I地区では米軍那覇飛行場のアスファルト道路も検出された。
- III層：砂層。管制塔I地区で堆積が確認されるほか、管制塔I地区V層とエプロン地区IV層で検出された遺構の埋土もこの砂層である。3つに細分されるが、出土遺物は近世・近代の陶磁器類などで大きな違いはみられない。放射性炭素年代では約300～70年前頃という結果が得られている。これら出土遺物や理化学年代に加え、土中に多量の炭・焼土が含まれることを加味すると、戦災によって消失した大嶺村の家屋や家財道具等を、昭和20（1945）～21（1946）年に行われた米軍那覇飛行場建設に伴う造成によって攪乱することによって形成したと解釈できる。
- IV層：砂層。エプロン地区にみられる地層で、遺構検出面である。大嶺村期の様々な遺構に加え、遺物も近世・近代頃の陶磁器類などが多量に得られている。2つに細分でき、下層のIV-2層に検出された遺構からは約1,200～1,000年前ごろの理化学年代値が得られていることから、この地層に弥生～平安並行時代後半からグスク時代頃の遺構も残されていた可能性が挙げられる。
- V層：砂層。管制塔I地区・エプロン地区にみられる地層で、黒住氏の研究では潮間帯上部の砂層と理解されている。IV層とは平面的にモザイク状に検出されたため、調査において厳密に掘り分けながら調査することはできなかったが、遺物には弥生～平安並行時代の土器が出土している。放射性炭素年代では、管制塔I地区で約900～750年前、エプロン地区では約2,900～1,950年前頃の年代値が得られており、出土土器の年代観と概ね一致している。
- VI層：貝殻とサンゴ化石で構成された粗砂層。エプロン地区で確認された地層で、無遺物層である。黒住氏の研究によると、潮間帯中部から下部で海草藻場を有する内湾域だったと推定している。放射性炭素年代では、約7,200～4,800年前頃の年代値が得られている。

以上の結果から、理解されるのは以下のとおりである。

- ① 人為的な営為によって形成された層はI～III層で、そのうちIII層のみが砂層である。これはIV層以下の地層を基地造成によって削平したことによって形成された。それに対してIV～VI層は自然堆積の砂層と理解される。
- ② VI層は形成当時水面下で遺構・遺物ともに確認されなため、旧表土下の地山層である。

第2節 大嶺跡跡で検出された遺構

SD 管制塔I地区で4基が検出されている。これらは方形の区画を形成し、大嶺村民俗地図と照合すると概ね土地区画の方向と一致することが確認されるため（第105図）、区画溝と考えられる。また、平成21年度那覇市調査箇所でも溝が検出されているが、これらは概ね北西～南東軸であり、やはり大嶺村の街区の軸方向と概ね整合している。

SK 管制塔I地区とエプロン地区で多数が検出されている。これらのうちで性格が分るのが管制塔I地区SK I・2とエプロン地区SK Iである。管制塔I地区SK I・2は、それぞれウマとブタ幼獣の埋葬土坑である。特にSK Iに埋葬されたウマは、丸山氏によると日本及び沖縄の在来種より大型であることから外来種と理解されるとのことである。さらに乳歯には細菌も確認され、飼育管理に問題があった可能性がある。以上の所見からは、1936（昭和11）年より農林省馬政局が進められていた「第2次馬政計画」に関連する可能性が指摘されている（第6章第3節）。検出地点は小禄飛行場前は屋敷等の区画内であるため（第105図）、小禄飛行場敷設後に埋葬されたと想定される。またエプロン地区SK Iは廃棄土坑で、様々な生



第 104 図 大嶺村跡主要遺構分布図 1 (S=1/3000)



第 105 図 大嶺村跡主要遺構分布図 2 (S=1/3000)

(背景：大嶺村民俗地図（大嶺向上会編 2008、1945年1月米軍航空写真）

生活用品や食糧残滓が出土した。屋敷区画内に位置しており、個人単位の廃棄場所であったとみられる。

SP エブロン地区で100基以上が検出されている。隅丸方形で断面平坦形の礎石抜け穴と想定されるものと、略円形で断面掃鉢状の柱穴もしくは植栽痕と目されるものが認められる。ただし明確なプランを確認することはできなかった。またIV-2層検出遺構と、IV-1層でも遺構埋土が黒色のSP42・59は、大嶺村以前の可能性がある。

SE エブロン地区で3基が検出されている。SE1・2はほぼ構造や出土遺物から想定される構築年代とも差異はみられないが、SE1は地山の泥岩(クチャ)層に達してもなお下まで掘り込まれており、掘削深度に違いがみられた。一方でSE3は最下部以外は井筒が残されておらず詳細は不明であるが、埋土がSK1に切られることからSE1・2より古い可能性が指摘される。

SL エブロン地区から2基が検出されている。平面形は大きく異なるが、ともに焼土の混じる炭層が確認されている。

SF エブロン地区から1基が検出されている。ほぼ東西方向に轍2条が平行に残る。SKを切ることに加え、大嶺村の道とも方向が一致しないため、戦前・戦中・戦後直後のものである。

SG エブロン地区から1基が検出されている。ほとんどはII層によって埋められているが、下層部には水性堆積の痕跡が確認された。出土資料の残存状況も極めて良好である。この池は大嶺村の民俗地図上でも確認することができる(第105図)。

第3節 大嶺村跡出土の遺物

1 陶磁器

中国産陶磁器 青磁・白磁・青花磁器・褐釉陶器などが出土している。主体は18～19世紀の徳化窯系の白磁と青花磁器で、年代的に大嶺村期のものである。これらの資料は県内の同時代の遺跡から出土するものと同様である。一方で、僅かではあるが14世紀末から15世紀前半頃の青磁(20～22、図版33、164、189)やこれを素材とする円盤状製品(109、114)と15世紀の白磁(24)、16世紀の青花(191)も出土しており、瀬戸哲也氏の編年でIV～V期とされる一群である(瀬戸ほか2007)。出土層位は同時代のもではなかったが、調査区周辺にこの時期の遺跡が存在する可能性を示す。

日本産陶磁器 白磁・染付・施釉陶器・無釉陶器などで、沖縄産陶器と並んで出土遺物の主体をなす。ほとんどの資料は近代の瀬戸・美濃系で、ほかに肥前系と砥部産のいわゆるスンカンマカイである。また僅かではあるが、日本硬質陶器社(現ニッコー(株))製の洋食器(59)や、統制番号のある国民食器(図版26)も確認されている。

沖縄産陶磁器 施釉陶器・無釉陶器が出土しており、出土遺物の主体を占める。施釉陶器はコバルトが利用されるものも多いため近代が主体である。無釉陶器は詳細な年代は判然としないが、県内の近世・近代遺跡と相違はみられない。なお、僅かだが野子甕片も確認されており、調査区周辺に古墓が存在している(もしくはしていた)ことを示している。

瓦質土器・陶質土器 瓦質土器には日本産と沖縄産とが確認され、主に植木鉢や火炉などがみられる。陶質土器は沖縄産に限られる。小畑氏の研究により、沖縄産瓦質土器の中にはイネ耨り痕の残る資料が数点確認された(第6章第4節)。このような胎土の資料は、湧田古窯跡出土資料に類例がみられる。

2 土器

先史時代土器が僅かに出土する。縄文時代後～晩期は胴部片が得られている。弥生～平安並行時代では、前半期に位置づけられる浜屋原式もしくは大当原式(297・300)、後半期のフェンサ下層式(299)が出土している。また、グスク時代の土器も確認され、出土層位から原位置ではないものの、大嶺村跡に先史時代から人々が居住したことを確認することのできる資料である。

3 その他の遺物

石器 剥片石器(93)や敲石磨石類(315)、台石(10・152、274)などが出土している。剥片石器の出土は縄文時代前期から晩期、弥生～平安並行時代後半期に限られることから(大塚2014)、出土土器とを加味してこれらの時期の資料と目される。

瓦 明朝系瓦と近代瓦とが確認される。明朝系には灰色と赤色とが認められる。また「儀」銘のある瓦(97)が1点確認されている。

煙管・磁器製品・道具等 煙管は施釉陶器製の雁首1点(107)のみである。磁器製品には戦中の金属製品代用品である磁器製おろし器がみられる(104・105)。道具等には、西洋人形(106)・泥面子(132～135)・ミニチュアおろし器(138)などが確認された。

円盤状製品 中国産陶磁器や瓦、ガラス製など多種多様な素材が利用される。加工方法には、周縁を打刺するもの(7,108～114,208,210,269,293～295,317)と、側面を研磨するもの(115など)が認められた。また形状にも略円形(7,108～115,208,210,269,293,295,317)のものと略方形(209,294)のものがある。

金属製品 器種に分かるものには、把手金具(116)、瓶の蓋(117～119)、鍵(121)、鉄(123)、指輪(185)、簪(236,296,318)などが出土している。特に瓶の蓋は多くの資料が出土した。銭貨は寛永通宝に限られる。(125,187,237,270)

木製品 SE 1・2から桶状の製品(187)や木製具・建材と目される資料(212～214)などが得られている。

ガラス製品 多くの資料が出土しており、瓶や窓ガラスなどが確認される。特に瓶には高標の残る資料も多く確認することができた(第106図)。1・2はわかもと製菓「わかもと整腸薬」で昭和4(1929)年以降。3は山発商店の白髪染め「るり羽」で明治44(1911)年以降。4は尾澤商店の皮膚薬「外用全治水」で明治～大正年間。5は参天堂「大学目薬」で明治30(1897)～大正年間。7は鈴木商店「味の素」で1909(明治42)年以降。8～10は大日本麦酒株式会社のビール瓶で、9・10は「DAINIPPON BREWERY CO LTD」銘で明治39(1906)年～昭和24(1949)年。12以降は詳細不明。

歯ブラシ 今回の調査で出土した骨製品とプラスチック製品はほぼ歯ブラシに限られ、中には有銘資料もみられる(第107図)。1は詳細不明。2は「クロバー歯刷子B公一四號品」。3・4は「すずらん」。

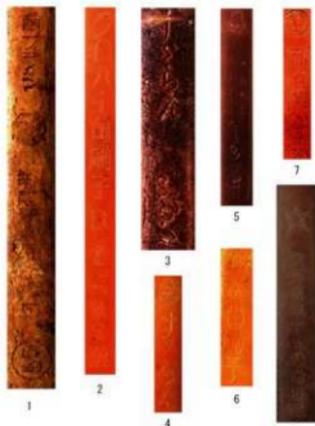


第106図 大嶺村跡出土有銘ガラス瓶(S=1/3)

5は不明。6は「銀歯歯刷子」。7は「百貨店特製」で那覇の円山号百貨店製とみられる。8は「陸軍第四十五聯隊酒保」で、同連隊が熊本・鹿児島県で徴用された部隊であることから、配属者が大嶺村もしくは小嶽飛行場に赴任したことを示す資料である。

石製品・石造物・石材 石製品には砥石(127～129,271)を主体に、石盤(130)や硯(319)が得られている。石造物は礎石や建材などがあり、いずれも大嶺村の時期のものとして目される。利用石材は県内近隣の細粒砂岩(ニービ)製などが多いが、石器・石製品には遠隔地石材の輝緑岩や県外産とみられる粘板岩なども散見される(表110)。一方で石造物には遺跡前面の海砂性凝固物や石灰質砂岩などが確認される。前者は大嶺海岸の石切場跡でも確認された石材であるため(那覇市市民文化局文化財課編2018)、ここから大嶺村に石材が供給された可能性が挙げられる。

出土石材は多岐に渡る。大半は遺跡近隣で得られる細粒砂岩や琉球石灰岩だが、一部遠隔地石材の火成岩類や変成岩類もみられる。



第107図 大嶺村跡出土有銘歯ブラシ(縮尺不同)

表 110 石材別石器・石製品・石造物・石材集計表

	石器				石製品								石造物				石材	総計		
	砕片	凝石	凹石	白石	礮	石球	石盤	磁石	磁石?	有孔石製品	香炉	不明	井筒	石柱?	礎石	礎石?			礎材	不明
火成岩	安山岩?												1				7		1	9
	角閃石石英安山岩																		1	1
	輝緑岩	1			1															3
変成岩	粘板岩				1		5												1	7
	千枚岩																			9
	千枚岩?																		1	1
	片岩																			5
	黒色片岩																			2
	緑色千枚岩																			2
堆積岩	緑色片岩																			2
	赤色片岩																			1
	スコリア																			26
	スコリア?																			3
	礫石							1					1							6
	チャート	1																		1
	頁岩					1		1					2							2
	礫砂岩								1											1
	凝灰岩																			1
	細粒砂岩	2	1	2				1	1	1			5	2	1	8	10	7	25	248
	粗粒砂岩?																			2
	中粒砂岩	4		1		1													1	25
	中粒砂岩?							1												1
	片状砂岩																			8
	礫質砂岩																			1
	石灰質砂岩																			3
	珪砂性凝灰岩							1				1		1					2	10
	サンゴ石													3					12	2
	珪砂性凝灰岩																		1	1
古生代石灰岩																			16	
不明																			1	
総計	1	7	1	4	2	1	5	6	1	1	1	8	9	1	8	10	27	30	396	
総計																				519

※石材測定は大塚による

以上の結果により、出土遺物は以下の5つの時代の資料が確認された。

- 戦前・戦中・戦後直後 国民食器、磁器製おろし器など
- 近世・近代 中国産・日本産・沖縄産陶磁器、その他製品
- グスク時代 中国産青磁・白磁・グスク土器
- 弥生～平安並行時代 同前半期土器（浜屋原式・大当原式）、同後半期土器（フェンサ下層式）
- 縄文時代 同後期土器（大山式）、同晩期土器（仲原式）

第4節 まとめ 一発掘調査成果による大嶺村跡の環境と土地利用の変遷一

第1期：約7500～4500年前（VI層、縄文時代早期末～中期）

完新世以降の海進の影響か、管制塔・エプロン地区（ともに標高1m以下でVI層検出）ともに潮間帯中部～下部で、海草藻場が形成された内湾域だったと推定される。また管浩伸氏の研究によれば、この時代はまだサンゴ礁は海面に達しておらず（管2014）、現在より波を被るような環境だったことも想定される。なお、周辺ではこの時代の貝塚が鏡水箕原原C遺跡の標高約5m地点で検出しているため（那覇市教育委員会文化財課編2008）、少なくとも標高1～5m程度まで海進が及んだと考えられる。

第2期：約4500～2000年前（地層未確認、縄文時代後期～晩期）

徐々に離水が進み、新砂丘（V層）が形成されていく。出土土器の年代から、この時期に大嶺村跡に人が居住を始めたことが窺える。なお、周辺では縄文時代後期の遺跡に鏡水箕原原A遺跡、鏡水名座原A遺跡などがある。

第3期：約2000年前（V層、弥生～平安並行時代前半期）

離水が進み、エプロン地区は潮間帯上部の環境となる。これによりV層の砂層が形成される。先史時代の土器はこの時期のものが最も多いことから、大嶺村跡の別地点でV層が検出される箇所

は、この時代の遺跡が存在している可能性がある。周辺ではこの時代の遺跡に鏡水箕原原C遺跡がある。

第IV期：約800年前～グスク時代（IV-2層、大嶺村の起源的な集落か）

砂丘形成がほぼ完了し、エプロン地区ではビーチフェイスが形成されたことに伴い、フェンサ下層式土器の時代頃から大嶺村跡以前の集落が形成した可能性がある。さらに14世紀後半～15世紀の中国産陶磁器が出土しているが、エプロン地区の南にある丘陵は「ウフグシク」「ヤマグシク」と呼ばれること、『おもろそうし』に大嶺領主の記載があることから、大嶺にもグスクと集落が存在していた可能性を指摘することができる。なお、周辺には弥生～平安並行時代後半からグスク時代の那崎原遺跡や、同時期の中国産陶磁器が出土する瀬長グスクなどが挙げられる。

第V期：近世～近代（IV-1層、大嶺村期～字大嶺期）

ビーチフェイスを地山として、部分的に造成等も行い旧表土を形成したとみられる。徐葆光が景観を賞賛した大嶺村が形成され、海岸とほぼ平行の北西-南東方向を主軸とした街区を形成し、様々な遺構を構築した。またエプロン地区の調査成果から、近代には近隣の石切場から供給される石材も利用して井戸等を相当数増築していたことが分かる。周辺にも多くの近世・近代集落遺跡が存在するほか、「間切図」によると大嶺村東に馬場が記載されており、交通・物流上の要地であった可能性が窺える。

第VI期：戦前・戦中（IV-1層、小祿飛行場）

昭和6（1931）年より小祿飛行場の構築が開始され、徐々に増築が進んでいくとともに周辺に陣地壕や掩体壕などの付帯施設が構築された（沖縄県立埋蔵文化財センター編2015）。これに関連する遺構・遺物に、軍用の可能性のある外国種の馬埋葬跡や陸軍第四十五聯隊所属者の異動を示す歯ブラシなどが確認されている。また、今次調査では検出されなかったが、那覇市が実施した試掘調査において飛行場とみられる遺構が検出されている（那覇市教育委員会編2012）。

第VII期：戦中～戦後直後（Ⅲ層、米軍那覇飛行場）

6月上旬に米軍が小祿地域を攻略し、その後米軍那覇飛行場が構築される。この際に焼失した大嶺村の建物等をまとめて土地造成が行われたことでⅢ層が形成。これにより溝や井戸・池跡などの地下に構築する遺構の一部は破壊をまぬかれ、Ⅲ層下に埋没した。

第VIII期：戦後～現代（I・II層、米軍那覇飛行場～那覇空港）

米軍が那覇飛行場として利用、さらに昭和47（1972）年の本土復帰後は那覇空港並びに航空自衛隊那覇基地及び海上自衛隊那覇基地として利用され、今日に至っている。そして平成26（2014）年からは当発掘調査の経緯でもある那覇空港滑走路増設事業が開始され、大嶺崎及び周辺の景観は再び大きく変わりつつある。

参考文献（第2・6章を除く）

- 字大嶺向上会編 2008『大嶺の今昔』
- 新垣力 2003『沖縄出土の清陶磁器』『沖縄埋文紀要』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 大畑昭平 2014『琉球列島の石器・石器石材』新里真之・高宮広上編『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第1集】 六一書房
- 菅浩伸 2014『琉球列島のサンゴ礁形成過程』高宮広上・新里真之編『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第2集】 六一書房九州陶磁学会 2000『九州陶磁の福年』九州陶磁学会 10周年記念九州陶磁学会
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間光・松原哲志 2007『沖縄における貿易陶磁器研究-14- 16世紀を中心にして』『沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 那覇市教育委員会文化財課編 2008『鏡水箕原原C遺跡』（埋蔵文化財発掘調査ニュースNo.15）那覇市教育委員会
- 那覇市教育委員会文化財課編 2012『大嶺村跡-那覇空港消防車庫新築工事に伴う緊急発掘調査報告-』（那覇市文化財調査報告書第89集）
- 那覇市教育委員会文化財課編 2012『那覇空港内大嶺地区埋蔵文化財分布調査報告』（那覇市文化財調査報告書第92集）

報告書抄録

ふりがな	おおみねむらあと							
書名	大嶺村跡							
副書名	那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第101集							
編著者名	大堀皓平(編)、具志堅清大、玉城 綾、長嶺 均、小畑弘己、黒住耐二、丸山真史、南 勇輔、矢作健二、松元美由紀、上田圭一							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7					Tel. 098-835-8752		
発行年月日	平成31(2019)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおみねむらあと 大嶺村跡	おきなほけん 沖縄県 なほし 那覇市 あざおおみね 字大嶺 (那覇空港内)	47201	—	26°	127°	2016.03.01 ～ 2016.07.26	2,150㎡	那覇空港事務所 管制塔庁舎 新築工事等に 伴う緊急発掘 調査
				11'	38'		59㎡	
				53"	19"		578㎡	
				11'	38'			
				57"	20"			
				26°	127°			
				11'	38'			
				46"	30"			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
大嶺村跡	集落跡	近世・近代		ウマ埋葬跡、井戸、溝状遺構、遺物廃棄土坑、池跡など		中国産・日本産陶磁器、沖縄産陶器、金属製品、木製品、歯ブラシ、遊具、動物骨、貝類など		大嶺村及び小禄飛行場跡に伴う遺構・遺物
		グスク時代 ～ 縄文時代		ピット		縄文時代後晩期土器、弥生～平安並行期土器、石器、中国産青磁など		大嶺村以前の遺構・遺物
要約	<p>本調査は、那覇空港拡張事業に係る那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に先立つ緊急発掘調査である。発掘調査の結果、大嶺村当時とみられる井戸や廃棄土坑などの近世・近代の様々な遺構や、戦時中とみられる外來馬の埋葬跡などの遺構が検出された。また遺物にも沖縄産や日本産の陶器磁器をはじめ、近世・近代の約2万点強の遺物が出土した。中でも日本軍の銘の残る歯ブラシは、九州の隊隊と小禄飛行場との関係性を示す重要な資料である。</p> <p>また、内陸部側の調査区においては、近世・近代以前の可能性のある遺構が検出されたほか、遺物中にもグスク時代及び先史時代の遺物が確認された。これらの成果から、那覇空港内において、先史時代及びグスク時代の遺跡が残されている可能性が挙げられる。その背景として、管制塔地区は少なくとも縄文時代中期頃までは潮間帯中下部であったことが明らかとなり、大嶺崎周辺の陸域の変化が遺跡形成に大きく影響している可能性が挙げられる。</p>							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第101集

大嶺村跡

那覇空港事務所管制塔庁舎新築工事等に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成31年3月15日
編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
☎ : 098-835-8751・8752
印 刷 (有) 金城印刷
〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町 5 丁目 9 番16号
